

下茅原遺跡（第1次・第2次）、東沖遺跡 発掘調査報告

2009（平成21）年3月
三重県埋蔵文化財センター



SB300付近(南から)



調査区と櫛田川を望む(南から)



調査区遠景(西から)



SK228(南から)



SK50・58(東から)



東沖遺跡出土鉄製品及び鍛冶関連遺物

はじめに

高見山を水源とし伊勢湾に注ぐ櫛田川は、水量が豊富な三重県でも有数の一級河川です。その櫛田川がひととき大きく蛇行して流れる中流域の、左岸に位置する松阪市茅原町の下茅原地区は、背後にある山地から櫛田川へと続く丘陵地に田畑・水田・集落がある穏やかな風景の地域です。この地域に所在する下茅原遺跡と東沖遺跡は、過去の範囲確認調査から中世を中心とした遺跡と認識されていましたが、中山間地域総合整備事業(茅広江地区)に伴う一連のほ場整備事業に先立ち、発掘調査が実施されました。

今回発掘調査報告書として刊行させていただくのは、平成16年度に実施した下茅原遺跡発掘調査(第1次)、平成17年度に実施した下茅原遺跡発掘調査(第2次)、平成18年度に実施した東沖遺跡発掘調査の結果です。

下茅原遺跡発掘調査(第1次)では、副葬品を伴った石組みの墓などが、また東沖遺跡発掘調査では、複数の石組遺構を伴う、溝で区切られた屋敷地の跡と考えられる多数の遺構が検出されました。出土した多くの中世遺物とともに、この地が伊勢平野からは離れた内陸部にも関わらず、鎌倉・室町時代から居住地であったことが分かる貴重な成果をあげることができました。これらの成果は今後当地域の歴史をより解明していくうえで、重要な資料となるものと言えましょう。

三重県埋蔵文化財センターでは、各種開発事業に伴う発掘調査を実施するだけでなく、その結果・成果の広く県民の皆様や地域の皆様への公開・還元をすすめています。これが、地域の歴史を通じて郷土への愛着心や誇りを持っていただくための一助になればと願っております。

最後になりましたが、発掘調査を実施するにあたり、ご理解とご協力を賜りました地元下茅原地区の皆様をはじめ松阪市教育委員会、県農水商工部、松阪農林商工環境事務所農村基盤室の方々に厚く感謝申し上げます。

平成21年3月31日

三重県埋蔵文化財センター

所長 吉水 康夫

例 言

- 1 本書は、三重県松阪市茅原町字中田・東沖地内に所在する下茅原（しもちはら）遺跡の第1次・第2次及び東沖（ひがしおき）遺跡発掘調査報告書である。
- 2 本書が扱う発掘調査の原因事業は、平成16～18年度中山間地域総合整備事業（茅広江地区）である。
- 3 発掘調査は下記の体制で実施した。
下茅原遺跡・東沖遺跡 範囲確認調査 三重県埋蔵文化財センター 企画調整グループ 大川操
下茅原遺跡
第1次調査 調査主体 三重県教育委員会
調査担当 三重県埋蔵文化財センター 調査研究Ⅱグループ 木本勝己、伊藤裕偉、小山憲一
作業委託 安西工業株式会社
第2次調査 調査主体 三重県教育委員会
調査担当 三重県埋蔵文化財センター 調査研究Ⅰグループ 木本勝己、西口剛司、豊田祥三
作業委託 国際航業株式会社
東沖遺跡 調査主体 三重県教育委員会
調査担当 三重県埋蔵文化財センター 調査研究Ⅰ課 木本勝己、穂積裕昌、酒井巳紀子
作業委託 安西工業株式会社
- 4 本書が対象とした実調査面積は、次のとおりである。
下茅原遺跡 第1次調査：3,145㎡
第2次調査：1,832㎡
東沖遺跡 3,480㎡
- 5 本書が対象とした現地調査期間は、次のとおりである。
下茅原遺跡 第1次調査：平成16年8月19日～平成16年12月3日
第2次調査：平成17年6月1日～平成17年8月23日
東沖遺跡 平成18年5月17日～平成18年9月29日
- 6 調査にかかる諸費用は、三重県農水商工部が全額負担した。
- 7 本書が扱う発掘調査の資料並びに出土遺物等は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。
- 8 本書の執筆は下茅原遺跡第1次調査を小山憲一・伊藤裕偉・酒井巳紀子が、第2次調査を木本勝己が、東沖遺跡を酒井巳紀子が行った。遺物の写真撮影は、小山憲一と酒井巳紀子が行い、編集は酒井巳紀子が行った。なお、文責は目次及び文末に明記している。
- 9 本書で使用した地図類は、国土地理院発行の1/25,000地形図、松阪市都市計画図、三重県農水商工部作成の事業計画図である。
- 10 本書で示す方位は座標北を用いた。座標は世界測地系に準拠し、国土座標第Ⅵ系を用いた。なお、磁針方位は西偏6度54分、真北方位は西偏0度16分である（平成18年）。
- 11 本書では、下記の遺構表示略記号を用いた。なお、遺構図のうち「S」で示した部分は、石を表している。
SB：掘立柱建物 SK：土坑 SD：溝 SX：墓 SR：自然流路 SZ：落ち込み
- 12 東沖遺跡の遺構平面図では、遺構番号を3桁の数字でのみで表記した。遺構の性格については、遺構一覧表を参照していただきたい。（凡例）SK1→001 SK10→010 SK100→100
- 13 本書で使用する用語は、以下に統一している。
つぼ：壺 わん：椀 なべ：鍋 ほうろく：焙烙
- 14 本書で表記する色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』（21版、日本色研事業株式会社、1998年）に準拠した。
- 15 本文、遺物観察表、挿図、写真図版の遺物番号は相互に対応している。なお、遺物の写真図版は縮尺不同である。
- 16 発掘調査及び本書の作成に際しては、下記の方々にご指導・ご協力いただいた。（敬称略・五十音順）
大道和人、狭川真一、藤澤典彦、藤澤良祐

本文目次

I	前 言	(木本、小山)	1
II	位置と環境	(西口)	10
III	下茅原遺跡 第1次調査	(小山)	12
	1 A地区	(小山、酒井)	12
	2 B地区	(伊藤)	33
	3 小結	(小山)	39
IV	下茅原遺跡 第2次調査	(木本)	48
	1 調査区の地形と基本的層序	(木本)	48
	2 検出遺構	(木本)	48
	3 出土遺物	(木本)	52
	4 小結	(木本)	52
V	東沖遺跡	(酒井)	54
	1 基本層序	(酒井)	54
	2 検出遺構	(酒井)	54
	3 出土遺物	(酒井)	84
	4 自然科学分析	(ハレオ・ラボ、元興寺文化財研究所、酒井)	127
	5 小結	(酒井)	146
V	下茅原遺跡・東沖遺跡の総括	(酒井)	158

挿 図 目 次

第1図	調査区位置図・範囲確認坑配置図	2	第46図	SK27・37・61・65・77・80・82・87・88・111平面図・断面図	73
第2図	下茅原遺跡第1次調査区割図	8	第47図	SK113・114・118・141・142・147・158・179・190 196・225・245・249平面図・断面図	75
第3図	下茅原遺跡第2次調査区割図	9	第48図	SK177平面図・断面図	77
第4図	遺跡位置図	11	第49図	SK136・145・278平面図・断面図	78
第5図	A地区遺構平面図①	14	第50図	SD75・124・212・242平面図・断面図	79
第6図	A地区遺構平面図②	15	第51図	SX99平面図・断面図	81
第7図	A地区土層断面図	16	第52図	SX122・236・SK226平面図・断面図	82
第8図	SX12・18平面図・断面図	17	第53図	SX274・Pit平面図・断面図	83
第9図	SX19・SK13・20・Pit平面図・断面図	18	第54図	掘立柱建物出土遺物実測図①	85
第10図	SB22・23・24・25・26・27平面図・断面図	19	第55図	掘立柱建物出土遺物実測図②	87
第11図	流路・墓・掘立柱建物・土坑出土遺物実測図	21	第56図	掘立柱建物出土遺物実測図③	89
第12図	落ち込み・墓・Pit出土遺物実測図	23	第57図	土坑出土遺物実測図①	91
第13図	包含層出土遺物実測図	26	第58図	土坑出土遺物実測図②	95
第14図	B地区小地区割図	33	第59図	溝・墓出土遺物実測図	97
第15図	B地区遺構平面図	34	第60図	鎌382模式図	99
第16図	B地区土層断面図	35	第61図	Pit出土遺物実測図	99
第17図	B地区出土遺物実測図	37	第62図	包含層出土遺物実測図①	100
第18図	SX12・18・19造墓過程推定復元図	40	第63図	包含層出土遺物実測図②	101
第19図	掘立柱建物変遷図	42	第64図	土壌分析試料採取箇所	128
第20図	SR1・31推定復元図	43	第65図	土坑土壌のリン・カルシウム分布図	131
第21図	遺構変遷図①	44	第66図	元素マッピング図と点分析位置①	132
第22図	遺構変遷図②	45	第67図	元素マッピング図と点分析位置②	133
第23図	遺構平面図	49	第68図	SK226出土炭化材材組織の走査電子顕微鏡 写真①	135
第24図	土層断面図①	50	第69図	SK226出土炭化材材組織の走査電子顕微鏡 写真②	136
第25図	土層断面図②	51	第70図	SK226出土炭化材材組織の走査電子顕微鏡 写真③	137
第26図	SK46・47遺構平面図	52	第71図	SX274出土骨	138
第27図	L28・29付近遺構平面図	52	第72図	鉄滓100切断面のXRF分析チャート	139
第28図	出土遺物実測図	53	第73図	鉄滓153切断面のXRF分析チャート	139
第29図	遺構平面図①	55	第74図	椀形鍛冶滓の顕微鏡組織	142
第30図	遺構平面図②	56	第75図	遺構変遷図①	148
第31図	遺構平面図③	57	第76図	遺構変遷図②	149
第32図	遺構平面図④	58	第77図	ブロック形屋敷地群事例①	150
第33図	調査区北壁・東壁土層断面図	59	第78図	ブロック形屋敷地群事例②	151
第34図	SB281・282・283・284平面図・断面図	60	第79図	ブロック形屋敷地群事例③	152
第35図	SB285・286・287・288平面図・断面図	61	第80図	ブロック形屋敷地群事例④	153
第36図	SB289・290・291平面図・断面図	62	第81図	鉄関連遺物出土点数分布図	156
第37図	SB292・293・294・296・297・298平面図・断面図	63	第82図	遺構変遷図Ⅰ期	159
第38図	SB295平面図・断面図①	64	第83図	遺構変遷図Ⅱ期	160
第39図	SB295平面図・断面図②	65	第84図	遺構変遷図Ⅲ期	161
第40図	SB299平面図・断面図	67	第85図	遺構変遷図Ⅳ期	162
第41図	SB300平面図・断面図①	68			
第42図	SB300平面図・断面図②	69			
第43図	SB301・302・303・304平面図・断面図	70			
第44図	SB305平面図・断面図	71			
第45図	SB306・307平面図・断面図	72			

写真図版目次

巻頭写真1	東沖遺跡SB300付近	T19 Pit 1	187
巻頭写真2	東沖遺跡調査区と櫛田川を望む 東沖遺跡調査区遠景	T18 Pit 8	187
巻頭写真3	東沖遺跡SK228 東沖遺跡SK50・58	T18付近	187
巻頭写真4	東沖遺跡出土鉄製品及び鍛冶関連遺物	SK46・47付近	187
写真図版1	A地区調査前状況	SK46・47付近	187
	A地区SR1	写真図版22	出土遺物
写真図版2	A地区SX12石積検出状況	写真図版23	調査前状況
	A地区SX12土師器鍋出土状況		調査区全景
写真図版3	A地区SX12刀子(6)・土師器皿(4)出土状況	写真図版24	調査区全景
	A地区SX19遺物出土状況		A1区全景
写真図版4	A地区SX18遺物出土状況	写真図版25	A2区全景
	A地区F5 Pit7遺物出土状況		B区全景
写真図版5	A地区調査区全景	写真図版26	SK228出土状況
	A地区調査区北端遺構集中部		SK228完掘状況
写真図版6	B地区調査前状況	写真図版27	SK228西壁
	B地区SR31		SK228南壁
写真図版7	B地区SR31		SK228階段部分近景
	B地区SR31	写真図版28	SK50・58実測風景
写真図版8	B地区調査区全景		SK228東壁
	B地区調査区全景		SK228北壁
写真図版9	出土遺物①		SK288小礫出土状況
写真図版10	出土遺物②	写真図版29	作業風景
写真図版11	出土遺物③		SK228東壁
写真図版12	調査前状況		SB299、SK120出土状況
	下茅原遺跡全景	写真図版30	SB299・300付近
写真図版13	調査区全景		写真図版31
	調査区全景		SB300、SK121・162・163、SK136・145付近
写真図版14	調査区全景		SK121・162出土状況
	A地区・B地区付近	写真図版32	SK121・163出土状況
写真図版15	A地区・B地区付近		SK136・145出土状況
	C地区・D地区・E地区付近	写真図版33	SB305、SK50・58出土状況
写真図版16	A地区全景		SB305、SK50・58出土状況
	B地区全景		SB305、SK50・58完掘状況
写真図版17	B地区全景	写真図版34	SK37遺物出土状況
	C地区全景		SK80検出状況
写真図版18	C地区全景		SK61炭化物出土状況
	D地区全景		SK61完掘状況
写真図版19	D地区全景		SK82
	E地区全景	写真図版35	SK273土層
写真図版20	E地区全景		SK61土層
	E地区全景		SK113土層
写真図版21	R～T21・22付近		SK65土層
	R～T21・22付近		SK65土層
	R・S21・22、T21・22付近		SK147土層
			SK153土層
			SK196遺物出土状況
			作業風景、SK50・58付近

写真図版36	SK177出土状況	202	写真図版46	出土遺物⑦	212
	SK226出土状況	202	写真図版47	出土遺物⑧	213
写真図版37	SD124出土状況	203	写真図版48	出土遺物⑨	214
	SD124出土状況	203	写真図版49	出土遺物⑩	215
	SX122	203	写真図版50	出土遺物⑪	216
	SD212	203	写真図版51	出土遺物⑫	217
	SD212	203	写真図版52	出土遺物⑬	218
写真図版38	SX99	204	写真図版53	出土遺物⑭	219
	SX99礫除去後	204	写真図版54	出土遺物⑮	220
	SX122土壌分析試料採取風景	204	写真図版55	小刀	221
	SK147土壌分析試料採取風景	204		鎌	221
	SK226炭化材採取風景	204	写真図版56	火打金	222
写真図版39	SX236出土状況	205		鏝	222
	SX274出土状況	205		釘	222
写真図版40	出土遺物①	206	写真図版57	羽口	223
写真図版41	出土遺物②	207		椀形滓	223
写真図版42	出土遺物③	208		鉄滓	223
写真図版43	出土遺物④	209	写真図版58	工事完成後 下茅原遺跡を望む	224
写真図版44	出土遺物⑤	210		工事完成後 東沖遺跡を望む	224
写真図版45	出土遺物⑥	211			

表 目 次

第1表	範囲確認調査結果一覧表①	3	第25表	遺物観察表③	115
第2表	範囲確認調査結果一覧表②	4	第26表	遺物観察表④	116
第3表	A地区遺構一覧表	27	第27表	遺物観察表⑤	117
第4表	A地区出土遺物観察表①	28	第28表	遺物観察表⑥	118
第5表	A地区出土遺物観察表②	29	第29表	遺物観察表⑦	119
第6表	A地区出土遺物観察表③	30	第30表	遺物観察表⑧	120
第7表	A地区出土遺物観察表④	31	第31表	遺物観察表⑨	121
第8表	A地区出土遺物観察表⑤	32	第32表	遺物観察表⑩	122
第9表	B地区遺構一覧表	38	第33表	遺物観察表⑪	123
第10表	B地区出土遺物観察表	38	第34表	遺物観察表⑫	124
第11表	遺構一覧表	48	第35表	遺物観察表⑬	125
第12表	2次調査遺物観察表	53	第36表	遺物観察表⑭	126
第13表	遺構一覧表①	103	第37表	分析試料とその詳細	130
第14表	遺構一覧表②	104	第38表	測定Ⅰの蛍光X線分析結果	130
第15表	遺構一覧表③	105	第39表	点分析(測定Ⅱ)の蛍光X線分析結果	130
第16表	遺構一覧表④	106	第40表	SK226出土炭化材の樹種同定結果	134
第17表	遺構一覧表⑤	107	第41表	鉄滓切断面XRF測定条件	139
第18表	遺構一覧表⑥	108	第42表	鉄滓切断面の測定結果まとめ	139
第19表	遺構一覧表⑦	109	第43表	供試材の履歴と調査項目	143
第20表	遺構一覧表⑧	110	第44表	供試材の化学組成	143
第21表	遺構一覧表⑨	111	第45表	出土遺物の調査結果のまとめ	143
第22表	遺構一覧表⑩	112	第46表	土壌洗浄一覧表	144
第23表	遺物観察表①	113	第47表	ブロック形屋敷地消長表	154
第24表	遺物観察表②	114	第48表	鉄製品種別割合	155

I 前 言

1 調査に至る経過

下茅原遺跡

第1次調査 下茅原遺跡は、松阪市南部の櫛田川中流域で計画された中山間地域総合整備事業に先立ち行われた分布調査で発見された遺跡である。平成14年度に行われた範囲確認調査で、事業予定地内に遺構が確認されたため、開発部局と協議を行った結果、現状保存が不可能な部分について本発掘調査を行い、記録保存することで合意した。なお、本発掘調査着手前の段階までは、今回調査区周辺部に広がる遺跡の名称を小字単位で命名しており、本遺跡も小字の名称に従い「中田遺跡」とされていた。しかし、周辺部の地形や範囲確認調査の結果を踏まえ遺跡名称を再検討した結果、遺跡の広がりから小字単位で遺跡名称を個別に付与するのは不相当と判断し、大字名の「下茅原遺跡」と改称した。

この下茅原遺跡の第1次調査の本発掘調査は、当

事業のは場整備に先立って、平成16年8月から2箇所の当事業地内遺跡該当地で行われることとなった。

第2次調査 下茅原遺跡の第2次調査の本発掘調査は、当事業のは場整備に先立って、現在の集落に近い同遺跡南東の当事業地内遺跡該当地で、平成17年度6月から行なわれることとなった。

該当地は、ほ場整備の中でも主に用水路建設部分にあたるため、南西方向から北東方向に細長い形状をした調査区となった。

東沖遺跡 東沖遺跡は、下茅原遺跡端より東南東約0.4kmに位置する。当遺跡も、上記平成14年度の範囲確認調査で発見された遺跡である。東沖遺跡の本発掘調査は、ほ場整備に先立って、当事業地内遺跡該当地で、平成18年度5月から行われることとなった。

2 調査の経過

(1) 調査経過の概要

下茅原遺跡

第1次調査 現地調査は、9月21日にA地区から開始した。A地区は調査区が南北に細長いため、一段下がった南端部側から掘削を開始した。南端部では自然流路が検出できたが、調査区の南半部から中央部にかけてはほとんど遺構は検出できず遺物の出土も僅少であった。反面、調査区北端部は遺構が集中し、掘立柱建物・溝・土坑・中世墓等を検出した。遺物は整理箱で30箱程出土し、A地区出土遺物の大半は当該範囲から出土した。また、当該範囲では当初遺構検出面と判断した層に、なおも遺物が含まれていることが判明したことから、記録作業終了後に下層調査を行った。調査の結果、土坑・墓等を確認した。

B地区は10月1日に調査を開始した。調査区南部に自然流路が確認され、周辺の地形から、A地区の南端部で確認された流路とつながる可能性が高いことが判明した。一方の調査区北部の平坦面ではピツ

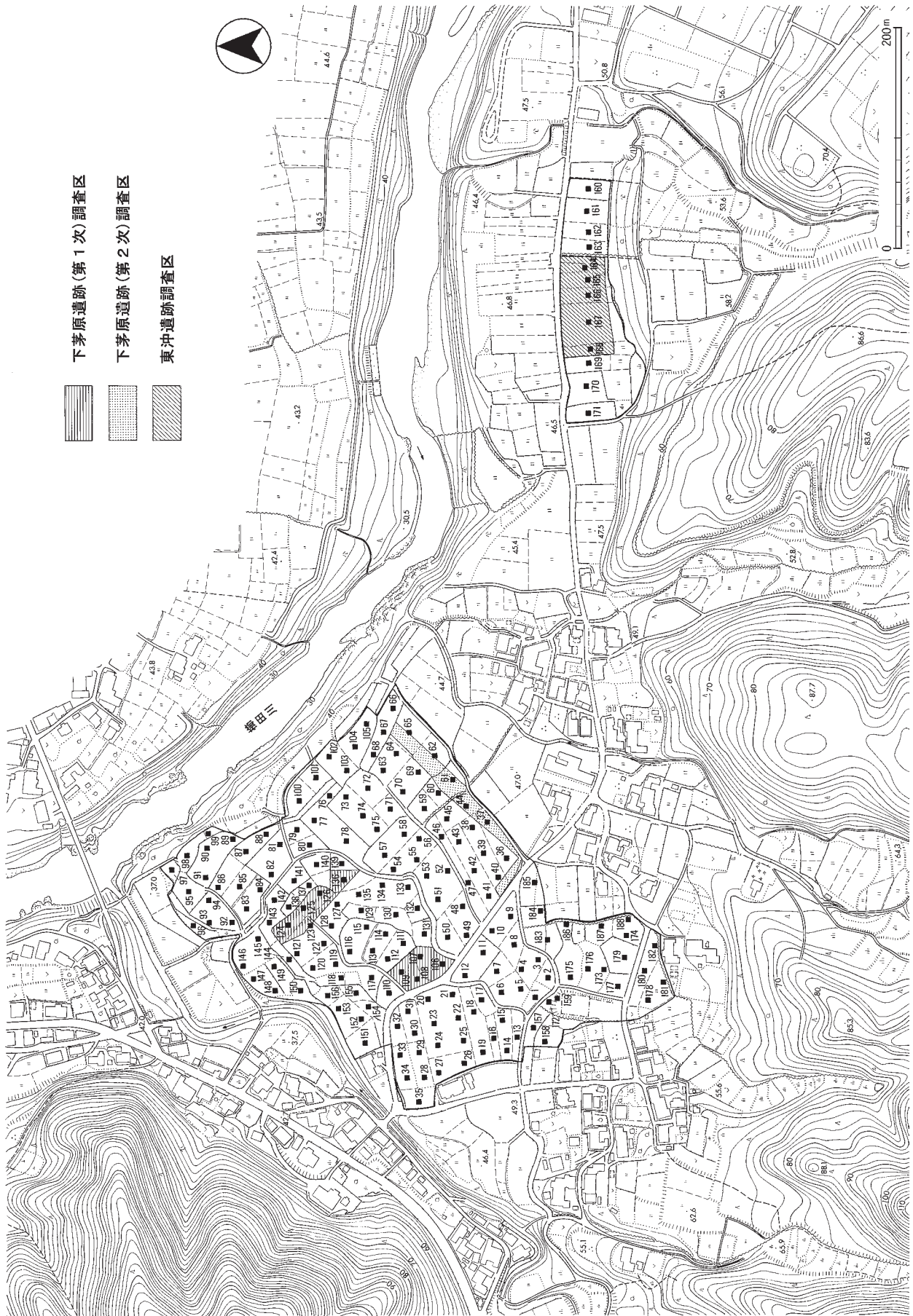
ト・溝・土坑などが検出されたが、性格不明のものがほとんどで、出土遺物も整理用箱で2箱程度であった。

調査の期間中は二度にわたる台風の上陸や秋雨前線の影響などで調査は度々休止したが、遺構密度が比較的薄かったことから、B地区は11月8日に、A地区は12月3日に調査の全工程を終了し、12月9日に現場詰所を撤収した。

第2次調査 6月24日にA地区表土掘削を開始した。表土掘削はさらにB地区、C地区、D地区、E地区へと順に進めていった。

表土掘削が終わった段階でA地区から順に包含層掘削も行っていった。包含層掘削が終われば、遺構検出・遺構掘削・各図面作成から個別遺構や遺構全景等の写真撮影の記録作業を、基本的にこれら地区ごとに順に済ませていくという方向で行っていった。

A地区は、遺構が確認できず、7月14日に、図面作成及び写真撮影等のすべての記録作業を終えた。B～E地区も遺構の密度は薄く、B地区は、7月22



第1図 調査区位置図・範囲確認坑配置図 (1:5,000)

調査坑No.	遺物包含層上面の深さ(cm)	遺構上面の深さ(cm)	遺構	遺物	備考
1	—	—	—	—	
2	—	—	—	—	
3	—	28~30	Pit	—	
4	26~36	38~44	溝または流路?	—	周辺表土に土師器散布
5	30~36	46~54	土坑、Pit	土師器皿、山茶碗、陶器片	
6	26~32	30~44	溝または流路?	土師器皿・鍋	遺構内に土師器多い
7	24~32	28~38	溝、Pit	土師器小皿、山茶碗	
8	—	—	—	—	周辺表土に土師器多く散布
9	—	24~30	溝?、土坑	—	
10	—	24~28	流路?	—	周辺表土に土師器、山茶碗散布
11	24~28	30~36	流路?	土師器皿・鍋	
12	20~34	46~56	流路?	土師器皿・鍋、山茶碗	
13	—	110~120	井戸?	—	
14	—	—	—	土師器片、山茶碗	表土には土師器、山茶碗多く散布
15	—	—	—	山茶碗	
16	—	—	—	—	
17	—	24~30	溝、Pit	—	周辺表土に土師器、山茶碗散布
18	24~26	40	—	—	
19	14~20	52	Pit	土師器片	
20	—	26~28	土坑、溝、井戸?、Pit	—	
21	—	22~24	流路?、Pit	—	
22	—	24~34	流路?、Pit	—	
23	24	32~34	土坑、流路?	—	土坑に炭化物、焼土含む
24	—	20~26	流路?、Pit	—	
25	20~24	42	流路?	—	
26	24~30	40~44	—	—	周辺表土は土師器多い
27	—	26~40	土坑	縄文土器?	
28	—	24~26	土坑、流路	縄文土器?	
29	—	28~30	流路、Pit	土師器片、山茶碗	
30	—	38~44	土坑	—	
31	—	30~34	土坑	—	石が30~40cmの間隔で円形に巡る
32	24~28	40	—	土師器片	
33	—	36~40	流路	—	
34	—	30~34	土坑、Pit	—	
35	—	20	流路?	—	
36	28~34	34~44	Pit	—	周辺に土師器多く散布
37	—	62~68	—	—	周辺に土師器多く散布
38	28~30	38	溝、Pit	—	
39	26~30	40	溝、Pit	—	
40	28~32	38	溝	—	
41	—	—	—	—	
42	—	—	—	—	
43	26~28	36~38	溝	土師器片、山茶碗	
44	—	40~46	土坑、Pit	—	
45	—	—	—	—	周辺に土師器多く散布
46	—	30~32	—	—	
47	28~34	38~40	土坑、Pit	山茶碗	

調査坑No.	遺物包含層上面の深さ(cm)	遺構上面の深さ(cm)	遺構	遺物	備考
48	—	28~30	土坑、Pit	—	
49	24~32	34~50	溝、落ち込み	—	
50	—	—	—	—	
51	—	—	—	—	
52	20~22	26~30	Pit	土師器、山茶碗	
53	20~24	30~36	土坑、溝、Pit	ロクロ土師器	周辺には製塩土器多く散布
54	—	34~40	流路	ロクロ土師器小皿、土師器皿、山茶碗	
55	30~32	—	流路	土師器小皿、山茶碗	
56	—	28~30	溝、Pit	—	
57	—	26~30	Pit	—	
58	—	—	—	—	
59	—	—	—	—	
60	—	—	—	—	
61	28~30	30~38	土坑、Pit	—	周辺表土に土師器小皿、山茶碗等散布
62	22~26	34~36	溝	土師器皿	
63	22~28	42~52	溝、Pit	土師小皿	
64	18~22	44~48	溝?、Pit	土師器、山茶碗、鉄製品釘?	
65	24~26	44~50	土坑?、Pit	—	
66	—	—	—	—	
67	—	—	—	土師器片	
68	24~28	30~32	流路?	土師器片	
69	—	72~84	流路?	—	
70	—	—	—	—	
71	26~28	32~34	Pit?	—	
72	22	30~38	Pit?	—	
73	24	44~48	土坑、Pit	土師器、山茶碗	検出面上面に炭粒多い
74	24	—	—	土師器甕	
75	—	—	—	—	
76	—	—	—	—	
77	—	—	—	—	
78	20~24	52~56	流路? Pit	—	
79	20~22	—	—	—	
80	22~24	26~28	溝、流路?、Pit	土師器片	
81	—	—	—	—	
82	26	40	流路	土師器小皿・皿、山茶碗	
83	—	—	—	—	
84	18~21	22~26	流路	土師器小皿・皿	
85	—	—	—	—	
86	—	—	—	—	
87	—	—	—	—	
88	—	—	—	土師器鍋、陶器片	
89	—	—	—	—	周辺に土師器多く散布
90	20~24	24~30	流路	土師器片	
91	—	—	—	—	周辺に土師器多く散布
92	30~36	36~46	流路	—	周辺表土には土師器皿、山茶碗等散布
93	30~32	40~42	土坑	土師器小皿・皿・鍋	
94	22	30~34	溝	—	

第1表 範囲確認調査結果一覧表①

調査坑No.	遺物包含層上面の深さ(cm)	遺構上面の深さ(cm)	遺構	遺物	備考
95	—	—	—	—	
96	—	—	—	—	周辺表土には土師器多く散布
97					実施不可
98					実施不可
99	—	—	—	—	
100	—	28~30	流路	土師器皿・鍋	
101	—	50	流路	—	
102	—	60~64	土坑	—	
103	—	—	—	—	
104	—	—	—	—	
105	36~40	—	—	土師器小皿	
106	20~24	30	土坑?	土師器片、須恵器?	
107	28~30	30~40	土坑	土師器皿・鍋	
108	18~20	22~24	流路	—	
109	—	40	流路、Pit	—	
110	—	40~42	土坑?、流路	—	
111	22	36~38	Pit	—	
112	—	—	—	—	
113	—	22~24	溝、Pit	土師器片	
114	—	30~34	土坑、Pit	—	
115	—	30~40	Pit	—	
116	—	—	—	—	
117	24	30~34	流路、Pit	土師器皿、山茶碗	表面でサスカイトを採取
118	—	47~52	流路、Pit	—	
119	—	24	流路	—	
120	—	21~22	土坑、Pit	—	
121	—	—	—	—	
122	26~29	30~32	土坑、Pit	—	
123	—	30	流路	—	
124	—	31~33	流路	土師器皿、山茶碗	
125	22~30	28~34	流路	—	表面で土師器加工円盤・小皿、山茶碗採取
126	—	26~30	流路	—	
127	—	—	—	—	
128	—	—	—	—	
129	22~25	35~39	流路	土師器皿・鍋、山茶碗	
130	18~20	22~26	土坑、Pit	土師器皿、山茶碗	
131	—	36~40	流路	ロクロ土師器、土師器皿、山茶碗	表面には土師器小皿あり
132	—	—	—	—	
133	24~29	44~48	流路	製塩土器?	
134	18~24	30~36	流路	土師器鍋・皿、山茶碗、青磁碗	
135	24~30	42~45	流路	土師器皿・甕、山茶碗	
136	18~25	33~44	流路	土師器小皿・鍋、山茶碗	
137	—	30	流路、Pit	—	周辺表土には土師器多く含む
138	—	30	流路	—	
139	—	34~36	流路	土師器皿・小皿、山茶碗	
140	—	54~62	水溜?	—	
141	—	—	—	—	

調査坑No.	遺物包含層上面の深さ(cm)	遺構上面の深さ(cm)	遺構	遺物	備考
142	28~32	46	流路	土師器小皿・皿、山茶碗	周辺表土に土師器、山茶碗多い
143	—	—	—	—	
144					実施不可
145	24	40~44	—	土師器鍋	
146					実施不可
147	22	36~50	流路	—	周辺表土に土師器、山茶碗多い
148	20~24	—	—	土師器皿・甕	
149	26~30	—	—	—	
150	22~32	58~70	流路	土師器	
151	20~24	34	溝?	土師器皿・鍋	
152	36~38	52~54	土坑、溝、Pit	土師器皿	
153	24~30	44~48	流路	土師器甕、山茶碗	
154	30	—	—	土師器片	
155	28~32	—	—	土師器片	
156	22	—	—	土師器片	
157	—	—	—	—	周辺表土に土師器、山茶碗等多く散布
158	—	—	—	—	周辺表土に土師器、山茶碗等多く散布
159					実施不可
160	22~28	40~42	—	—	
161	25~30	44~52	土坑	土師器片	遺構埋土に焼土含む
162	36~44	44~56	—	土師器皿・小皿	
163	42~44	56~62	—	ロクロ土師器小皿	
164	30~40	48~58	土坑、Pit	土師器皿	遺構埋土に焼土、炭粒含む
165	—	58~80	Pit	—	
166	22~24	30~36	土坑、Pit	土師器小皿、山茶碗	遺構埋土に焼土、炭粒含む
167	28	32~47	土坑、溝、Pit	土師器小皿・皿・鍋、山茶碗	
168	12~20	20~28	土坑、Pit	土師器小皿・皿・鍋	
169	—	—	—	—	表面ではわずかに土師器、山茶碗の散布がある
170	—	24~28	土坑	—	表面ではわずかに土師器、山茶碗の散布がある
171	—	—	—	—	表面ではわずかに土師器、山茶碗の散布がある
172	—	—	—	—	
173	—	—	—	—	
174	—	—	—	—	
175	—	—	—	—	
176	—	—	—	—	
177	—	—	—	—	
178	—	—	—	—	
179	—	—	—	—	
180	—	—	—	—	
181	—	—	—	—	
182	—	—	—	—	
183	—	—	—	—	
184	—	—	—	—	
185	—	—	—	—	
186	—	—	—	—	
187	—	—	—	—	
188	—	—	—	—	

第2表 範囲確認調査結果一覧表②

日に、C地区は7月28日に、D地区は8月1日に、E地区は8月3日にと、同様に各地区の記録作業を終えた。

8月5日には、遺跡・調査区全景・個別遺構等のラジコンヘリコプターによる航空写真撮影も行った。

調査中は、天候に恵まれたことや、遺構密度が少なかったこともあり、調査の進行は予定以上にとても早く進んだ。

東沖遺跡 調査は、西から東へと進めた。したがって、表土掘削・遺構検出も上記のように進め、遺構掘削が終わったところから順次、記録作業を行っていった。

6月7日に調査区南西隅から表土掘削を開始し、6月28日には、この地点より遺構検出も開始した。8月23日には、すべての遺構検出を完了し、9月12日頃に遺構掘削がほぼ終了した。9月6日には、遺構の性格を解明するため、リン・カルシウム分析に伴う土壌試料を採取した。9月9日には現地説明会を開催した。9月13日には、遺跡・調査区全景、遺構集中部等のラジコンヘリコプターによる写真撮影を行った。全ての記録作業が完了したのは、9月22日であった。

(2) 調査日誌 (抄)

下茅原遺跡

第1次調査

- 9月21日 A地区表土掘削開始。
9月24～29日 台風等の影響で作業休止。
10月1日 A地区表土掘削終了。B地区表土掘削開始。
10月4日 B地区南部に自然流路を確認。
10月12日 A地区人力掘削開始。調査区西壁側溝掘削及び壁面精査。
10月13日 B地区表土掘削終了。
10月15日 A地区調査区南側(下段調査区)の遺構検出。SR1検出・完掘。
10月18日 A地区上段調査区北側から遺構検出。下段調査区西壁土層断面実測。
10月19～20日 台風上陸のため作業休止。
10月21日 A地区北東端の落ち込み検出。B地区遺構検出開始。
10月22日 A地区北半部の検出。調査区北端部に遺

構が集中。遺物も相当量出土。B地区SR31写真撮影。北部平坦面の遺構掘削。

- 10月28日 A地区検出作業終了。B地区遺構掘削終了。調査区全景写真撮影。
11月2日 A地区北端部遺構集中部分掘削。SZ9内で礫集中地点あり。B地区遺構平面実測。
11月5日 A地区SX12石組み検出状況写真撮影。B地区調査区壁際の断ち割り。土層断面実測。
11月8日 A地区遺構掘削。B地区土層図作成。B地区調査作業全工程終了。
11月9日 A地区SX12石組実測。
11月10日 A地区遺構掘削。下層遺構存在の可能性あり。
11月11～15日 雨天作業中止。
11月16日 A地区調査区清掃。SX12実測。
11月17日 A地区調査区全景写真撮影。遺構平面実測開始。SX12実測。
11月24日 遺構平面実測終了。
11月25日 調査区北端部分下層調査開始。
11月26日 中世墓SX19他検出・掘削。
11月30日 下層調査区全景写真撮影。
12月1日 下層遺構平面実測。
12月2日 調査区西壁際断ち割り。土層写真撮影。
12月3日 調査区西壁土層断面実測。全工程終了。

第2次調査

- 6月24日 A地区より表土掘削開始。
7月4日 A地区で、遺構検出・遺構掘削開始。
7月7日 A地区全景写真撮影。B地区遺構検出・掘削開始。
7月13日 B地区で焼土含む土坑5基検出。
7月14日 A地区遺構平面実測図作成。
7月19日 B地区全景写真撮影。
7月21日 A地区・B地区土層断面図作成。C地区遺構検出・掘削開始
7月22日 B地区遺構平面実測図作成。C地区全景写真撮影。
7月25日 調査区の台風対策を実施。
7月26日 台風のために作業を中止。
7月27日 D地区遺構検出・掘削開始。C地区・D

- 地区土層断面図作成。
- 7月28日 C地区遺構平面実測図作成。
- 7月29日 E地区遺構検出・掘削開始。D地区全景写真撮影。
- 8月1日 D地区遺構平面実測図作成。
- 8月2日 E地区土層断面実測図作成。E地区全景・個別遺構写真撮影。E地区遺構検出で2箇所の土坑から縄文土器深鉢片出土。
- 8月3日 E地区遺構平面実測図作成。ラジコンヘリコプターによる航空写真に向けて調査区の清掃。
- 8月4日 航空写真に向けての遺跡全体の清掃。
- 8月5日 ラジコンヘリコプターによる調査区全景等航空写真撮影。

東沖遺跡

- 5月30日 調査前風景写真を撮影。
- 6月7日 表土掘削を開始。
- 6月20日 土層断面図の記録開始。
- 6月28日 遺構検出・掘削開始。
- 7月3日 個別遺構図の記録開始。
- 7月6日 表土掘削完了。
- 7月25日 高田高校地歴部遺跡見学(生徒・引率教師計10名)。
- 8月3日 遺構平面実測図(1/20)記録開始。SX99で鉄製品小刀出土。
- 8月4日 SB305(SK50・58)の出土状況を撮影。
- 8月23日 遺構検出完了。
- 8月31日 SB299(SK120)、SB300(SK121・162・163)の出土状況を撮影。
- 9月6日 リン・カルシウム分析の土壌試料を採取。
- 9月9日 東沖遺跡現地説明会を開催。(14:30~15:30 参加者110名)
- 9月12日 航空写真撮影のため、調査区清掃。
- 9月13日 ラジコンヘリコプターによる航空写真撮影。
- 9月14日 遺構集中部等の個別遺構写真撮影。

9月22日 遺構平面実測図等の記録作業が完了。

(3) 文化財保護法等による諸通知

各発掘調査の文化財保護法等にかかる諸通知は、以下によって行っている。

下茅原遺跡

第1次調査

・三重県文化財保護条例第48条第1項にかかる発掘通知(県教育長宛県知事通知)

平成15年5月28日付農商第20-80号

・文化財保護法第58条の2第1項にかかる発掘調査実施報告(県教育長宛埋蔵文化財センター所長通知)

平成16年6月1日付教埋第95号

・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知(松阪警察署長宛県教育長通知)

平成16年12月28日付教委第12-4-25号

第2次調査

・三重県文化財保護条例第48条第1項にかかる発掘通知(県教育長宛県知事通知)

平成17年5月9日付松農第937号

・文化財保護法第99条第1項にかかる発掘調査実施報告(県教育長宛埋蔵文化財センター所長通知)

平成17年6月10日付教埋第105号

・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知(松阪警察署長宛県教育長通知)

平成17年9月8日付教委第12-4-20号

東沖遺跡

・三重県文化財保護条例第48条第1項にかかる発掘通知(県教育長宛県知事通知)

平成18年4月11日付松農環第329号

・文化財保護法第99条第1項にかかる発掘調査実施報告(県教育長宛埋蔵文化財センター所長通知)

平成18年5月18日付教埋第86号

・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知(松阪警察署長宛県教育長通知)

平成18年10月25日付教委第12-4-10号

3 調査の方法

(1) 遺構番号について

下茅原遺跡

第1次調査 現地調査の段階で、A地区は1から30、

B地区は31以降に設定した。調査の結果、A地区は1~21の遺構番号を付与したが、報告書作成段階では1~27の遺構番号を付与している。一方、B地区

は31～37の遺構番号を付与している。従って、28～30は欠番とした。詳細は第3・9表の遺構一覧表を参照されたい。

第2次調査 前年度の1次調査での遺構番号を踏まえ、2次調査は41～47の遺構番号を付与した。

東沖遺跡

東沖遺跡は、1から順に遺構番号を付与した。

(2) 調査区の設定について

下茅原遺跡

第1次調査 調査区は、第2図のように北側の調査区をA地区、南側の調査区をB地区とした。各調査区では、国土座標に沿った4m方眼の小地区を設定した。北西隅を起点として、北～南に算用数字、西～東にアルファベットを付与し、各小地区の北西隅に小地区杭を設置し、A1、A2・・・と表記した。

第2次調査 調査区は、旧水田の畦などに施された石垣などによって区分されていたため、南西方向から北東方向へL字型に伸びる調査区を、第3図にあるように、西から順にA～Eの5地区に区分した。A～E地区の全地区を一括として国土座標に沿った4m方眼の小地区を設定した。北西隅を起点として、北～南にアルファベット(大文字)とカタカナ、西～東に算用数字を付与し、各地区の北西隅に小地区杭を設置し、A1、A2・・・と表記した。

東沖遺跡

調査区は、国土座標に沿った4m方眼の小地区を設定した。北西隅を起点として、北から南にアルファベット大文字でA～M、西から東に算用数字で、1～25を付与した。各小地区の北西隅には、小地区杭を設置し、A1、A2・・・と表記した。

(3) 掘削の方法

表土掘削は重機で行い、包含層掘削と遺構掘削は、人力で行った。

東沖遺跡については、石組遺構があったため、石の現位置を動かさないように掘削した。図面作成・写真撮影ができるまで慎重に掘り進んでいった。石組遺構の作業が完了次第、除去後の図面等が必要な

ものは、石を除去して掘削した。

(4) 遺構図面の作成について

各地区遺構検出段階で1/40の略測図(遺構カード)を随時作成していき、これをもとに1/100の遺構平面略測図を作成していった。遺構掘削完了後には、以下の縮尺で図面を作成した。

下茅原遺跡

第1次調査

- ・遺構平面図 A地区 1:20 B地区 1:50
- ・個別遺構平面図・断面図 1:10
- ・土層断面図 1:20

第2次調査

- ・遺構平面図 1:20
- ・土層断面図 1:20

東沖遺跡

- ・遺構平面図 1:20
- ・個別遺構平面図・断面図 1:10、1:20
- ・土層断面図 1:20

(5) 遺構写真について

調査前、主な遺構の完掘後、調査後および、調査作業中の様子などの写真撮影を行った。撮影には、必要に応じてローリングタワーを使用した。フィルムはモノクロとカラーリバーサルを用いた。

下茅原遺跡

第1次調査 アサヒペンタックス6×7カメラと、補助として35mmカメラ(ニコンFM2)を使用した。

第2次調査 4×5版ウスタカメラと、補助として35mmカメラを使用した。ラジコンヘリコプターによる航空写真撮影を行い、4×5版ウスタカメラと、補助として6×6版(ブローニー)で、遺跡全景、調査区全景・近景を撮影した。

東沖遺跡

4×5版ウスタカメラと、補助として35mmカメラを使用した。ラジコンヘリコプターによる航空写真撮影では、6×6版(ブローニー)で撮影した。

(小山憲一・木本勝己)



Y = 43,800

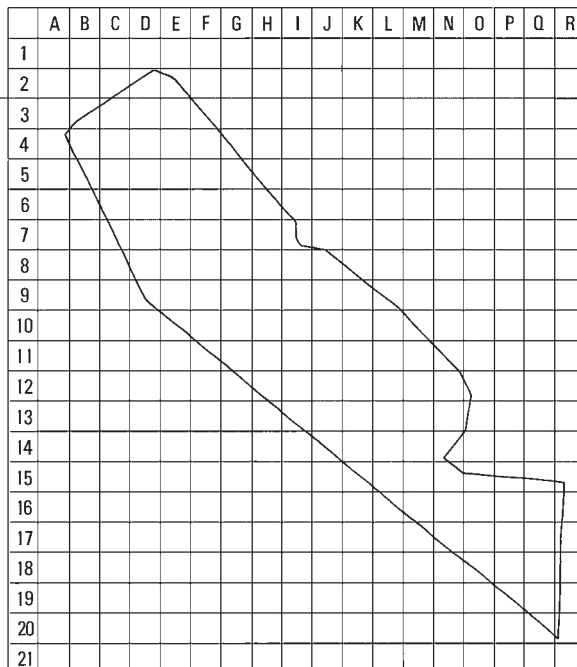
Y = 43,850

Y = 43,900

A地区

X = -166,800

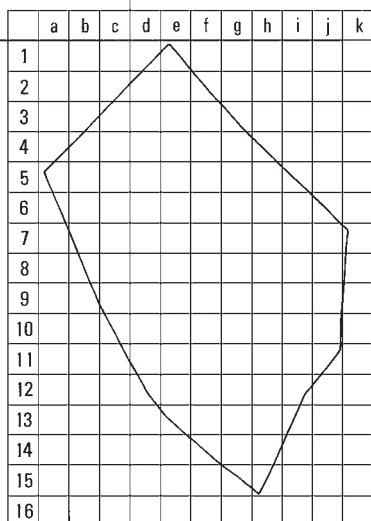
X = -166,850



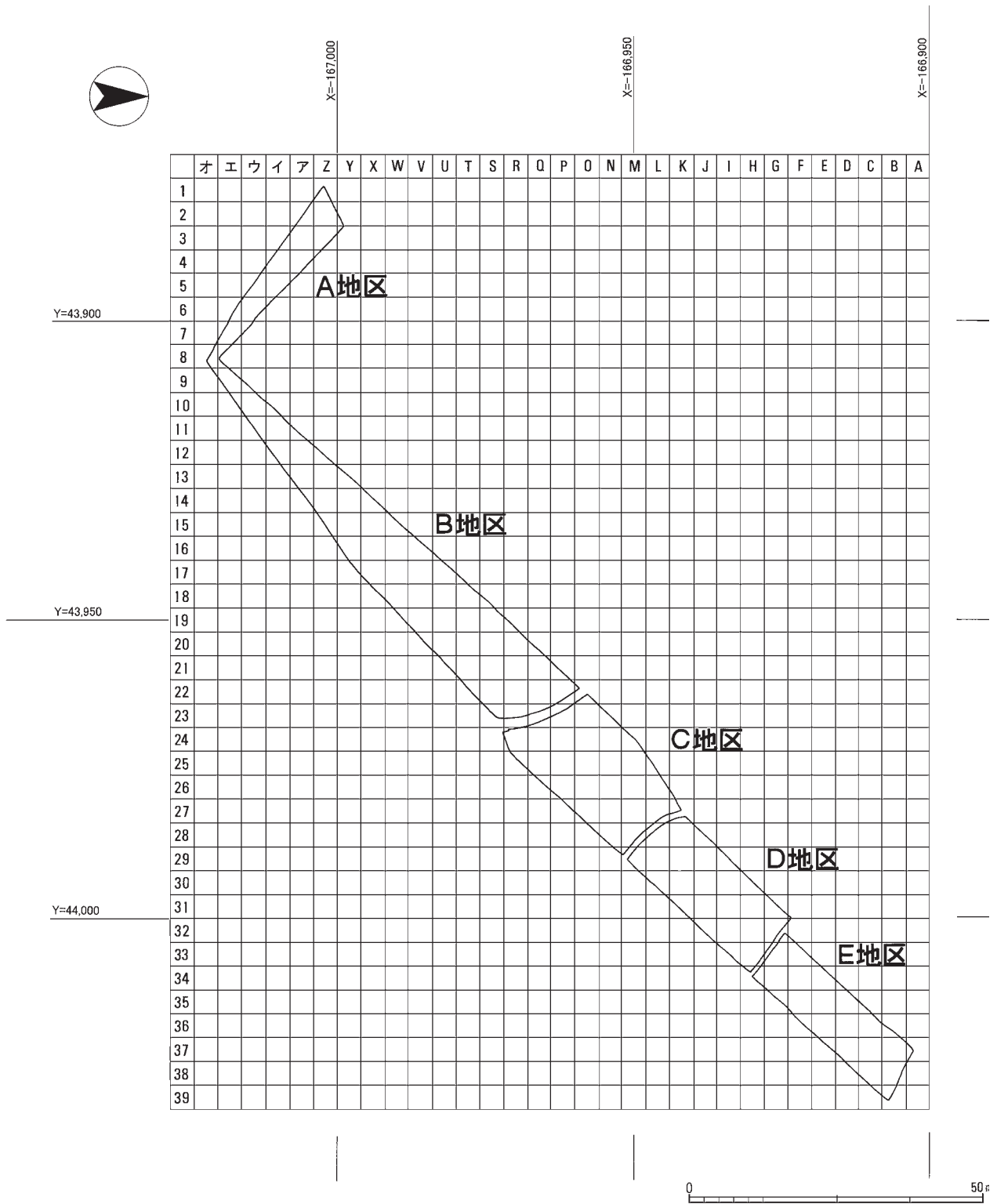
B地区

X = -166,900

X = -166,950



第2図 下茅原遺跡第1次調査区割図(1:1,000)



第3図 下茅原遺跡第2次調査区割図(1:1,000)

II 位置と環境

1 地理的環境

下茅原遺跡（1）・東沖遺跡（2）は、三重県松阪市茅原町に所在する遺跡である。当調査区は、櫛田川が中流域で北に大きく流れを変える左岸側中位段丘面に位置する。南側は丘陵になっており、その

丘陵裾部にあたる上位段丘面に現在の集落がある。下位段丘面は狭小で、調査区のある中位段丘面には水田を主とした耕作地が広がる。北方には大明神山があり、西方は六呂木川に沿って谷筋が伸びている。

2 歴史的環境

当遺跡の所在地である松阪市茅原町周辺は、縄文時代以前から櫛田川の影響を受けてきている。櫛田川は、上流部は中央構造線に沿って高見峠より流れ、当地の北東を蛇行しながら伊勢湾に流れ込む。櫛田川沿いの当地周辺は縄文遺跡が多く、新殿木戸遺跡^①（3）、下村A遺跡^②（6）、合道遺跡（7）、鎌岩遺跡（8）、大久保遺跡^③（9）、中の平西遺跡（10）、脇ノセコ遺跡（11）、中の平東遺跡（12）、上ノ広遺跡^④（19）、王子広遺跡^⑤（21）、大原堀遺跡^⑥（22）、奥ホリ遺跡^⑦（24）、と豊富である。また井尻遺跡^⑧（多気町）、宮ノ東遺跡^⑨（松阪市飯高町）、などからは、サヌカイトが出土している。縄文時代後期になると石鏃など剥片石器の材料に在地のチャート利用が著しく減少し、主に櫛田川上流よりつながる大阪・奈良県境の二上山産出のサヌカイトの利用が一般的になる^⑩。これは櫛田川流域で交易や流通が盛んであったことを意味している。

弥生時代になると、遺跡の分布は下流域に移行し、中流域では花ノ木遺跡^⑪（23）などがある。

中世の遺跡としては、畝ノ上遺跡（5）、宮谷遺跡（13）、川ノ上遺跡（14）、堂ノ前遺跡（15）、門阪遺跡^⑫（16）、スブクリ遺跡^⑬（17）などがある。鍬形中世墓群^⑭（26）では、一族集団的な小さな連合体の墓から、村（字）を単位とする墓への変化が見られ、その形成と変換は、社会構造の変化の反映であるといえる。また伊勢国司北畠氏系の牧城跡^⑮（28）、釈尊寺遺跡^⑯（29）、上山城跡（30）などがある。

この時期、当地周辺は伊勢神宮の政治的・経済的基盤として位置し、多くの御厨・御園が設置されており、茅原田御厨・広瀬御園などが成立していた。

近世に入り幕藩体制が確立されると、当地周辺は紀州和歌山藩領となり、和歌山と松阪を結ぶ道が和歌山街道として熊野街道とともに整備された。当時、大和方面から茅原を通り伊勢神宮へ向かう伊勢本街道は、伊勢神宮への参拝客（おかげ参り）で賑わいを見せていた。津留（多気町）は渡し場としてまた宿場町として賑わった所であり、その櫛田川対岸にある当地でも、旅の人々が行き交っていたことであろう。（西口剛司）

[註]

- ① 『松阪市史 第二巻 資料篇 考古』松阪市、1978年
- ② 「下村A遺跡」『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告―第1分冊1―』三重県教育委員会、1989年
- ③ 『多気町史 通史』多気町史編纂委員会、1992年
- ④ 「上ノ広遺跡」『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告―第1分冊1―』三重県教育委員会、1989年
- ⑤ 前掲①に同じ
- ⑥ 『大原堀遺跡発掘調査報告―第2・3次調査―』三重県埋蔵文化財センター、2008年
- ⑦ 『奥ホリ遺跡発掘調査報告書』三重県埋蔵文化財センター、1999年
- ⑧ 『勢和村史 通史編』勢和村史編集委員会、1999年
- ⑨ 『飯高町郷土史』飯高町郷土誌編纂委員会、1986年
- ⑩ 前掲⑨に同じ

- ⑪ 「花ノ木遺跡」『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告―第1分冊1―』三重県教育委員会、1989年
- ⑫ 『門阪遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター、1997年
- ⑬ 『戸井口遺跡・スブクリ遺跡（1・2次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター、2005年
- ⑭ 「鍬形中世墓群」『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告―第1分冊2―』三重県教育委員会、1989年
- ⑮ 前掲③に同じ
- ⑯ 「釈尊寺（中牧）遺跡」『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告―第1分冊1―』三重県教育委員会、1989年



No.	遺跡名	時代	主な遺構	主な出土物
1	下茅原遺跡	縄文、平安、室町	掘立柱建物、土坑、墓、旧河道	土師器、山茶碗、青磁、白磁、銭貨、刀子、五輪塔等
2	東沖遺跡	鎌倉～室町	掘立柱建物、石組遺構、土坑、溝、墓	土師器、山茶碗、青磁、白磁、刀子、火打金、銭貨等
3	新殿木戸遺跡	縄文、鎌倉		縄文土器、石器、山皿、山茶碗等
4	若宮遺跡	室町以降	土坑	土師器、十能、貨幣等
5	畝ノ上遺跡	平安、鎌倉、室町以降	掘立柱建物、土坑	土師器、山茶碗等
6	下村A遺跡	縄文、平安以降		縄文土器、石器、土師器、瓦器、山茶碗等
7	合道遺跡	縄文、古墳以降		チャート、土師器等
8	鎌岩遺跡	縄文、古墳以降		石鏃、土師器片等
9	大久保遺跡	縄文、古墳以降		縄文土器、石器、土師器、土錘
10	中の平西遺跡	縄文、古墳以降		サヌカイト片、土師器
11	脇ノセコ遺跡	縄文、古墳以降		石鏃、土師器片
12	中の平東遺跡	縄文、古墳以降		石鏃、土師器片
13	宮谷遺跡	鎌倉		土師器、山茶碗
14	川ノ上遺跡	鎌倉	柱穴	土師器、山茶碗
15	堂ノ前遺跡	鎌倉		土師器
16	門阪遺跡	奈良、平安、鎌倉、室町	掘立柱建物、石組土坑、土坑、溝	土師器、山茶碗、銭貨、火打金等
17	スブクリ遺跡	鎌倉、室町	溝、柱穴	縄文土器、石器、土師器等
18	戸井口遺跡	江戸	掘立柱建物、土坑、溝	縄文土器、焙烙、十能、天目茶碗等
19	上ノ広遺跡	縄文、平安	土坑、溝、土坑墓、柱穴	縄文土器、石鏃、土師器、直刀、釘等
20	御麻生菌蔭寺	白鳳		軒丸瓦、軒平瓦等
21	王子広遺跡	縄文		縄文土器、石器等
22	大原堀遺跡	縄文、平安	土器棺墓、土坑墓、掘立柱建物	縄文土器、石器、土師器、製塩土器、山茶碗等
23	花ノ木遺跡	縄文、弥生、鎌倉、室町	竪穴住居、方形周溝墓、土坑	縄文土器、石器、弥生土器、土師器、山茶碗等
24	奥ホリ遺跡	縄文、鎌倉	土坑、柱穴	縄文土器、石器、土師器、山茶碗等
25	浅間山北・南遺跡	弥生、鎌倉以降	土坑、柱穴	弥生土器、土師器、山茶碗等
26	楯形中世墓群	室町	配石墓、集石墓	土師器、壺、鉢、五輪塔等
27	牧瓦窯跡群	白鳳	ロストル式平窯、地下式有階有段壘り窯	軒平瓦、丸瓦、軒丸瓦、平瓦、熨斗瓦等
28	牧城跡	室町		
29	釈尊寺遺跡	室町	掘立柱建物、土坑、柵列、石列、配石遺構	土師器、槽鉢、甕、磁器、瓦等
30	上山城跡	室町	土塁	
31	宮脇遺跡	鎌倉、室町		土師器
32	宮ノ木遺跡	鎌倉		土師器、山茶碗
33	秋丸遺跡	平安～鎌倉		製塩土器、土師器、山茶碗等
34	三疋田遺跡	平安、鎌倉	溝、自然流路	土師器、須恵器、山茶碗、軒丸瓦等
35	東片田遺跡	奈良、鎌倉	柵列	土師器

第4図 遺跡位置図 [国土地理院 1:25,000「松阪、横野、大河内、国東山」](1:50,000)

Ⅲ 下茅原遺跡 第1次調査

1 A地区

(1) 調査区の地形と基本層序

A地区は櫛田川左岸の河岸段丘上に位置し、現況は水田である。調査区の南端部は一段低い水田となっており、水田面の標高は上段調査区が約45m、下段調査区が約44mである。本調査区は北側に流れる櫛田川と西側に流れる六呂木川の合流地点付近に位置し、周辺との比高差が2～3mあることから、段丘の突端部と判断できる。

基本層序は、表土直下で褐色・黄褐色系の粘質土(第2～9層)が確認でき、黄褐色系の粘質土及び砂質土(第11・14・17・18・21層)で遺構の検出を行った。ただし、調査区北端部の遺構集中範囲では、検出面になおも遺物が包含していたため、記録作業終了後、無遺物層である砂礫層(第22・23層)まで掘り下げ、再度検出作業を行った(第2面)。なお、検出作業は2面行っているが、各検出面で遺構に明確な時期差は認められないため、遺構平面図は合成して表現している。また、掘立柱建物の断面図(第10図)のうち、第2面で検出した柱穴については一部点線で表現している。

(2) 検出遺構

検出した主な遺構は、掘立柱建物・溝・土坑・墓・落ち込み・自然流路等で、所属時期は概ね平安時代末期～室町時代と考えられる。以下、主な遺構について概要を記すが、個々の遺構については、後掲の遺構一覧表^①(第3表)を参照されたい。

①平安時代末期の遺構

SR1 調査区の南端部で検出した幅約6m、深さ約0.5mの自然流路である。底部は砂礫層を形成し、岩盤も一部露出していた。従って、この砂礫層形成時には、かなり強い水流があったものと考えられる。一方、砂礫層の上層には灰～黒色系の粘質土が堆積していることから、これらの層が堆積する段階には、あまり強い水流が無かったものと考えられる。本調査区で検出した範囲は延長約10mのみであるが、南西から北東方向へ水流を形成していたことが分かる。

出土遺物は山茶椀(1)1点のみであるが、平安時代の末期頃には埋没したものと推定される。なお、SR1を検出した検出面の下層では層位的にSR1より古い段階の礫層も認められる。つまり、SR1を検出した調査区南端は長らく自然の流路となっていたと考えられる。また、後述するB地区のSR31の下流部であると考えられる。

②鎌倉時代の遺構

SX12 調査区北東壁際に位置する。土層確認用のトレンチ掘削時に小刀が出土した。また、礫が集積されていたことから、墓と認識して遺構検出及び掘削を行った。集積されていた礫は最大幅約30cmまでの川原石であった。礫の集積状況は一見無造作に思われたが、中央部に積み上げられた礫を除去した結果、比較的扁平な礫が壁際に立てられたような状態で不整形形状に配置されていた。東側の集石は転落等で原位置を保持していないためかやや判然としないが、墓壙掘削後にその輪郭に沿って扁平礫を配置し、その後中央部に礫を積み上げて集石墓を造営したのと考えられる。墓壙の埋土は褐色系の粘質土で、焼土・炭化物等の混入は認められなかったため、土葬と考えられる。副葬品と考えられる遺物として、土師器皿(2～4)が3点、土師器鍋(5)1点、小刀(6)1点が出土しており、いずれも墓壙北端部の壁際に集中していた。小刀は墓壙の最底部に置かれ、その上部に土師器鍋が横位に置かれる。土師器皿の一部は壁際に立った状態で出土しているものがあつた。墓の造営年代は、出土土師器皿・鍋から13世紀後葉と考えられる。

SX19 調査区北端部の遺構集中部に位置する。平面形態は長軸約1.3mの隅丸不整形長方形を呈する。墓壙の東隅には最大幅約30cm以下の川原石が4個体所在する。検出面は礫混土層であるが、この程度の大きさを持つ礫が集積した状況は、自然由来とは考えにくい。墓の関連遺構と判断した。また、釘(8)も2点出土しているが、墓壙検出以前の包含層

掘削の段階で、当遺構周辺で多数の釘（131・133～135・137）が出土していることから、木棺墓であった可能性が高い。ただし、礫と釘の両者がともに造墓時の原位置を保持していると仮定すれば、出土位置の関係から木棺内に自然石が納入されていたとも想定できる。しかし、それよりはむしろ埋葬後の墓壇上に据え置かれた礫が、木棺の腐朽によって墓壇内に陥没した蓋然性が高いと考える。従ってこれらの礫は、埋葬後の墓壇上に据えられた墓標と想定したい。副葬品と考えられる遺物として、土師器鍋（7）1点、小刀（9）1点が出土しているが、釘との位置関係から鍋は棺外に横位の状態で納入された可能性がある。墓の造営年代は、出土土師器鍋から13世紀後葉と考えられる。

③室町時代の遺構

S B 22 東西4間（約7.8m）、南北1間（約1.8m）の非常に細長い建物で、主軸はN47° Eである。柱間は東西1.8～2.0m、南北1.8mで柱穴は比較的小規模である。柱穴内からは土師器皿（10・11）が2枚重なる状態で出土した他、15世紀後半～16世紀前葉頃の土師器皿（12）・鍋等が出土している。

S B 23 東西3間（約5.9m）、南北1間（約1.8m）の細長い建物で、主軸はN44° Eである。柱間は東西1.8～2.1m、南北1.8mで柱穴は比較的小規模である。柱穴内からは15世紀後半～16世紀前葉頃の土師器皿・鍋等が出土している。柱穴の切り合いから、S B 24の後に建てられたと考えられる。

S B 24 東西3間（約5.8m）、南北2間（約3.4m）の建物で、主軸はN42° Eである。柱間は東西1.8～2.1m、南北1.6～1.8mで、柱穴内からは15世紀後半から16世紀前葉頃の土師器皿（13）・椀（14）・鍋等の他、鉄滓も出土している。

S B 25 東西2間（約3.6m）、南北3間（約4.0m）の建物で、平面形態は方形に近い。主軸はN45° Eで、柱間は東西1.8～1.9m、南北1.2～1.5mである。柱穴内からは青磁小片や銭貨（15）の他、15世紀後半頃の土師器皿小片等が出土している。その他は土師器の細片のみの出土のため所属時期は不詳ながら、他の建物と大きな時期差はないと考えられる。柱穴の切り合いから、S B 24の後に建てられたと考えられる。

S B 26 東西3間（約5.9m）、南北2間（約2.7m）の建物で、主軸はN47° Eである。柱間は東西2.0m、南北1.3～1.5mで、柱穴内からは15世紀後半～16世紀前葉頃の土師器皿（16）・鍋（17）等が出土している。

S B 27 東西2間（約4.1m）、南北2間（約2.4m）の建物で、主軸はN45° Eである。柱間は東西1.8～2.1m、南北1.0～1.4mで、柱穴内からは14世紀後半～15世紀前半頃の土師器皿・鍋（18）等が出土している。

S K 2 長軸約2mの平面形態が不整楕円形を呈した土坑である。埋土は淡褐色土1層で、埋土内から15世紀後半の土師器鍋（19）が出土している。

S K 3 調査区北端部の北側壁際に位置する。調査区外に遺構が延長するため全容は不明であるが、平面形態は円形と推定される。埋土は灰色粘質礫混土1層で、埋土から15世紀末～16世紀初頭の土師器鍋（20）が出土している。

S K 4 調査区北端部の北側壁際に位置する。調査区外に遺構が延長するため全容は不明であるが、平面形態は楕円形と推定される。埋土は灰色粘質礫混土1層で、埋土から15世紀後半の土師器鍋（21）と混入遺物の山茶椀（22）が出土している。

S K 11 調査区北端部の西側壁際に位置する。調査区外に遺構が延長するため全容は不明であるが、長径4m程の楕円形土坑の可能性がある。底部には段差があり、中央部が深くなっている。埋土上面で砂岩製の一石五輪塔（26）が出土し、埋土中からは15世紀後半の土師器鍋（25）が出土している。

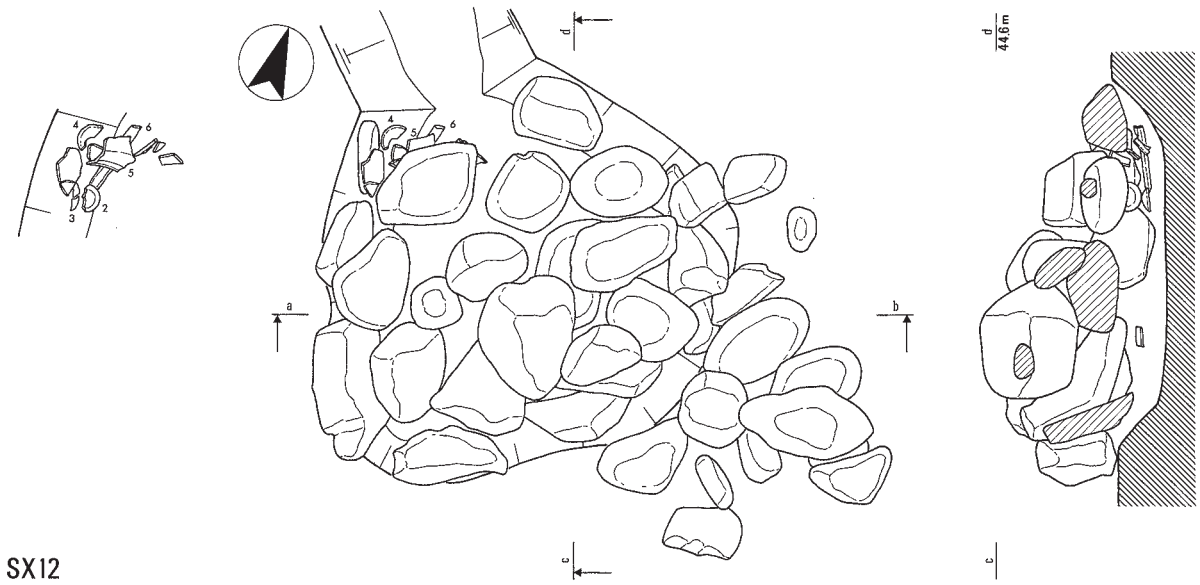
S K 13 調査区北端部の遺構集中部に位置する。平面形態は不整楕円形で埋土は褐色粘質土1層である。この埋土には炭化物が混入し、焼土粒と思われる明黄褐色土が斑点状に混在する。埋土中から15世紀末～16世紀初頭の土師器鍋（23）が出土している。

S K 14 調査区北端部の遺構集中部に位置する。平面形態は不整楕円形で、埋土は褐色土1層であるが、埋土上面で径40cm程度の焼土ブロックを検出した。埋土中から15世紀前半の土師器皿（27・28）と銭貨（29）が1点出土している。

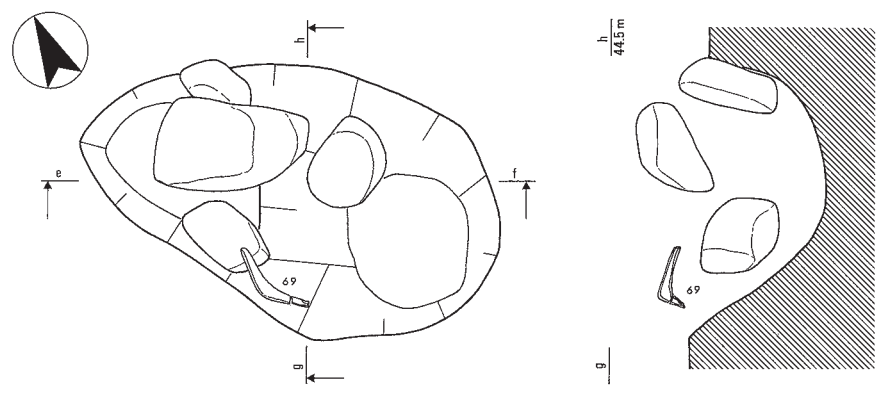
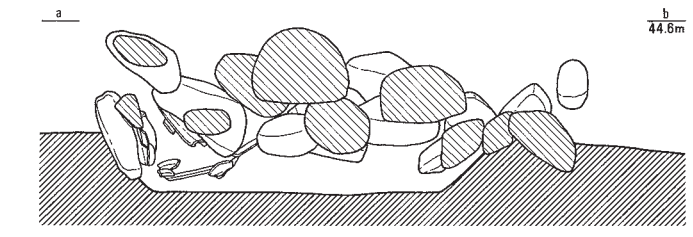
S K 15 調査区北端部の遺構集中部に位置する。平面形態は不整楕円形で、埋土は褐色系の砂質土1層



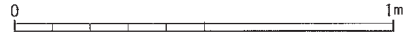
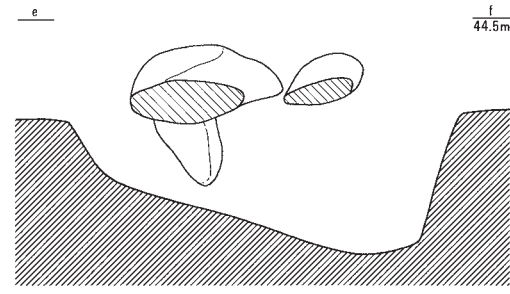
第5図 A地区遺構平面図①(1:200)



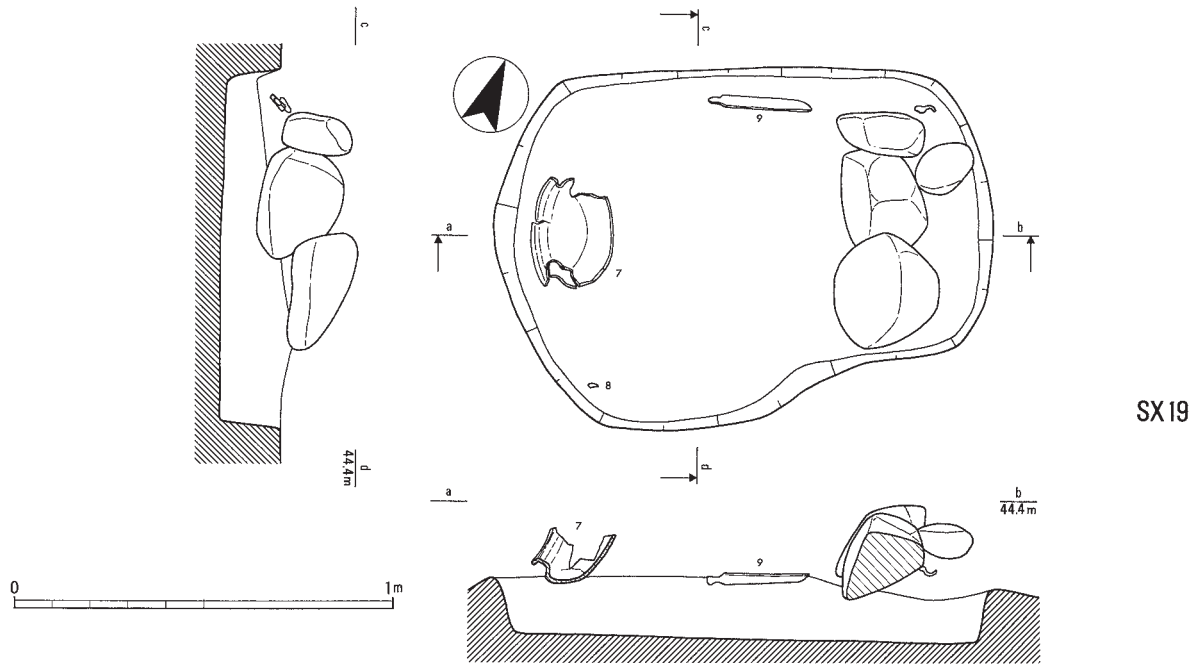
SX12



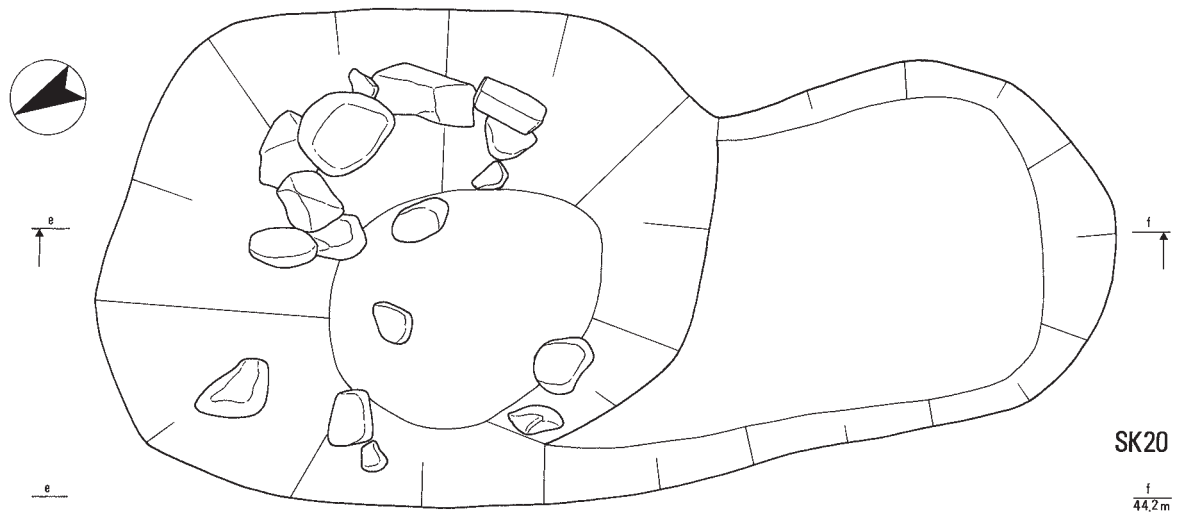
SX18



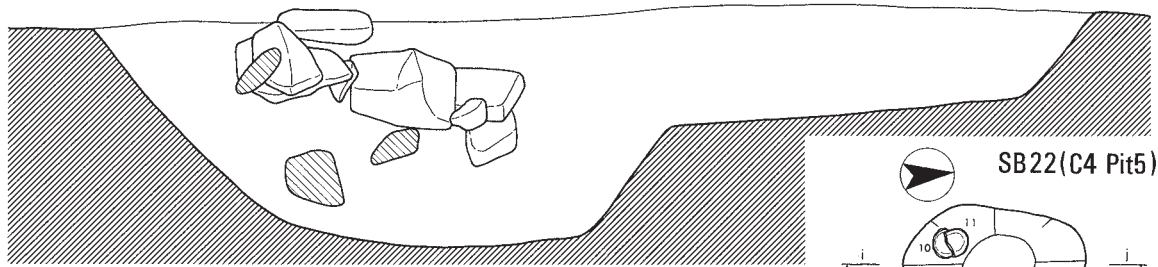
第8图 SX12·18平面图·断面图(1:20)



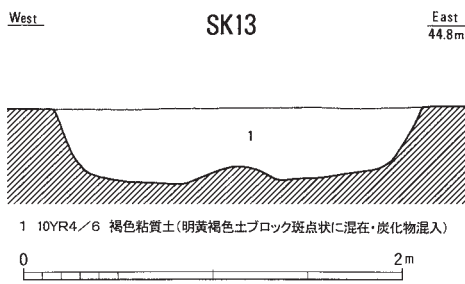
SX19



SK20

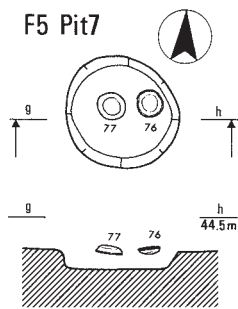


SB22 (C4 Pit5)

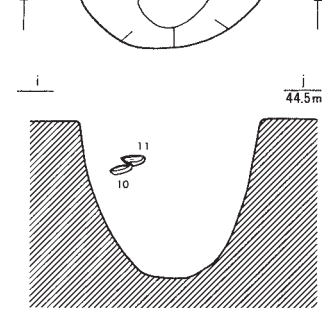


SK13

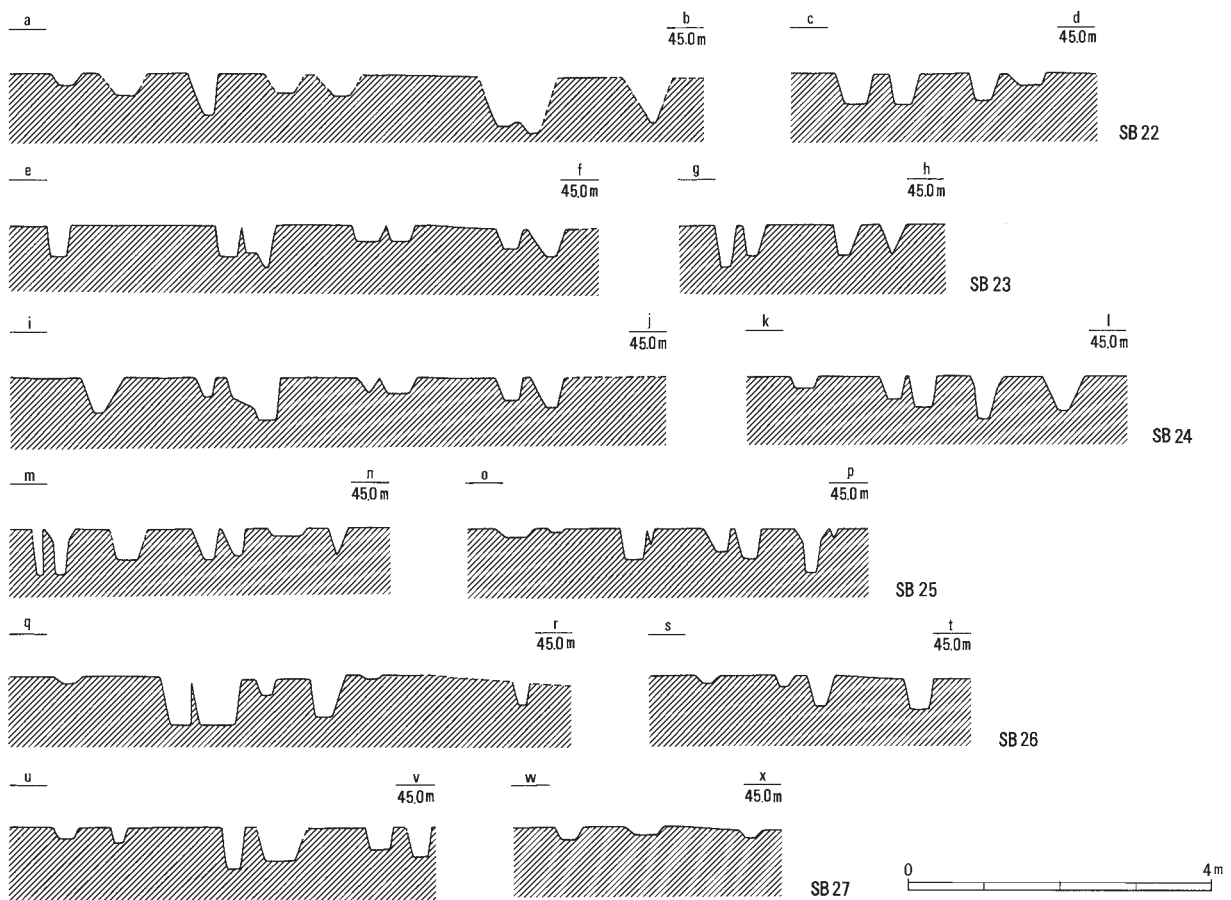
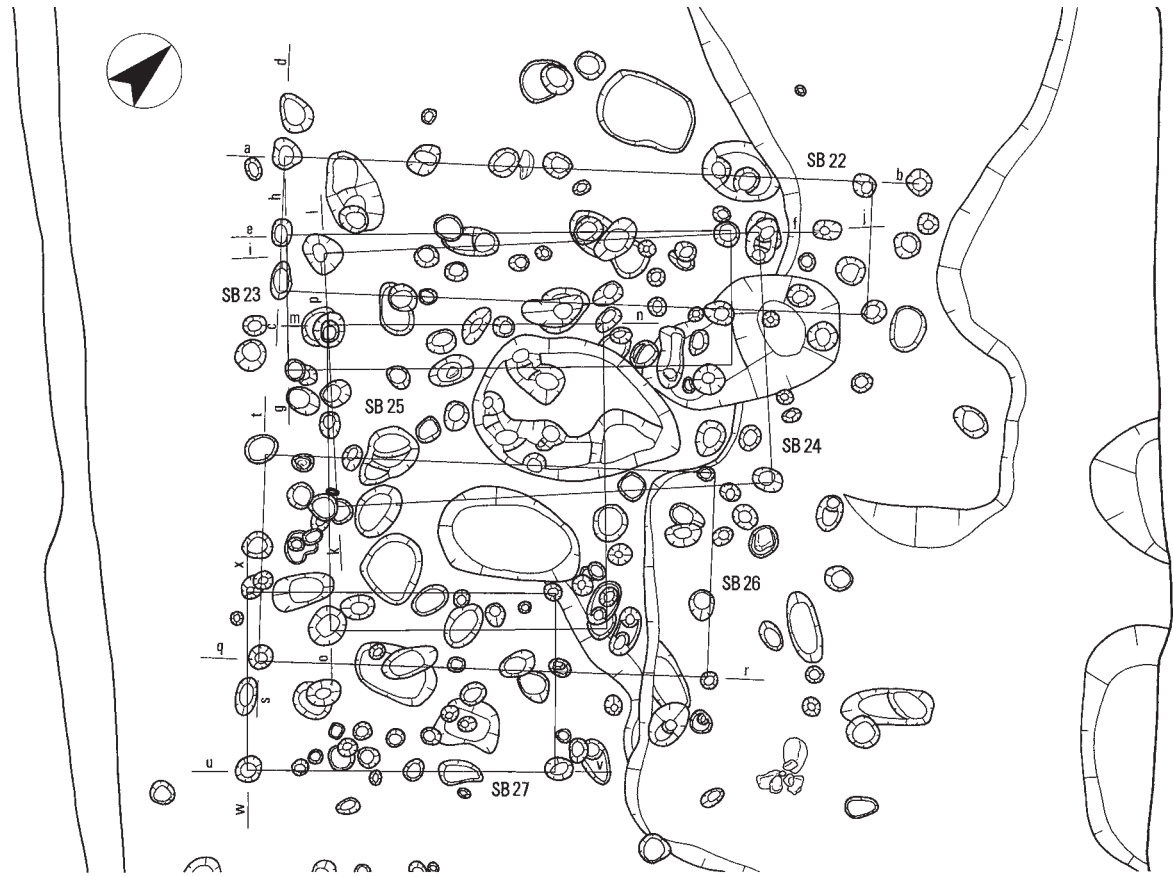
1 10YR4/6 褐色粘質土(明黄褐色土ブロック斑点状に混在・炭化物混入)



F5 Pit7



第9図 SX19、SK13・20、Pit平面図・断面図(1:20、SK13は1:40)



第10图 SB22·23·24·25·26·27平面图·断面图(1:100)

である。埋土中から白磁小椀（30）が出土している。
S K 20 調査区北端部の遺構集中部に位置する。平面形態は不整楕円形で、底部南側はテラス状を呈する。底部北側は検出面からの深さが1.2m程あり、最大径50cm以下の礫が疎らな状態で出土している。遺構の形態から井戸の可能性も想定されるが、性格不明の土坑である。埋土中からは15世紀後半の土師器鍋（31）と銭貨（32）が出土している。

S Z 9 調査区北端部の遺構集中部に位置する。段丘突端部に形成された自然の落ち込み地形と思われる。埋土内からは、12世紀～16世紀代の遺物が出土している。出土遺物は、土師質土器（ロクロ土師器）小皿（50）、瓦器椀（51）、土師器皿（37～41）、土師器鍋（42～48）、土師器羽釜（49）、山茶椀（52～58）、古瀬戸後期の灰釉中皿もしくは盤類（49）、常滑製品甕（62）、常滑製品片口鉢（60・61）、白磁小皿（64）、小刀（66）、釘（67）、銭貨（65）等である。埋土内の出土遺物の時期幅が大きいことから、漸移的に落ち込み地形が埋没し、S B 22～27との関係から15世紀後半～16世紀前葉に落ち込み地形が整地され、平坦面を形成した際に混入したと想定される。

S Z 17 調査区北端部の西側壁際に位置する。段丘突端部に形成された自然の落ち込み地形と思われる。埋土から山茶椀（68）や15～16世紀代の土師器鍋が出土しているため、16世紀頃までには埋没したと想定される。

F 5 Pit 7 径約30cmで検出面からの深さが5cmの浅い小穴である。建物を構成する柱穴として認定できなかったが、15世紀末から16世紀前半の完形の土師器皿（76・77）が2枚出土している。これらは一方が正立（76）、他方が倒立（77）状態で出土しており、人為的に埋納した可能性が高い。

④時期不明の遺構

S X 18 調査区北端部の遺構集中部に位置する。当初の検出段階では、鎌（69）と自然礫が認識できたのみで、墓壙は確認できなかったが、鎌及び礫を取り上げた後にさらに掘り下げたところ、長軸約1.1mの墓壙を検出した。検出した礫は、最大幅40cm以下の川原石で、検出状況から人為的に据え置かれたものと考えられる。墓壙の埋土は黄褐色系の砂質土で焼土や炭化物の混入は見られなかった。墓壙の埋土

からは土師器の小片が出土したが、時期を特定できるものは出土していない。遺構の検出状況及び遺物の出土状況からは、墓と認定するにはやや疑問も残るが、ここでは可能性を肯定的に捉え墓として報告しておきたい。時期を特定できる遺物は出土していないが、S X 12・19と同時期と推定される。

S K 6 調査区中央付近に位置する。長軸1.5mほどの平面不整楕円形を呈する。土師器の細片が少量出土したが、性格・所属時期ともに不明である。攪乱土坑である可能性が高い。

S K 16 調査区北端部の遺構集中部に位置する。平面形態は不整楕円形で埋土は黄橙色系の粘質土一層である。土師器の細片が少量出土したのみで、遺構の性格・所属時期ともに不明である。

S K 21 平面形態が不整楕円形の土坑である。S X 12に切られているため、S X 12以前の遺構と判断できるが、出土遺物が皆無であり、性格も不明である。

S D 7 調査区北端部の遺構集中部に位置する。延長1m余りの溝状遺構であるが、性格は不明である。検出面からの深さは数cmしかなく、長楕円形の土坑とした方が適切かもしれない。土師器の小片が出土しているが、所属時期は不明である。

S D 10 S D 7に隣接する。遺構の規模・形態はS D 7と同様で、性格・所属時期ともに不明である。

S Z 5 上段調査区南端部の調査区壁際に位置する。段丘突端部に形成された自然の落ち込み地形と思われる。時期を特定できる遺物は出土していない。

S Z 8 上段調査区南端部付近の調査区壁際に位置する。S Z 5同様、段丘突端部に形成された自然の落ち込み地形と思われる。時期を特定できる遺物は出土していない。
(小山憲一)

(3) 出土遺物

A地区では、整理箱で31箱程度の遺物が出土している。その大部分は、調査区北端部の遺構集中部分からの出土である。出土遺物の所属時期は12～16世紀代が大半で、縄文時代の遺物も僅かながら出土している。土師器は、すべて南伊勢系のものである。

①平安時代の遺構出土遺物（1）

S R 1 出土遺物（1）

1は陶器椀（以下、山茶椀と称す）である。高台端部に刳殻痕が見られる。器壁が厚く、底径も8.5cm

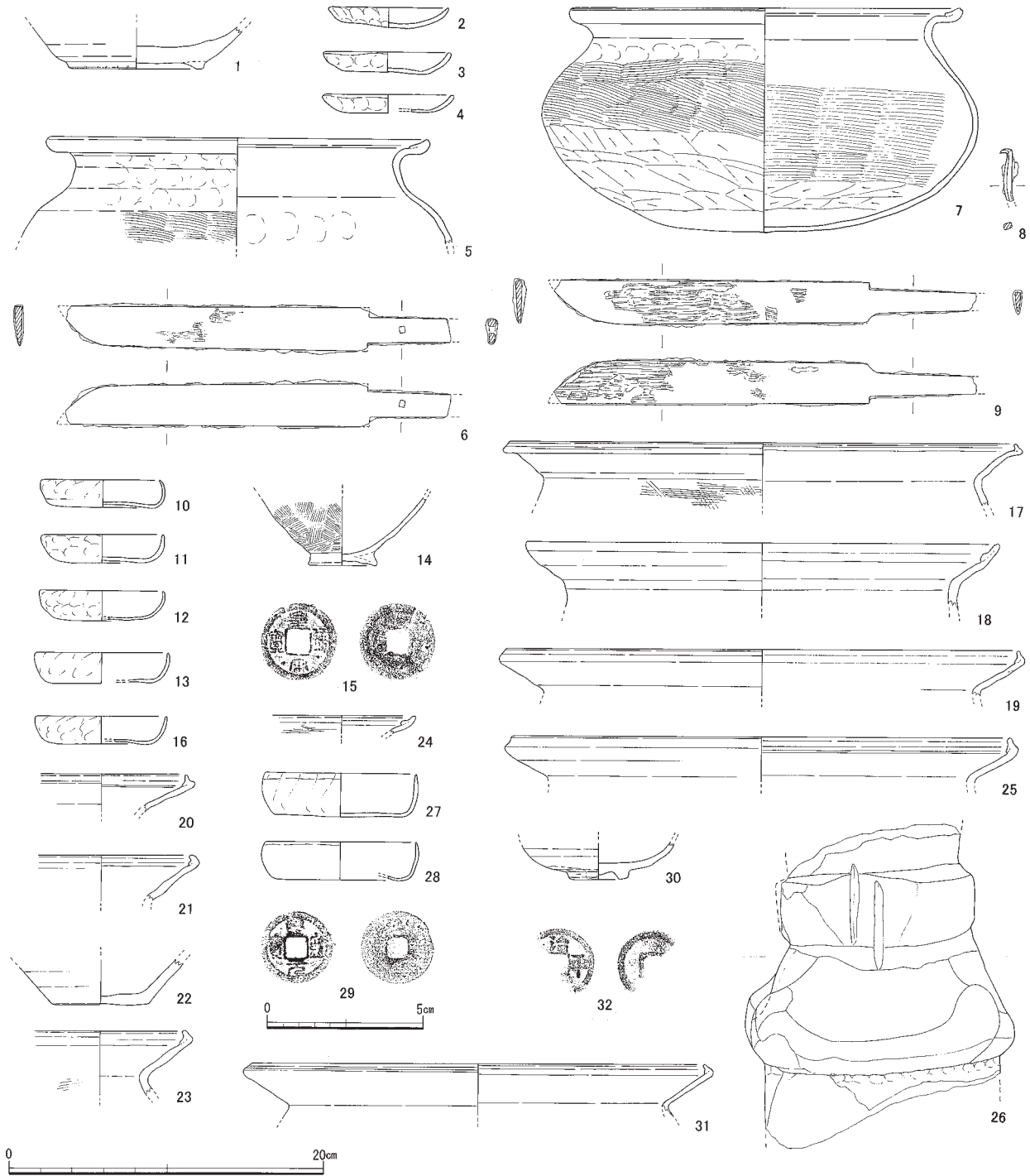
と大きい。藤澤良祐氏の編年^②（以下、藤澤編年と称す）尾張型第4型式のものである。

②鎌倉時代の遺構出土遺物（2～9）

S X 12出土遺物（2～6）

2～4は、いずれも口径8cm前後の土師器小皿で伊藤裕偉氏の分類（以下、伊藤分類と称す）^③のA系統に区分される。2は、器高が若干高めで、内面底

部中央から口縁部に向かって広がる。オサエやナデが明瞭に観察できる。3は、器壁が厚く、やや硬質である。5は土師器鍋の口縁部から体部片である。頸部のオサエは明瞭で、体部のハケメは細かく薄い。伊藤裕偉氏の編年^①（以下伊藤編年と称す）による第2段階a型式に位置付けられる。6は鉄製品小刀である。刃部には僅かに木質が残存し、目釘穴が開い



第11図 流路・墓・掘立柱建物・土坑出土遺物実測図(1:4、15・29・32は1:2)

ている。

S X 19出土遺物 (7~9)

7は、土師器鍋である。口縁部が短く、受口状をなし、頸部は明瞭な屈曲が見られる。伊藤編年第2段階 a 型式に相当する。8は鉄製品釘である。9は鉄製品小刀で、刃部に木質が残存している。

③室町時代の遺構出土遺物 (10~68)

S B 22出土遺物 (10~12)

10~12は土師器皿で、いずれも口径は8cm前後の大きさである。10は完形で、底部から体部にかけてオサエやナデの痕跡が明瞭に観察できる。11は若干器壁が厚い。12は硬質で、外面にオサエの際の指紋の痕跡まで観察できる。

S B 24出土遺物 (13~14)

13は土師器皿である。胎土は橙色で、口径8.6cmと大きい。14は土師器椀である。径4.4cmの高台が付き、外面体部には細かいハケメが施される。器壁は薄く、15世紀後半代のもと考えられる。

S B 25出土遺物 (15)

15は銭貨で、皇宗通寶。初鑄年は、1039年である。

S B 26出土遺物 (16・17)

16は土師器皿である。器壁が薄く、口縁端部は尖っている。17は土師器鍋である。頸部から口縁部へと「く」の字をし、端部付近で外反している。伊藤編年第4段階 b~c 型式の範疇であろう。

S B 27出土遺物 (18)

18は土師器鍋である。口縁部が長く、折り返し部分が小さい。小片のため、口径は誤差が生じる可能性が高い。伊藤編年第3段階 a 型式のものである。

S K 2 出土遺物 (19)

19は土師器鍋の口縁部で、外面に煤が付着している。口縁部内面に浅い窪みが見られ、伊藤編年第4段階 b 型式に相当しよう。

S K 3 出土遺物 (20)

20は土師器鍋の口縁部である。口縁端部のコヨナデが強く、端部外面が凹線状に窪んでいる。伊藤編年第4段階 c 型式のものである。

S K 4 出土遺物 (21・22)

21は土師器鍋である。口縁部のみ残存し、外面に煤が付着している。口縁部内面の折り返し部分に沈線状の窪みがあり、伊藤編年第4段階 b 型式に相当

する。22は山茶椀である。底部は平底で、藤澤編年尾張型第8か9型式のものである。

S K 13出土遺物 (23)

23は土師器鍋である。口縁部のみ残存し、「く」の字形をしている。口縁端部外面のヨコナデが強く、伊藤編年第4段階 c 型式のものである。

S K 11出土遺物 (24~26)

24・25は、土師器鍋の口縁部である。24は、器壁が薄く、扁平で、小形品になろう。口縁部内面に沈線状の窪みが見られ、伊藤編年第4段階の範疇であろう。25は、口縁端部が長く、やや内彎している。伊藤編年第4段階 b 型式に該当する。26は砂岩製の一石五輪塔である。火輪・水輪・風輪のみが残存している。

S K 14出土遺物 (27~29)

27・28は土師器皿で、伊藤分類B系統に属する。いずれも器壁が薄く、口縁端部がヨコナデにより尖っている。29は銭貨で、「熙寧元寶」。初鑄年は1068年である。

S K 15出土遺物 (30)

30は白磁小椀である。体部は緩やかに内彎し、高台と体部の一部は、露胎している。森田勉氏の分類^⑤(以下、森田分類と称す) B群に属する。

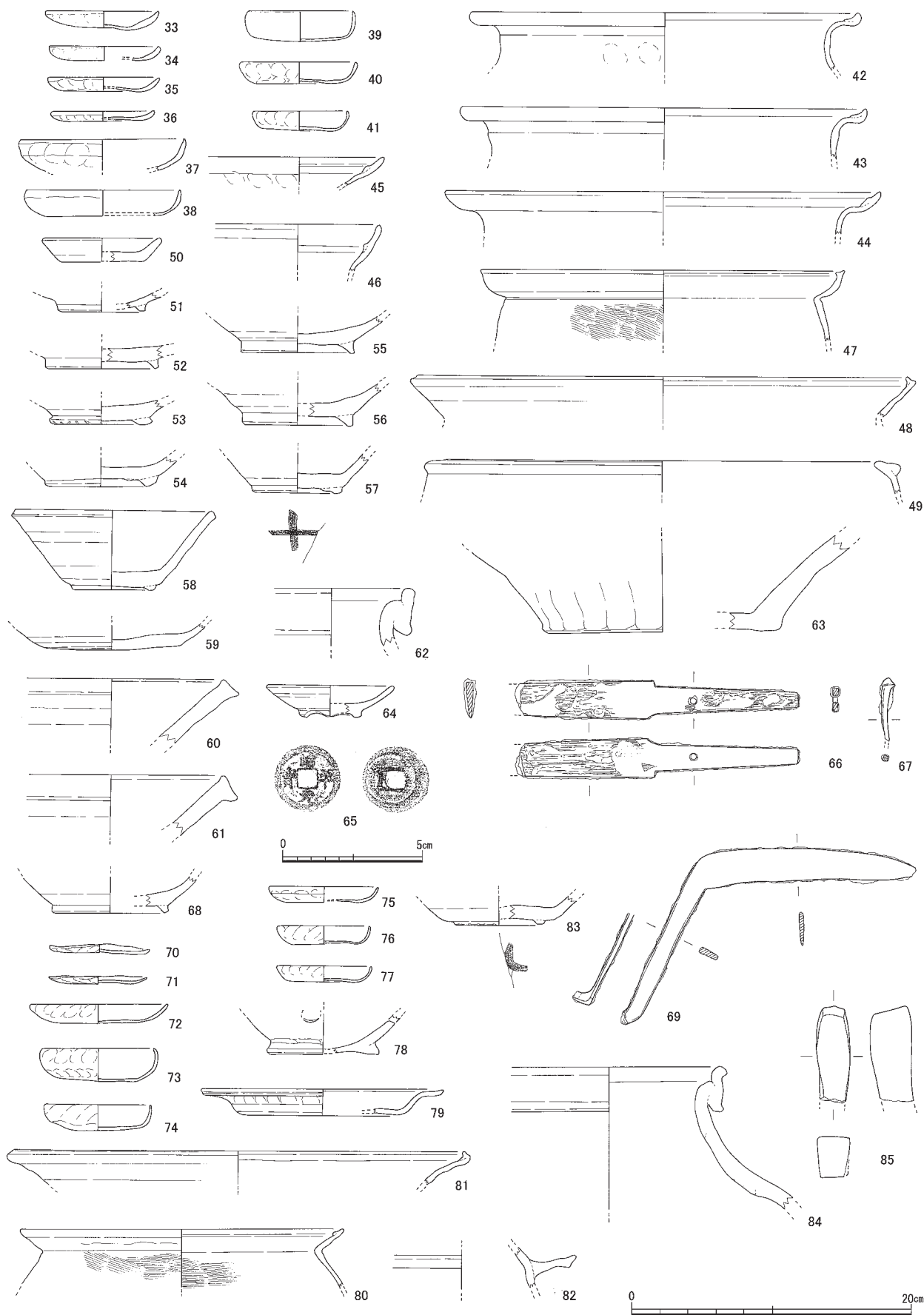
S K 20出土遺物 (31・32)

31は土師器鍋で、口縁部外面端部が凹線状に窪んでいる。伊藤編年第4段階 b 型式になろう。32は銭貨である。「治平□□」と読める。

S Z 9 出土遺物 (33~67)

土師器 33~36は小皿、37~41は皿、42~48は鍋、49は羽釜である。33は器高が1.2cmとやや深めで、口径も大きく、古い要素が見られる。また、口縁端部は強くヨコナデしている。34は口縁部がやや肉厚である。35は、かなり歪んでいるため、本来口径はもう少し小さくなるだろう。36は底部から口縁部にむかって肥厚している。37は口径11.8cmと大きく、器壁も厚い。38は、器壁が厚めで、口縁部がやや尖っている。39は器高が高く、底部から口縁部に向かって緩く立ち上がる。40は、口縁部がやや外側へむかって開いている。41は口径6.9cmと小振りで、体部のオサエがよく観察できる。

42は、口縁部は短く、頸部はオサエによって長く



第12図 落ち込み・墓・Pit出土遺物実測図(1:4、65は1:2)

なっている。伊藤編年第1段階b型式のものである。43は、口縁部が短く、受口状をなし、頸部が長い。伊藤編年第1段階b型式のものである。44は口縁部と頸部上面の境が明瞭で、口縁部の折り返しはゆるい三角形状をなしているため、伊藤編年第2段階c型式に相当する。45は口縁部がやや内彎し、内面の折り返し部分が平たいため伊藤編年第3段階b型式のものである。46は口縁部が長く、やや内彎する。口縁部内面の折り返し部分の断面は、低い三角形状をなしているため伊藤編年第3段階b型式のものである。47は胎土に小石粒が少ない。口縁端部は面をなし、頸部には明瞭な稜線が入り、体部は細かいハケメが見られる。伊藤編年第3段階a型式に相当しよう。48は口縁端部のヨコナデが強く、内面に沈線状の窪みがあり、伊藤編年第4段階b型式のものである。49は口径30cmを超える大形の羽釜で、口縁部はやや内傾気味に立ち上がる。端部は擬口縁を作り、その上端を包むように素地を付加したと考えられる。伊藤裕偉氏の分類⁶⁾によるD a類に相当する。

50は小皿である。土師器ならば、硬質の土師質土器に、焼成不良の山皿ならば、藤澤編年第6型式に該当する。51は瓦質土器碗である。底部しか残存していないためよくわからない。

陶器 52～58は山茶碗である。52は底部が厚く、高台が小さいため藤澤編年渥美型第6型式のものである。53は高台が低い台形状で、刳殻痕が付着している。藤澤編年渥美型第6型式のものである。54はぶ厚い底部に低い高台が付く藤澤編年渥美型第5型式のものである。55・56は、底部のみ残存している。胎土が細かく、高台は断面三日月を呈しているため藤澤編年第3型式のものである。57は底部から体部にかけて残存している。内面底部は角張り、高台は小さく、大半が剥離している。藤澤編年尾張型第7型式のものである。また、外面底部には、墨書があり、「十」と読める。58は口縁部が尖り、内面底部が角張っている。藤澤編年尾張型第7型式のものである。59は瀬戸美濃製品中皿もしくは盤類である。藤澤良祐氏の編年⁷⁾（以下、藤澤編年と称す）古瀬戸後IかII期のものである。

60～63は常滑製品である。60・61は片口鉢の口縁部である。60は口縁端部がわずかに下方へのびてい

るため中野編年8型式のものであろう。61は口縁端部が60より下方へのびている。中野編年8もしくは9型式の範疇であらう。62は甕の口縁部である。短い縁帯の下方は頸部に付いており、中野編年9型式に相当しよう。63は底部片である。底径から考えると甕にならう。

磁器 64は白磁で、皿にならう。体部を緩く内彎させながら立ち上がり、口縁端部を丸く引き出している。高台は内側部分が斜行するように削り出されている。高台の接地面を除き全面施釉されている。また、内面には重ね焼き時の痕跡が残る。いわゆるB群⁸⁾に属する。

鉄製品 65は銭貨で、治平通寶。初鑄年は、1064年である。66は小刀で、刃先が欠損している。目釘穴があき、木質がよく残っている。67は釘である。

S Z 17出土遺物 (68)

68は山茶碗の底部である。胎土は細かく、高台は断面三角形を呈している。藤澤編年渥美型第3型式に相当する。

④時期不明の遺構出土遺物 (69)

S X 18出土遺物 (69)

69は鉄製品鎌である。切先がわずかに欠損している。

⑤その他出土遺物 (70～120)

P i t 出土遺物 (70～85)

土師器 70・71は小皿、72～77は皿である。70は、小皿で、オサエが明瞭に残り、歪みも見られる。72は器高が低く、扁平である。外面底部には、素地接合痕が確認できる。73は口径8.4cmと大きい。74は胎土が灰白色をしている。口縁部には緩いヨコナデが見られる。75は口径7.8cmに対して器高が1.1cmと低く、扁平である。77は口径が6.7cm、器高1.2cmと非常に小振りで、歪みが大きい。胎土は橙色をしている。78は碗で、底径8cmの高台が付く。体部の上部には弧状のラインがあり、穿孔と見られる。79は茶釜の蓋である。

80・81は土師器鍋の口縁部である。80は、口径が21cmと小形品である。口縁部は長く、体部には細かいハケメが施され、一見伊藤編年第3段階のものに見える。しかし、小形品は古い要素をひきずることや胎土が橙色であることを考慮すると、伊藤編年第

4段階の範疇に入ろう。81は口縁端部の内面中程に沈線状の窪みがあることや端部外面のヨコナデが強いことから伊藤編年第4段階b型式のものである。82は土師器羽釜の鐙部分である。

陶器 83は、山茶碗の底部である。外面底部には、墨書が書かれている。文字は、一部しか残っていないため、判読は難しい。藤澤編年尾張型第6型式のものである。84は常滑製品甕である。縁帯は上下に伸びるものの、短い。中野晴久氏の編年^⑨（以下、中野編年と称す）6a型式のものである。

石製品 85は、凝灰岩製の砥石である。断面は四角く、四面ともよく研磨され、使用されている。

包含層出土遺物（86～141）

縄文土器 86は、縄文土器深鉢の体部片である。二条の細い垂下沈線が施文される。中期末葉～後期初頭の所産と考えられる。

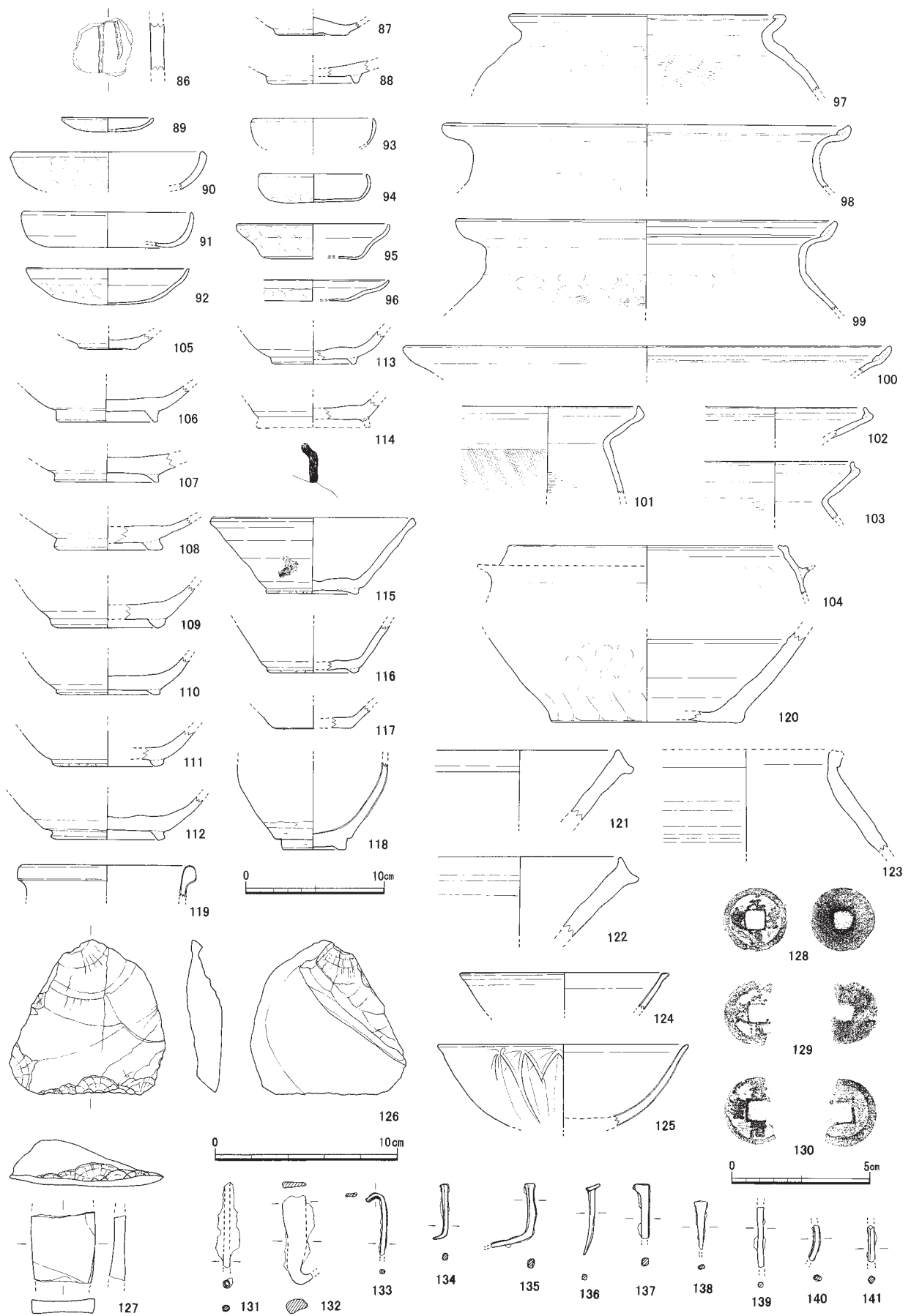
土師器 87は土師質土器小皿である。底部のみ残存し、中心に向かって肥厚している。88は土師質土器碗である。89は小皿、90～96は皿である。90は器壁が厚く、口縁端部を強くヨコナデし面を持っている。91は口径14.2cmと大きく、やや器壁が厚めである。92は口縁部にヨコナデを施し、緩やかに外反している。伊藤分類のD系統に区分される。94は、口径が7.8cmと小さい。95・96は平底の底部から口縁部にむかって外反している。体部上半と口縁部にはヨコナデが施されている。伊藤分類D系統に区分される。

97は甕の口縁部である。口縁部は短く、内側に折り返しており、伊藤編年（仮）A段階のものである。98～103は鍋である。98は口縁端部が立ち上がり、受口状を呈する。伊藤編年第1段階b型式に相当する。99は口縁端部の断面がわずかに三角形状をしているため伊藤編年第2段階c型式となる。100は口縁部が長く、やや内彎しているため伊藤編年第3段階b型式のものである。101は口縁部から頸部へと「く」の字形をし、体部には横方向の後、縦方向にハケメが施されている。伊藤編年第4段階c型式のものである。102・103は口縁端部外面のヨコナデが強く、凹線状に窪むため伊藤編年第4段階c型式のものである。104は羽釜で、口径20cm程度の小形品になる。口縁部は短めで、口縁端部は折り返されず方頭状に収められる。伊藤分類のB類に相当する。

陶器 105は、山皿の底部である。平底で、底部がやや突出している。藤澤編年渥美型第5型式の古段階に相当する。106～117は山茶碗である。106は胎土が細かく、高台は断面逆三角形を呈している。藤澤編年第3型式のもので、尾張型であろう。107は、高台が低めの断面逆三角形を呈し、藤澤編年渥美型第5型式のものである。108は高台が高く、台形状をなしている。また、焼成が不十分であったせいか、底部内面は若干黒色を帯びている。藤澤編年第5型式のもので、渥美型になろうか。109は、内面に自然釉が付着している。高台が高く、八の字状に開いている。藤澤編年渥美型第4型式のものである。110は高台が低く、全体的に丸みを帯びている。藤澤編年渥美型第6型式のものである。111は、高台端部に靱殻痕が付着している。藤澤編年渥美型第5型式のものである。112は高台が高いため藤澤編年渥美型第4型式。113は高台が低く、底部内面と体部内面の境には浅い凹みが見られる。藤澤編年尾張型第6型式のものである。114は、底部に墨書が見られる。残存部分が少ないため、文字の判読はできない。高台が低く、小さく形骸化し、藤澤編年第6型式のものである。115は、口縁端部が尖り、内面底部は角張っているため藤澤編年尾張型第7型式に相当する。体部には、墨痕が見られる。116は高台が低く、体部が直線的に開いているため藤澤編年尾張型第6型式のものである。117は高台が剥離している。藤澤編年渥美型第7型式になろう。

118は、天目茶碗である。底部から体部にかけて残存している。高台の削り込みは直角で浅く、藤澤良祐氏の編年^⑩（以下藤澤編年と称す）登窯第1小期のものである。119は、瀬戸美濃製品灰釉四耳壺である。口縁部のみ残存し、藤澤編年古瀬戸後Ⅲ～Ⅳ期古段階のものである。

120～122は常滑製品である。120は、底部片で、内面がよく揃られている。121・122は片口鉢の口縁部である。121は口縁端部が下方へのびており、中野編年10型式に相当しよう。122は、口縁端部が上下方向にのびている。中野編年11型式になろう。123は、甕の口縁部である。いわゆる常滑写しで、消費地ではあまり流通しないもの^⑪のようである。時期は、古瀬戸後期の範疇である。



第13図 包含層出土遺物実測図(1:4、126は1:3、128~130は1:2)

磁器 124は、白磁碗の口縁部である。口縁部が外反し、体部内面上位に浅い沈線が見られる。125は青磁碗である。外面体部に縞連弁の文様が施されている。龍泉窯系のもので、森田分類のⅠ-5類に属する。

その他 126は、凝灰質泥岩製の削器である。詳細な時期はわからないが、縄文時代のものの可能性がある。127は、凝灰岩製の砥石である。断面は板状で、中央がよく研磨され、ゆるやかに凹んでいる。

128~130は銭貨である。128が元豊通寶で、初鑄年は1078年である。129・130は銭文の一部が欠損している。129は「元□通寶」、130は「景□元寶」と読める。

131・133~141は鉄製品釘である。132は上部の断面が平坦で、下部は台形状を呈し、鉤状製品であろうか。

(酒井已紀子、小山憲一)

遺構番号	地区	グリッド	性格	時期	南伊勢中世	間桁×梁	桁行(m)	梁行(m)	建物方向	備考
SR1	A	P17~P19	流路	平安時代末期	I期					自然流路。B地区SR31の下流部と推定される。
SK2	A	E6・7、F6・7	土坑	室町時代	IV期					
SK3	A	F3	土坑	室町時代	IV期					
SK4	A	F3・4、G4	土坑	室町時代	IV期					
SZ5	A	N13・14、O13	落ち込み	不明						
SK6	A	I・J12	土坑	不明						攪乱坑の可能性あり。
SD7	A	F5	溝	不明						
SZ8	A	M10・11	落ち込み	不明						
SZ9	A	D2~I7	落ち込み	室町時代	IV期					
SD10	A	F5	溝	不明						
SK11	A	C・D2	土坑	室町時代	IV期					
SX12	A	H5	墓	鎌倉時代	II期					墓壇上に石積みあり。土師器皿・鍋、小刀を副葬品とする。
SK13	A	D4・5、E4・5	土坑	室町時代	IV期					
SK14	A	D・E4	土坑	室町時代	III期					
SK15	A	C3	土坑	不明	III期かIV期					
SK16	A	B・C4	土坑	不明						
SZ17	A	B・C3	落ち込み	室町時代	IV期					
SX18	A	C4	墓	不明						鉄製鎌出土。
SX19	A	D3	墓	鎌倉時代	II期					木棺墓か。土師器鍋・小刀を副葬品とする。
SK20	A	D3・4、E3・4	土坑	室町時代	IV期					有段土坑。人頭大以下の礫が下段部に有り。
SK21	A	H5	土坑	不明						
SB22	A	C4、D3・4	掘立柱建物	室町時代	IV期	4×1	7.8	1.8	N47° E	
SB23	A	C4、D3・4・5	掘立柱建物	室町時代	IV期	3×1	5.9	1.8	N44° E	
SB24	A	C4、D3・4、E4	掘立柱建物	室町時代	IV期	3×2	5.8	3.4	N42° E	
SB25	A	D4・5、E4・5	掘立柱建物	室町時代	IV期	3×2	4	3.6	N45° E	
SB26	A	D4・5、E4・5	掘立柱建物	室町時代	IV期	3×2	5.9	2.7	N47° E	
SB27	A	D5・6、E5	掘立柱建物	室町時代	IV期	2×2	4.1	2.4	N45° E	

第3表 A地区遺構一覧表

遺物 番号	登録 番号	器 種	出土 地区	報告 書遺 構番 号	調査 時遺 構番 号	法量 (cm)			残存度	調整 (技法) の特徴	胎 土	焼成	色 調	備 考	
						口径	器高	その他							
1	018-02	陶器 山茶椀	A	SR1	下段 地区 落込			高台径 8.5	高台部 11/12	外:ロクロナデ、底部糸切、高台 貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密(微砂粒含 む)	良	灰白 N7/0	尾張型第4型式	
2	004-04	土師器 皿	A-H5	SX12	SX12 No. 8	7.6	1.2		口縁部 6/12	外:ナデ、オサエ 内:ナデ、オサエ	密	並	灰白 2.5Y8/2		
3	004-03	土師器 皿	A-H5	SX12	SX12 No. 10	4.1	1.3		完存	外:ナデ、オサエ 内:ナデ、オサエ	密	並	浅黄橙 10YR8/3		
4	004-05	土師器 皿	A-H5	SX12	SX12 No. 7	8.4	1.2		口縁部 5/12	外:ナデ、オサエ 内:ナデ、オサエ	密	並	灰白 2.5Y8/2		
5	004-02	土師器 鍋	A-H5	SX12	SX12 No. 1	24.4			口縁部 4/12	外:ヨコナデ、オサエ、ナデ、ハケ メ(10本/1cm) 内:ヨコナデ、オサエ、ナデ	密(微砂粒含 む)	並	浅黄 2.5Y7/3	外面煤付着	
6	001-02	鉄製品 小刀	A-H5	SX12	SX12 No. 11	残存長 24.4	残存幅 2.5	残存厚 0.5							木質残存
7	004-01	土師器 鍋	A-D3	SX19	SX19 No. 1	25	14.3	体部径 27.7	口縁部 5/12	外:ヨコナデ、オサエ、ナデ、ハケ メ(5~6本/1cm)、ケズリ 内:ヨコナデ、オサエ、ナデ、ハケ メ、ケズリ	密(微砂粒含 む)	並	浅黄 2.5Y7/3	外面煤付着	
8	002-03	鉄製品 釘	A-D3	SX19	SX19 No. 4	残存長 3.4	残存幅 0.8	残存厚 0.5							木質残存
9	001-03	鉄製品 小刀	A-D3	SX19	SX19 No. 2	残存長 26.6	残存幅 2.7	残存厚 0.5							木質残存
10	012-02	土師器 皿	A-C4	SB22	Pit5 No. 2	7.9	1.8		完存	外:ナデ、オサエ 内:ナデ、オサエ	密(0.5mm以下 の砂粒含む)	並	浅黄橙 10YR8/4	口縁部歪み有り	
11	012-01	土師器 皿	A-C4	SB22	Pit5 No. 1	7.9	1.75		ほぼ 完存	外:ナデ、オサエ 内:ナデ、オサエ	密(1mm以下の 砂粒含む)	並	浅黄橙 7.5YR8/4・8/6	口縁部歪み有り	
12	012-03	土師器 皿	A-C4	SB22	Pit3	8	1.9		口縁部 6/12	外:ナデ、オサエ 内:ナデ	密(0.5以下の 砂粒含む)	並	浅黄橙 10YR8/4		
13	012-05	土師器 皿	A-D3	SB24	Pit5	8.6	1.95		口縁部 6/12	外:ナデ、オサエ 内:ナデ、オサエ	密(0.5mm以下 の砂粒含む)	並	橙 7.5YR7/6		
14	013-02	土師器 椀	A-D3	SB24	Pit5			高台径 4.4	高台縁 部9/12	外:ナデ、高台貼付、ナデ、ハケ メ(4本/0.4~0.5cm) 内:ナデ	密	並	橙~にぶい橙 7.5YR7/6~7/4		
15	002-15	銭貨	A-D4	SB25	Pit 25				完存						皇宗通寶
16	012-10	土師器 皿	A-E5	SB26	Pit 25	8.3	1.8		口縁部 3/12	外:ナデ、オサエ 内:ナデ、オサエ	密	並	淡黄 2.5Y8/3・8/4		
17	014-02	土師器 鍋	A-D5	SB26	Pit 11	33.0			口縁部 2/12	外:ヨコナデ、ナデ、オサエ、ハ ケメ(4~5本/0.5cm) 内:ヨコナデ、ナデ	密(微砂粒と1 mmの小石含 む)	並	灰黄褐~にぶい黄 橙 10YR6/2~7/4	外面煤付着	
18	014-01	土師器 鍋	A-D5	SB27	Pit7	(30.2)			口縁部 1/12	外:ヨコナデ、ナデ 内:ヨコナデ、ナデ	密(0.5mm以下 の砂粒含む)	並	灰黄褐~にぶい黄 橙 10YR6/2~7/2	外面煤付着	
19	006-01	土師器 鍋	A-E6 E7, F6 , F7	SK2	SK2- I	33.4			口縁部 2/12	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密(1mm以下の 砂粒含む)	並	にぶい黄橙 10YR7/3	外面煤付着	
20	006-04	土師器 鍋	A-F3	SK3	SK3				口縁部 小片	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密(1.5mm以下 の砂粒含む)	並	灰黄 2.5Y7/2		
21	006-05	土師器 鍋	A-F3 F4	SK4	SK4				口縁部 小片	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密(2mm以下の 砂粒含む)	並	にぶい黄橙 10YR7/2	外面煤付着	
22	005-04	陶器 山茶椀	A-F3 F4, G4	SK4	SK4			底径 6.0	底部 5/12	外:ロクロナデ、底部糸切 内:ロクロナデ	密(1mm以下の 砂粒含む)	良	灰白 5Y7/1	尾張型第8か9型 式	
23	006-07	土師器 鍋	A-D5	SK13	SK13 - I				口縁部 小片	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ、ナデ	密(1mm以下の 砂粒含む)	並	にぶい黄橙 10YR7/3		
24	006-06	土師器 鍋	A-D2	SK11	SK11				口縁部 小片	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密(微砂粒含 む)	並	にぶい黄橙 10YR7/3		
25	006-02	土師器 鍋	A-C2 D2	SK11	SK11	32.7			口縁部 2/12	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密(1mm以下の 砂粒含む)	並	にぶい黄橙 10YR7/2	外面煤付着	
26	005-01	五輪塔	A-D2	SK11	SK11	残存長 21.7	残存幅 17.1	残存重 5.1kg							
27	005-06	土師器 皿	A-D4	SK14	SK14 - I	9.7	2.8		口縁部 5/12	外:ナデ、オサエ 内:ナデ	密(1mm以下の 砂粒含む)	並	灰白 10YR8/2		
28	005-05	土師器 皿	A-D4	SK14	SK14 Pit1	9.6	2.4		口縁部 4/12	外:ナデ、オサエ 内:ナデ	密(1mm以下の 砂粒含む)	並	灰白 2.5Y8/2		
29	002-12	銭貨	A-D4	SK14	SK14 Pit1				完存						熙寧元寶
30	005-02	白磁 小椀	A-C3	SK15	SK15 - I			高台径 3.8	高台部 完存	外:ロクロナデ、ロクロケズリ、 削出高台、施釉 内:ロクロナデ	密(微砂粒含 む)	良	素地: 灰白7.5Y8/1 釉: 灰白7.5Y8/1	B群	
31	006-03	土師器 鍋	A-D3 D4, E3 , E4	SK20	下層 SK20 - I	29.9			口縁部 2/12	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密(1mm以下の 砂粒含む)	並	にぶい黄橙 10YR6/3	外面煤付着	

第4表 A地区出土遺物観察表①

遺物 番号	登録 番号	器 種	出土 地区	報告 書遺 構番 号	調査 時遺 構番 号	法量 (cm)			残存度	調整 (技法) の特徴	胎 土	焼成	色 調	備 考
						口径	器高	その他						
32	002-16	銭貨	A-D3 D4, E3, E4	SK20	下層 SK20 -II	-	-	-	1/2	-	-	-	-	治平□□ (治平元寶?)
33	008-05	土師器 小皿	A-F4	SZ9	SZ9	8.0	1.2	-	口縁部 8/12	外:ナデ、オサエ 内:ナデ、オサエ	やや密(1mm以下 の微砂粒含む)	並	にぶい黄橙 10YR7/3	
34	008-06	土師器 小皿	A-H6	SZ9	SZ9	8.0	1.0	-	口縁部 5/12	外:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内:ヨコナデ、ナデ、オサエ	やや密(1mm以下 の微砂粒含む)	並	浅黄 2.5Y8/3	
35	009-05	土師器 小皿	A-F5	SZ9	SZ9	8.0	1.0	-	口縁部 5/12	外:ナデ、オサエ 内:ナデ、オサエ	やや粗(2.5mm以下 の砂粒含む)	並	浅黄橙 10YR8/3	口縁部歪み有り
36	009-06	土師器 小皿	A-D3	SZ9	SZ9	7.2	0.7	-	口縁部 4/12	外:ナデ、オサエ 内:ナデ	密(1.5mm以下 の微砂粒含む)	並	にぶい橙 7.5YR7/4	
37	009-04	土師器 皿	A-E3	SZ9	SZ9	11.8	-	-	口縁部 3/12	外:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内:ヨコナデ、ナデ、オサエ	やや粗(1.5mm以下 の微砂粒含む)	並	浅黄橙 10YR8/3	
38	009-07	土師器 皿	A-E3	SZ9	SZ9	12.0	1.9	-	口縁部 2/12	外:ヨコナデ、ナデ 内:ヨコナデ、ナデ	やや密(1.5mm以下 の微砂粒含む)	並	淡黄 2.5Y8/3	
39	009-03	土師器 皿	A-D2	SZ9	SZ9	7.6	2.2	-	口縁部 3/12	外:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内:ヨコナデ、ナデ、オサエ	やや粗(3.5mm以下 の砂粒含む)	並	淡黄 2.5Y8/3	
40	009-01	土師器 皿	A-E4	SZ9	SZ9	8.4	1.5	-	口縁部 3/12	外:ヨコナデ、オサエ 内:ヨコナデ、ナデ	密(1mm以下の 微砂粒含む)	並	浅黄橙 7.5YR8/4	
41	009-02	土師器 皿	A-D3	SZ9	SZ9	6.9	1.4	-	口縁部 6/12	外:ナデ、オサエ 内:ナデ、オサエ	密(1mm以下の 微砂粒含む)	並	灰白 10YR8/2	
42	007-02	土師器 鍋	A-E3	SZ9	SZ9	27.8	-	-	口縁部 2/12	外:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内:ヨコナデ、ナデ	やや粗(2.5mm以下 の砂粒含む)	並	浅黄 2.5Y7/3	外面に煤付着
43	008-01	土師器 鍋	A-E3	SZ9	SZ9	29.0	-	-	口縁部 1/12	外:ヨコナデ、ナデ 内:ヨコナデ、ナデ	やや粗(5mm以下 の砂粒含む)	並	にぶい黄橙 10YR6/3	外面に煤付着
44	007-05	土師器 鍋	A-F4	SZ9	SZ9	31.0	-	-	口縁部 1/12	外:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内:ヨコナデ、ナデ	粗(1.5mm以下の 微砂粒含む)	並	浅黄橙 10YR8/3	外面に煤付着
45	008-02	土師器 鍋	A-I 7	SZ9	SZ9	-	-	-	口縁部 1/12	外:ヨコナデ、オサエ 内:ヨコナデ、ナデ	やや密(1mm以下 の微砂粒含む)	並	にぶい黄橙 10YR7/3	外面に煤付着
46	008-03	土師器 鍋	A-E3	SZ9	SZ9	-	-	-	口縁部 小片	外:ヨコナデ、ナデ 内:ヨコナデ、ナデ	粗(1.5mm以下の 砂粒含む)	並	浅黄橙 10YR8/3	
47	007-04	土師器 鍋	A-I 7	SZ9	SZ9	26.0	-	-	口縁部 1/12	外:ヨコナデ、ナデ、ハケメ(8~9 本/1cm) 内:ヨコナデ、ナデ	やや粗(1mm以下 の微砂粒含む)	並	灰白 2.5Y8/2	外面煤付着
48	007-01	土師器 鍋	A-F4	SZ9	SZ9	36.0	-	-	口縁部 2/12	外:ヨコナデ、ナデ 内:ヨコナデ、ナデ	密(1mm以下の 微砂粒含む)	並	にぶい黄橙 10YR7/4	外面煤付着
49	007-03	土師器 羽釜	A-E4	SZ9	SZ9	34.0	-	-	口縁部 1/12	外:ヨコナデ、ナデ 内:ヨコナデ、ナデ	やや粗(1.5mm以下 の微砂粒含む)	並	浅黄橙 10YR8/3	
50	010-07	土師質土 器 小皿	A-G5	SZ9	SZ9	8.5	1.7	底径 5.8	口縁部 3/12	外:ロクロナデ、底部糸切 内:ロクロナデ	密	並	灰黄 2.5Y7/2	
51	008-04	瓦質土 器 椀	A-E3	SZ9	SZ9	-	-	高台径 6.2	高台部 3/12	外:ナデ、底部糸切、高台貼付、ナ デ 内:ナデ	やや密(1mm以下 の微砂粒含む)	並	灰 5Y5/1	
52	011-04	陶器 山茶椀	A-D3	SZ9	SZ9	-	-	高台径 8.0	高台部 6/12	外:ロクロナデ、底部糸切、高台 貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	良	灰白 5Y7/1	渥美型第6型式
53	011-06	陶器 山茶椀	A-F4	SZ9	SZ9	-	-	高台径 7.3	高台部 3/12	外:ロクロナデ、底部糸切、高台 貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	良	灰黄 2.5Y7/2	渥美型第6型式
54	011-05	陶器 山茶椀	A-D3	SZ9	SZ9	-	-	高台径 7.9	高台部 6/12	外:ロクロナデ、底部糸切、高台 貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	良	灰白 5Y7/2	渥美型第5型式
55	011-03	陶器 山茶椀	A-H6	SZ9	SZ9	-	-	高台径 8.0	高台部 6/12	外:ロクロナデ、底部糸切、高台 貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	良	灰黄 2.5Y7/2	第3型式 内面に自然釉付 着
56	011-02	陶器 山茶椀	A-E2	SZ9	SZ9	-	-	高台径 7.9	高台部 6/12	外:ロクロナデ、底部糸切、高台 貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	良	浅黄 2.5Y7/3	渥美型第3型式
57	011-07	陶器 山茶椀	A-E3	SZ9	SZ9	-	-	高台径 6.4	高台部 6/12	外:ロクロナデ、底部糸切、高台 貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密(1.5mm以下 の微砂粒含む)	良	灰黄 2.5Y7/2	尾張型第7型式 底部外面に「十」 の墨書
58	011-01	陶器 山茶椀	A-E3	SZ9	SZ9	14.6	5.6	高台径 5.8	口縁部 1/12	外:ロクロナデ、底部糸切、高台 貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密(4mm以下の 砂粒含む)	良	灰黄 2.5Y7/2	尾張型第7型式
59	010-05	陶器 中皿か 盤類	A-E3	SZ9	SZ9	-	-	底径 9.8	高台部 6/12	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	良	素地: にぶい黄橙 ~浅黄橙10YR6/4~ 8/3 釉: 灰白5Y7/2	瀬戸美濃製品 古瀬戸後 I か II 期

第5表 A地区出土遺物観察表②

遺物 番号	登録 番号	器 種	出土 地区	報告 書遺 構番 号	調査 時遺 構番 号	法量 (cm)			残存度	調整(技法)の特徴	胎 土	焼成	色 調	備 考
						口径	器高	その他						
60	010-02	陶器 片口鉢	A-E4	SZ9	SZ9	-	-	-	口縁部 小片	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密(7mm以下の 砂粒含む)	良	灰褐 7.5YR5/2	常滑製品
61	010-03	陶器 片口鉢	A-E4	SZ9	SZ9	-	-	-	口縁部 小片	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密(1.5mm以下 の砂粒含む)	良	にぶい赤褐～褐灰 2.5YR4/3～ 7.5YR5/1	常滑製品
62	010-04	陶器 甕	A-E4	SZ9	SZ9	-	-	-	口縁部 小片	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密(8mm以下の 砂粒含む)	良	黄灰 2.5Y5/1～4/1	常滑製品
63	010-01	陶器 甕	A-F4	SZ9	SZ9	-	-	底径 17.0	底部 2/12	外:ナデ、オサエ 内:ナデ	密	良	素地:黄灰2.5Y6/1 自然釉:灰褐・に ぶい赤褐7.5YR4/2 5YR5/3	常滑製品
64	010-06	白磁 皿	A-E2	SZ9	SZ9	9.0	2.2	-	口縁部 2/12	外:ロクロナデ、ロクロケズリ、 施釉 内:ロクロナデ	密	良	素地:灰白2.5Y8/2 釉:灰白2.5Y8/2	B群
65	002-10	銭貨	A-F4	SZ9	SZ9	-	-	-	完存	-	-	-	-	治平元寶
66	001-01	鉄製品 小刀	A-D3	SZ9	SZ9	残存長 20.4	残存幅 2.6	残存厚 0.7	-	-	-	-	-	基部と身部両面 に木質残存
67	002-05	鉄製品 釘	A-D3	SZ9	SZ9	残存長 4.5	残存幅 1.3	残存厚 0.5	-	-	-	-	-	-
68	005-03	陶器 山茶椀	A-B 3	SZ17 3	SZ17	-	-	高台径 8.3	高台部 3/12	外:ロクロナデ、底部糸切、高台 貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密(1mm以下の 砂粒含む)	良	灰白 5Y7/1	渥美型第3型式
69	002-01	鉄製品 鎌	A-C4	SX18	SX18	残存長 23.6	残存幅 2.3	残存厚 0.4	-	-	-	-	-	-
70	012-07	土師器 小皿	A-D3	下層 Pit5	下層 Pit5	7.1	0.65	-	ほぼ 完存	外:ナデ、オサエ 内:ナデ、オサエ	密	並	浅黄橙 7.5YR8/4	歪み大きい
71	012-08	土師器 小皿	A-D3	Pit 10	Pit 10	6.9	0.4	-	口縁部 6/12	外:ナデ、オサエ 内:ナデ、オサエ	密	並	浅黄橙 7.5YR8/6・8/4	歪み大きい
72	013-01	土師器 皿	A-D3	下層 Pit2	下層 Pit2	9.8	1.4	-	口縁部 3/12	外:ナデ、オサエ 内:ナデ、オサエ	密(0.5mm以下 の砂粒含む)	並	浅黄橙 10YR8/3	-
73	012-06	土師器 皿	A-D4	Pit 13	Pit 13	8.4	2.3	-	口縁部 2/12	外:ナデ、オサエ 内:ナデ、オサエ	密	並	浅黄橙 10YR8/3	-
74	012-04	土師器 皿	A-D4	下層 Pit9	下層 Pit9	7.7	1.9	-	口縁部 9/12	外:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内:ヨコナデ、ナデ、オサエ	密(1mm以下の 砂粒含む)	並	灰白 2.5Y8/2	-
75	012-09	土師器 皿	A-E4	Pit3	Pit3	7.8	1.1	-	口縁部 3/12	外:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内:ヨコナデ、ナデ	密	並	浅黄橙 10YR8/3	歪み大きい
76	012-11	土師器 皿	A-F5	Pit7	Pit7 No.1	6.6	2.3	-	完存	外:ナデ、オサエ 内:ナデ、オサエ	密(1mm以下の 砂粒含む)	並	浅黄橙 10YR8/3	歪み大きい
77	012-12	土師器 皿	A-F5	Pit7	Pit7 No.2	6.7	1.2	-	完存	外:ナデ、オサエ 内:ナデ、オサエ	密	並	浅黄橙 7.5YR8/3	歪み大きい
78	017-06	土師器 椀	A-D5	下層 Pit3	下層 Pit3	-	-	高台径 8.0	高台部 2/12	外:ナデ、工具ナデ、ケズリ 内:ナデ	密(1mm以下の 砂粒含む)	並	にぶい黄橙 10YR7/3	体部に穿孔か?
79	016-04	土師器 茶釜蓋	A-D4	Pit 23	Pit23 包含 層	17.3	1.8	-	口縁部 4/12	外:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内:ヨコナデ、ナデ	密(1mm以下の 砂粒含む)	並	にぶい黄橙 10YR7/3	外面煤付着
80	014-04	土師器 鍋	A-D4	Pit 20	Pit 20	21.0	-	-	口縁部 2/12	外:ヨコナデ、ナデ、オサエ、ハ ケメ(5本/0.5cm) 内:ヨコナデ、ナデ、ハケメ(4本 /0.4cm)	密	並	浅黄橙～橙 10YR8/3～7.5YR7/6	外面煤付着
81	014-03	土師器 鍋	A-D6	Pit1	Pit1	33.0	-	-	口縁部 2/12	外:ヨコナデ、オサエ 内:ヨコナデ	密	並	にぶい黄橙～浅黄 橙10YR7/4～8/4	外面煤付着
82	014-05	土師器 羽釜	A-D4	下層 Pit8	下層 Pit8	-	-	-	鑄部 小片	外:ヨコナデ、鑄貼付、ナデ 内:ナデ	密(1mm以下の 砂粒・雲母含 む)	並	浅黄橙～にぶい黄 橙10YR8/3～6/3	外面煤付着
83	013-03	陶器 山茶椀	A-E4	Pit6	Pit6	-	-	高台径 6.4	高台部 4/12	外:ロクロナデ、底部糸切、高台 貼付後ナデ 内:ロクロナデ	やや密(1.5mm 以下の砂粒含 む)	良	灰白 5Y8/1	尾張型第6型式 底部外面に墨書
84	013-04	陶器 甕	A-D3	Pit5	Pit5	-	-	-	口縁部 小片	外:ロクロナデ、ヨコナデ 内:ロクロナデ、ナデ、オサエ	やや密(4mm以 下の砂粒・雲 母含む)	良	外:灰～褐灰N6/0 ～7.5YR5/1 内:褐灰7.5YR4/1	常滑産
85	013-05	砥石	A-D5	下層 Pit7	下層 Pit7	残存長 6.8	残存幅 2.9	残存厚 2.9	-	-	-	-	-	残存重76.35g 凝灰岩
86	017-09	縄文土 器 深鉢	A-D 下 段	包含 層	西壁	-	-	-	体部 小片	外:ナデ、オサエ、沈線施文 内:ナデ、オサエ	密(2mm以下の 砂粒多く含 む)	並	にぶい黄橙 10YR6/3	-
87	017-07	土師質土 器 小皿	A-D6	包含 層	砂層 上面	-	-	底径 5.1	底部 完存	外:ロクロナデ、底部糸切 内:ロクロナデ	密(1.5mm以下 の砂粒含む)	並	にぶい橙 7.5YR6/4	-
88	017-08	土師質土 器 椀	A-K9	包含 層	包含 層	-	-	高台径 6.7	高台部 3/12	外:ロクロナデ、底部糸切、ナデ 内:ロクロナデ	密(1mm以下の 砂粒含む)	並	灰白 2.5Y8/2	-
89	017-05	土師器 小皿	A-E3	包含 層	包含 層	6.7	1	-	口縁部 3/12	外:ナデ、オサエ 内:ナデ	密(1mm以下の 砂粒含む)	並	浅黄橙 7.5YR8/3	-

第6表 A地区出土遺物観察表③

遺物番号	登録番号	器種	出土地区	報告書遺構番号	調査時遺構番号	法量 (cm)			残存度	調整(技法)の特徴	胎土	焼成	色調	備考
						口径	器高	その他						
90	017-04	土師器 皿	A-F5	包含層	下層包含層	14.2	—	—	口縁部 1/12	外:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内:ヨコナデ、ナデ	密(1mm以下の砂粒含む)	並	にぶい橙 7.5YR7/4	
91	017-01	土師器 皿	A-E4	包含層	包含層	12.4	2.5	—	口縁部 4/12	外:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内:ヨコナデ、ナデ	密(1.5mm以下の砂粒含む)	並	灰白 2.5Y8/1	
92	016-07	土師器 皿	A-E4	包含層	包含層	11.7	2.6	—	口縁部 4/12	外:ヨコナデ、オサエ 内:ヨコナデ、ナデ	密(1.5mm以下の砂粒含む)	並	浅黄橙 10YR8/3	
93	017-03	土師器 皿	A-F4	包含層	包含層	9	—	—	口縁部 3/12	外:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内:ヨコナデ、ナデ	密(1mm以下の砂粒含む)	並	浅黄橙 10YR8/3	
94	017-02	土師器 皿	A-D4	包含層	包含層	7.8	2.1	—	口縁部 11/12	外:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内:ヨコナデ、ナデ	密(1mm以下の砂粒含む)	並	浅黄橙 10YR8/3	
95	016-05	土師器 皿	A-F4	包含層	包含層	11	2.5	—	口縁部 2/12	外:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内:ヨコナデ、ナデ	密(1mm以下の砂粒含む)	並	浅黄橙 7.5YR8/3	
96	016-06	土師器 皿	A-F3	包含層	包含層	—	—	—	口縁部 小片	外:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内:ヨコナデ、ナデ	密(1mm以下の砂粒含む)	並	橙 7.5YR7/6	
97	015-02	土師器 甕	A-E4	包含層	包含層	20	—	—	口縁部 1/12	外:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内:ヨコナデ、ハケメ(6本/1cm)	密(1.5mm以下の砂粒含む)	並	灰白 10YR8/2	外面に煤付着
98	015-03	土師器 鍋	A-E5	下層包含層	下層包含層	29.4	—	—	口縁部 1/12	外:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内:ヨコナデ、ナデ	密(1.5mm以下の砂粒含む)	並	にぶい黄橙 10YR7/3	外面に煤付着
99	015-01	土師器 鍋	A-E4	包含層	包含層	27.5	—	—	口縁部 1/12	外:ヨコナデ、ナデ、オサエ、ハケメ(6本/0.8cm) 内:ヨコナデ、ナデ	密(2mm以下の砂粒含む)	並	灰白 10YR8/2	外面に煤付着
100	016-01	土師器 鍋	A-H7	包含層	包含層	35.1	—	—	口縁部 1/12	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密(1mm以下の砂粒含む)	並	にぶい黄橙 10YR7/3	外面に煤付着
101	015-05	土師器 鍋	A-F5	包含層	包含層	—	—	—	口縁部 小片	外:ヨコナデ、ナデ、ハケメ(7本/1cm) 内:ヨコナデ、ナデ、ハケメ	密(微砂粒含む)	並	にぶい黄橙 10YR6/3	外面に煤付着
102	016-02	土師器 鍋	A-E3	包含層	包含層	—	—	—	口縁部 小片	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密(1mm以下の砂粒含む)	並	褐灰 10YR4/1	
103	015-04	土師器 鍋	A-D3	包含層	下層包含層	—	—	—	口縁部 小片	外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、ナデ	密(1mm以下の砂粒含む)	並	にぶい黄橙 10YR7/2	外面煤付着
104	016-03	土師器 羽釜	A-D4	包含層	包含層	20	—	—	口縁部 1/12	外:ヨコナデ、鑄貼付、ナデ 内:ヨコナデ、ナデ、オサエ	密(1mm以下の砂粒含む)	並	灰白 10YR8/2	外面煤付着
105	019-07	陶器 山皿	A-D3	包含層	下層包含層	—	—	底径 6.3	底部 完存	外:ロクロナデ、底部糸切 内:ロクロナデ	密(2.5mm以下の砂粒含む)	良	灰白 2.5Y7/1	渥美型第5型式
106	018-05	陶器 山茶碗	A	調査区南壁	調査区南壁	—	—	高台径 7.3	高台部 7/12	外:ロクロナデ、底部糸切、高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	良	灰白 5Y7/1	尾張型?第3型式
107	019-02	陶器 山茶碗	A	表土	表土	—	—	高台径 7.5	高台部 4/12	外:ロクロナデ、底部糸切、高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	良	灰白 5Y7/1	渥美型第5型式
108	018-03	陶器 山茶碗	A-M10	包含層	包含層	—	—	高台径 7.8	高台部 9/12	外:ロクロナデ、底部糸切、高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	良	灰白 2.5Y8/1・7/1	渥美型?第5型式
109	018-04	陶器 山茶碗	A	表土	表土	—	—	高台径 8.0	高台部 4/12	外:ロクロナデ、底部糸切、高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	良	灰白 5Y7/1	渥美型第4型式 内面に自然釉
110	018-08	陶器 山茶碗	A	表土	表土	—	—	高台径 7.4	高台部 2/12	外:ロクロナデ、底部糸切、高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	良	灰白~灰 5Y7/1~N6/0	渥美型第6型式
111	019-03	陶器 山茶碗	A	表土	表土	—	—	高台径 8.0	高台部 2/12	外:ロクロナデ、底部糸切、高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	良	灰白 5Y7/1	渥美型第5型式
112	019-01	陶器 山茶碗	A-L10	包含層	包含層	—	—	高台径 8.2	高台部 3/12	外:ロクロナデ、底部糸切、高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	良	灰白 5Y7/1	渥美型第4型式
113	018-07	陶器 山茶碗	A	表土	表土	—	—	高台径 6.0	高台部 3/12	外:ロクロナデ、底部糸切、高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密	良	灰白 2.5Y8/1	尾張型第6型式
114	019-05	陶器 山茶碗	A	表土	表土	—	—	—	底部 小片	外:ロクロナデ、底部糸切、高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密(1mm以下の微砂粒含む)	良	灰白 N7/0	渥美型?第6型式 底部外面に墨書
115	018-01	陶器 山茶碗	A-E4	包含層	包含層	14.8	5.4	高台径 6.6	口縁部 11/12	外:ロクロナデ、底部糸切、高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密(3mm以下の砂粒含む)	良	灰白 5Y7/1	尾張型第7型式
116	019-04	陶器 山茶碗	A-E4	包含層	包含層	—	—	高台径 6.6	高台部 3/12	外:ロクロナデ、底部糸切、高台貼付後ナデ 内:ロクロナデ	密(微砂粒含む)	良	灰白 5Y7/1	尾張型第6型式
117	019-06	陶器 山茶碗	A-F4	包含層	包含層	—	—	底径 5.6	底部 4/12	外:ロクロナデ、底部糸切 内:ロクロナデ	密	良	灰白 5Y7/1	渥美型第7型式
118	021-05	陶器 天目茶碗	A	北壁側溝	北壁側溝	—	—	高台径 4.6	高台部 完存	外:ロクロナデ、ロクロナズリ、施釉 内:ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白2.5Y8/2 釉:黒7.5YR2/1	瀬戸産 登窯第1小期

第7表 A地区出土遺物観察表④

遺物番号	登録番号	器種	出土地区	報告書遺構番号	調査時遺構番号	法量 (cm)			残存度	調整(技法)の特徴	胎土	焼成	色調	備考
						口径	器高	その他						
119	020-05	陶器 四耳壺	A-E4	包含層	包含層	12.9	-	-	口縁部 2/12	外:ロクロナデ、施釉 内:ロクロナデ、施釉	密	良	灰白 2.5Y8/2 明黄褐 2.5Y6/6	瀬戸美濃製品 古瀬戸後ⅢかⅣ 期古段階
120	020-01	陶器 片口鉢	A	表土	表土	-	-	底径 13.9	底部 2/12	外:ナデ、オサエ 内:ナデ	やや粗(3mm以下 の砂粒含む)	やや良	にぶい橙～赤橙 2.5YR6/4～10R6/6	常滑産
121	020-03	陶器 片口鉢	A-D3	包含層	下層 包含層	-	-	-	口縁部 小片	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	やや密	やや良	赤褐～暗赤灰 10R5/4～3/1	常滑産
122	020-02	陶器 片口鉢	A-F4	包含層	包含層	-	-	-	口縁部 小片	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	やや粗(2mm以下 の砂粒含む)	やや良	橙～にぶい橙 2.5YR6/6～6/4	常滑産
123	020-04	陶器 甕	A-D2	包含層	包含層	-	-	-	口縁部 小片	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	良	灰白～灰褐 2.5Y8/2～7.5YR5/2	瀬戸 古瀬戸後期 外面に自然釉
124	021-03	白磁 椀	A	表土	表土	15.0	-	-	口縁部 2/12	外:ロクロナデ、施釉 内:ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 N8/0 釉:灰白 N8/0	
125	021-04	青磁 椀	A-F4	包含層	包含層	18.0	-	-	口縁部 1/12	外:ロクロナデ、施釉 内:ロクロナデ、施釉	密	良	素地:灰白 N7/0 釉:オリーブ灰 2.5GY6/1	
126	021-01	削器	A-L15	包含層	調査 区壁	全長 8.3	最大幅 8.35	最大厚 1.9	完存	-	-	-	-	重量130g 凝灰質泥岩
127	021-02	砥石	A-E4	包含層	包含層	残存長 5.1	残存幅 4.6	残存厚 1.1	-	-	-	-	-	残存重40g 凝灰岩
128	002-11	銭貨	A-E4	包含層	包含層	-	-	-	ほぼ 完存	-	-	-	-	元豊通宝
129	002-13	銭貨	A-E4	包含層	包含層	-	-	-	1/2	-	-	-	-	元口通寶(元豊 通寶?元祐通 寶?元符通 寶?)
130	002-14	銭貨	A-E3	包含層	包含層	-	-	-	1/2	-	-	-	-	景口元寶 (景祐元寶?)
131	003-05	鉄製品 釘	A-D3	包含層	下層 包含層	残存長 6.2	残存幅 径0.3 ～0.4	-	-	-	-	-	-	
132	002-02	鉄製品 鉤状製 品	A-F5	包含層	包含層	残存長 6.5	残存幅 1.7	残存厚 1.1	-	-	-	-	-	
133	003-03	鉄製品 釘	A-D3	包含層	下層 包含層	残存長 4.6	残存幅 0.4～ 0.5	残存厚 0.3～ 0.8	-	-	-	-	-	
134	003-01	鉄製品 釘	A-D3	包含層	下層 包含層	残存長 4.1	残存幅 0.4	残存厚 0.5	-	-	-	-	-	
135	003-02	鉄製品 釘	A-D3	包含層	下層 包含層	残存長 4.7	残存幅 0.5～ 0.6	残存厚 0.7	-	-	-	-	-	
136	002-04	鉄製品 釘	A-E4	包含層	包含層	残存長 5.1	残存幅 0.5	残存厚 0.4	-	-	-	-	-	
137	003-04	鉄製品 釘	A-D3	包含層	下層 包含層	残存長 4.0	残存幅 0.6～ 1.2	残存厚 0.6	-	-	-	-	-	
138	002-06	鉄製品 釘	A-E4	包含層	包含層	残存長 3.7	残存幅 1.0	残存厚 0.4	-	-	-	-	-	
139	002-08	鉄製品 釘	A-D2	包含層	包含層	残存長 4.4	残存幅 0.5	残存厚 0.4	-	-	-	-	-	
140	002-07	鉄製品 釘	A-E4	包含層	包含層	残存長 2.6	残存幅 0.85	残存厚 0.5	-	-	-	-	-	
141	002-09	鉄製品 釘	A-D2	包含層	包含層	残存長 2.7	残存幅 0.5	残存厚 0.6	-	-	-	-	-	

【凡例】

- ・遺物番号:挿図掲載番号。
- ・登録番号:実測段階の登録番号。
- ・出土地区:調査区及びグリッド名。〔A(調査区)ーB1(グリッド)〕
- ・色調:『新版標準土色帖』1999年度版による。複数の色調が存在する場合は併記した。
- ・残存度:当該部位を12分割した際の残存度。

第8表 A地区出土遺物観察表⑤

2 B地区

(1) 調査区の基本層位

B地区は、A地区の南方約100mにあたる。現況は水田で、水田面の標高は約46mである。

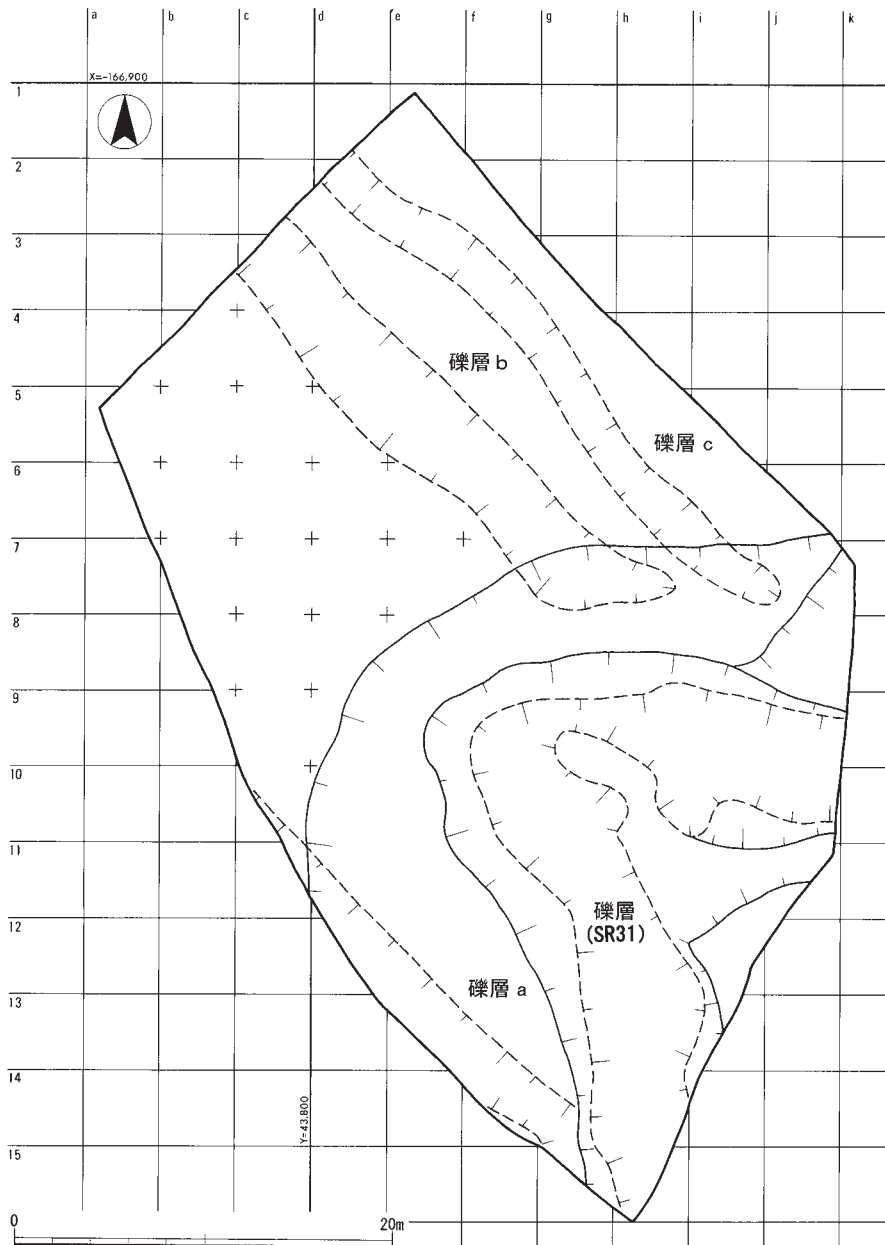
包含層と遺構埋土 表土直下で、黒褐色・暗褐色系土（第15・16層）が確認できる。これが遺物包含層に相当し、調査区北部全体を薄く覆っている。この層は11世紀前半～12世紀前半頃にかけての遺物を含むものの、その含有量は極めて少ない。遺構基盤層となるのは、褐色系の砂・礫層である。遺構は、主に黒褐色・暗褐色系土を埋土としたものであるが、

後述のように、遺構から出土した遺物も極めて少ないものであった。

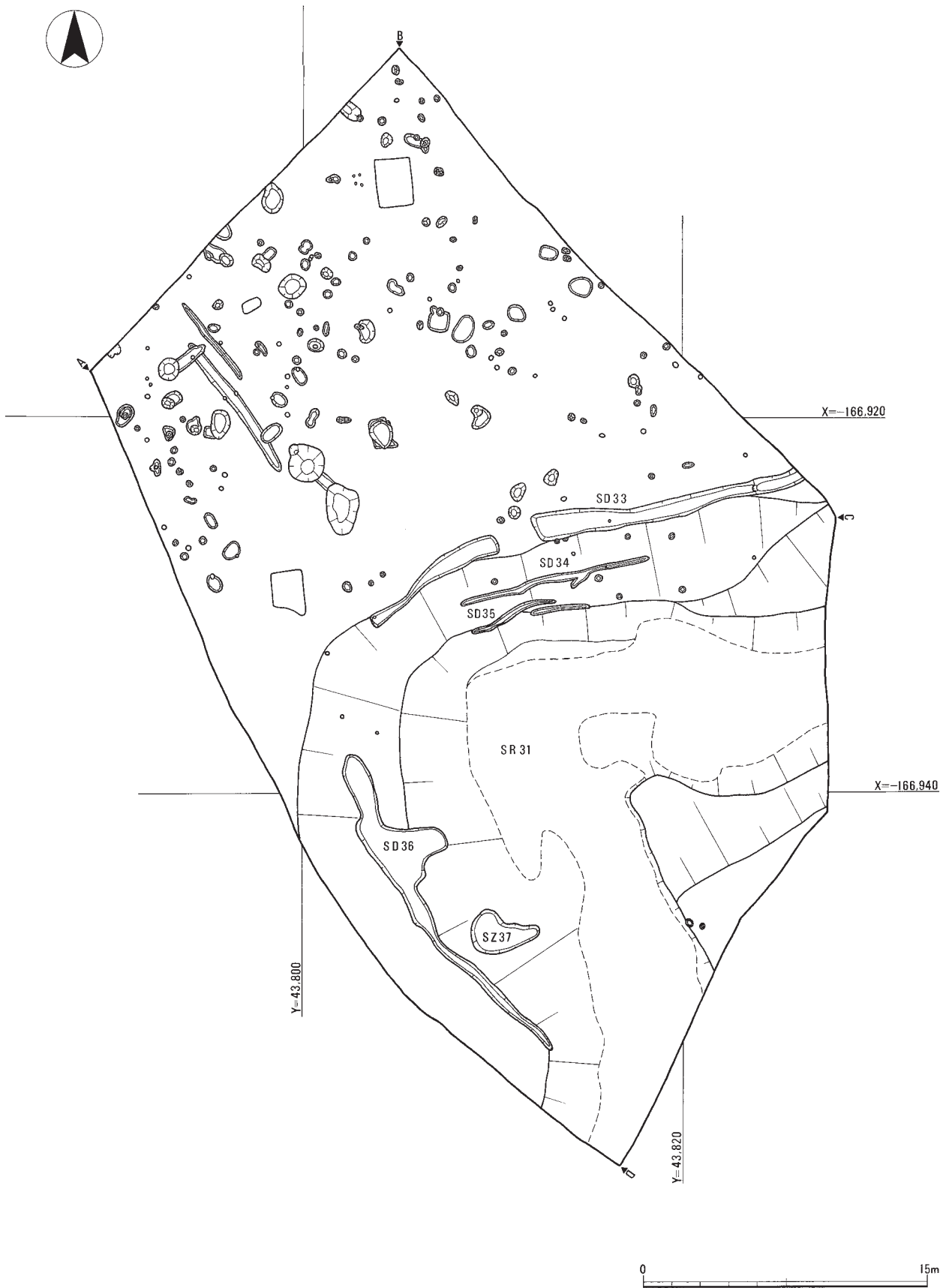
調査区南部は、ほぼ全体が河道（SR31）である。

遺構基盤層の状況 調査前のB地区は、一見すると丘陵尾根端部のような地形的環境にあったため、段丘礫層を基盤とするものと想定していた。ところが、調査の結果、B地区の基盤層が砂礫を中心とした河成の洪水層で形成されていることが判明した。

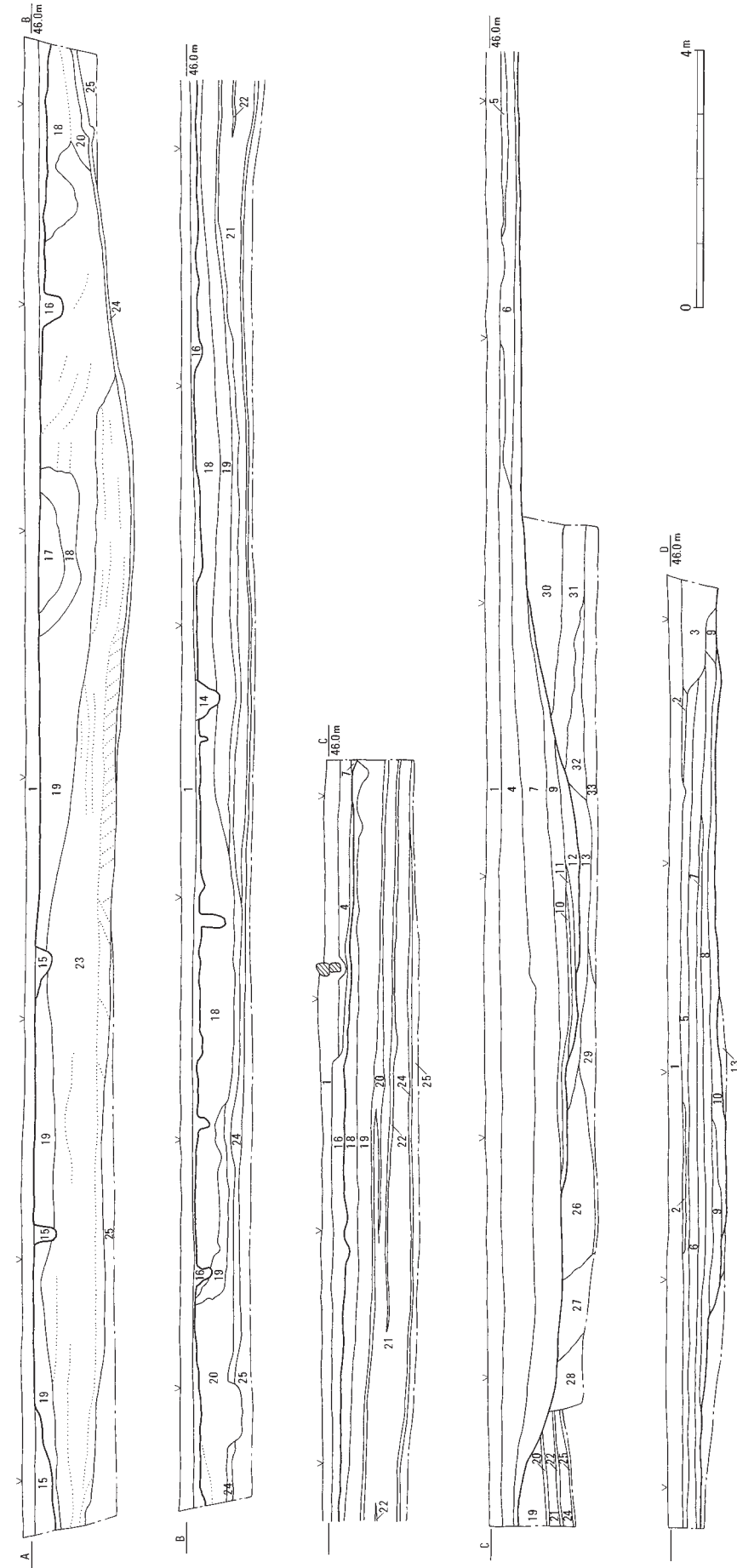
遺構検出段階で、調査区北部では礫層が带状に確認できた（第14図）。調査最終段階に、調査区外周部



第14図 B地区小地区割図(1:400)



第15図 B地区遺構平面図(1:300)



第16図 B地区土層断面図(1:100)

- 1 素土 (耕作土)
- 2 旧耕作土 10YR5/4 にふい黄褐色シルト質粘土
- 3 10YR5/2 灰黄褐色砂土 (φ10mmの塊多)
- 4 旧耕作土 10YR4/3 にふい黄褐色シルト質粘土
- 5 旧耕作土 10YR4/3 にふい黄褐色シルト質粘土
- 6 旧耕作土 10YR5/6 黄褐色シルト質粘土
- 7 SR31埋土 10YR3/4 暗褐色シルト質粘土
- 8 SR31埋土 10YR3/3 暗褐色シルト質粘土
- 9 SR31埋土 10YR4/4 褐色シルト質粘土。黄褐色ブロック混じる
- 10 SR31埋土 10YR4/4 褐色シルト質粘土 (粘性強い)
- 11 SR31埋土 10YR3/3 暗褐色シルト質粘土 (砂多い)
- 12 SR31埋土 10YR4/3 にふい黄褐色シルト質粘土・炭多い
- 13 SR31埋土 10YR5/6 黄褐色砂土 (粗砂・φ20mm以下の塊多量)
- 14 10YR4/4 褐色土
- 15 10YR3/3 暗褐色細砂質土
- 16 10YR2/3 黒褐色シルト質土
- 17 10YR6/6 明黄褐色細砂 (塊多)
- 18 10YR5/6 黄褐色シルト質土
- 19 10YR4/6 褐色細砂 (φ15mm以下の角片塊多)
- 20 10YR5/8 黄褐色細砂混じりシルト
- 21 10YR5/8 黄褐色細砂
- 22 10YR5/8 黄褐色細砂混じりシルト
- 23 10YR6/8 明黄褐色細砂と細砂の互層
- 24 10YR6/4 にふい黄褐色細砂混じりシルト
- 25 10YR5/3 にふい黄褐色粘土
- 26 10YR4/6 褐色細砂混じりシルト
- 27 10YR5/8 黄褐色粘土
- 28 10YR4/6 褐色細砂
- 29 10YR6/6 明黄褐色細砂質シルト
- 30 10YR7/8 黄褐色細砂 (φ15mmの塊多)
- 31 10YR7/8 黄褐色細砂混じり泥層 (φ20~30mmの塊)
- 32 10YR6/8 明黄褐色細砂混じりシルト
- 33 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂質シルト

に土層観察のための断ち割りを行ったところ、この層に対応する流路が北西～南東方向に流れていたことが確認できた。流路の埋土は、調査区北東壁では互層に堆積したシルト層と砂層が確認されており、あまり強くない水流が想定できる。なお、これら調査区北部の基盤層となる流路は、いずれも後述のS R31よりも層位的に古いものである。

(2) 検出遺構

調査地区内で検出した主な遺構は、11世紀前半から12世紀前半頃にかけての流路とそれに付属する溝・落ち込みなどである。

ここでは、主だった遺構について述べる。個々の遺構については、後掲の遺構一覧表^⑩（第9表）も参照されたい。

S R31 調査区南部で検出した幅約15m、深さ約1.3mの自然流路である。調査区内では、南端付近から北上し、東へL字形に屈曲する蛇行部分を確認した。埋土の最下層には礫層が認められ、そこには最大幅30cmほどの大礫を含んでいる。したがって、この礫層形成時には、かなり強い水流があったものと考えられる。

蛇行する部分の攻撃面となる北岸部では、基盤を抉り込むような地形が確認できた。それに対し、南岸部では、そういった地形は認められなかった。

礫層よりも上には、暗褐色系の粘質土が堆積している。したがって、この層が堆積する段階には、あまり強い水流が無かったものと考えられる。調査区の南東隅にはS R31の南東岸を検出しているが、この部分の上にも暗褐色系粘質土が堆積している。したがって、礫層が堆積した後のS R31は、比較的弱い水流が見られる程度の河川となっており、S R31とは別の流路が他の地に形成されていたものと考えられる。

出土遺物は、礫層上面付近から確認された。出土遺物から、この河道は11世紀後半～12世紀前半頃に埋没したのと考えられる。

なお、S R31の北岸ラインは、調査前の水田畦畔の位置にほぼ符合していた。S R31の上部には、段状に整形された旧水田面が2面ほど存在している。土層の状況からは、S R31の埋没後、その形態に合わせて水田化し、その後次第にかさ上げを行って現

在の状況に至ったものと考えられる。それでも、最終的に流路の形態そのものは畦畔という形で遺存することになったものと考えられる。

S D33 S R31の北岸よりも北側で検出した遺構である。埋土は礫混じりの粗砂で構成されている。S R31とその北側に広がる平坦面とを区画する遺構と考えられる。遺構西端部の延長線上には同種の溝があり、両者は一連の遺構であるものと考えられる。

埋土内からは、11世紀後半～12世紀前半頃の土器が出土しているが、S R31埋没後に掘削された遺構である可能性が高い。なお、S D33は調査区断面には明確に現れなかった。

S D34・35 S R31の北岸部からややS R31内部に入ったあたりで検出した遺構である。いずれの溝も幅約30cm程度の小規模なもので、S R31と同じ弧を描くような形態を示している。埋土は細砂で構成されており、S R31から供給された土砂で埋没したのと考えられる。

埋土内からは、11世紀後半～12世紀前半頃の土器類が出土している。

S D36 S R31の東岸部で検出した遺構である。先述のS D33～35のような明確な遺構形態を示さず、落ち込み状のものである。性格としては、S R31に伴う自然地形と考えられる。

埋土内からは、11世紀後半～12世紀前半頃の土器類が出土している。

S Z37 S R31内にあり、S D36の東側にあたる。突出部のある不整形を呈する形態であるが、検出面から10cm程度の深さしかない。S D36と同様、S R31によって形成された自然地形の落ち込みと考えられる。

埋土内からは、11世紀後半～12世紀前半頃の土器類が少量出土している。

調査区北部のピット群 調査区北部は平坦面が広がっている。ここからは溝・ピットなどを検出したが、建物としてまとまるものが無い。埋土内から遺物が出土したピットも数基にとどまり、量も極めて少ない。建物を構成するピットであれば、所属時期を示さないまでも、何らかの遺物を含むことが通常であり、この調査区で見られるような状況になることは無い。これらのことから、調査区北部の平坦面で検

出したピットは建物に伴うものではない可能性が高いと考えられる。

調査区北部の土坑群 調査区北部からは、土坑状の遺構も多く検出している。これらは黒褐色系土を埋土とするものである。いずれの遺構も不定形で、埋土内からの出土遺物はほとんど無い。

これらの遺構は、植栽や耕作に伴い開削されたものと考えられる。所属時期は不明であるが、中世以降のものと考えて大過ないであろう。

(3) 出土遺物

B地区出土遺物は、整理箱に2箱と少ない。その大部分がSR31出土である。

弥生土器 (142)

壺の底部片である。中期中葉から後葉頃のものと考えられる。

SR31出土土器 (143~150)

143~147は土師質土器¹³⁾(ロクロ土師器)。143は小皿、144は皿である。145~147は椀で、櫛田川中流域から下流域の地域では稀に見られるもの。148は土師器甕。149は灰釉陶器椀で、斎藤孝正氏編年¹⁴⁾のH72

号窯式のものであろう。150は陶器小椀で、藤澤良祐氏による山茶椀編年¹⁵⁾の第4型式に相当する。これらの遺物は、概ね南伊勢中世I期¹⁶⁾に相当する。

P i t 出土土器 (151・152)

151は灰釉陶器椀で、前記と同様H72号窯式のものであろう。152は土師質土器小皿。(伊藤裕偉)

(4) 範囲確認調査出土遺物

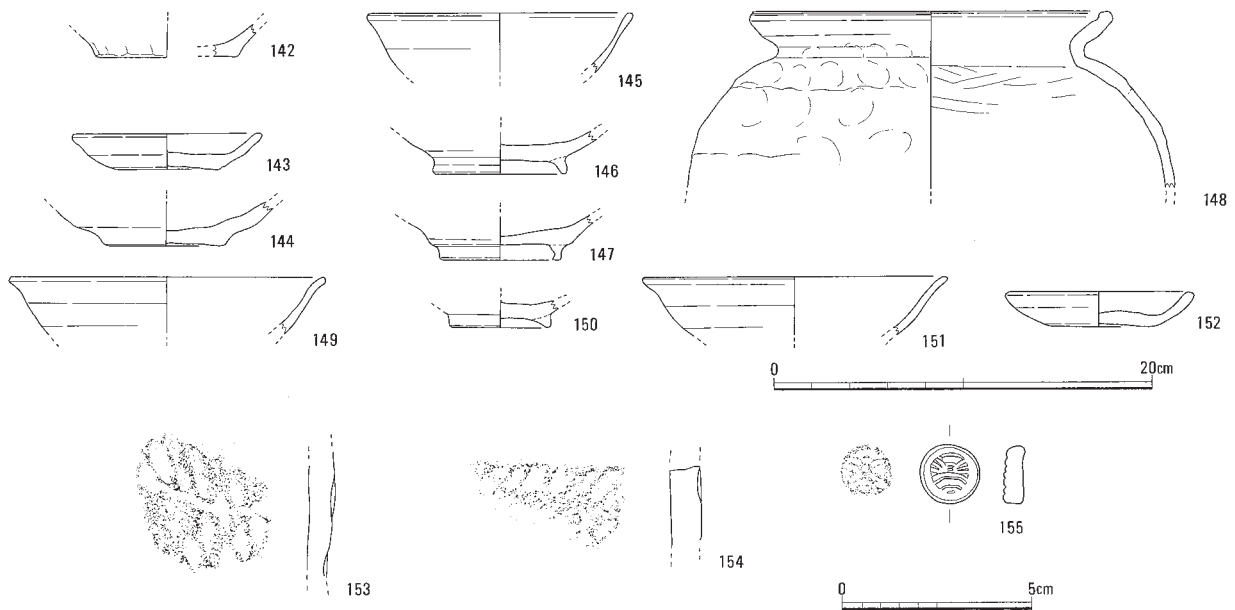
本発掘調査の事前実施された範囲確認調査で出土した主な遺物を掲載した。

縄文土器 (153・154)

153・154は押型文深鉢片で、縄文時代早期の神宮寺式に相当する。B地区西部の高台部分で出土しており、この付近に当該期の遺構が存在するものと考えられる。

土製品 (155)

155は銭貨を模して作られた土製品。直径約3.1cmの極めて小形のもの。模様は、江戸時代末期に生産された「文久永寶」の裏面と共通するものであるため、この土製品もおそらくはその頃のものであろう。(伊藤裕偉)



第17図 B地区出土遺物実測図(1:4、153~155は1:2)

遺構番号	地区	グリッド	性格	時期	南伊勢中世	特徴・形状など
SR31	B	j7～h15	流路	平安末期	I期	自然流路。下層に大礫。蛇行する。
SK32	B	b5	土坑	不明		
SD33	B	g7～	溝	平安末期	I期	SR31の外縁部。
SD34	B	f8～	溝	平安末期	I期	SR31の外縁部。
SD35	B	f8～	溝	平安末期	I期	SR31の外縁部。
SD36	B	e11～	溝	平安末期	I期	SR31の外縁部。
SZ37	B	f12・13	落ち込み	平安末期	I期	SR31の外縁部。土師器甕片ほか。

第9表 B地区遺構一覧表

遺物番号	登録番号	器種	出土地区	報告書遺構番号	調査時遺構番号	法量(cm)			残存度	調整(技法)の特徴	胎土	焼成	色調	備考
						口径	器高	その他						
142	022-07	弥生土器壺	B	SR31	SR31付近排土	-	-	底径7.6	底部3/12	外:ナデ 内:ナデ	密	並	にぶい黄橙10YR7/4 にぶい黄褐10YR5/3	
143	022-03	土師質土器小皿	B	SR31	流路	10.0	1.9	底径5.8	口縁部4/12	外:ロクロナデ、底部糸切 内:ロクロナデ	密	並	灰白10YR8/2	
144	022-06	土師質土器皿	B	SR31	流路南端	-	-	底径6.2	底部6/12	外:ロクロナデ、ナデ、底部糸切 内:ロクロナデ	密	並	浅黄橙10YR 8/3 にぶい黄橙10YR7/3	
145	023-04	土師質土器椀	B	SR31	流路	14.0	-	-	口縁部1/12	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	並	灰白10YR8/2	
146	022-04	土師質土器椀	B	SR31	流路南端	-	-	高台径7.0	高台部5/12	外:ロクロナデ、高台貼付後ナデ、 底部糸切 内:ロクロナデ	密	並	灰白10YR8/2	
147	022-05	土師質土器椀	B	SR31	SR31付近	-	-	高台径6.4	高台部3/12	外:ロクロナデ、高台貼付後ナデ、 底部糸切 内:ロクロナデ	密	並	浅黄橙10YR8/3	
148	022-01	土師器甕	B	SR31	流路南端	19.0	-	-	口縁部3/12	外:ヨコナデ、オサエ 内:ヨコナデ、工具ナデ、ナデ	密	並	灰黄褐10YR5/2 浅黄橙10YR8/3	
149	023-01	灰釉陶器椀	B	SR31	流路	16.6	-	-	口縁部1/12	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	良	灰白5Y7/1	
150	023-03	陶器小椀	B	SR31	SR31付近排土	-	-	高台径5.3	高台部9/12	外:ロクロナデ、高台貼付後ナデ、 底部糸切 内:ロクロナデ	密	良	灰白N7/0	
151	023-02	灰釉陶器椀	B-e7	Pit1	Pit1	16.0	-	-	口縁部1/12	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	良	灰白5Y7/1	
152	022-02	土師質土器小皿	B-i12	Pit1	Pit1	9.9	1.8	底径5.4	口縁部4/12	外:ロクロナデ、底部糸切 内:ロクロナデ	密	並	にぶい黄橙10YR7/2 灰黄褐10YR5/2	
153	023-05	縄文土器深鉢	範囲確認調査	No.27	G No.27土坑	-	-	-	小片	外:押型文 内:ナデ	密	並	にぶい黄橙10YR5/3	
154	023-06	縄文土器深鉢	範囲確認調査	No.28	G No.28遺構検出面	-	-	-	小片	外:押型文 内:ナデ	密	並	にぶい黄橙10YR5/3	
155	023-07	土製品	範囲確認調査	No.125	G No.125周辺表探	直径1.6	-	厚0.6	完存	-	密	並	にぶい橙7.5YR6/4	貨幣模造

【凡例】

- ・遺物番号：挿図掲載番号。
- ・登録番号：実測段階の登録番号。
- ・出土地区：調査区及びグリッド名。〔A（調査区）-B1（グリッド）〕
- ・色調：『新版標準土色帖』1999年度版による。複数の色調が存在する場合は併記した。
- ・残存度：当該部位を12分割した際の残存度。

第10表 B地区出土遺物観察表

3 小結

第1次調査では、A地区北端部を除けば、調査面積に比して遺構密度が薄く、性格不明の遺構も多い。出土遺物も比較的少量であったが、以下に特筆される検出遺構及び出土遺物等について若干の考察を行い、第1次調査の小結としたい。

(1) 中世墓について

A地区で検出した中世墓については、前項で詳細は記述済みであるが、ここでは各遺構の要点を整理し、下茅原遺跡における中世墓について、推定も含め若干の考察を行いたい。

① S X 12

S X 12の造墓状況は以下のとおりである。

- ・墓壙の平面形態：不整円形（縁辺を立位の扁平石で囲む）
- ・埋葬形態：土葬
- ・副葬品：土師器皿3・土師器鍋1・小刀1
- ・地上遺構：幅約30cm以下の川原石による集石
- ・造墓時期：13世紀後葉

調査結果を基に造墓過程を復元してみると、墓壙の掘削→墓壙縁辺に扁平礫を配置→遺体の安置→副葬品の納入（小刀納入後、その上部に土師器鍋、墓壙との隙間に土師器皿納入。）→覆土→墓標（石積み）の設置と推定される。

② S X 19

S X 19の造墓状況は以下のとおりである。

- ・墓壙の平面形態：隅丸不整長方形
- ・埋葬形態：土葬（木棺墓）
- ・副葬品：土師器鍋1・小刀1
- ・地上遺構：自然石の墓標？
- ・造墓時期：13世紀後葉

調査結果を基に造墓過程を復元してみると、墓壙の掘削→遺体（木棺）の安置→副葬品の納入（木棺と墓壙との隙間に土師器鍋を横位に納入。小刀は棺の内外のどちらに納入かは不明であるが、おそらく棺内と考えられる。）→覆土→墓標（自然礫）の設置と推定される。

③ S X 18

S X 18の造墓状況は以下のとおりである。

- ・墓壙の平面形態：不整楕円形
- ・埋葬形態：土葬
- ・副葬品：鎌1
- ・地上遺構：自然石の墓標？
- ・造墓時期：不明

調査結果を基に造墓過程を復元してみると、

墓壙の掘削→遺体の安置→覆土→墓標（自然礫）及び副葬品の据え置きと推定される。

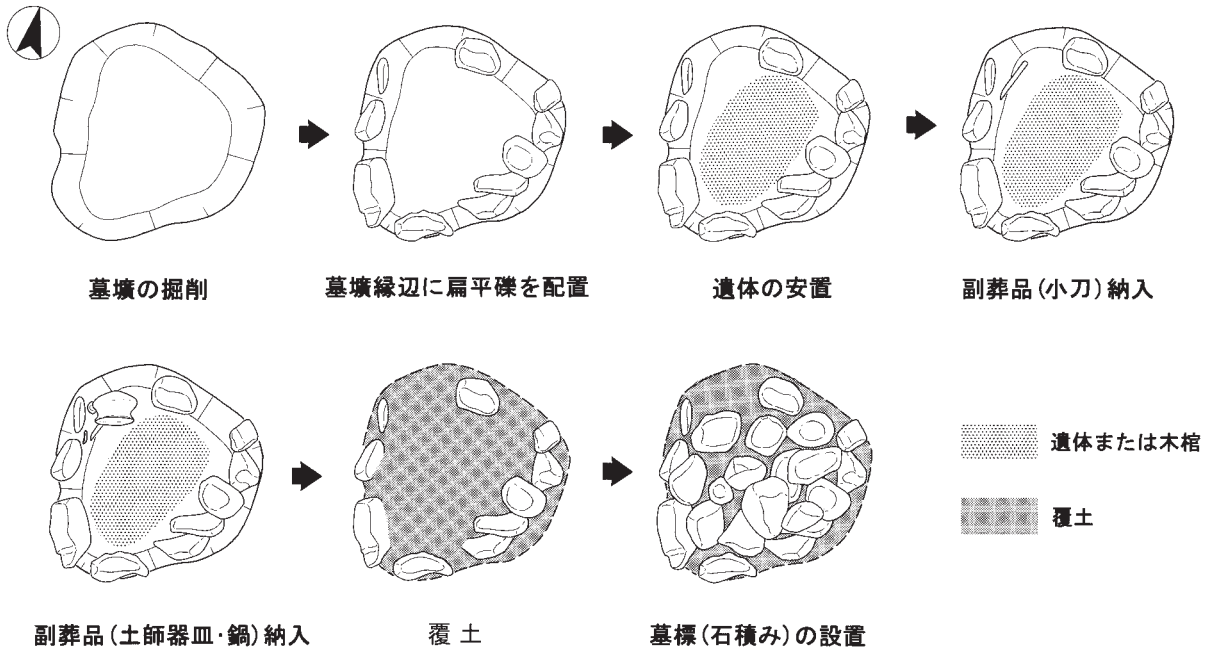
当遺構は先に述べたとおり、可能性を肯定的に捉え中世墓と認定したが、その認定には疑問も残る。肯定的な認定根拠としては、S X 12・S X 19がともに副葬品として刃物を納め、墓標として自然礫を用いているように、S X 18においても人為的と考えられる複数の礫の据え置きと鎌の出土が挙げられる。一方、否定的な要素としては、検出した自然礫と墓壙と判断した土坑との関係が理解しがたいことに加え、副葬品とした鎌が墓壙内に埋納されていない点であるが、自然礫の一部は墓壙内へ陥没した結果と判断し、副葬品の鎌は墓標とともに墓上に据え置かれたものと解釈して中世墓と認定したい。

④ まとめ

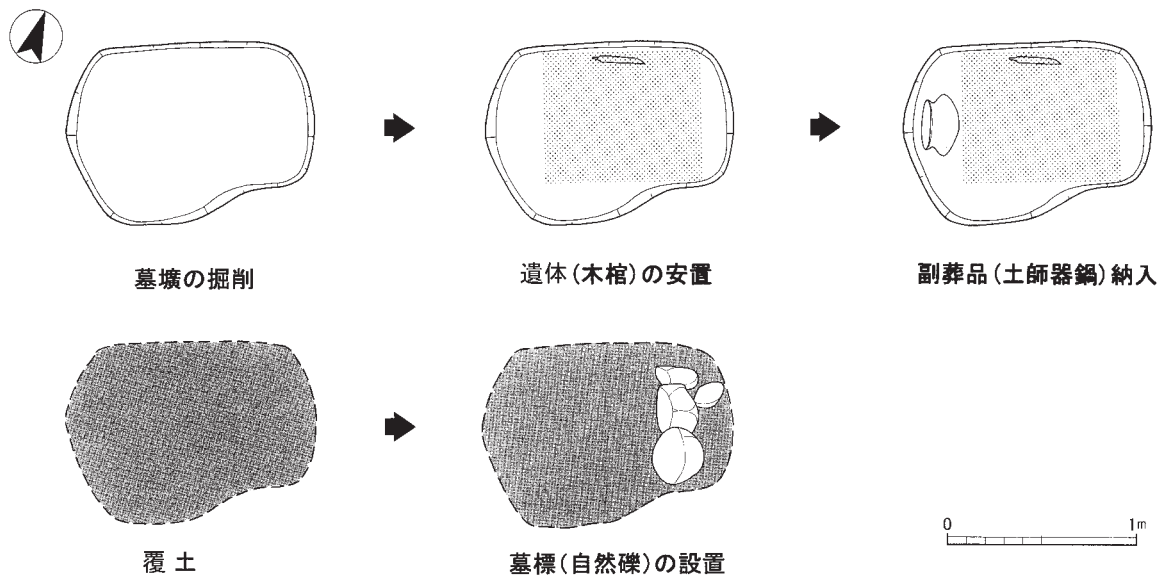
墓を墓と認定するには、それなりの根拠が必要である。埋葬人骨が出土すれば決定的な根拠となり得るが、それ以外は墓としての認定自体が容易ではない。今回の調査では一片の骨片も検出できなかったが、3基の墓を認定した。うち1基は墓と認定するには疑問が残るものの、これらの認定根拠はいずれも副葬品と墓標であり、三者には「自然石」の墓標と「刃物」を副葬品とする共通点がある。また、三者ともに土葬墓と考えられる点や造墓時期が同時期と推定される点も共通点と言えよう。他方、墓壙の規模や刃物以外の副葬品の内容、墓標の設置状況には差異があり、その差異は被葬者に起因するものであるうか。中でもS X 18は土葬と仮定すると、墓壙の規模から成人の墓とは考えにくく、小児埋葬墓との想定も可能と思われる。

これら以外に、埋土上面で一石五輪塔が出土したS K 11やS Z 9の埋土内で検出した集石、S Z 9及び包含層で出土した小刀や銭貨などは中世墓の可能

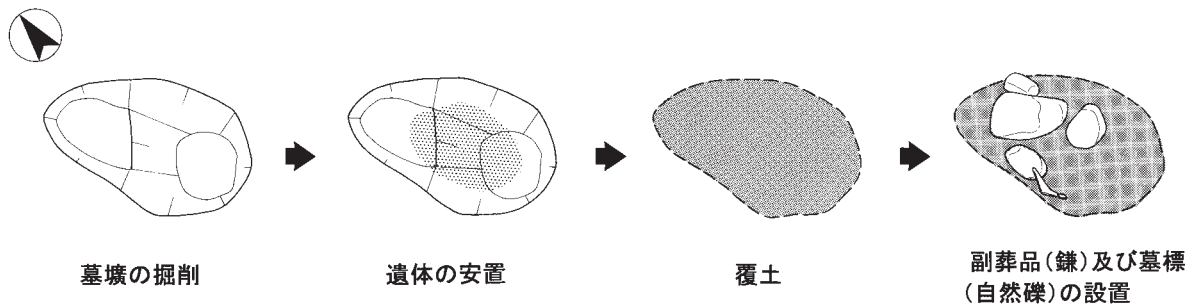
SX 12



SX 19



SX 18



第18図 SX12・18・19造墓過程推定復元図(1:40)

性が疑われる遺構・遺物と考えられる。これらはすべて調査区北端部の遺構集中部に位置するが、土色のコントラストが非常に不鮮明であったため、検出できなかった可能性もある。従って、今回の調査では墓標としての自然礫と副葬品がセットで確認できたものを認定根拠として中世墓を3基認定したが、3基以上の中世墓が存在した可能性は否めない。

(2) 掘立柱建物について

A地区では調査区北端部で掘立柱建物を6棟確認した。個々の建物については前項で詳細は記述済みであるが、これらの建物は出土遺物から概ね15世紀後半～16世紀前葉にかけての建物である。ここでは各建物間の関係等を中心に若干の検討を行う。

確認した6棟の建物は、限られた範囲内で重複しており、何度も建て替えがなされたことは明白である。柱穴の切り合い関係から、

S B 24→S B 23・S B 25→S B 27

の順に建て替えが行われたことは判断できるが、S B 22・26は柱穴の切り合い関係が他の建物との間に無いため、全体の建て替えの過程は不明である。また、柱穴内の出土遺物から建物の所属時期を概ね15世紀後半～16世紀前葉と推定したが、少量の出土遺物から建物の先後関係は推定しがたい。

次に、複数の建物が同時期に存在した可能性として、建物の重複関係から以下のような想定ができる。

- ・S B 22 (4間×1間) - S B 25 (3間×2間)
- ・S B 22 (4間×1間) - S B 26 (3間×2間)
- ・S B 22 (4間×1間) - S B 27 (2間×2間)
- ・S B 23 (3間×1間) - S B 26 (3間×2間)
- ・S B 23 (3間×1間) - S B 27 (2間×2間)
- ・S B 24 (3間×2間) - S B 27 (2間×2間)

これらのうち、柱穴の切り合いから判断した建物の新旧関係から、S B 24とS B 27の併存は考えにくい。また、S B 22・23はそれぞれ4間×1間、3間×1間の細長い建物であるため、主屋に付随する建物と考えるほうが自然であり、以上のことからこれらの建物の建て替え過程を推定すると、

S B 24単独→S B 22・S B 25の併存→S B 23・S B 26の併存→S B 27単独

となり、建物の存続期間を4期に区分できる。掘立柱建物の耐用年数を20年と仮定した場合、20年×4

期=80年となり、出土遺物から判断した建物の存続期間とも概ね一致する。従って、これらの建物は3回程度の建て替えを繰り返し、おそらく一世帯が同じ土地に百年近く住み続けた結果と考えられよう。

建物の棟方向は、いずれも北に対して東へ42度から47度振っており、建て替えに際しても棟方向を変えることはなかったようである。また、方位を意識するよりは、むしろ北東方向へ張り出した段丘端部の地形を意識した建物配置がなされたと考えられる。

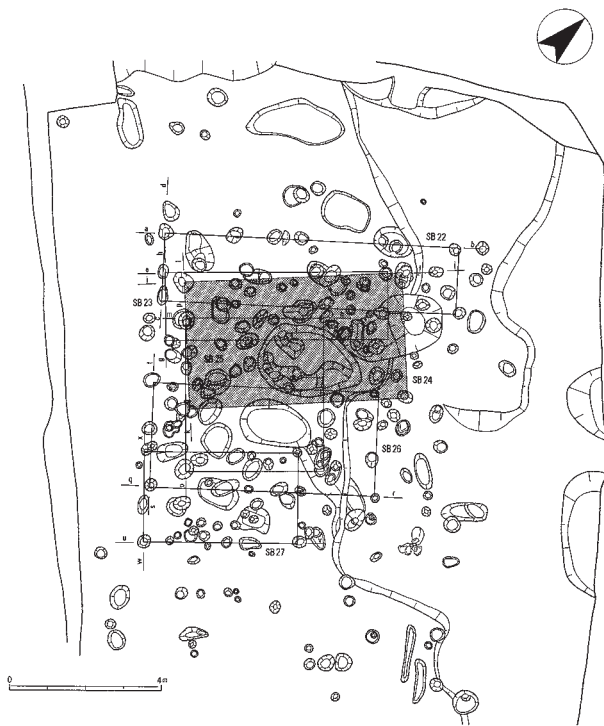
建物と重複している土坑のうち、S K 13・14については、それぞれS B 24・25に伴う土坑との想定も可能である。S K 13の平面形態は不整楕円形で埋土は褐色粘質土一層であるが、埋土中には炭化物が混入し、焼土粒と思われる明黄褐色土も斑点状に混在している。S B 25に伴う土坑と仮定した場合、建物内の位置は南東隅に位置することから、各地で検出されている南東隅土坑に伴う建物と想定できる。一方、S K 14の平面形態は不整楕円形で、埋土は褐色土一層であるが、埋土上面で径40cm程度の焼土ブロックを検出している。柱穴内からは土師器皿・碗・鍋等の他、鉄滓が出土していることを勘案すると、鍛冶工房的な建物であった可能性も想定できると思われる。

(3) 遺構の変遷について

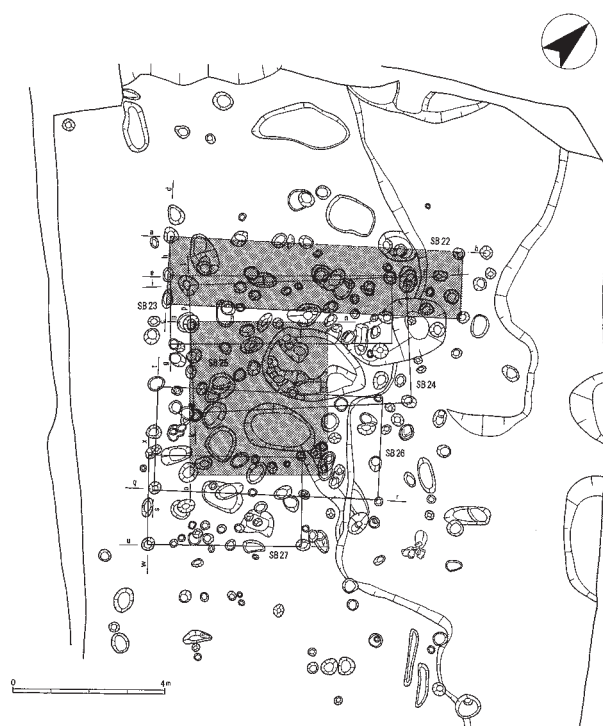
第1次調査で確認した遺構は、概ね三期に区分できる。以下に各期の状況と変遷について概要を記したい。

①第I期(平安時代末期以前)

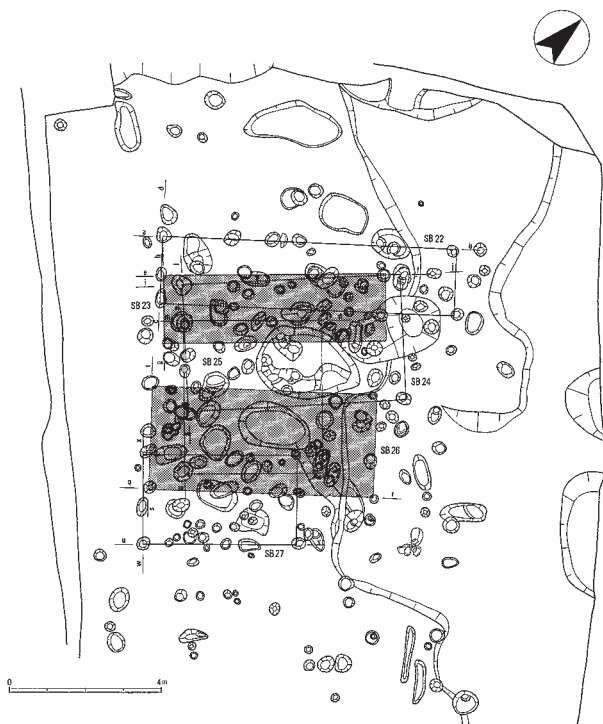
伊藤裕偉氏の南伊勢中世編年I期^⑩に対応する。A・B両地区ともに自然流路S R 1・31が確認されている。B地区では、検出されたS R 31の北岸ラインが調査前の水田畦畔の位置にほぼ符合しており、S R 31の埋没後、その形態に合わせて水田化した。流路の形態そのものは畦畔という形で遺存している状況が確認されている。一方、A地区で検出したS R 1は延長約10mの範囲のみであるが、南東から北東方向へ水流を形成しており、S R 1とS R 31の間の地形から判断すると、両者は一連の流路と考えられる。S R 1の出土遺物は山茶椀(100)1点のみであるが、平安時代の末期頃には埋没したものと推定され、これはB地区の出土遺物から判断されたS R



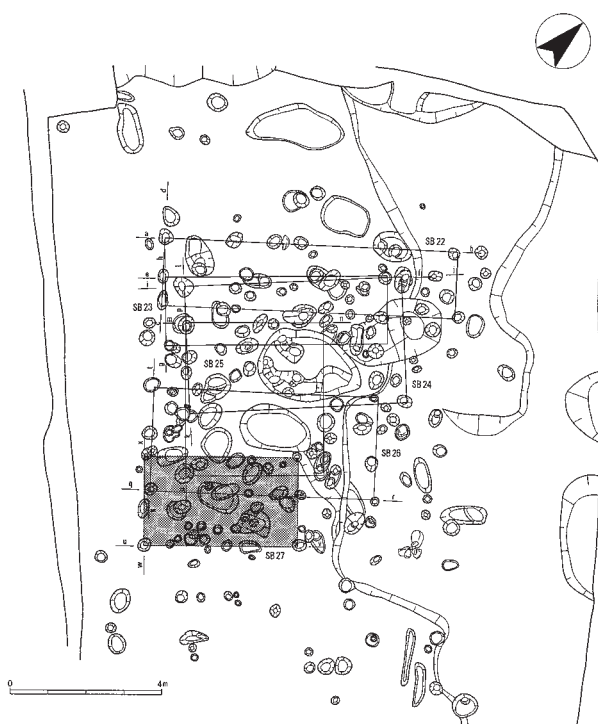
I 期 (SB24)



II 期 (SB22·25)

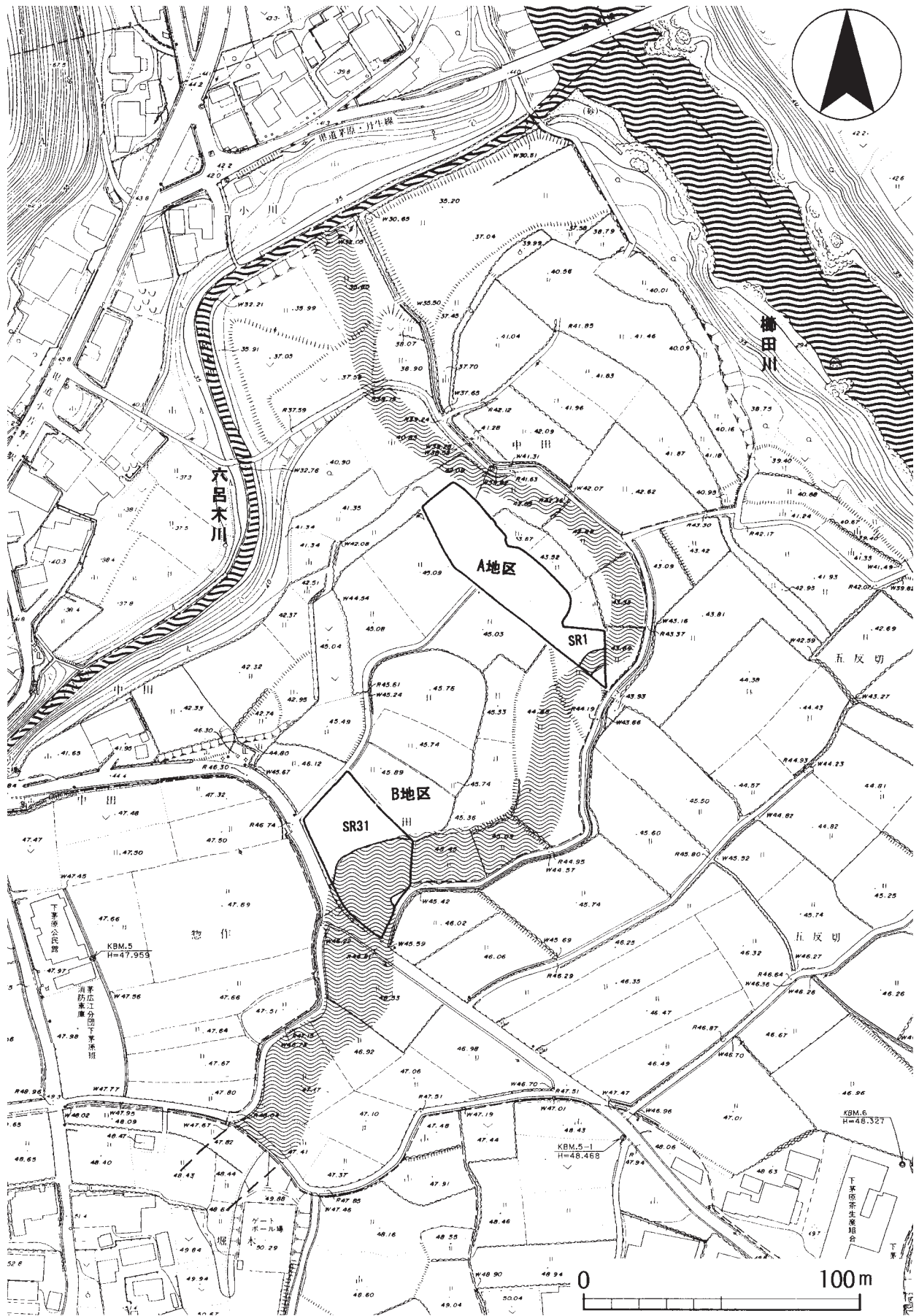


III 期 (SB23·26)

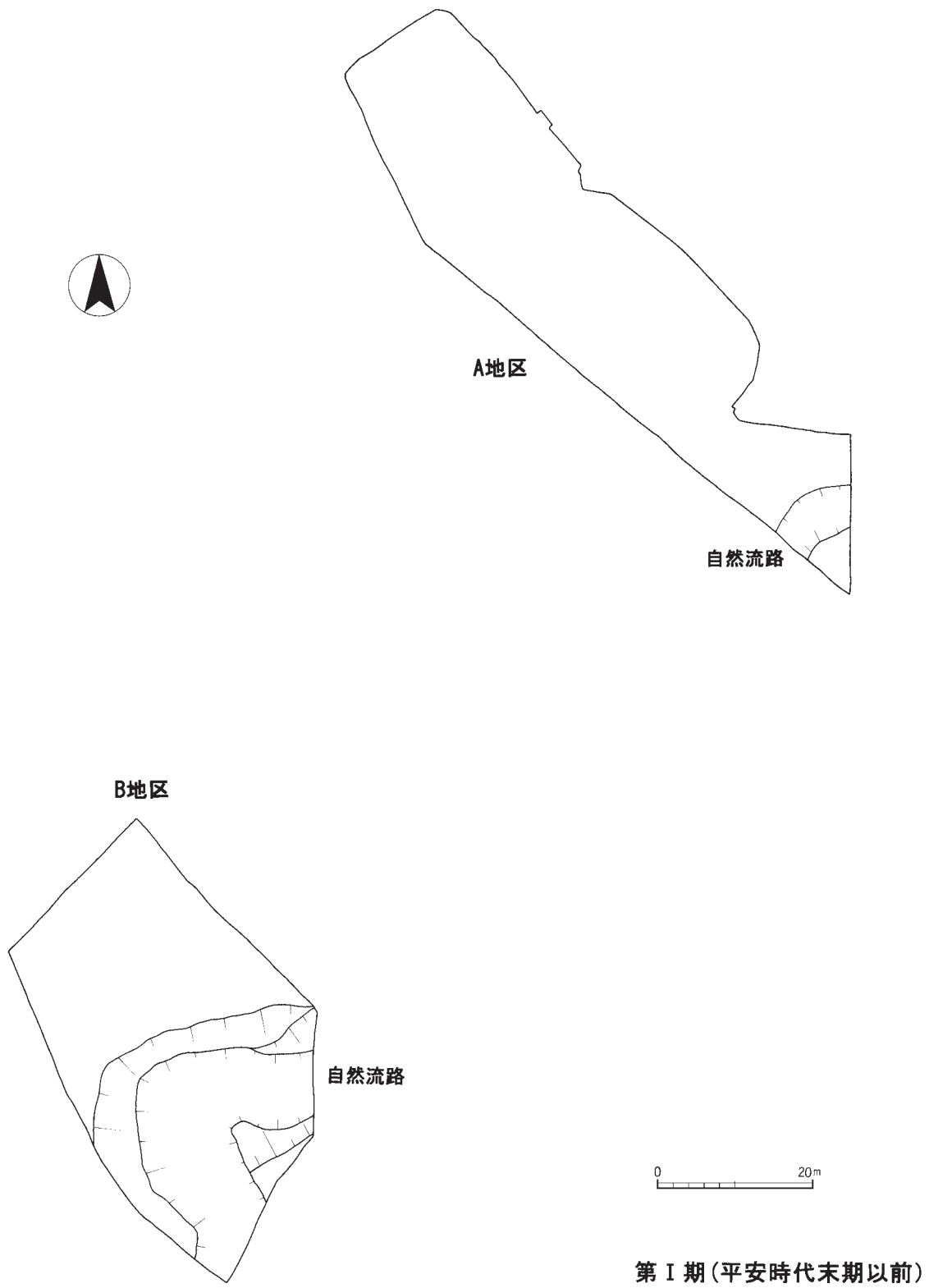


IV 期 (SB27)

第19図 掘立柱建物変遷図(1:200)

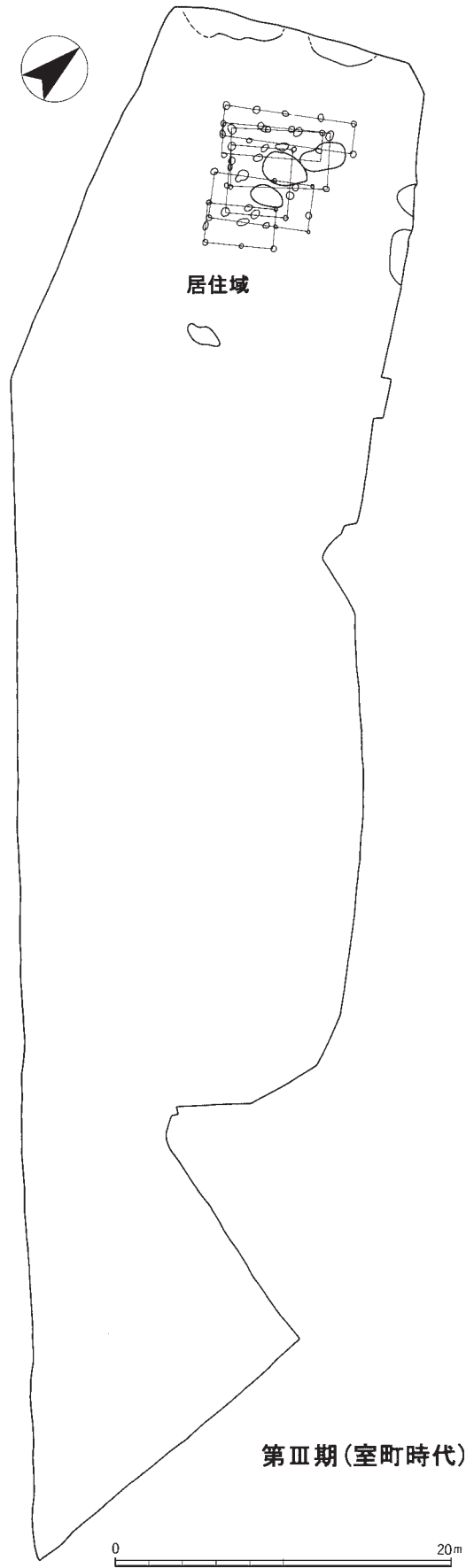
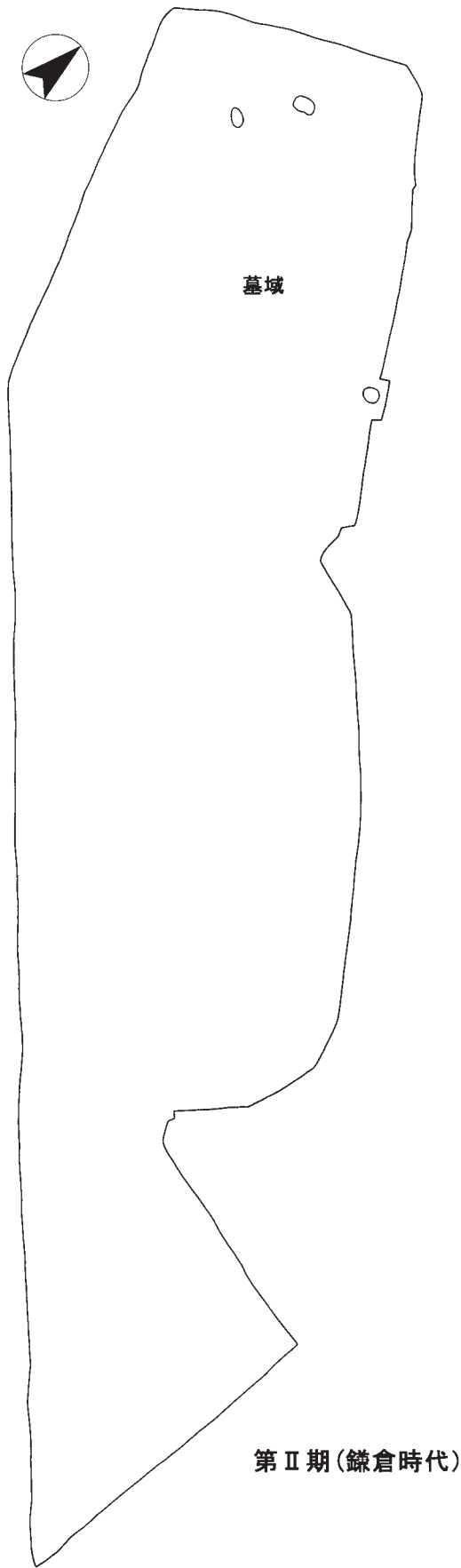


第20図 SR1・31推定復元図(1:2,000)



第 I 期 (平安時代末期以前)

第21図 遺構変遷図①(1:800)



第22図 遺構変遷図②(1:400)

31の埋没時期とも矛盾しない。

S R 1・31の北側延長部は、最終的に櫛田川もしくは六呂木川に合流すると考えられるが、水田面の標高や畦畔の形状等、地形から判断して六呂木川に合流すると推定した(第20図)。第1次調査の調査区は、これらの河川によって形成された河岸段丘上に位置し、A地区はその突端部と判断できる。今回調査で確認したA地区遺構集中部は周辺との比高差が最も大きく、その比高差は3mを超える。A地区では、砂層や角の取れた円礫を含む砂礫層が認められたことから、櫛田川や六呂木川、S R 1・31の氾濫時に侵食を受けたものと考えられる。A地区ではこれらの砂層や砂礫層で遺構を検出しており、中世以降は地形的に安定した場所であったことが分かる。調査最終段階に、A地区では調査区東壁に沿って下層遺構の確認を目的としたトレンチ調査を行ったが、遺構・遺物は皆無であったことから、当該期以前の人間の営為の痕跡は河川の氾濫によって消滅したか、若しくは中世以前は土地利用に不適(あるいは物理的に利用不可能)な場所として認識されていたと考えられる。

②第Ⅱ期(鎌倉時代)

伊藤裕偉氏の南伊勢中世編年Ⅱ期に対応する。S R 1・31埋没後は地形的に安定し、A地区では13～14世紀代に墓地が営まれる。墓地に選定されたのは、眼下に櫛田川を臨む段丘の突端部であるが、墓域としては小規模なもので、北端部の限られた範囲が利用された。B地区では植栽や耕作等の痕跡以外は確認されなかったことから、中世以降、現在に至るま

で専ら耕作中心の土地利用がなされ、居住域等に土地が利用されることは無かったと考えられる。

なお、第Ⅰ期で埋没したS R 1・31については、水流の停止後もその流路は浅い谷状地形として残存し、土地利用のできるような安定した地形とはならなかったと推定される。この状況は第Ⅲ期においても大きく変わることなく継続したと考えられ、現況の地形にこれらの痕跡が残されていることがそれを裏付けている。

③第Ⅲ期(室町時代)

伊藤裕偉氏の南伊勢中世編年Ⅳ期に対応する。この時期になると、A地区では第Ⅱ期に墓地として利用されていた場所が居住域に変化する。当該地では掘立柱建物が6棟確認されているが、前述のとおり調査区北西部の限られた範囲内で幾度も建て替えが行われている。調査区中央部ではピットが多数検出されているが、建物としてまとまるものは無く、出土遺物も僅少であった。また、土坑も数基検出されているが、S K 6以外に遺物が出土したものは無く、遺構の形状も不定形である。これらの状況は、B地区の調査区北部の状況と酷似しており、植栽や耕作に伴い開削された痕跡等と考えるのが妥当であろう。従って、A地区の南東部は第Ⅰ期にS R 1が埋没して以来、谷地形ゆえに土地利用がなされず、中央部は専ら耕作等を中心とした土地利用がなされ、北東部が居住域として利用されたと推定される。一方、B地区は第Ⅱ期同様、明確な人間の営為の痕跡は確認されていない。

(小山憲一)

[註]

- ① 遺構一覧表の時期区分、南伊勢中世は以下の文献に拠る。
伊藤裕偉「中世後期における伊勢・志摩地域の土器相」『関東、東海における中世土器（煮炊具）の最近における研究成果』静岡大学、2005年
- ② 山茶碗の編年については、以下の文献に拠る。
藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第3号、三重県埋蔵文化財センター、1994年
- ③ 南伊勢系土師器皿の分類・編年は、以下の文献に拠る。
伊藤裕偉『多気遺跡群発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター、1993年
伊藤裕偉『岩出地区内遺跡群発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター、1996年
- ④ 南伊勢系土師器鍋の編年は、以下の文献に拠る。
伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Miehistory』vol. 1、1990年
伊藤裕偉「伊勢の中世煮沸用土器から東海を見る」『鍋と甕そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム、1996年
- ⑤ 青磁・白磁の分類は、以下の文献に拠る。
森田勉「大宰府出土の輸入中国磁器について－型式分類と編年を中心として－」『大宰府陶磁研究－森田勉氏遺稿集・追悼論文集－』森田勉氏遺稿集・追悼集刊行会、1995年
- ⑥ 南伊勢系土師器羽釜の分類は、以下の文献による。
『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査報告－第3分冊－楠ノ木遺跡』三重県教育委員会、三重県埋蔵文化財センター、1991年
- ⑦ 瀬戸美濃製品の編年については、以下の文献による。
藤澤良祐「中世瀬戸窯の動態」『（財）瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第5輯、1997年
藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要V』瀬戸市歴史民俗資料館、1986年
- ⑧ 前掲⑤に同じ
- ⑨ 常滑産甕の編年は、以下の文献に拠る。
中野晴久「生産地における編年について」『常滑焼きと中世社会』小学館、1995年
- ⑩ 登窯製品については、以下の文献に拠る。
藤澤良祐『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要VI』瀬戸市歴史民俗資料館、1987年
藤澤良祐『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要VII』瀬戸市歴史民俗資料館、1988年
藤澤良祐『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要VIII』瀬戸市歴史民俗資料館、1997年
- ⑪ 藤澤良祐氏に実見のうえご教授いただいた。
- ⑫ 前掲①に同じ
- ⑬ 『嶋抜II』三重県埋蔵文化財センター、2000年
- ⑭ 斉藤孝正『日本の美術』409～越州窯青磁と緑釉・灰釉陶器～、至文堂、2000年
- ⑮ 前掲②に同じ
- ⑯ 前掲①に同じ
- ⑰ 前掲①に同じ

IV 下茅原遺跡 第2次調査

1 調査区の地形と基本的層序

第2次調査箇所は、第1次調査箇所の南西の水田に位置する。発掘前の調査区の標高は、A地区が約46.5m、B地区が約46.5m、C地区が約45.6m、D地区が約45.2m、E地区が約44.7mと、A・B地区からC地区、D地区、E地区へと段々に低くなる。

以下、地区ごとに基本層序を記述する。

A地区 第1層が灰色粘質土（耕作土）、第2層が明黄褐色土、第3層が暗褐色粘質土である。

B地区 第1層が灰色粘質土（耕作土）、第2層が灰褐色粘質土、第3層が褐灰色粘質土、第4層が橙色粘質土、第5層がにぶい黄橙色土、第6層が明褐色土、第7層が黒褐色粘質土、第8層が黒褐色粘質土である。

C地区 第1層が灰色粘質土（耕作土）、第2層が明黄褐色土、第3層が褐灰色土、第4層が、灰褐色土である。

D地区 第1層が灰色粘質土（耕作土）、第2層が明褐色土、第3層がにぶい褐色土、第4層が黒褐色土、第5層が黄褐色土である。

E地区 第1層が灰色粘質土（耕作土）、第2層が橙色土、第3層が灰褐色土、第4層が灰褐色土、第5層が明黄褐色土である。

A地区とB地区では土層の連続性が確認できた。しかし、C地区やD地区では基本層序の間に他の層が入り複雑な堆積の様子を示している。

2 検出遺構

第2次調査箇所では、遺構は希薄であった。以下、地区ごとに遺構の概要を記述する。

A地区 暗褐色粘質土を検出面とした。遺構は確認できなかった。

B地区 中央部から東部に、ピットや土坑を確認した。ピットには柱痕跡の可能性もあるものもあったが、規則性が見られず建物としての認識はできなかった。東端付近でS K 41～45が集中して確認された。いずれも焼土、炭化物が混じり、遺物は出土していない。形状から風倒木である可能性が高い。

C地区 ピットが点在しているが、規則性は認められなかった。

D地区 グリッドL 28、L 29付近で大きめの土坑を

確認した。埋土は明褐灰色土であった。土取跡と考えられる。中央付近にもピットが点在しているが、規則性は認められなかった。

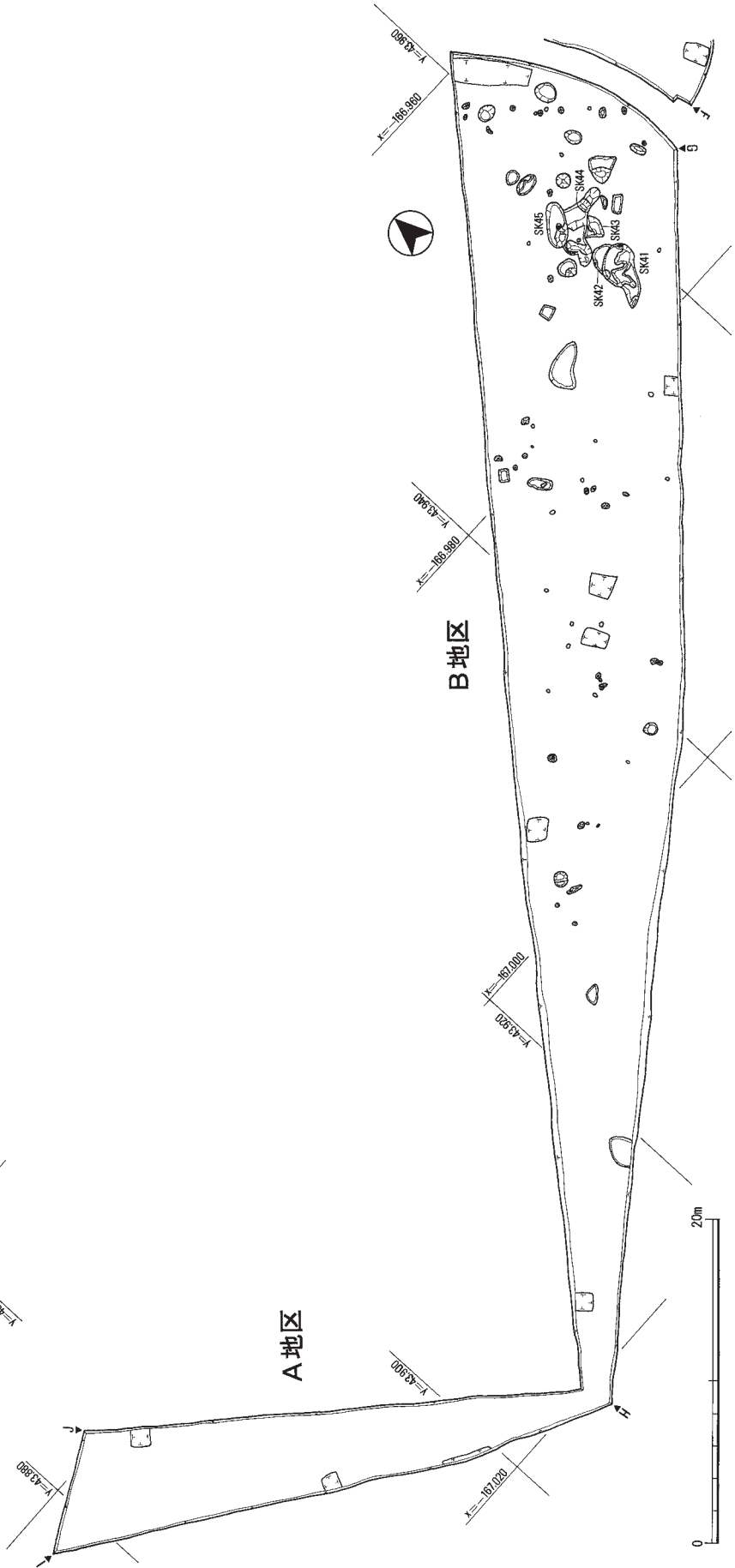
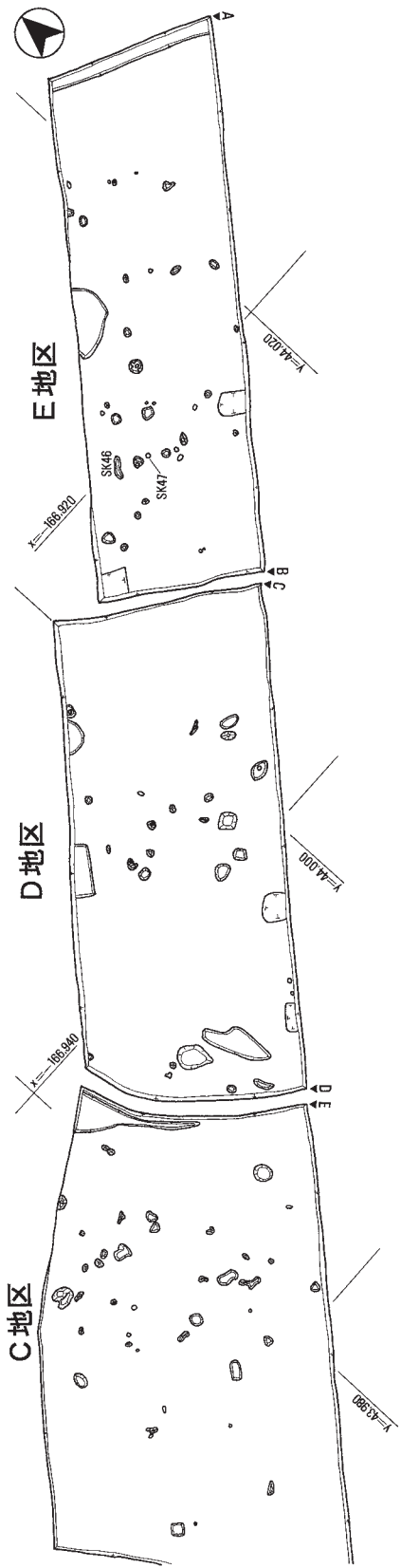
E地区 西端付近で土坑2基を確認した。

S K 46 長さ約1.3m、幅0.4m、深さ0.2mの瓢箪形にも近い楕円形の浅い土坑である。底部より縄文時代早期後半頃のものと考えられる深鉢片が1片出土した。他の破片は見られず、他の場所からの流れ込みである可能性も高い。したがって、この遺構が縄文時代のものであるかは確定できない。

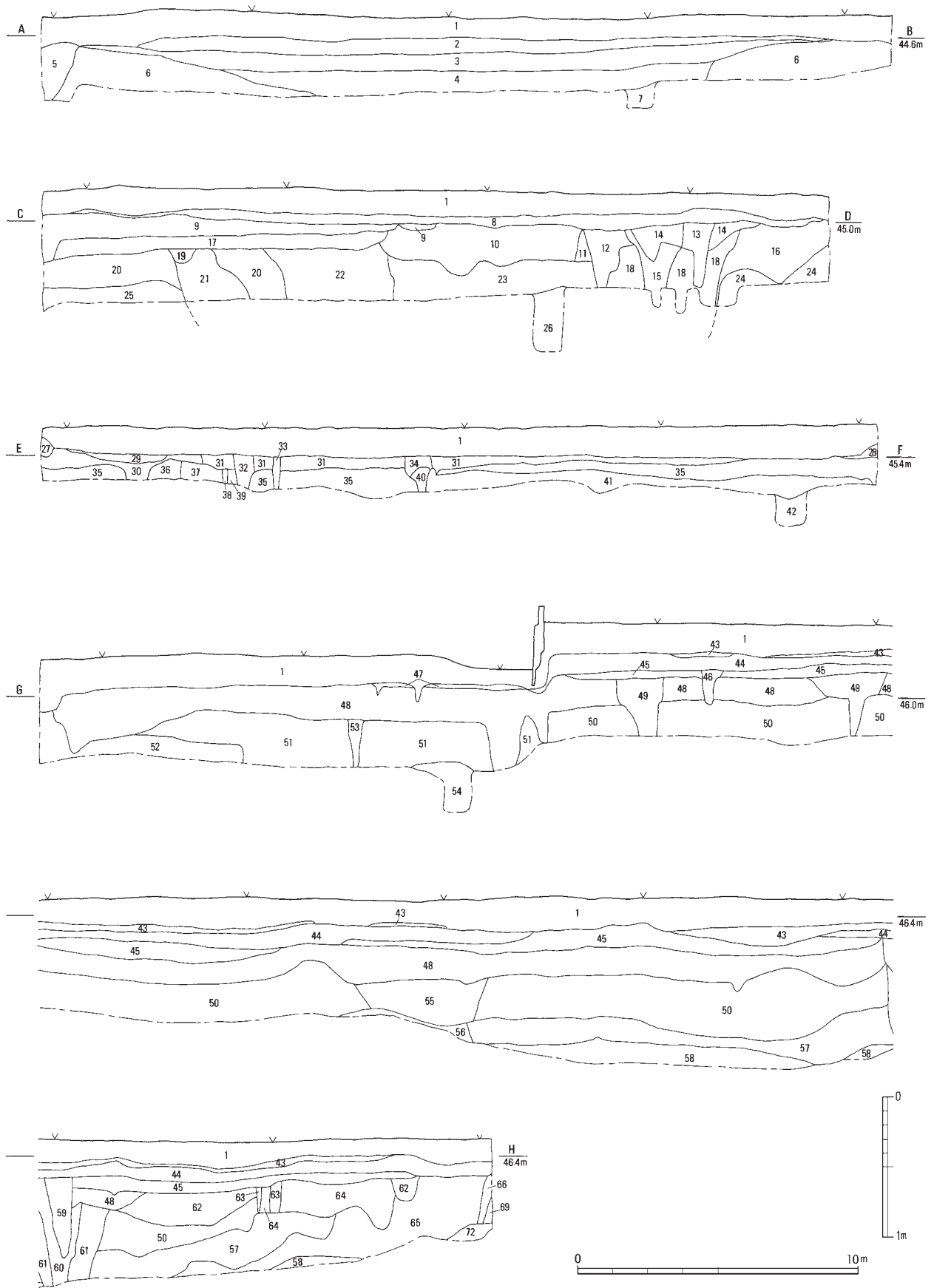
S K 47 長さ約0.4m、幅0.3m、深さ0.2mの不定楕円形の小さな土坑である。この遺構からも底部より縄文時代早期後半頃のものと考えられる深鉢片が1片

遺構番号	地区	グリッド	性格	時期	備考
S K 41	B	S21・T21	土坑	不明	焼土・炭化物混じる。風倒木。
S K 42	B	S21	土坑	不明	焼土・炭化物混じる。風倒木。
S K 43	B	R21・S21	土坑	不明	焼土・炭化物混じる。風倒木。
S K 44	B	R21・S21	土坑	不明	焼土・炭化物混じる。風倒木。
S K 45	B	R21・S21	土坑	不明	焼土・炭化物混じる。風倒木。
S K 46	E	E34・F34	土坑	縄文時代？	縄文土器片出土(流れ込みの可能性あり)
S K 47	E	F34	土坑	縄文時代？	縄文土器片出土(流れ込みの可能性あり)

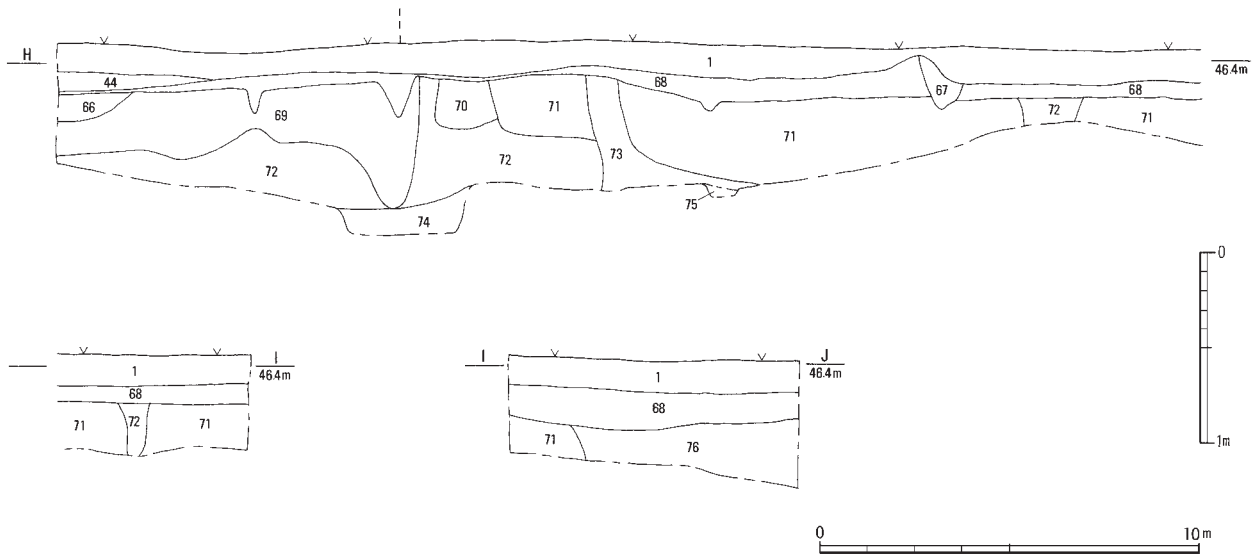
第11表 遺構一覧表



第23図 遺構平面図(1:400)



第24図 土層断面図①(縦1:40、横1:200)



- | | |
|--|--|
| 1 7.5Y6/1 灰色粘質土 | 39 7.5YR6/2 灰褐色土 |
| 2 7.5YR6/8 橙色土 | 40 10YR6/3 にぶい黄橙色土 |
| 3 7.5YR5/2 灰褐色土 | 41 7.5YR5/2 灰褐色土 |
| 4 7.5YR4/2 灰褐色土 (所々に10~20mm程度の礫混じる) | 7.5YR3/2 黒褐色土の礫状ブロック多く混じる |
| 5 10YR6/2 灰黄褐色土 | 42 10YR6/8 明黄褐色土 (試掘坑) |
| 6 7.5YR6/2 灰褐色土 | 43 5YR6/2 灰褐色粘質土 (しまりあり) |
| 7 10YR7/8 黄橙色土 (試掘坑) | 44 5YR5/1 褐灰色粘質土 (5~50mm程度の礫まばらに混じる) |
| 8 7.5YR5/6 明褐色土 | 45 7.5YR6/6 橙色粘質土 |
| 9 7.5YR5/3 にぶい褐色土 | 46 10YR5/4 にぶい黄橙色土 (5~50mm程度の礫混じる) |
| 10 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土 (1~40mm程度の礫多く混じる) | 47 7.5YR6/8 橙色土 |
| 11 10YR4/4 褐色土 | 48 10YR5/4 にぶい黄橙色土 (所々に1~5mm程度の砂粒混じる) |
| 12 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 | 49 10YR5/4 にぶい黄橙色土 (5~50mm程度の礫混じる) |
| 13 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 (しまりあり) | 50 10YR7/6 明黄褐色粘質土 |
| 14 10YR6/3 にぶい黄橙色土 | 51 7.5YR4/2 灰褐色土 |
| 15 7.5YR7/6 橙色土 | 52 10YR5/3 にぶい黄橙色砂質土 |
| 16 7.5YR4/2 灰褐色土 | 53 10YR6/3 にぶい黄橙色土 |
| 17 10YR3/2 黒褐色土 | 54 10YR6/3 にぶい黄橙色砂質土 (試掘坑) |
| 18 10YR3/4 暗褐色土 | 55 10YR6/4 にぶい黄褐色粘質土 |
| 19 10YR5/8 黄褐色土 | 56 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土 |
| 10YR4/1 褐灰色土のブロックと木炭粒混じる | 57 10YR3/2 黒褐色粘質土 (黄ブロック含む) |
| 20 10YR5/8 黄褐色土 | 58 10YR2/3 黒褐色粘土 |
| 21 10YR7/8 黄橙色砂質土 (1~5mm程度の砂粒多く混じる) | 59 7.5YR4/3 褐色砂質土 (10~40mm程度の礫多く混じる。しまりなし) |
| 22 10YR5/6 黄褐色砂質土 (しまりなし。0.5~1mm程度の礫多く混じる) | 60 10YR6/6 明黄褐色砂質土 |
| 23 10YR5/6 黄褐色土 | 61 10YR6/6 明黄褐色粘質土 |
| 24 10YR5/6 黄褐色粘質土 | 62 10YR4/1 褐灰色粘質土 |
| 25 10YR7/8 黄橙色土 | 63 7.5YR5/3 にぶい褐色粘質土 |
| 26 10YR4/2 灰黄褐色土 (しまりあり。試掘坑) | 64 7.5YR4/1 褐灰色粘質土 |
| 27 7.5YR7/8 黄褐色土 | 65 7.5YR2/1 黒色粘質土 (しまりあり) |
| 28 7.5YR6/8 橙色土 | 66 10YR3/2 黒褐色粘質土 (しまりあり) |
| 7.5YR6/2 灰褐色土混じる | 67 7.5YR6/2 灰褐色土 |
| 29 7.5YR7/6 橙色土 | 68 10YR6/6 明黄褐色土 (5~10mm程度の礫混じる) |
| 30 5YR5/6 明赤褐色土 | 69 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 (しまりあり) |
| 31 10YR7/8 黄褐色土 | 70 10YR3/2 黒褐色粘質土 (しまりあり) |
| 32 5YR5/6 明赤褐色土 | 71 10YR3/3 暗褐色粘質土 (しまりあり) |
| 33 5YR5/4 にぶい赤褐色土 | 72 7.5YR5/2 灰褐色土 |
| 34 5YR5/6 明赤褐色土 | 73 10YR3/2 黒褐色粘質土 (しまりあり) |
| 35 7.5YR6/2 灰褐色土 | 74 10YR6/4 にぶい黄褐色土 (1~2mmの砂、10~30mmの礫多く混じる トレンチ) |
| 36 10YR5/3 にぶい黄褐色土 | 75 10YR6/4 にぶい黄褐色土 (試掘坑) |
| 37 7.5YR6/3 にぶい褐色土 | 76 10YR6/4 にぶい黄褐色土 |
| 38 10YR3/2 黒褐色粘質土 (黄ブロック含む) | |

第25図 土層断面図②(縦1:40、横1:200)

出土した。他の破片は見られず、これも他の場所からの流れ込みである可能性も高い。したがって、この遺構も縄文時代のものであるかは確定できない。

3 出土遺物

出土遺物は、包含層から出土したものが大半で、整理箱2箱と少量であった。

S K 46出土遺物 (156)

156は、縄文土器深鉢の体部片である。S K 46の底部から出土した。外面にナデ、内面に条痕が施される。縄文時代早期後半頃のものであろう。

S K 47出土遺物 (157)

157は、縄文土器深鉢の体部片である。S K 47の底部から出土した。外面に条痕、ナデ、オサエ、内面に条痕、ケズリが施される。縄文時代早期後半頃のものであろう。

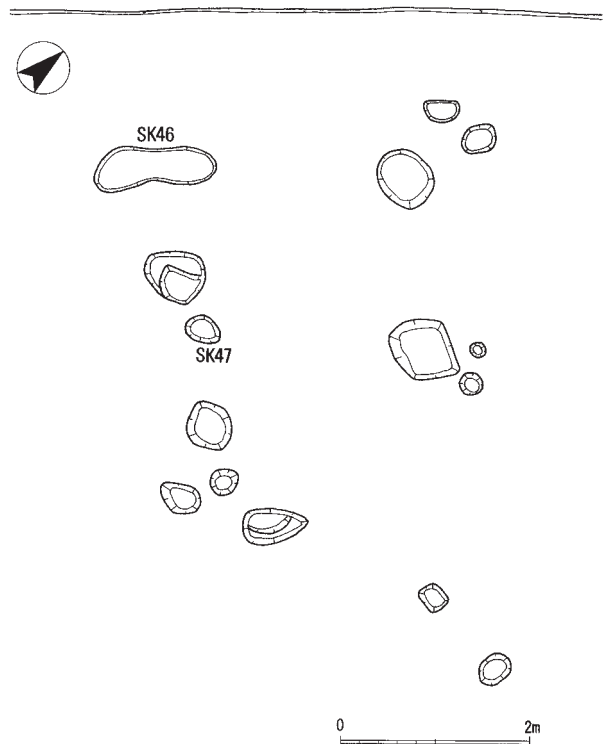
包含層出土遺物 (158～171)

158～161は、いずれも縄文土器深鉢片で、縄文時代早期後半頃のものと考えられる。162・163は土師質土器（ロクロ土師器）皿の底部片である。164は南伊勢系^①の土師器皿である。165は土師器鍋で、伊藤裕偉氏による編年^②の第4段階に相当する。166～168は山茶椀で、166・167は、藤澤良祐氏による編年^③の渥美・湖西型第6型式に相当する。169は、土師器甕の口縁部である。170は、青磁椀の口縁部であろう。171は、長さ9.5cmの鉄製鎌である。錆による劣化が少なく、原型をよく留めている。

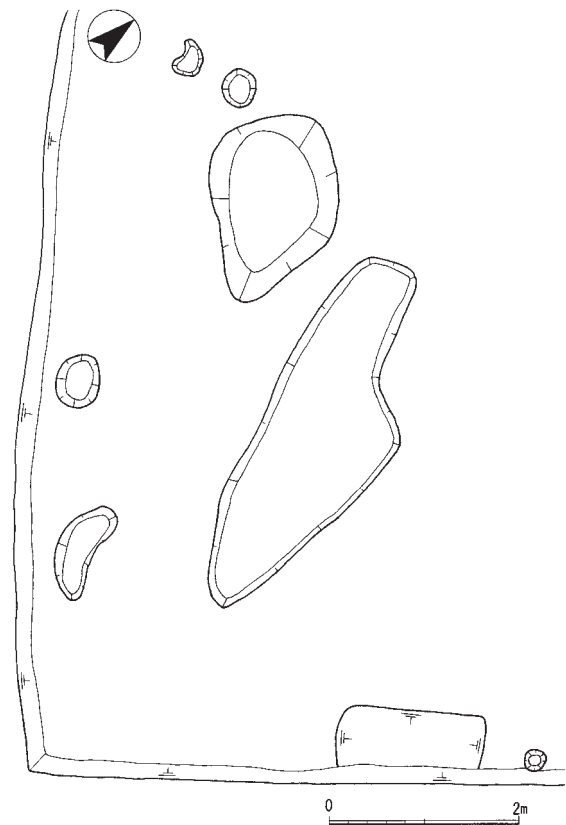
4 小結

下茅原遺跡の第2次調査区は、発掘面積に対して遺構・遺物共に大変少なかった。縄文土器の出土している土坑があるが、点数も少なく、周囲からの流れ込みである可能性が高い。縄文時代の遺構・遺物は、範囲確認調査の調査坑27・28で早期の土器が確認されているが、第1次調査でも遺構は確認されていない。周辺に縄文時代の遺構がある可能性が高いので今後の注意が必要であろう。また、第2次調査においては、包含層出土の遺物も点数が少ない。これらも周囲からの流れ込みであると考えられる。

(木本勝己)



第26図 SK46・47遺構平面図(1:80)

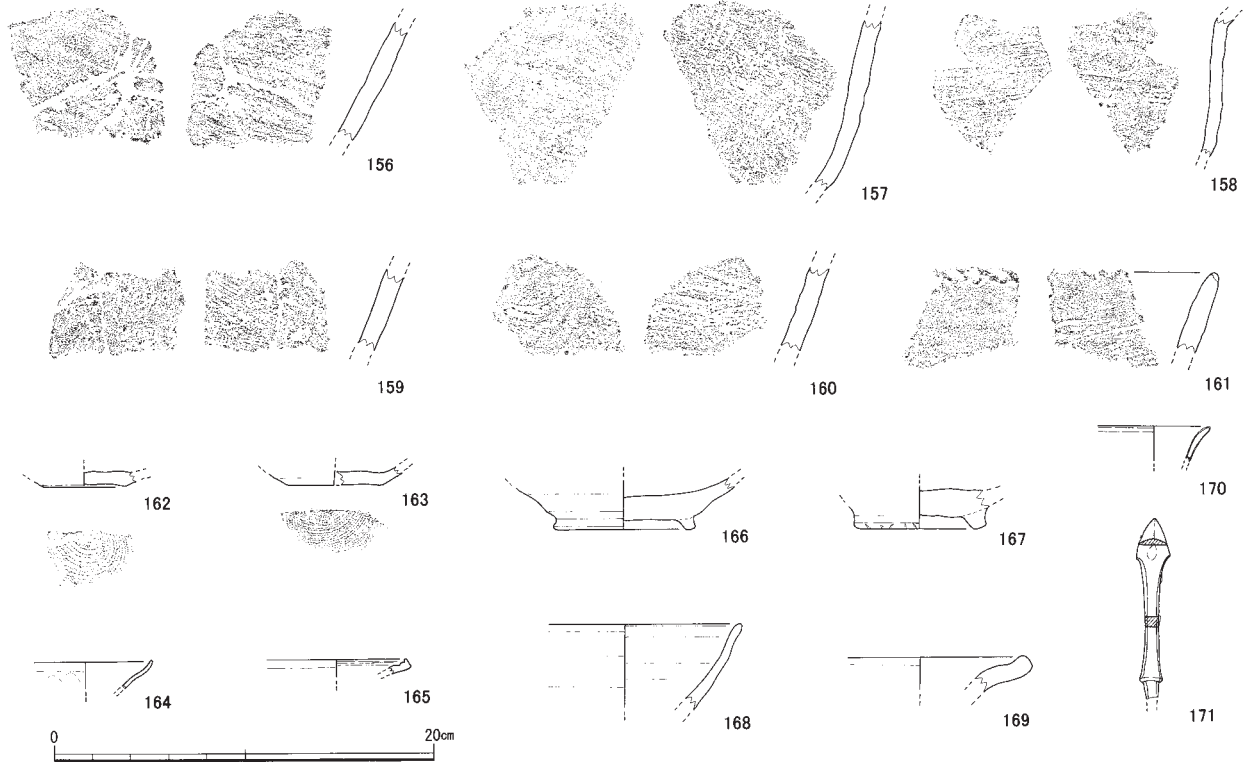


第27図 L 28・29付近遺構平面図(1:80)

[註]

- ① 『多気遺跡群発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター、1993年
 ② 伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」

- 『Mie history』vol.1、1990年
 ③ 藤澤良佑「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第3号、三重県埋蔵文化財センター、1994年



第28図 出土遺物実測図(1:4)

報告番号	実測番号	器種	地区	出土位置	出土遺構	法量(cm)	残存度	調整、技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
156	2002-02	縄文土器 深鉢	E	F34	SK46	-	体部 小片	外：ナデ 内：条痕	やや粗 (~3mmの微砂粒含む)	-	外：にぶい黄橙10YR6/4 内：にぶい黄橙10YR7/4	繊維含有
157	2002-06	縄文土器 深鉢	E	F34	SK47	-	体部 小片	外：条痕、ナデ、オサエ 内：条痕、ケズリ	やや粗 (~3mmの砂粒含む)	-	外：にぶい黄褐10YR4/3 内：灰黄2.5Y7/2	
158	2002-03	縄文土器 深鉢	E	G35	包含層	-	体部 小片	外：条痕 内：条痕	やや粗 (~2mmの砂粒含む)	-	外：にぶい黄橙10YR6/3 内：にぶい黄橙10YR7/3	
159	2002-01	縄文土器 深鉢	A	-	包含層	-	体部 小片	外：ナデ 内：条痕	やや粗 (~4mmの小石含む)	-	外：灰黄褐10YR4/2 内：にぶい黄橙10YR6/4	繊維含有
160	2002-05	縄文土器 深鉢	E	F34	包含層	-	体部 小片	外：条痕、ナデ 内：条痕	やや粗 (~3mmの小石含む)	-	外：にぶい黄橙10YR5/3 内：にぶい黄橙10YR6/3	
161	2002-04	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	小片	外：キザミ、ナデ、オサエ 内：ナデ、条痕	やや粗 (~2mmの小石含む)	-	にぶい黄橙10YR6/4	繊維含有
162	2001-09	土師質土器 皿	E	-	包含層	底部径 4.5	底部 6/12	外：ナデ、底部糸切 内：ナデ	やや密 (~1mmの砂粒含む)	-	にぶい黄橙10YR7/3	
163	2001-06	土師質土器 皿	E	-	包含層	底部径 5.0	底部 6/12	外：ロクロナデ、底部糸切 内：ロクロナデ、ナデ	密 (~2mmの砂粒含む)	-	浅黄橙10YR8/3	
164	2001-01	土師器 皿	B	-	包含層	-	小片	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	密	-	にぶい黄橙10YR7/3	
165	2001-03	土師器 鍋	-	-	表土掘削	-	口縁部 小片	外：ナデ 内：ナデ	密	-	外：にぶい黄橙10YR7/3 内：にぶい橙5YR7/4	
166	2001-08	陶器 山茶碗	E	B38	攪乱	高台径 7.5	高台 7/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白2.5Y7/1	
167	2001-07	陶器 山茶碗	D	H30	包含層	高台径 7.0	高台 2/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰黄2.5Y7/2	
168	2001-04	陶器 山茶碗	D	H30	包含層	-	小片	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	-	灰白5Y7/1	
169	2001-05	土師器 甕	E	E36	包含層	-	口縁部 小片	外：ナデ 内：ナデ	やや粗 (~2mmの砂粒含む)	-	浅黄橙7.5YR8/4	
170	2001-02	青磁 碗	D	I27	包含層	-	小片	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	良	素地：浅黄2.5Y8/3 釉：灰白5Y7/2	
171	2002-07	鉄製品 鐵	D	I32	包含層	残存長 9.5	-	-	-	-	-	

第12表 第2次調査遺物観察表

V 東沖遺跡

1 基本層序

調査区の基本層序は、第1層耕作土、第2層盛土、粘質土（検出面：地山）である。深さは、現地表面から1.1m程下である。

2 検出遺構

東沖遺跡では、鎌倉時代～室町時代の掘立柱建物、土坑、墓、溝などを検出した。掘立柱建物は、3箇所にとまり、溝によって区画された屋敷地が並んでいる。屋敷地は、北側に遺構が密集し、南側は希薄である。南側は、水田造成時に削平され、さらに遺構は希薄になっている。なお、表土掘削の際に耕作土除去下で礫を確認した。礫は、遺構に伴うものか不明であったため、まとまりが確認できないものについては、除去した。遺構の中には礫を伴っていたものもあったのかもしれない。

(1) 掘立柱建物

掘立柱建物を27棟確認した。建物の時期は、12世紀後葉～15世紀前葉迄で、13世紀前葉～14世紀前葉迄の建物が大半を占める。掘立柱建物の規模は、①主屋と考えられる建物、②3間×2間の建物、③小規模な建物にわかれ、調査区北半部に集中する。

S B 281 桁行3間、梁行2間の側柱建物である。建物方向は、N 1° Eで、S B 295と同じである。面積は30.75㎡で、主屋と考えられる。当遺跡内でも規模の大きな建物である。S B 281は、S B 285より後出し、建物内土坑 S K 256を伴う。柱間は、桁行1.35+3.0+1.8m、1.35+2.85+1.95m、梁行2.5+2.75m、2.1+2.9mと不揃いである。柱穴からは、無釉陶器椀（以下、山茶椀と訳す）や土師器皿等が出土している。

S B 282 桁行3間、梁行2間の総柱建物である。建物方向は、N 1° Wで、面積は21.87㎡である。柱間は、桁行が1.8+1.5+2.1m、梁行は2.6+1.65mである。柱穴の一部は、S K 256により削平されている。柱穴からは、土師器小皿（8）や藤澤良祐氏の編年^①（以下藤澤編年と記す）第5型式の山茶椀が出土している。

S B 283 S B 281の西側で検出した桁行3間、梁行2間の総柱建物である。S B 285より先行する。建物

方向は、N 4° Eで、面積は19.98㎡である。柱間は、桁行が1.65+1.5+2.4m、梁行は1.5+2.1mである。柱穴からは、土師器鍋や藤澤編年第5型式の山茶椀（9）が出土している。

S B 284 桁行2間、梁行2間の総柱建物に1間分（1.2m）の庇がつく。建物方向は、N 6° E、面積は18.9㎡である。柱間は、桁行が2.1+1.95m、梁行は1.8mの等間である。庇と考えた1間分（1.2m）は、他より若干狭いため庇になると考える。しかし、桁行3間、梁行2間の総柱建物の可能性も残る。また、S B 284は、S K 259より新しく、S B 281の建物内土坑 S K 256より古い。柱穴からは、伊藤裕偉氏の編年^②（以下伊藤編年と記す）第1段階の土師器鍋や藤澤編年第5型式の山茶椀が出土している。

S B 285 桁行4間、梁行2間の総柱建物である。S B 285は、S B 283より後出し、S B 281より前出する。建物方向は、N 3° Eで、面積は32.37㎡である。また、調査区東側で検出した掘立柱建物の中で、一番規模が大きく、主屋となる建物である。柱間は、桁行が2.1+2.1+2.0+2.1m、梁行が1.95mの等間である。柱穴からは、伊藤編年第1段階b型式の土師器鍋（10）や山茶椀が出土している。

S B 286 S D 212の南側で検出した桁行3間、梁行2間の側柱建物である。建物方向は、N 8° Wで、面積は16.1㎡である。柱間は、桁行が1.75+2.1+1.5mと1.95+1.95+1.65m、梁行は1.5+2.4m、2.25+2.55mでいずれも不揃いであったが、一応建物とした。柱穴からは、土師器皿（11）、伊藤編年第1段階の土師器鍋や片口鉢が出土している。

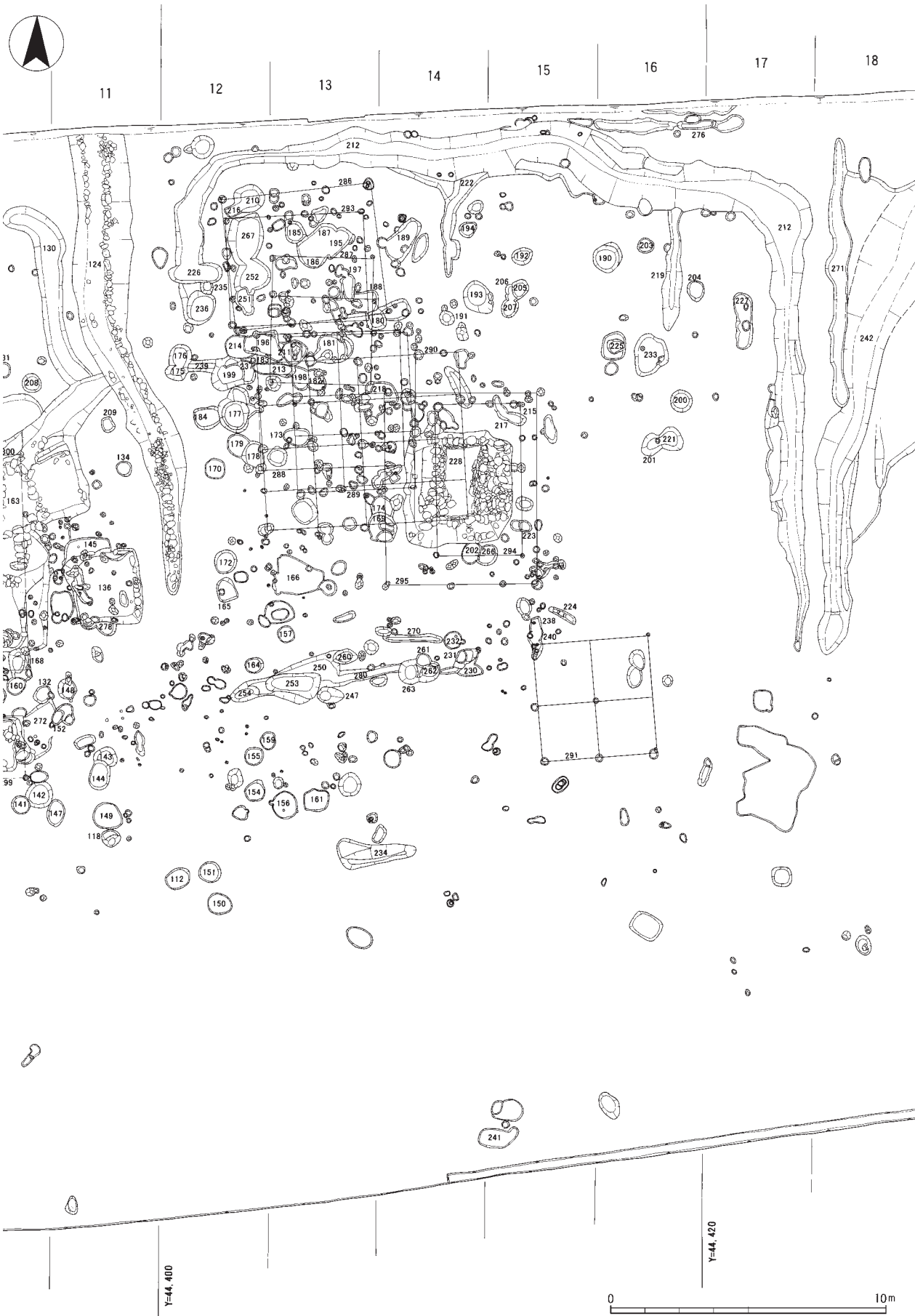
S B 287 桁行2間、梁行2間の側柱建物で、北側に1間分（1.5m）の庇がつく。建物方向は、N 1° Wで、面積は17.44㎡である。柱間は、桁行が3.15mと



第29図 遺構平面図①(1:200)



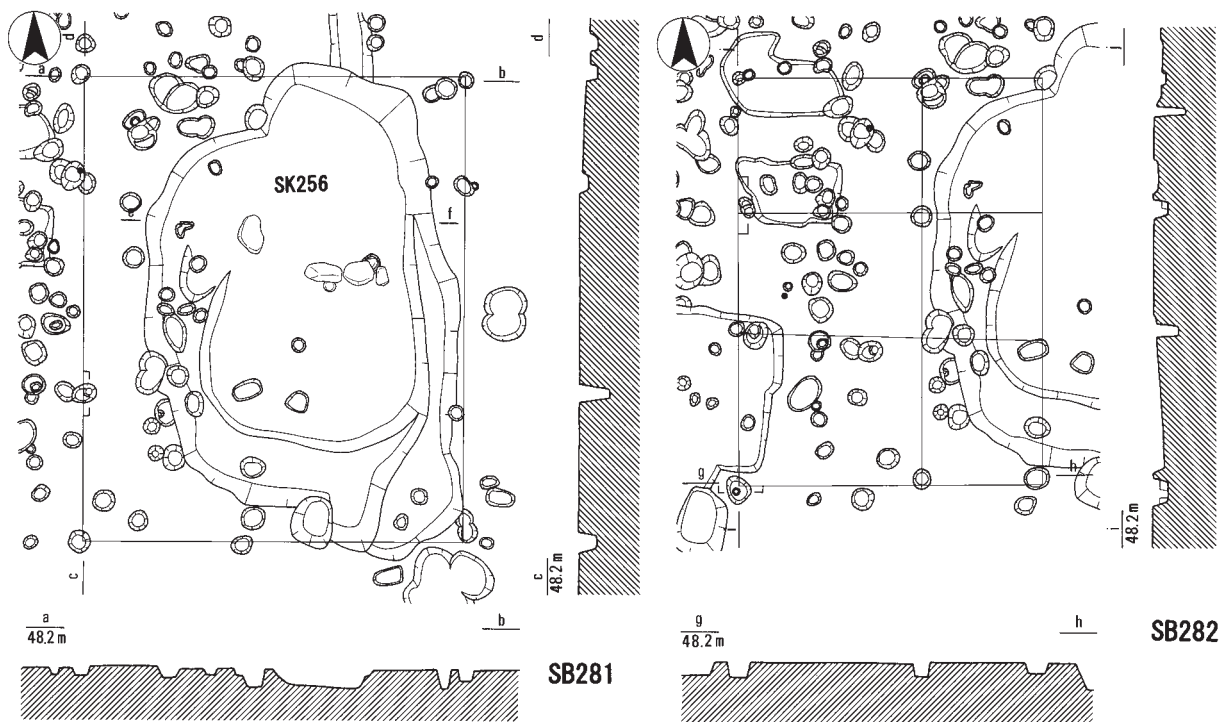
第30図 遺構平面図②(1:200)



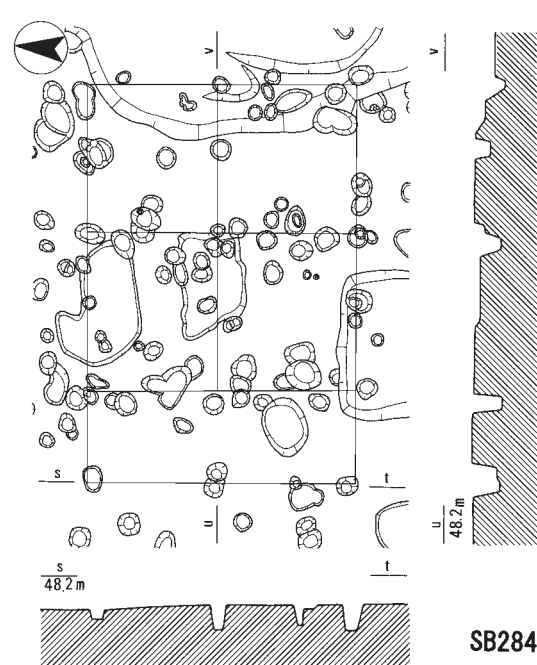
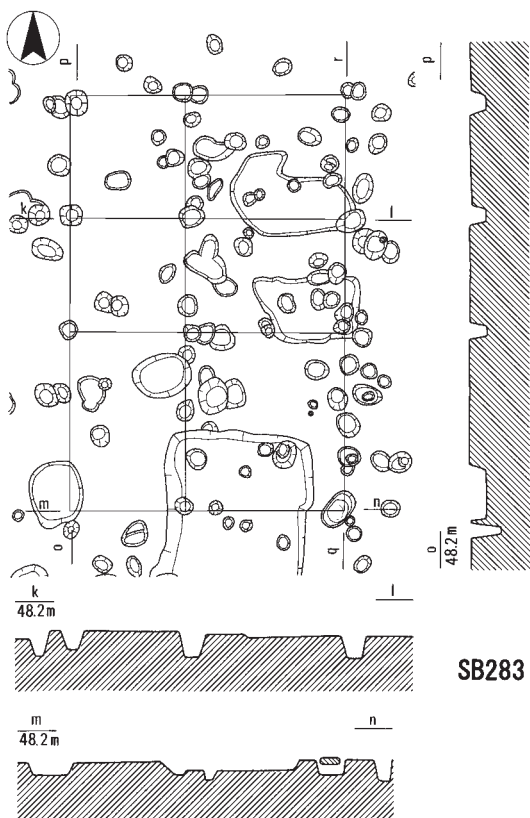
第31図 遺構平面図③(1:200)



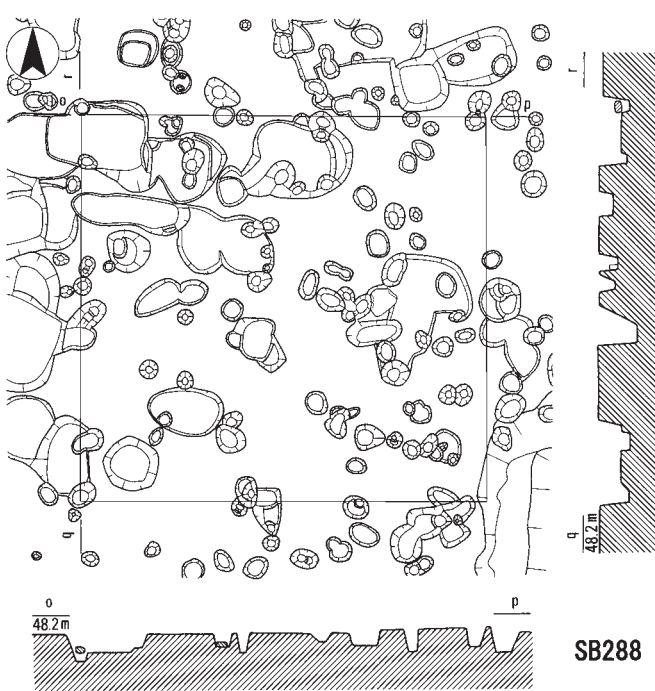
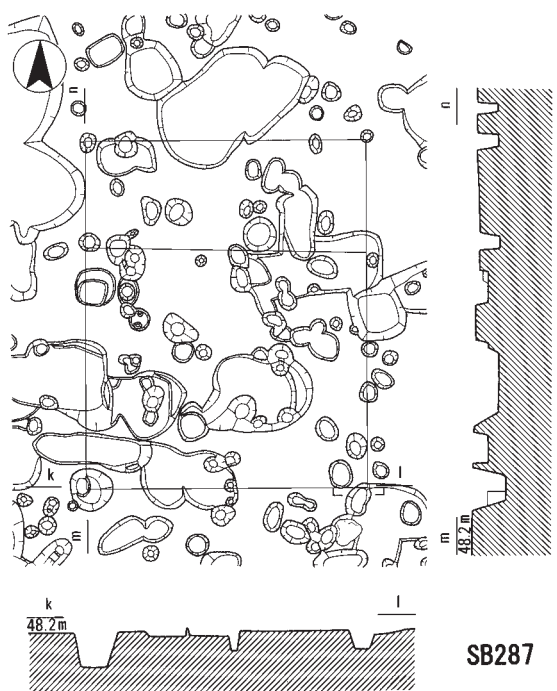
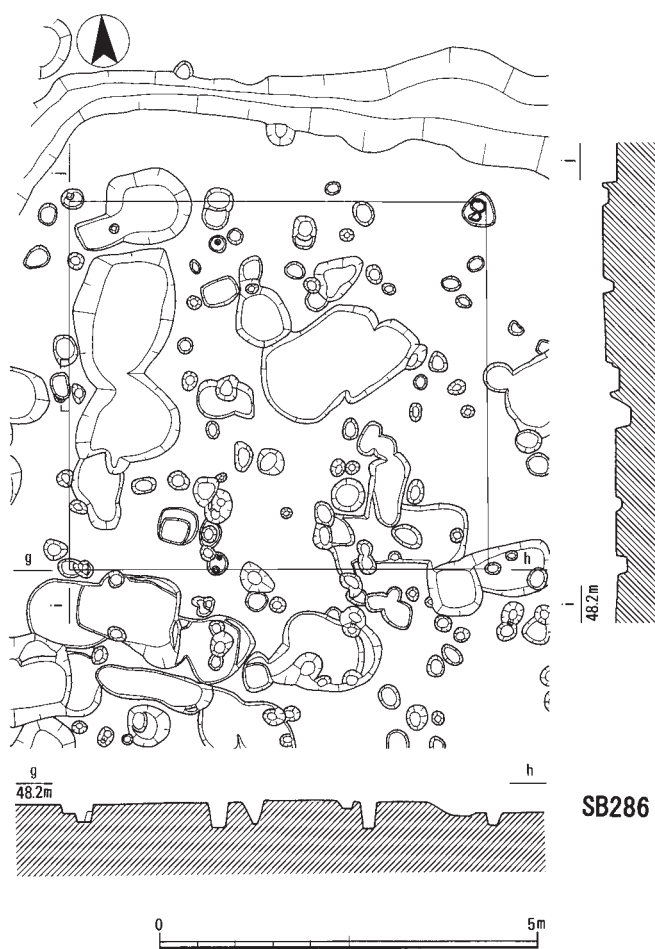
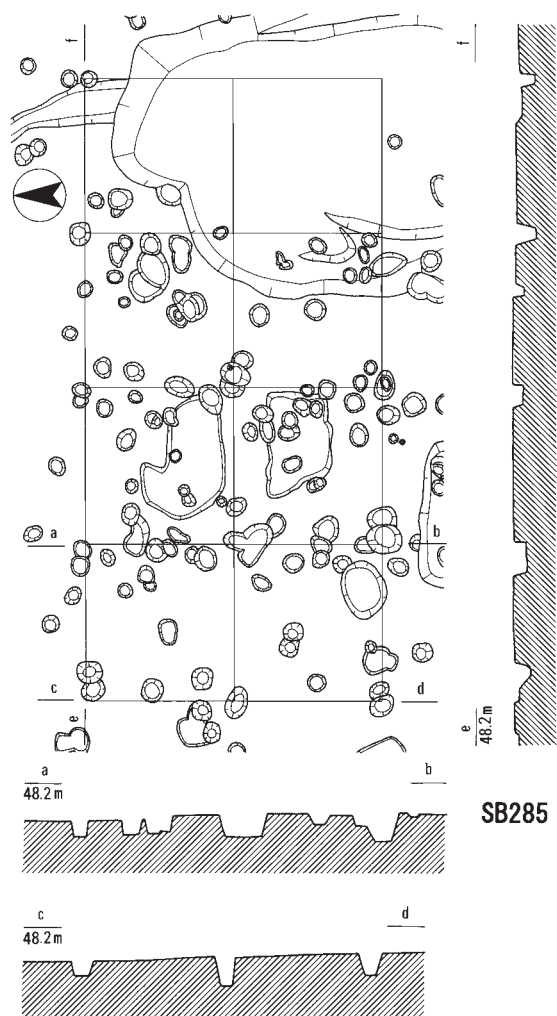
第32図 遺構平面図④(1:200)



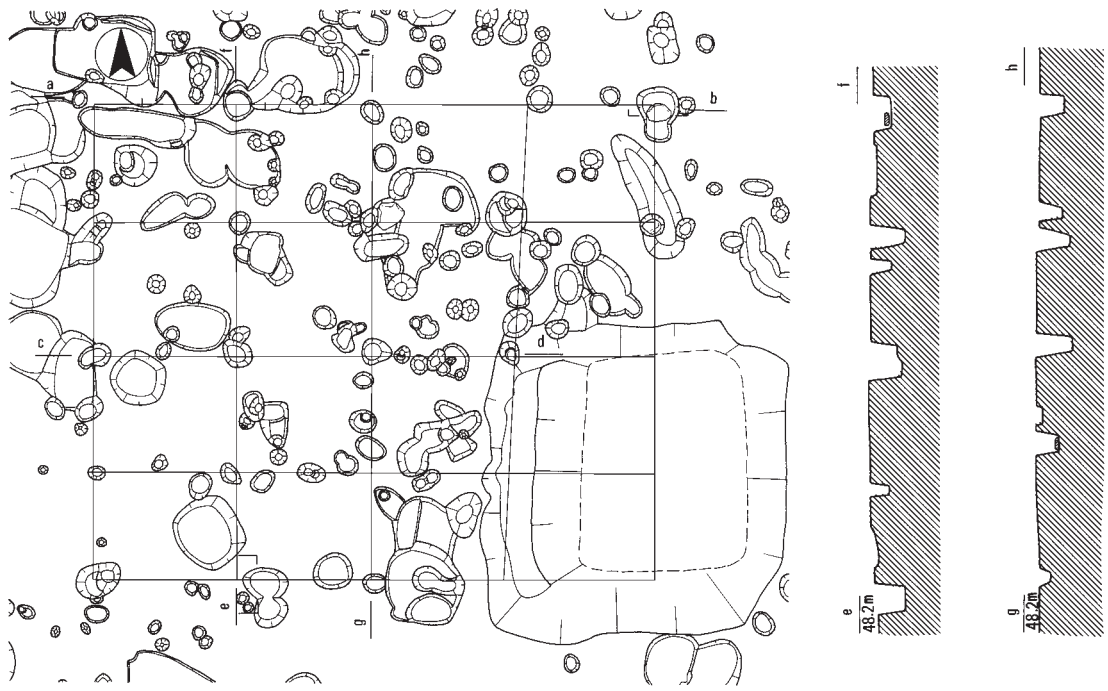
1. (SK256埋土) 5YR4/2 灰褐色土
2. (SK256埋土) 10YR5/3 にぶい黄褐色土に
2. 5Y8/4 淡黄色砂質土(地山)プロク含む
3. (SK256埋土) 7. 5YR5/4 にぶい褐色土
4. (Pit埋土) 7. 5YR4/2 灰褐色土(炭化物混じる)
5. (SK256埋土) 2. 5Y7/3 浅黄色砂質土
6. (SK256埋土) 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質土



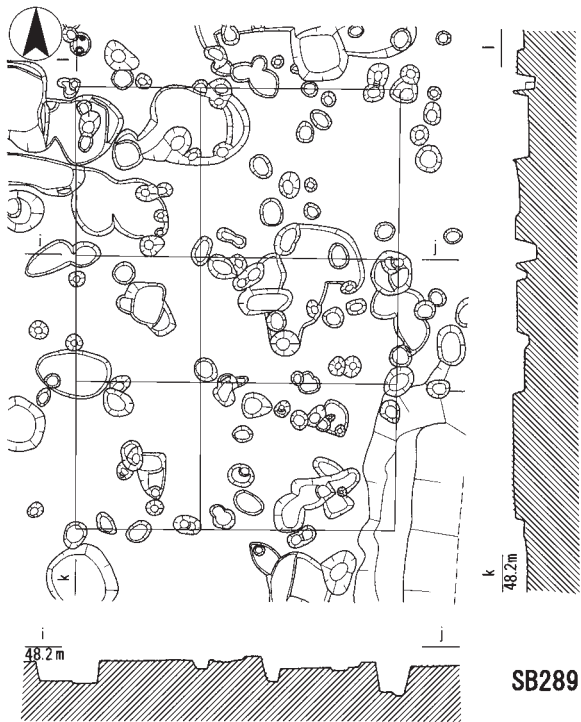
第34図 SB281・282・283・284平面図・断面図(1:100)



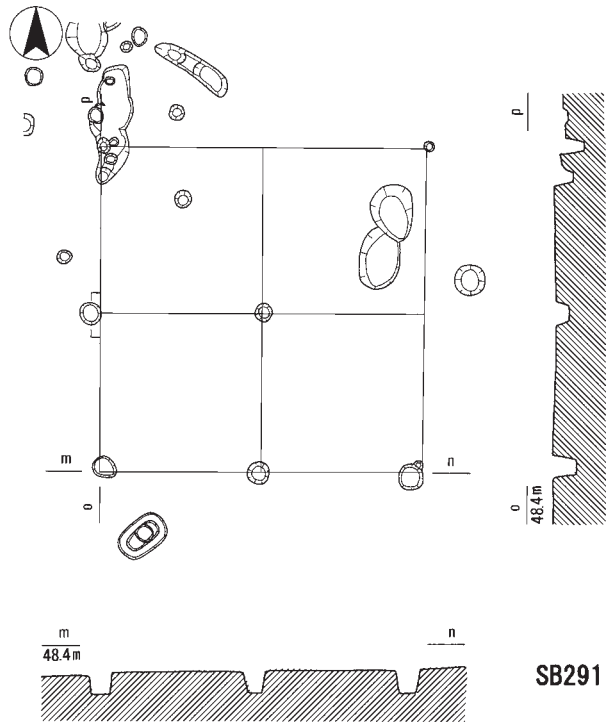
第35图 SB285·286·287·288平面图·断面图(1:100)



SB290

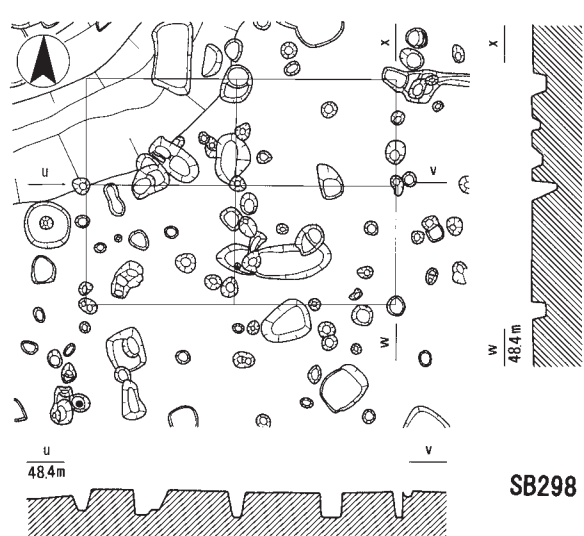
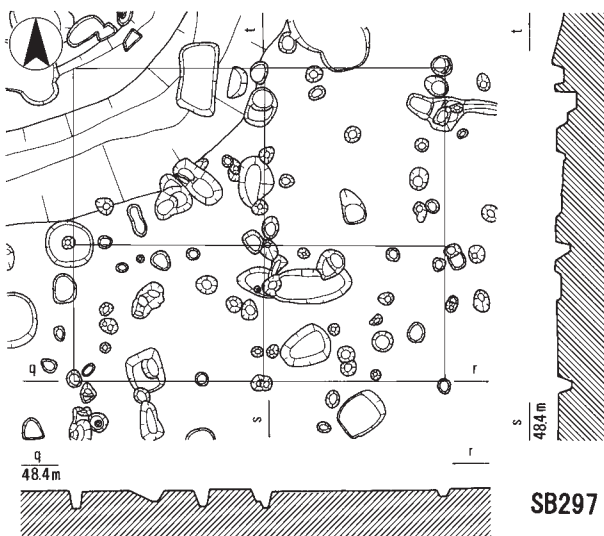
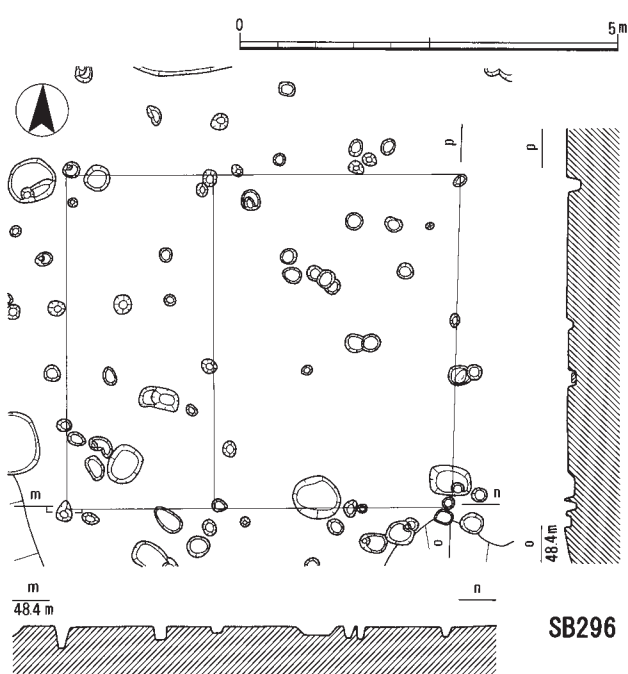
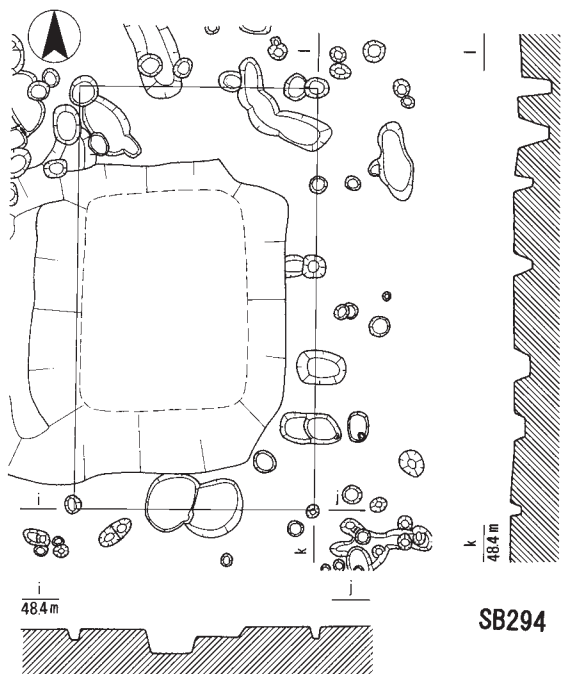
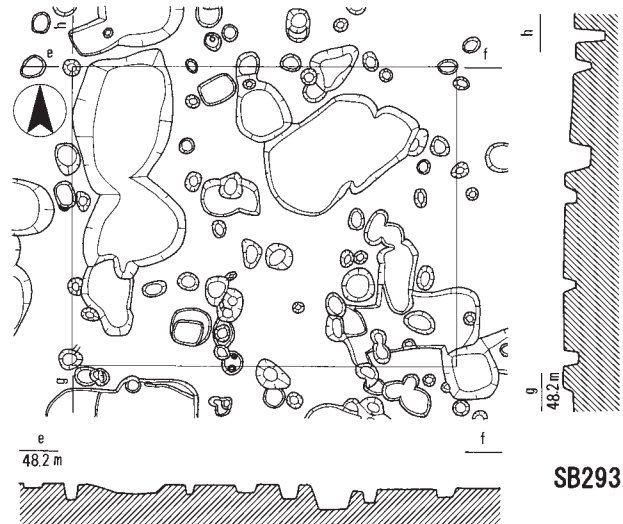
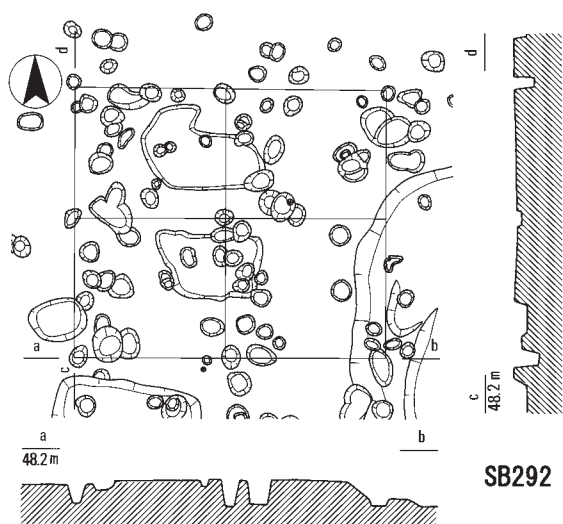


SB289



SB291

第36图 SB289·290·291平面图·断面图(1:100)



第37图 SB292·293·294·296·297·298平面图·断面图(1:100)

1.2+1.95m、梁行が1.5+1.8mである。柱穴からは、土師器皿が出土している。

S B 288 桁行3間、梁行2間の側柱建物である。建物方向は、N 2° Wで、面積は26.78㎡である。柱間は、桁行が2.1+1.65+1.5m、梁行が1.95+2.15mである。柱穴からは、藤澤編年第5型式の山茶碗等が出土している。

S B 289 桁行3間、梁行2間の総柱建物である。石積み土坑[®]S K 228 (S B 295) より後出する。建物方

向は、N 4° Wで、面積は24.86㎡である。柱間は、桁行が2.25+1.65+1.95m、梁行が1.65+2.1mである。柱穴からは、土師器鍋が出土している。

S B 290 調査区中程で検出した桁行4間、梁行4間の総柱建物である。建物方向は、N 2° Wで、面積は46.5㎡。当遺跡内で最大規模の建物であり、主屋となる建物である。柱間は、桁行が1.95+1.65+1.8+2.0m、梁行は1.5+1.8+1.5+1.4mである。柱穴と石積み土坑S K 228 (S B 295) との切り合い関係は不明で



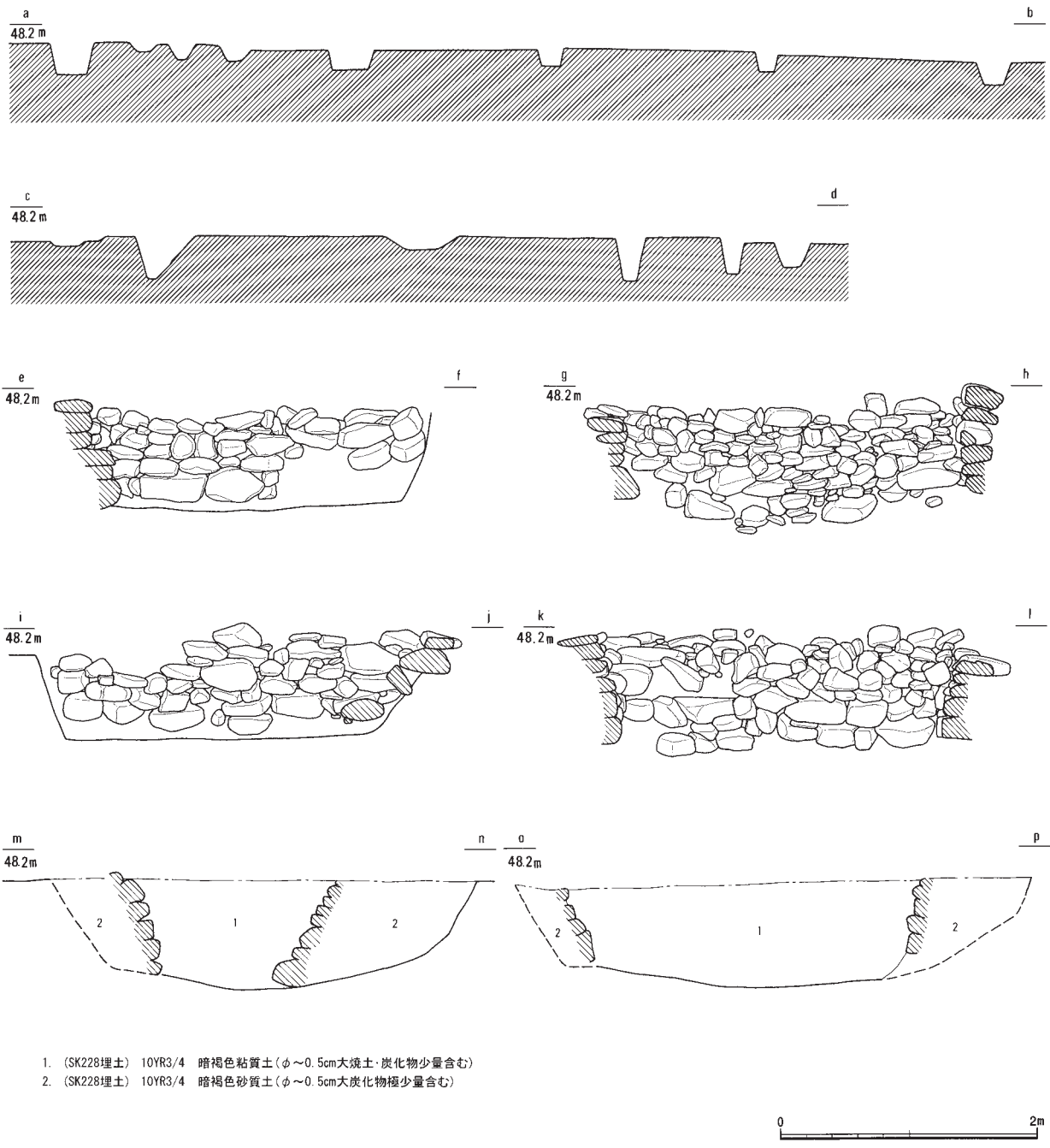
第38図 SB295平面図・断面図①(1:50)

ある。S B 289と一部柱穴が重複しており、時期は確定できない。柱穴からは、伊藤編年第3段階の土師器鍋が出土している。

S B 291 調査区南半部で検出した桁行2間、梁行2間の総柱建物である。周辺の建物とはやや離れた場所に位置する。建物方向は、N 6° Wで、面積は18.27㎡である。柱間は、桁行が2.25+2.1m、梁行が2.1mの等間である。柱穴からは、土師器鍋が出土している。

S B 292 桁行2間、梁行2間の総柱建物である。建物方向は、N 1° Wで、面積は14.38㎡とやや小規模な建物である。柱間は、桁行が1.95+2.1m、梁行が1.75+1.8mである。柱穴からは、土師器皿(27)や藤澤編年第6型式の山茶椀(28)が出土している。

S B 293 S D 212の南側で検出した桁行2間、梁行2間の側柱建物である。建物方向は、N 4° Wで、S B 298と同じ棟方向である。面積は19.7㎡である。柱間は、桁行が2.85+2.2mと2.65+2.4mで不揃い、梁



第39図 SB295平面図・断面図②(1:50)

行が1.2+2.7mであるが一応建物とした。柱穴からは、土師器皿(29)や山茶椀が出土している。

S B 294 桁行5間、梁行3間の側柱建物で、S B 295より新しい。建物方向は、N 1° Wで、面積は22.48㎡である。柱間は、桁行が1.2+1.2+1.2+0.9+1.05m、梁行が1.05+0.9+2.1mと、他の建物に比べて柱間が狭い。柱穴からは、土師器鍋(32)や山茶椀が出土している。

S B 295 桁行4間、梁行3間の側柱建物で、石積み土坑S K 228を伴う。建物方向は、N 1° Eで、面積は39.13㎡と規模が大きい。柱間は、桁行が1.65+1.65+2.1m、梁行が2.25+1.8+1.2mである。また、S B 295はS B 289・294より古い。

S K 228は、南西隅の礫が階段状に積まれ(写真図版27)、甕や壺類の出土が他の遺構より多いことから地下式貯蔵庫の可能性がある。S K 228の構築順は、掘形掘削後、北壁と南壁の礫を積んでから、東壁と西壁の礫を積んでいる。さらに、東壁は手前と奥の二重に礫が積まれ、途中で土坑の規模を縮小した可能性がある(写真図版28参照)。また、基底石から2段目の礫のレベルでは、床面全体に小礫が見られた。小礫は四方に積まれた石より小振りで、土坑を廃棄した際に投機したものとは考えにくい。調査時は、土坑に伴わないものと判断して除去したが、S K 228を縮小した際の床面であったかもしれない(写真図版28参照)。また、S K 228の埋土は、石組の内側で暗褐色粘質土、外側(堀形)では暗褐色砂質土と石組を境に異なっていた。

S K 228からは、多くの遺物が出土し、伊藤編年第1～4段階の土師器鍋や山茶椀など時期幅が広い。しかし、S K 228が使用されていた期間は、第3段階併行の羽釜(39)や古瀬戸後I期の平椀(46)、中野晴久氏の編年^④(以下中野編年と記す)8型式の常滑製品片口鉢(51)の時期、おおむね14世紀中葉～15世紀前葉までの範疇であろう。また、S K 228の規模が縮小されているならば、前段階の伊藤編年第2段階の土師器鍋や羽釜等の時期、13世紀後葉～14世紀前葉まで範疇に入るのかもしれない。埋土中の最新の遺物は、伊藤編年第4段階c型式(37)の土師器鍋で、この頃に最終埋没したと考えられる。また、柱穴からは、伊藤編年第1段階の土師器鍋や藤澤編

年第7型式の山茶椀が出土している。

S B 296 S D 75の東側で検出した桁行2間、梁行2間の側柱建物で、西側に1間分(1.95m)の庇がつく。建物方向は、N 6° Wで、面積は13.7㎡である。柱間は、桁行が2.7+1.65m、梁行が1.8+1.35mである。ここでは、総柱建物の可能性も残るものの、柱穴が不足しているため側柱建物として報告する。柱穴から土師器片が出土している。

S B 297 桁行2間、梁行2間の総柱建物で、建物方向は、N 6° W、面積は17.82㎡である。柱間は、桁行が2.55+2.4m、梁行が2.2+1.8mである。切り合い関係から、S D 75より古い遺構である。柱穴は小さいが、一応建物とした。柱穴からは、伊藤編年第2段階の土師器鍋が出土している。出土遺物の時期から、S B 298を建て替えた建物と思われる。

S B 298 S D 75の東側で検出した桁行2間、梁行2間の側柱建物である。建物方向は、N 4° Wで、面積は11.54㎡と狭小な建物である。切り合い関係から、溝S D 75より古い。非常に小規模ではあるものの、一応建物とした。柱間は、桁行が1.95+2.1m、梁行が1.35+1.5mである。柱穴から山茶椀が出土している。出土遺物の時期から、S B 297に先行する建物と思われる。

S B 299 桁行が2間、梁行は1間の建物で、石組遺構S K 120を伴う。覆屋のような建物であったと思われる。建物方向は、N 3° Wで、S B 300と棟方向が同じである。面積は8.1㎡と狭小である。柱間は、桁行が2.1+1.5m、梁行が2.25mである。

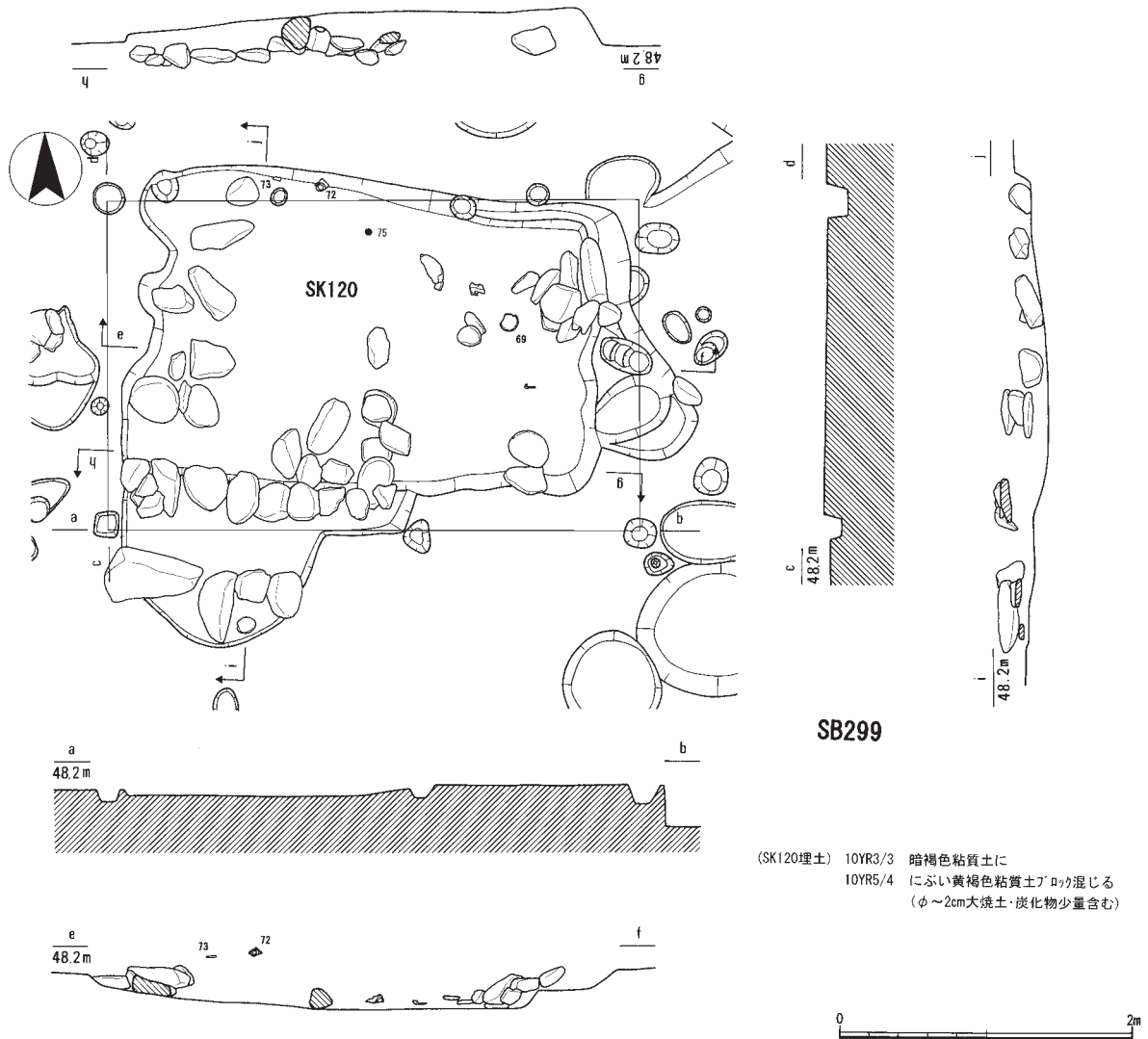
S K 120は、南側で部分的に礫が1段分程残る。礫は、一部基底石と思われるものもあるが、残りが悪いいため全体の様相は不明である。S K 120からは、伊藤編年第2段階の土師器鍋や青磁椀(72)等が出土している。柱穴からも青磁椀や山茶椀等が出土している。

S B 300 S D 124の西側で検出した桁行4間、梁行2間の建物で、石組遺構S K 121・162・163を伴う。S B 299やS B 305のように石組遺構^⑤に伴う覆屋のような建物であったと思われる。建物方向はN 3° Wで、S B 299・305と棟方向が同じである。面積は23.4㎡である。柱間は、桁行が2.25+1.8+1.5+2.25mと2.25+1.9+1.8+1.95mと不揃いで、梁行は1.5mの

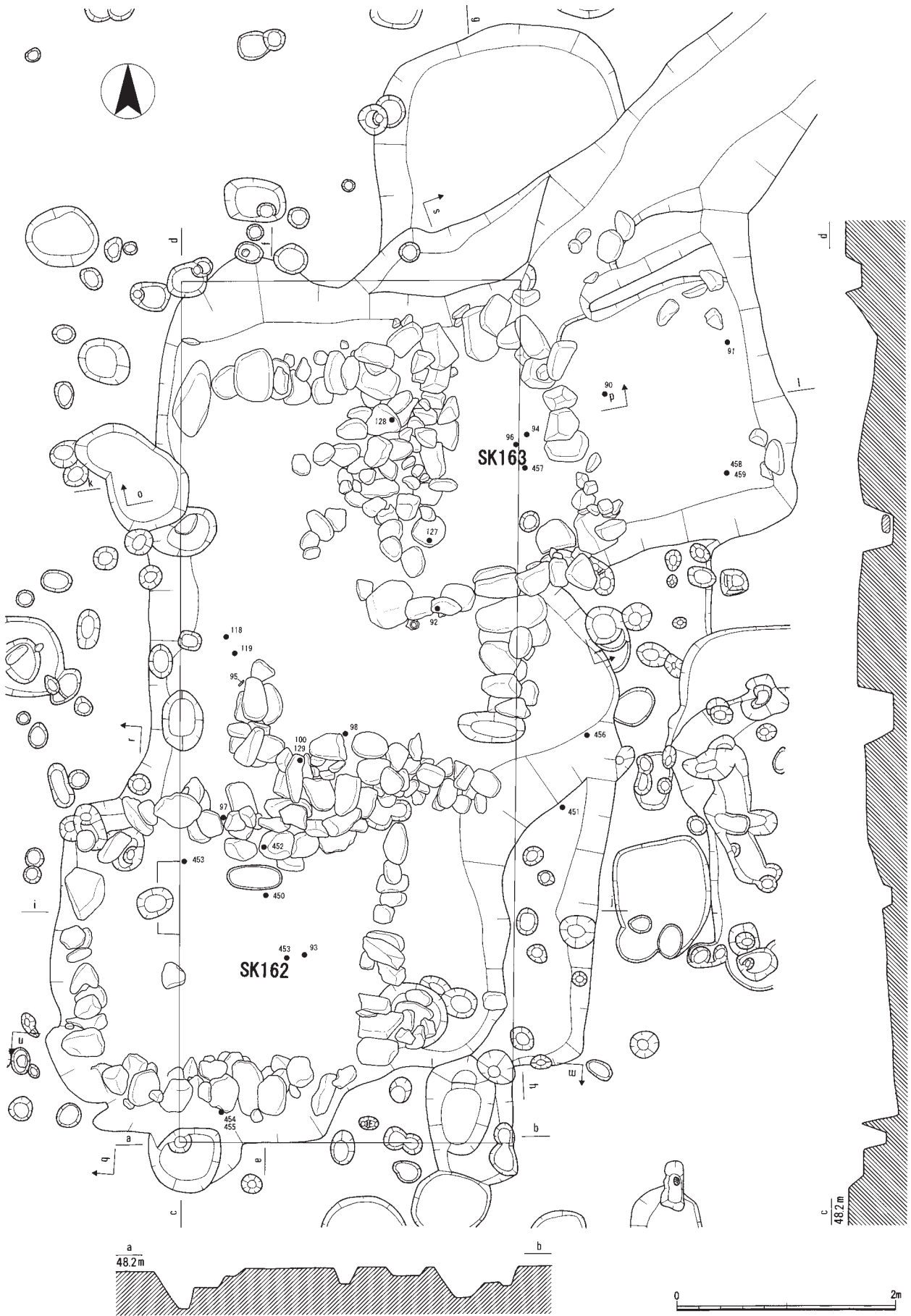
等間である。また、S B300は、S B307より先行する建物である。

S K121・162・163は、長方形の土坑が重なりあったようないびつな形で、検出時は切り合い関係がわからなかった。掘削当初は、S K121として遺構番号を付与した。しかし、掘削が進むにつれて、土坑内に長方形に残る石組を2箇所確認し、土層の観察と石組の出土状況から礫の途切れる場所を境にS K162とS K163にわけた。さらに、埋土の状況からS K163が後出すると判断した。しかし、報告段階で再考すると、2基ではなく、3ないしは4基の石組遺構（土坑）が重なっていると思われる。また、石組遺構からは、鉄滓が11点、鉄製品が15点出土してお

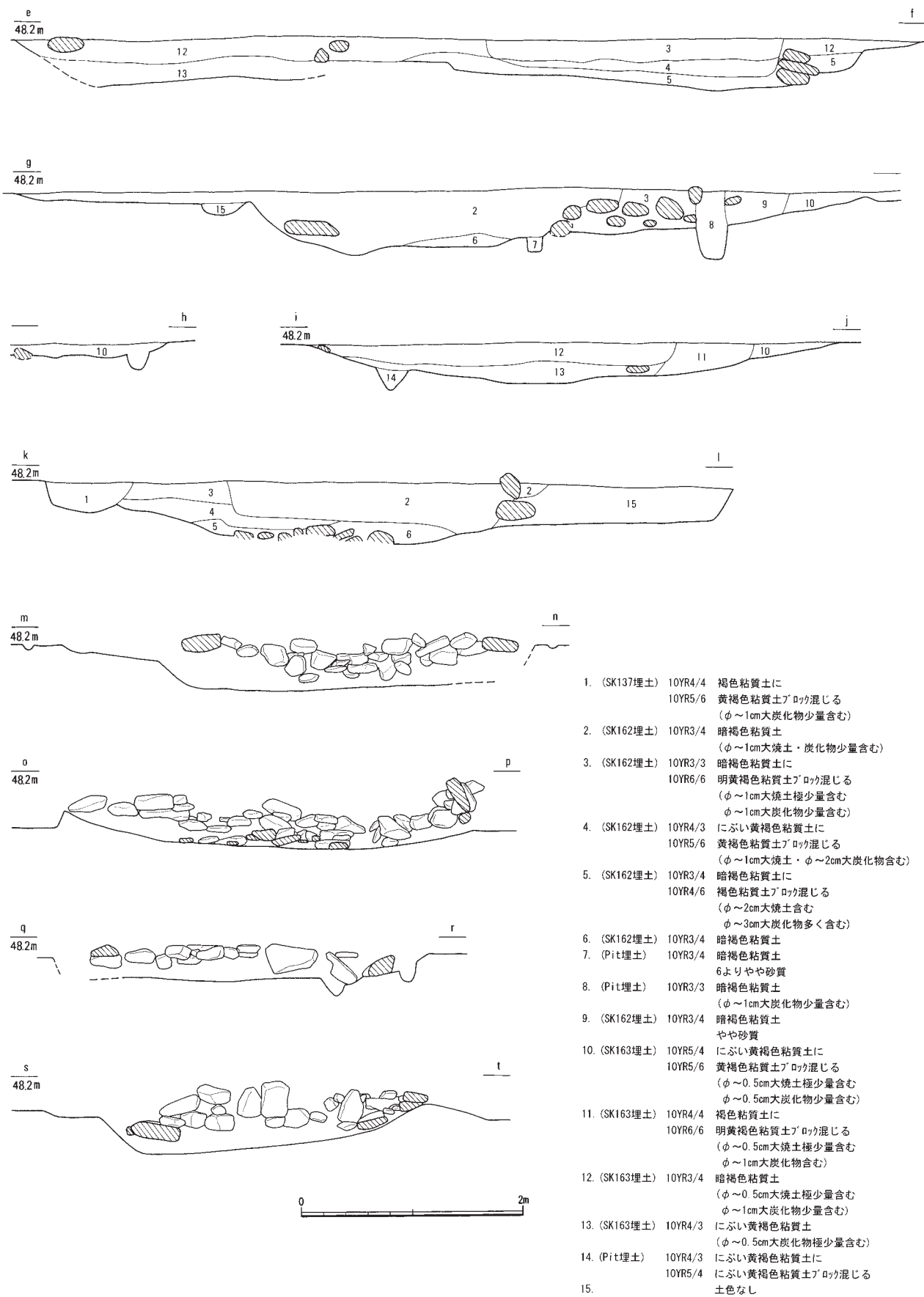
り、遺跡内で鉄関連遺物の出土数が最も多い。そして、これら鉄関連遺物や石組遺構の形状等、関連性を検討しても、石組遺構の性格は判然としない。また、調査時に出土遺物を9ブロックに分けて取上げたが、遺物の時期差はほとんどみられなかった。これらは、同時期に存在していた、もしくはほとんど時期をおかずして、使用されていたかと思われる。柱穴からは、伊藤編年第2段階頃の土師器鍋（77）や山茶椀が、石組遺構からは、伊藤編年第2段階c型式の土師器鍋や常滑製品甕（124）、火打金（92・93）等が出土している。おそらく、S K121・162・163が使用されていた期間は、13世紀前葉～14世紀前葉の範疇であろう。最新の遺物は、伊藤編年第2段階c



第40図 SB299平面図・断面図(1:50)



第41图 SB300平面图·断面图①(1:50)



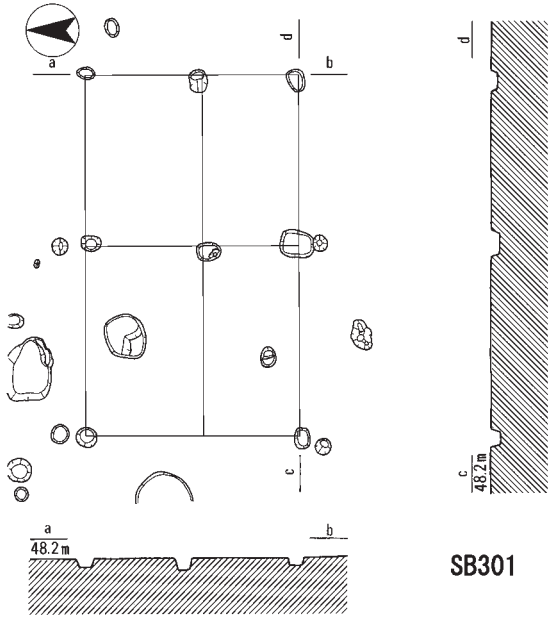
第42図 SB300平面図・断面図②(1:50)

型式の土師器鍋である。

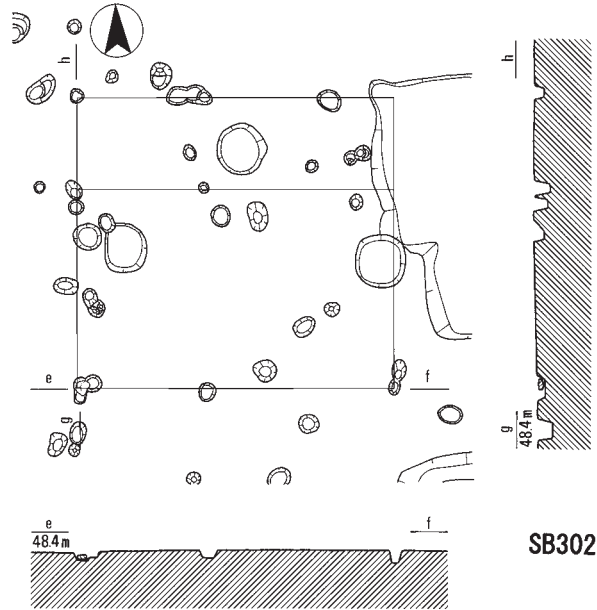
S B 301 S B 299の南側で検出した桁行2間、梁行2間の総柱建物である。S B 301は、掘立柱建物の南限となっている。建物方向は、N 0° Sで、面積は13.44㎡と小規模な建物である。柱間は、桁行が

2.55+2.25m、梁行は1.55+1.25mである。柱穴からは伊藤編年第1～2段階の土師器鍋や藤澤編年第5型式の山茶椀が出土している。

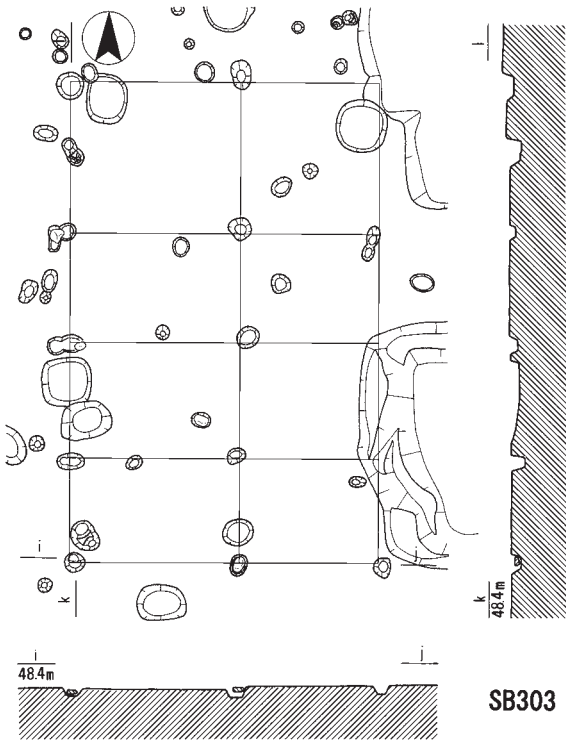
S B 302 桁行2間、梁行1間の側柱建物で、北側に1間分(1.2m)の底がつく。建物方向は、N 1° W



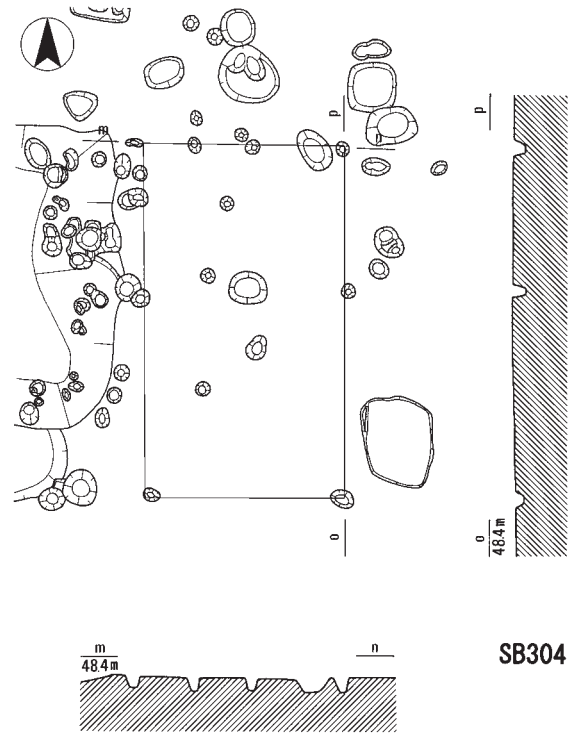
SB301



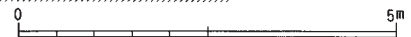
SB302



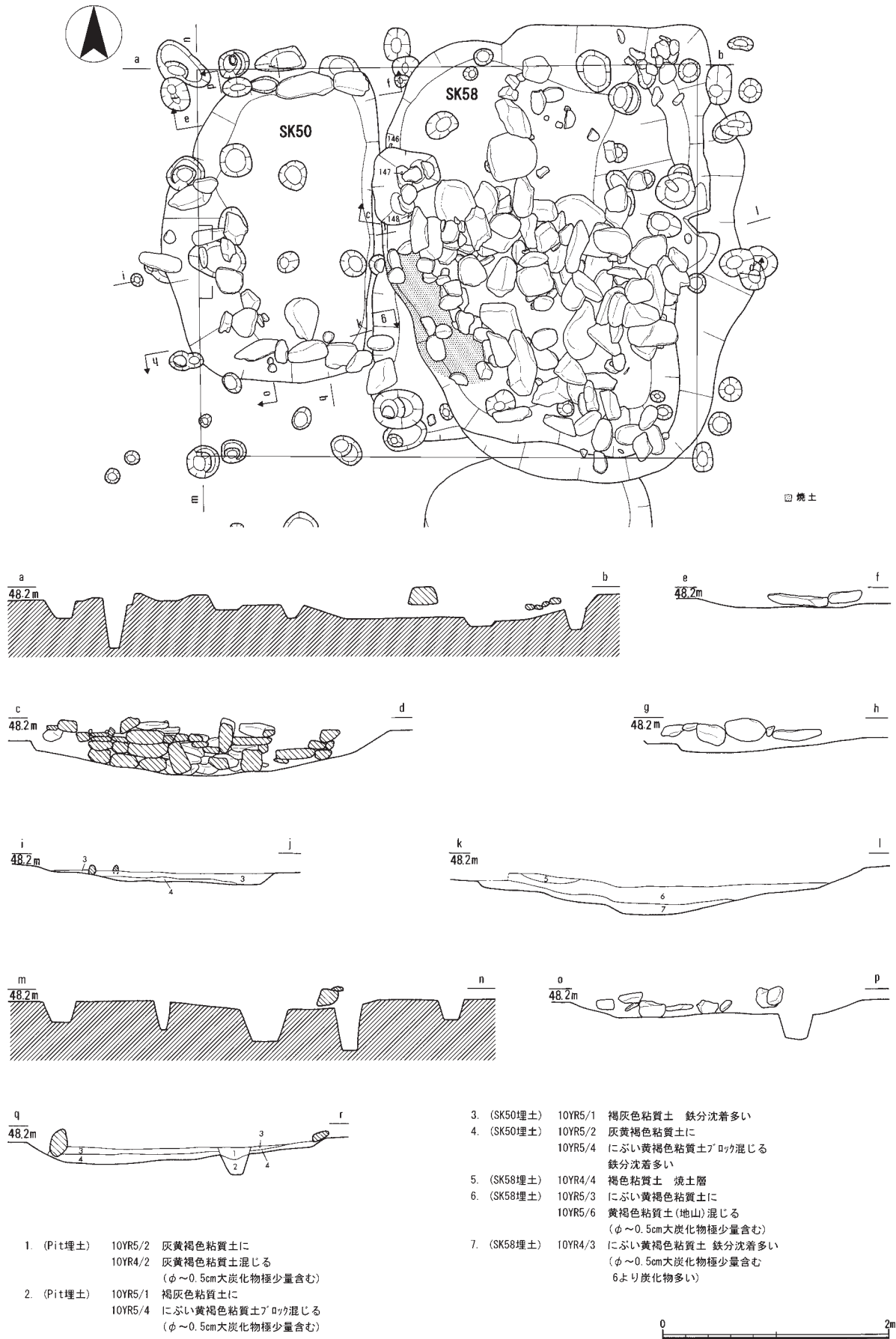
SB303



SB304



第43図 SB301・302・303・304平面図・断面図(1:100)



第44図 SB305平面図・断面図(1:50)

で、S B306と棟方向が同じである。面積は11.34㎡で、柱間は、桁行が1.8+2.4m、梁行が2.7mである。柱穴からは、山茶椀片が出土している。

S B303 桁行4間、梁行2間の総柱建物である。柱穴の切り合いから、S B302より新しい建物である。建物方向は、N 2° W、面積は25.72㎡である。西側で確認した建物の中で最も規模が大きく、主屋となる建物である。また、東側に隣接するS K65との切り合い関係はわからない。柱間は、桁行が2.0+1.5+1.5+1.85m、梁行は2.25+1.8mである。柱穴から土師器皿が出土している。

S B304 桁行2間、梁行2間の側柱建物で、S B305より後出する。建物方向は、N 4° Wで、面積は12.09㎡と小規模な建物である。柱間は、桁行が1.95+2.7m、梁行が1.4+1.2mである。柱穴から土師器皿が出土している。

S B305 桁行3間、梁行2間の建物で、石組遺構S K50・58の覆い屋と考えられる。S B305は、S B304・306より先行する建物である。建物方向は、N 3° Wで、面積は14.79㎡である。建物の中では、小規模な建物の部類に入る。柱間は、桁行が1.35+2.1+0.9mと1.2+3.15mの不揃い、梁行が1.65+1.8mである。

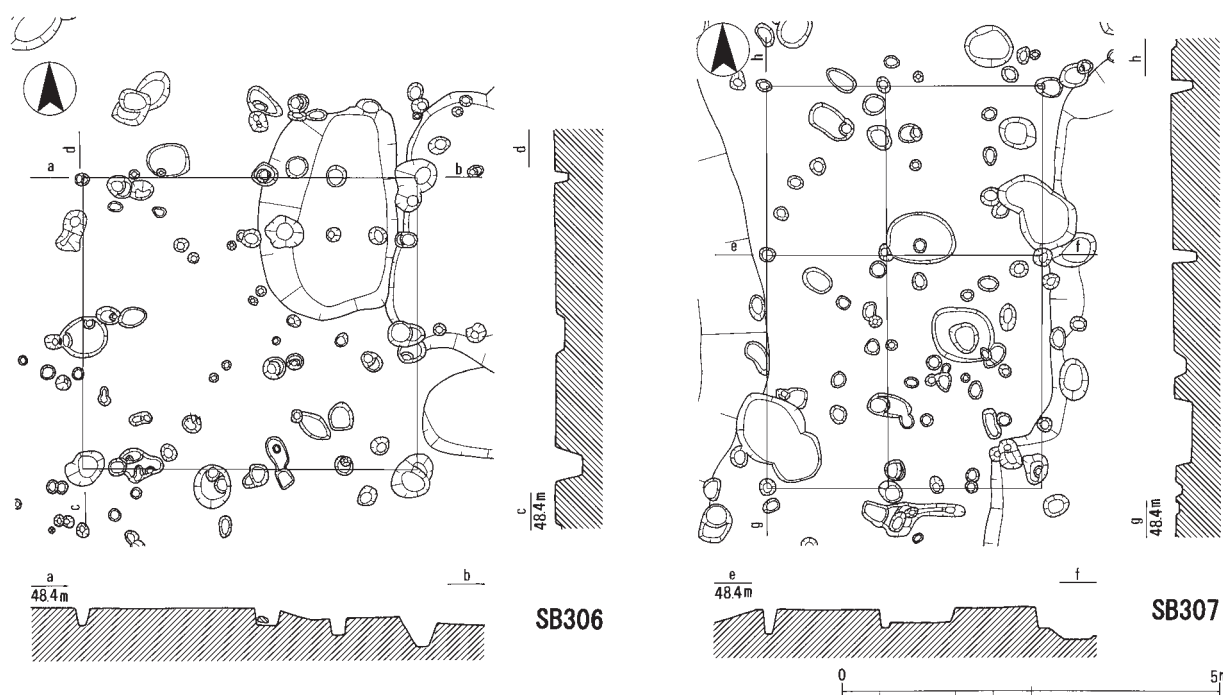
S K50は、基底石と思われる石が北側と西側の一部に残る。南側は、底より浮いた状態で残っていた。

S K58は、南半部に石が集中し、断面図を作成した箇所では、丁寧に石を積んでいるように見える。しかし、全体的には乱雑で、積まれたというよりも積んであったものを廃棄したと考えられる。また、S K58の南西隅には、焼土が堆積していた。焼土と礫との関連性を検討したものの、現段階では何とも言えない。

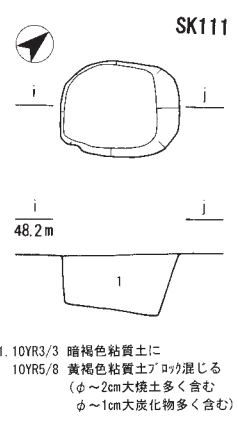
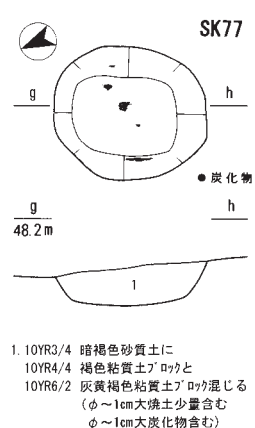
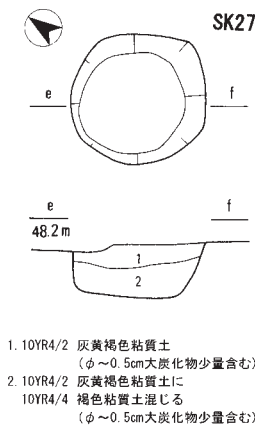
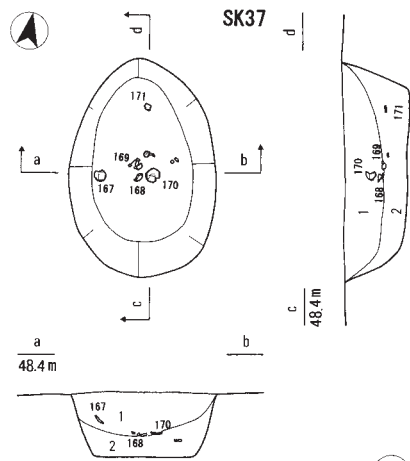
そして、S K50とS K58は、切り合い関係からS K50が先行する。そのため、S K50・58は別遺構として番号を付与した。しかし、出土遺物に時期差はなく、同時期ないしは、近接した時期に使用されたのであろう。また、S K58より後出するS K98は、S K50・58と関連性があるかは不明である。

S K50・58からは、常滑製品甕、青磁皿（144）や銭貨（145）などが出土している。使用された期間は、13世紀中葉～14世紀中葉の範疇であろう。最新の遺物は、伊藤編年第2段階c型式頃の土師器鍋（138）である。柱穴からは、土師器鍋小片や山茶椀等が出土している。

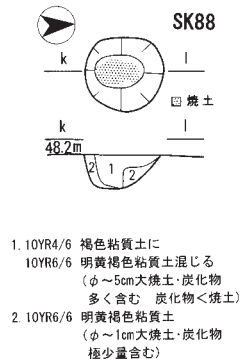
S B306 調査区西端で検出した桁行2間、梁行2間の側柱建物である。切り合いから、S B305より後出



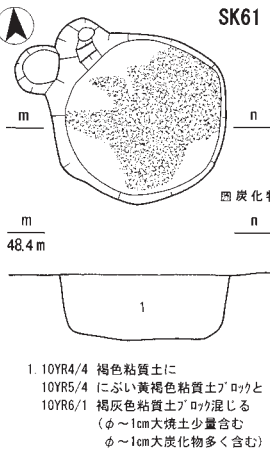
第45図 SB306・307平面図・断面図(1:100)



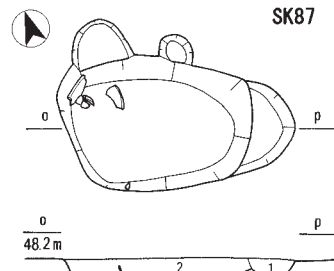
1. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土に
10YR5/6 黄褐色粘質土がロクと
10YR5/1 褐灰色粘質土がロク混じる
(φ~0.5cm大焼土極少量含む
φ~2cm大炭化物少量含む)
2. 10YR4/4 褐色粘質土に
10YR5/6 黄褐色粘質土がロクと
10YR5/1 褐灰色粘質土がロク混じる
(φ~0.5cm大焼土少量含む
φ~0.5cm大炭化物少量含む)



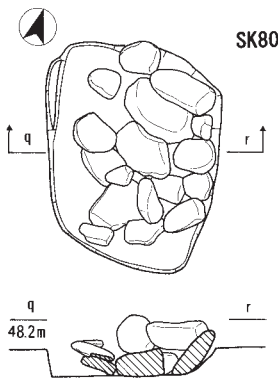
1. 10YR4/6 褐色粘質土に
10YR6/6 明黄褐色粘質土混じる
(φ~5cm大焼土・炭化物
多く含む 炭化物<焼土)
2. 10YR6/6 明黄褐色粘質土
(φ~1cm大焼土・炭化物
極少量含む)



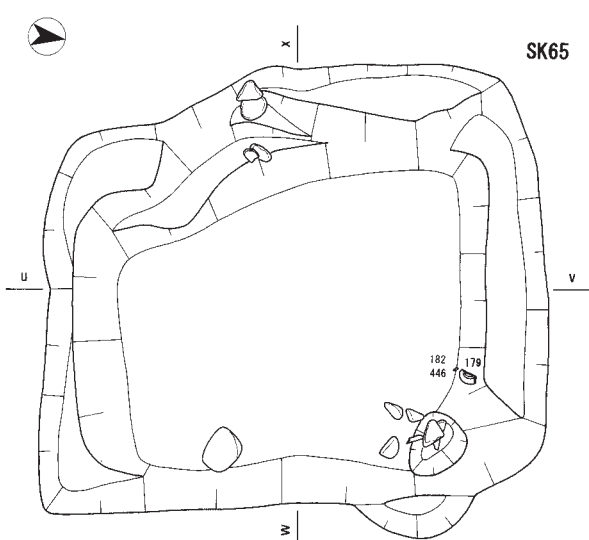
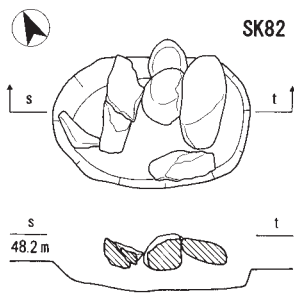
1. 10YR4/4 褐色粘質土に
10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土がロクと
10YR6/1 褐灰色粘質土がロク混じる
(φ~1cm大焼土少量含む
φ~1cm大炭化物多く含む)



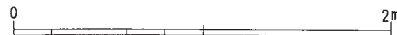
1. (Pit埋土) 10YR3/4 暗褐色粘質土に
10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土
がロク混じる
2. (SK87埋土) 10YR3/3 暗褐色粘質土に
10YR4/4 褐色粘質土混じる
(φ~1cm大炭化物少量含む)



1. 10YR3/3 暗褐色粘質土に
10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土混じる



1. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土に
10YR4/4 褐色粘質土がロク混じる
(φ~1cm大焼土少量含む
φ~0.5cm大炭化物多く含む)
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土に
10YR4/4 褐色粘質土がロク混じる
(φ~0.5cm大焼土極少量含む
φ~0.5cm大炭化物含む)
がロクは斑土状で1より多い
3. 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土に
10YR6/6 明黄褐色粘質土がロク混じる



第46図 SK27・37・61・65・77・80・82・87・88・111平面図・断面図(1:40、SK65は1:50)

する建物である。建物方向は、N 2° Wで、S B 303と棟方向が同じである。面積は16.5㎡。柱間は、桁行が2.3+2.1m、梁行が2.1+1.65mである。柱穴からは、伊藤編年第2段階の土師器鍋が出土している。

S B 307 S D 75とS B 300の間で検出した桁行2間、梁行2間の総柱建物である。建物方向は、N 3° Wで、S B 300と棟方向が同じである。面積は19.26㎡。柱間は、桁行が2.25+3.1m、梁行が1.65+1.95mである。S B 307は、切り合い関係からS B 300より後出する。柱穴からは、伊藤編年第2段階の土師器鍋が出土している。

(2) 土坑

土坑を279基確認した。土坑は、小規模なものが多い。これは、調査開始時から遺構の性格（当初は、土坑墓と想定）や報告書を考慮に入れ、遺物の有無に関わらず、一律、遺構番号を付与したためである。

また、土坑の性格を検討するために、埋土の堆積や含有物の量を極力記録した。埋土の状況は、次の2×4種類の組み合わせが見られた。①単一層埋土、②複数層埋土、(a) 焼土を含む、(b) 炭化物を含む、(c) 焼土、炭化物を含む。(d) 焼土、炭化物を含まない。遺構埋土の大半は、単一層埋土であった。そして、これら埋土の差をもとに、遺構の性格を解明するため、自然科学分析及び鍛造剥片の確認を行った。詳細は第4節を参照していただきたい。以下、主だった土坑と焼土や炭化物を多く含んでいた土坑のみ報告する。その他については、第13～22表遺構一覧表を参照していただきたい。

S K 27 調査区の西端で検出した径0.7m、深さ0.24mの円形をした土坑である。埋土は、灰黄褐色粘質土で2層に分層できた。埋土から土師質土器（ロクロ土師器）小皿や伊藤編年（仮）A段階の土師器甕（161）が出土している。当遺跡内でも古い時期の遺構である。

S K 37 調査区北東で検出した。長さ1.14m、幅0.76m、深さ0.34mの楕円形をした土坑である。土層1層下部からは、土師器小皿（167～171）が複数枚出土した。S K 37を掘削中、2層から遺物は出土していない。

S K 61 S D 75の西側で検出した土坑である。長さ0.92m、幅0.87m、深さ0.39m楕円形をしている。埋土は、褐色粘質土で、炭化物を多く含んでいた。そ

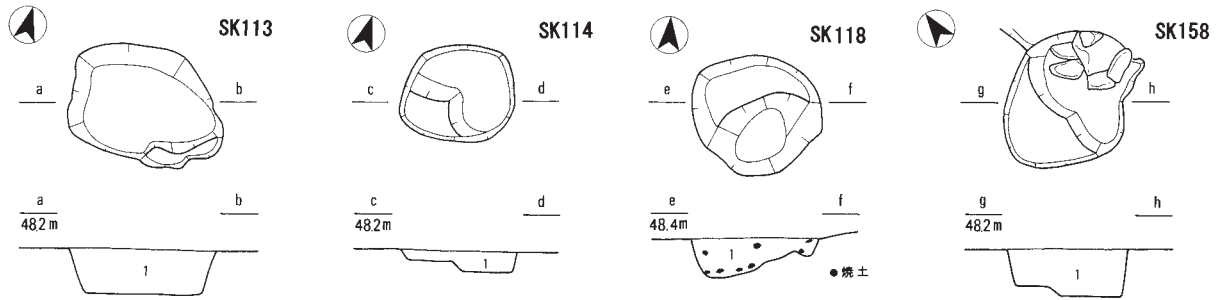
して、底には、炭化物が薄く広がっていた。しかし、壁面や底に被熱した痕跡は確認していない。埋土から、伊藤編年第2～3段階の土師器鍋や山茶碗が出土している。

S K 65 S D 75の西側で検出した最も深い土坑である。長さ3.32m、幅2.94m、深さ0.57mの隅丸方形を呈している。壁面や底の一部では、礫を確認した。しかし、小数で散在している状態であったため、土坑に伴うものかはわからない。また、土層の観察時に礫を抜き取ったような痕跡も確認できなかった。埋土は、ブロック状の塊が多く含まれ、埋没まであまり時間がなかったことがわかっている。そして、土層1層では、炭化物を多く確認した。S K 65は、規模や埋土の状況から他の土坑とは性格が異なっていると考える。しかし、用途はわからない。埋土からは、伊藤編年第2～3段階の土師器鍋（176～178）や常滑製品甕、釘（182）、砥石（183）等が出土している。

S K 77 調査区北東隅で検出した長さ0.87m、幅0.68m、深さ0.18mの楕円形をした土坑である。東壁、西壁、底の一部に炭化物が少量残存していた。被熱した痕跡はなく、底に炭化物が残存していたことから、S K 61と同じような土坑になると考える。埋土からは、土師器鍋小片が出土している。

S K 80 S B 303の南で検出した長さ1.19m、幅0.93m、深さ0.18mの隅丸方形をした土坑である。土坑内には、礫が残存していた。礫は30cm程の大きさで、北壁と東壁は壁面に沿って並んでいるように見える。しかし、全体的には規則性は見られない。後述するS X 99のような礫で覆われた墓の可能性も考えられるが、副葬品と考えられるような遺物も出土していないことから墓とは断定できない。ここでは土坑として報告する。埋土からは、土師器鍋や藤澤編年第4型式の山茶碗が出土している。

S K 82 S K 80の東隣で検出した。長さ1.04m、幅0.7m、深さ0.12mの楕円形を呈した土坑である。土坑内には、底より浮いた状態で礫が置かれていた。S K 80より規模は小さいものの、礫が出土していることから、同じような性格の遺構と思われる。埋土から土師器小皿（192・193）や藤澤編年第6型式の山茶碗が出土している。

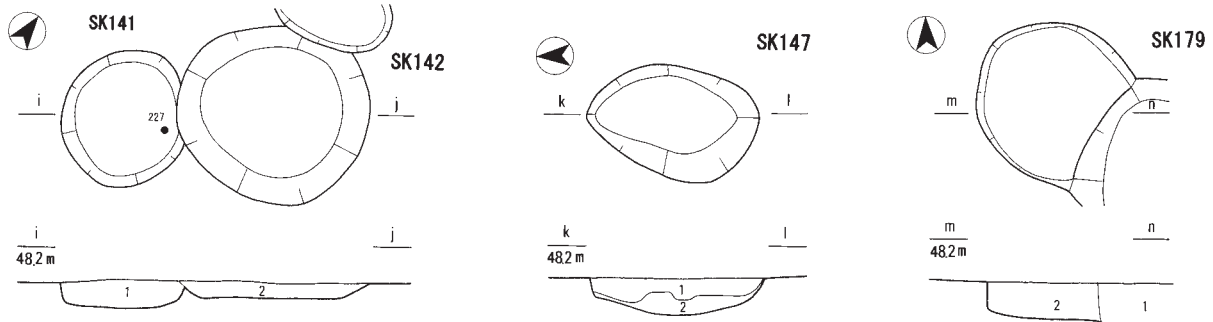


1. 10YR4/4 褐色粘質土に
10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土混じる
(ϕ ~5cm大焼土多く含む
 ϕ ~2cm大炭化物含む)

1. 10YR4/4 褐色粘質土に
10YR5/4 黄褐色粘質土 π ロツ混じる
(ϕ ~5cm大焼土多く含む)

1. 10YR3/4 暗褐色粘質土
(ϕ ~3cm大焼土多く含む
 ϕ ~1cm大炭化物含む)

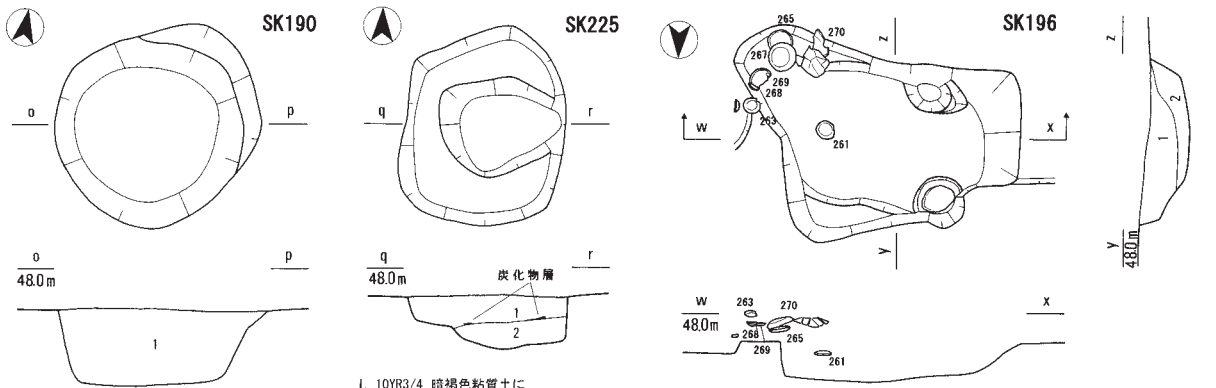
1. 10YR3/4 暗褐色粘質土に
10YR5/6 黄褐色粘質土 π ロツ混じる
(ϕ ~5cm大焼土多く含む
 ϕ ~2cm大炭化物含む
炭化物<焼土)



1. (SK141埋土) 10YR3/4 暗褐色粘質土に
10YR4/6 褐色粘質土 π ロツ混じる
(ϕ ~0.5cm大焼土・炭化物種少量含む)
2. (SK142埋土) 10YR3/4 暗褐色粘質土に
10YR4/6 褐色粘質土 π ロツ混じる
(ϕ ~5cm大焼土多く含む
 ϕ ~1cm大炭化物少量含む)

1. 10YR4/4 褐色粘質土に
10YR5/6 黄褐色粘質土 π ロツ混じる
(ϕ ~7cm大焼土多く含む
 ϕ ~0.5cm大炭化物種少量含む)
2. 10YR4/4 褐色粘質土に
10YR5/6 黄褐色粘質土混じる

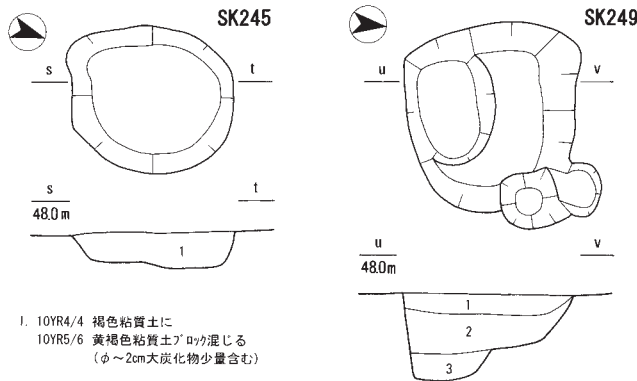
1. (SK178埋土) 10YR4/6 褐色粘質土に
10YR4/4 褐色粘質土 π ロツ混じる
2. (SK179埋土) 10YR4/4 褐色粘質土に
10YR3/3 暗褐色粘質土混じる
(ϕ ~0.5cm大焼土種少量含む
 ϕ ~5cm大炭化物多く含む)



1. 10YR3/4 暗褐色粘質土に
10YR4/6 褐色粘質土 π ロツ混じる
(ϕ ~0.5cm大焼土少量含む)

1. 10YR3/4 暗褐色粘質土に
10YR4/6 褐色粘質土 π ロツ混じる
(ϕ ~0.5cm大焼土少量含む)
2. 10YR3/4 暗褐色粘質土に
10YR4/4 褐色粘質土 π ロツ混じる

SK196 1. 10YR4/4 褐色粘質土
2. 10YR4/4 褐色粘質土
(ϕ ~0.5cm大焼土・炭化物種少量含む)
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土に
10YR4/4 褐色粘質土混じる
(ϕ ~0.5cm大炭化物種少量含む)



1. 10YR4/4 褐色粘質土に
10YR5/6 黄褐色粘質土 π ロツ混じる
(ϕ ~2cm大炭化物少量含む)

SK249 1. 10YR4/6 褐色粘質土
(ϕ ~1cm大炭化物種少量含む)
2. 10YR4/6 褐色粘質土に
10YR5/6 黄褐色粘質土 π ロツ混じる
3. 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土



第47図 SK113・114・118・141・142・147・158・179・196・225・245・249平面図・断面図(1:40)

S K 87 S D75の南側で検出した。長さ1.18m、幅0.71m、深さ0.12mの隅丸長方形をした土坑である。図示した遺物は、いずれも底から浮いた状態で確認した。埋土から伊藤編年第1段階b型式の土師器鍋や藤澤編年第6型式の山茶碗が出土している。

S K 88 北西隅で検出した。長さ0.42m、幅0.37m、深さ0.29mの楕円形をした土坑である。焼土は土層1層上部からまとまって出土した。2層からは極少量を確認した。土坑から遺物は出土していない。

S K 111 S B297の南で検出した長さ0.67m、幅0.6m、深さ0.32mの隅丸長方形をした土坑である。埋土には、焼土や炭化物が多く含まれていた。埋土から、藤澤編年第6型式の山茶碗(206)が出土している。

S K 113 S B301の北側で検出した長さ0.85m、幅0.65m、深さ0.24mの楕円形をした土坑である。埋土には、多くの焼土や炭化物が含まれていた。埋土から藤澤編年第6型式の山茶碗(209)が出土している。

S K 114 長さ0.63m、幅0.58m、深さ0.1mの隅丸長方形をした土坑である。埋土は、褐色粘質土で焼土を多く含んでいた。埋土から伊藤編年第1段階の土師器鍋(211)が出土している。

S K 118 S B299の南東で検出した長さ0.68m、幅0.59m、深さ0.21mの土坑である。埋土は、暗褐色粘質土で、焼土や炭化物をブロック状で多く含んでいた。また、埋土の洗浄を行ったところ、鍛造剥片が2点出土した。詳細は、第4節に記す。埋土から藤澤編年第5型式の山茶碗や青磁碗(217)が出土している。

S K 141 長さ0.75m、幅0.67m、深さ0.17mをした楕円形の土坑である。隣接するS K142より古い土坑である。埋土中の炭化物や焼土は、極少量を確認するのみであった。単一層埋土であり、当遺跡内でよく見られる遺構埋土であったため、埋土の一部を採取し鍛造剥片を探したが、確認できなかった。詳細は第4節を参照されたい。埋土から土師器皿(226)や鉄製品鏝(227)が出土している。

S K 142 長さ1m、幅0.92m、深さ0.13mの円形をした土坑である。S K141より新しい遺構である。埋土は、暗褐色粘質土で、焼土を多く含んでいた。埋土から藤澤編年第6型式の山茶碗が出土している。

S K 147 長さ1m、幅0.65m、深さ0.2mの楕円形をした土坑である。埋土は、褐色粘質土で、焼土を多

く含む1層と含まない2層に分かれる。この埋土の差をもとに、各層を対象にリン・カルシウム分析及び埋土の洗浄を行った。埋土からは、鍛造剥片が1点、鍛造剥片の可能性のある剥片1点が出土している。詳細は第4節を参照されたい。埋土から藤澤編年第6型式の片口鉢(234)や土師器鍋片が出土している。

S K 158 長さ0.85m、幅0.68m、深さ0.32mの不整形をした土坑である。図示の通り、土坑からは、多数の礫を確認した。この礫は遺構を構成するものかはわからない。埋土には、焼土を非常に多く含んでいた。しかし、壁面は被熱していなかった。埋土から伊藤編年第1段階の土師器鍋や皿(237・238)が出土している。

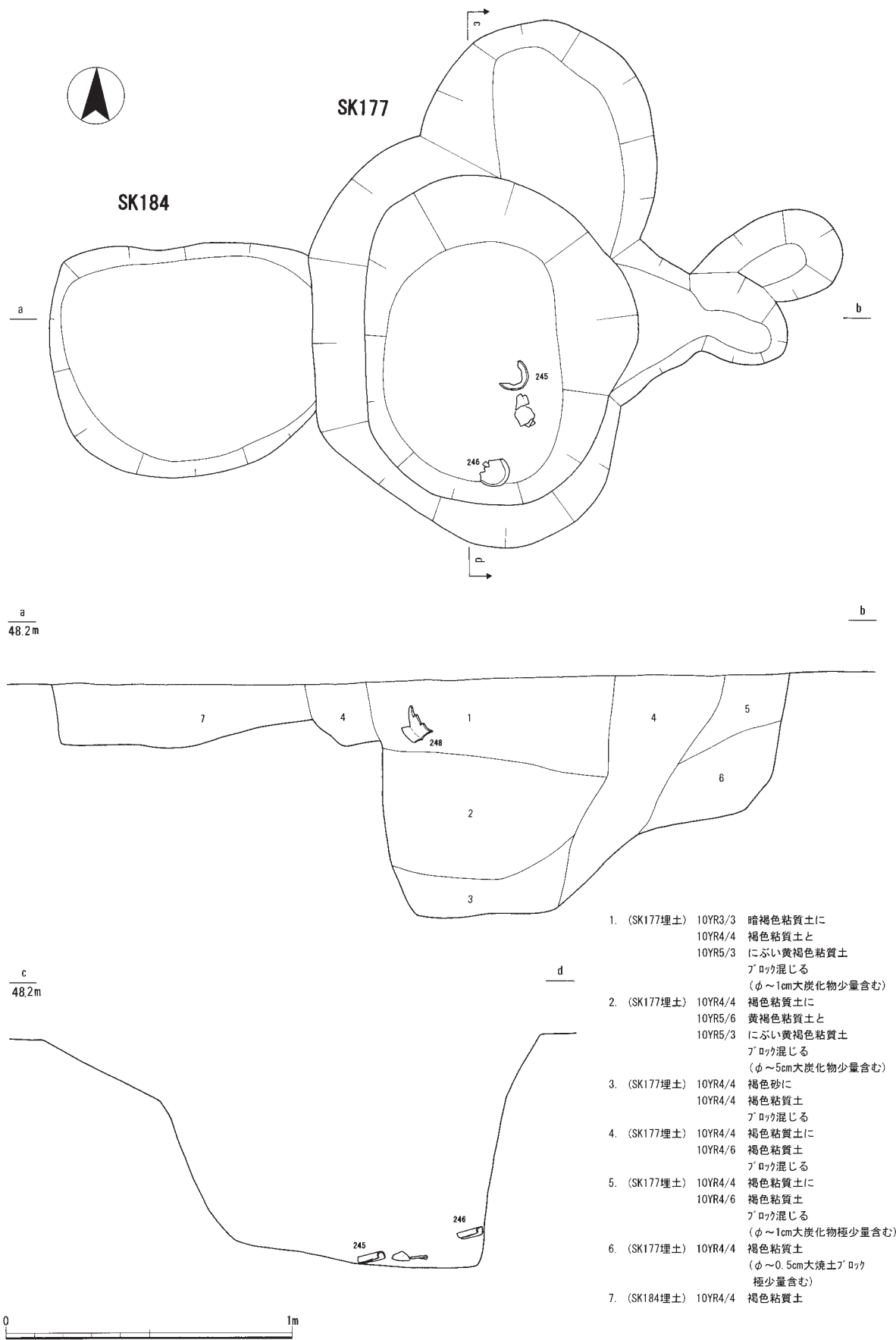
S K 177 長さ1.78m、幅1.73m、内径約1.1m、深さ0.83mと非常に深い土坑である。切り合い関係から、S K184より新しい遺構である。土層1層からは、伊藤編年第3段階の土師器鍋(248)が出土し、3層の底から土師器皿(245・246)が出土した。土坑内で湧水は確認していない。

S K 179 長さ0.88m、幅0.8m、深さ0.19mの円形をした土坑である。隣接するS K178やS B290より前出する。埋土は、褐色粘質土で炭化物を多く含んでいた。このため、リン・カルシウム分析及び埋土の洗浄のため試料採取を行った。埋土からは、鍛造剥片は見つからなかった。詳細は第4節を参照されたい。埋土から山茶碗片が出土している。

S K 190 長さ1.22m、幅1.06m、深さ0.4mの土坑である。埋土は、暗褐色粘質土で、炭化物を極少量含んでいたため、リン・カルシウム分析を行った。詳細は第4節を参照されたい。埋土から中野編年第6型式の常滑製品壺(258)が出土している。

S K 196 長さ1.39m、幅1.15m、深さ0.2mの不整形をした土坑である。切り合い関係から、S K214より新しい遺構である。埋土からは、土師器皿(264~269)、第5型式の山茶碗や青磁片が出土している。遺物は、いずれも底より浮いた状態で確認している。

S K 225 長さ1.04m、幅0.84m、深さ0.28mの隅丸長方形をした土坑である。土層1層と2層の間に薄く炭化物層を確認した。リン・カルシウム分析は、炭化物層下の2層で行った。詳細は第4節を参照されたい。埋土から藤澤編年第5型式の山茶碗が出



第48図 SK177平面図・断面図(1:20)

土している。

S K 226 S X 236の北側で検出した長さ1.98m、幅0.78m、深さ0.3mの楕円形をした土坑である。切り合い関係から、S K 226はS D 212より新しい遺構である。土坑内では、数点の礫と土師器鍋を確認した。土師器鍋や礫の下には、炭化物が2 cm程堆積していた。(写真図版38参照)しかし、底で被熱の痕跡は見られなかった。この埋土は、リン・カルシウム分析と炭化物(材)の樹種同定を行った。炭化物(材)の樹種は、アカガシ亜属、ムクノキ、クリ等であった。詳細は第4節を参照されたい。埋土から伊藤編年第1段階の土師器鍋や藤澤編年第5型式の山茶碗(275)が出土している。

S K 245 長さ0.92m、幅0.7m、深さ0.23mの楕円形をした土坑である。S K 245は、S B 283の柱穴の一部を削平している。埋土は、褐色粘質土で、炭化物を少量含んでいた。この埋土で、リン・カルシウム分析を行った。詳細は第4節を参照いただきたい。

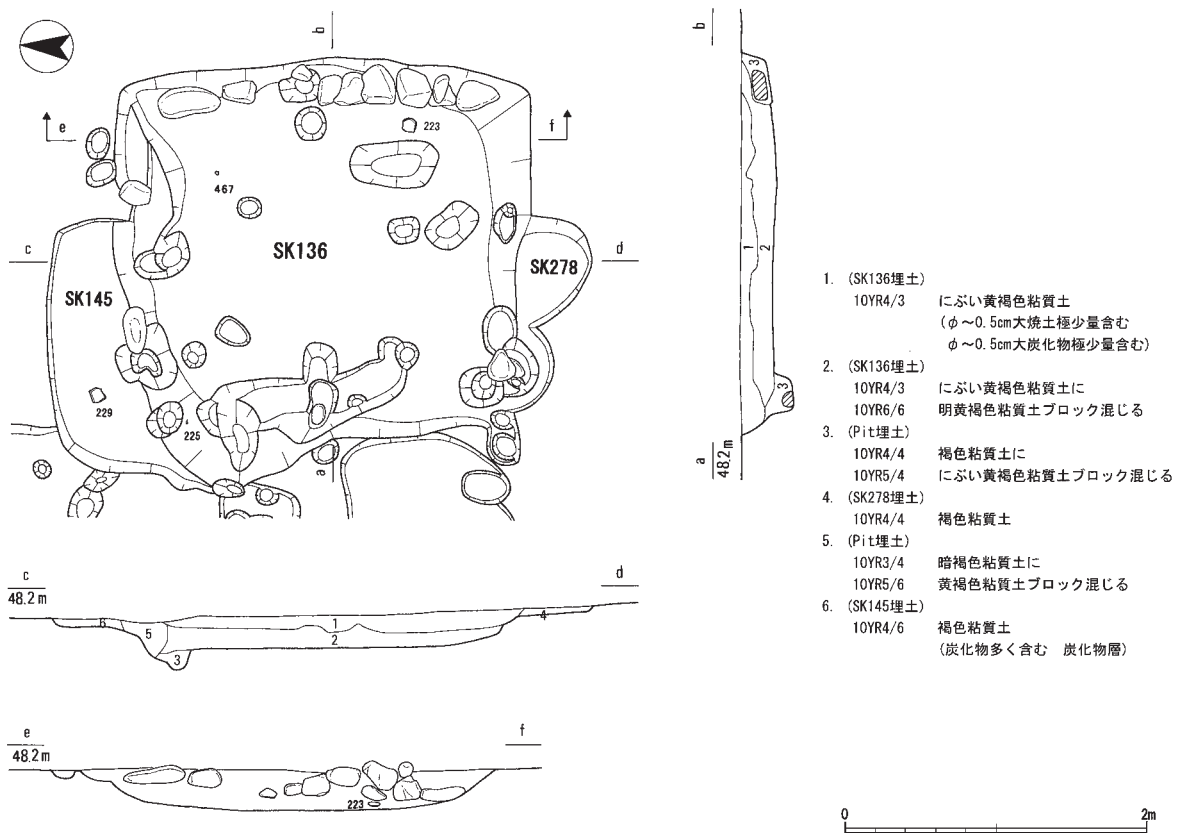
土坑からは土師器小皿が出土している。

S K 249 長さ1.07m、幅1.05m、深さ0.47mの隅丸方形をした土坑である。南側が一段ピット状に落ち込んでいる。埋土は3層に分かれ、2層でリン・カルシウム分析を行った。詳細は第4節を参照いただきたい。埋土から伊藤編年第1段階の土師器鍋や青磁碗が出土している。

(3) 石組遺構

S K 136・145・278 S K 136は長さ2.73m、幅2.48m、深さ0.26mの方形をした石組遺構である。東壁面には、一段の石列が確認できた。礫は、高さがまちまちでいずれも底から浮いた状態であった。遺構内のPitは、壁面で多く検出した。しかし、これらのPitは礫の抜き取り穴とは考えにくい。S K 136からは、伊藤編年第2～3段階の土師器鍋(222)や羽釜等が出土している。

S K 145は、長さ1.68m、幅0.67mで、深さ0.06mと非常に浅い土坑である。S K 145は、S K 136より古



第49図 SK136・145・278平面図・断面図(1:50)

く、検出面では東半部を中心に炭化物が広がっていた。S K145からは、伊藤編年第2段階の土師器鍋が出土している。

S K278は、長さ0.73m、幅0.5m、深さ0.06mの非常に浅い土坑である。

S K136、S K145、S K278、は、別遺構として番号を付与したが、石組遺構S K120のような一連の遺構の可能性が高い。また、柱穴が不足しているものの、S K120と同じように覆い屋を伴う遺構の可能性はある。

(4) 溝

溝を17条検出した。大半は小規模な溝である。S D212・242は、屋敷地を囲む区画溝として機能していたと考える。区画溝S D212・242は逆「コ」の字形をしている。区画溝は、水田造成時と表土掘削時に削平を受けているため、初めから逆「コ」の字形なのか、本来四周を巡る溝であったのかは判断がつかない。

S D75 幅2.3m、深さ0.1～0.38mのドーナツ形をした溝である。溝の埋土は、褐色粘質土で、北側のa-b箇所以外は単一層埋土である。土層の観察から水が流れていたような痕跡は確認できなかった。また、溝の内側を何度も精査をしたが、遺構は確認できなかった。S D75は、単独で構成されるのか、もしくは付随していた遺構が削平されたものかも含めて検討したが、性格や機能は不明である。

溝からは、伊藤編年第1段階b型式～4段階までの土師器鍋や山茶碗等が出土し、時期幅は広い。おそらく、溝が機能していたのは、伊藤編年第2段階の頃で、以降、除々に溝の埋没が始まり、最終埋没は、伊藤編年第4段階b型式の土師器鍋(289)の時期であると思われる。

S D124 総延長17m以上、幅0.6～2.15m、深さ0.14～0.39mの蛇行する溝である。溝は、南から北へ向かって低くなっている。溝の上部には、南では1列に、中程より北では両側に礫が置かれていた。礫は、土層の2層で確認でき、溝がある程度埋まってから置かれたと考えられる。溝は、東側に隣接するS D212との境界となり、屋敷地を区画していたと考えられる。また、溝が開口していた時期は、西側の石組遺構S K121・162・163から北へ抜ける溝として機能し

ていた可能性がある。溝からは、伊藤編年第3段階の土師器鍋(300)や中野編年第5型式の常滑製品甕(306)等が出土している。溝の最新の遺物は、伊藤編年第3段階b型式の鍋である。

S D212 総延長42.3m、幅0.3～2.3m、深さ0.24～0.62mの逆「コ」の字形をした溝である。溝の内側では、約21mを測る。溝の断面は、U字状で、南から北へ、東から西へ向かう程低くなる。S D212は、S K226より古く、S D222、S D219より新しい遺構である。S D212は、屋敷地を区画する溝であり、溝が開口している時期幅は広い。

S D212からは、伊藤編年第1～2段階の土師器鍋や藤澤編年第5～6型式の山茶碗(327～329)が出土している。おそらく、溝として機能していた時期は、伊藤編年第1段階b型式から2段階c型式の頃である。最新の遺物は伊藤編年第3段階併行と思われる土師器羽釜である。

S D242・269・271 S D242は、総延長29.2m以上、幅1～3.4m、深さ0.2～0.3mで、断面がU字状になる溝である。S D242・269・271の切り合い関係は不明である。S D242は、何条もの溝が並び、埋土の差がわかりにくく、遺構認定も難しかった。このため、トレンチを設定し、土色や堆積状況から溝と判断した。また、S D242は調査期間の都合上、完掘できなかった。平面図に破線で示したラインは、土層から判断した溝の推定ラインである。S D242から出土した最新の遺物は、藤澤編年第7型式の山茶碗である。

S D269は、長さ8.8m、幅1.3m、深さ0.1mの南北に延びる溝である。遺物は、縄文土器が出土しているのみである。S D269は、周囲の建物や土坑とはやや離れており、S D219のように区画溝に先行する溝、もしくは同時期に存在していた可能性がある。

S D271は、長さ9.4m、幅0.4～0.8m、深さ0.38～0.6mの南北に延びる溝である。S D271からは、藤澤編年第6型式の山茶碗が出土している。S D271もS D269と同様の、区画溝に先行するないしは同時期に存在していた可能性がある。

S D242は、S D212のような逆「コ」の字状の屋敷地を巡る区画溝になると考えられる。また、埋土中の遺物を見ると、S D212より古く、埋没時期も早いと推測される。これらを勘案すると、S D242はS

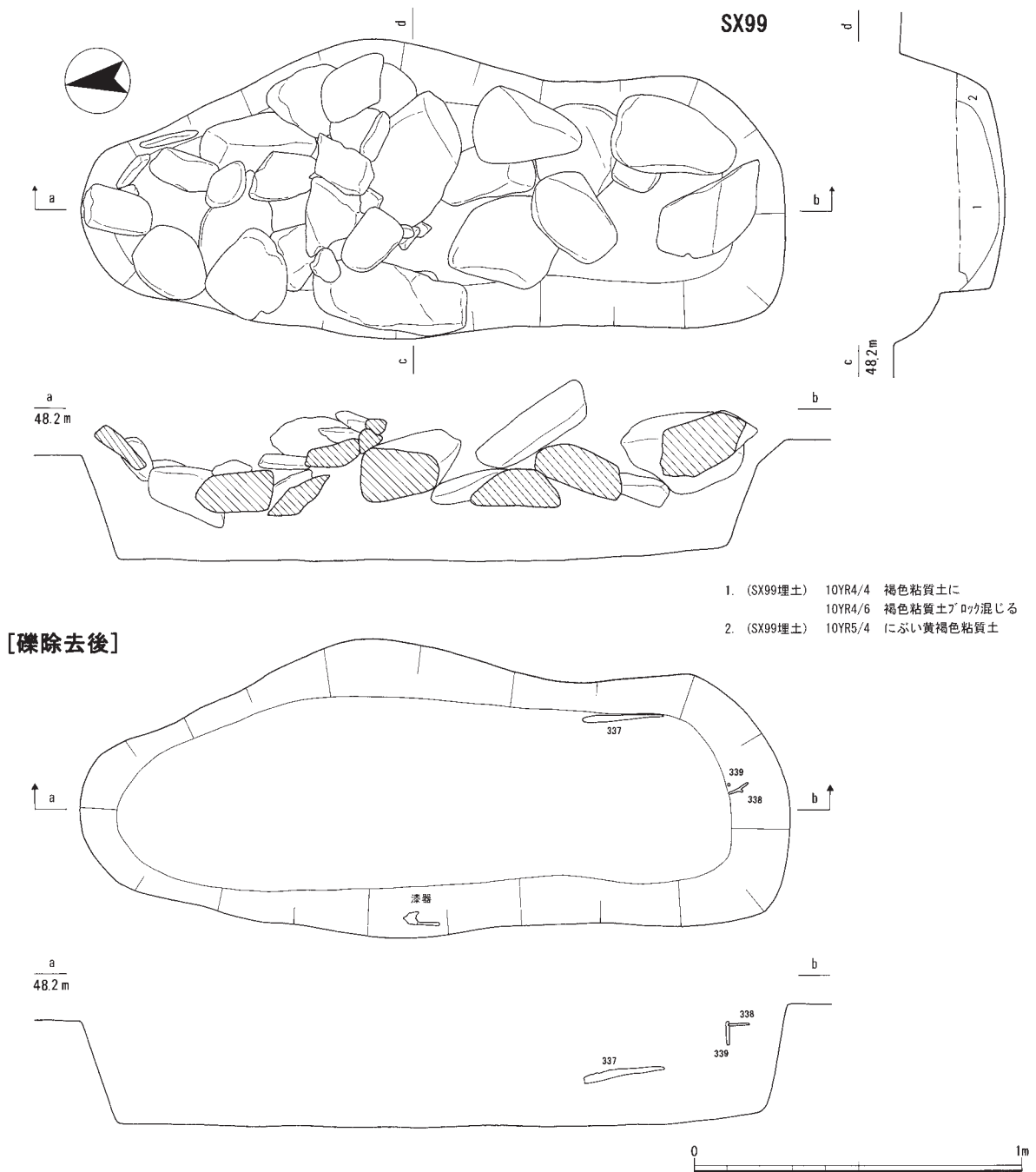
D212に先行して造られた、もしくは同時期に存在していたと区画溝と推察される。そして、S D269・271は、西隣りのS D219・222のように区画溝に先行する溝になるのではないだろうか。

(5) 墓

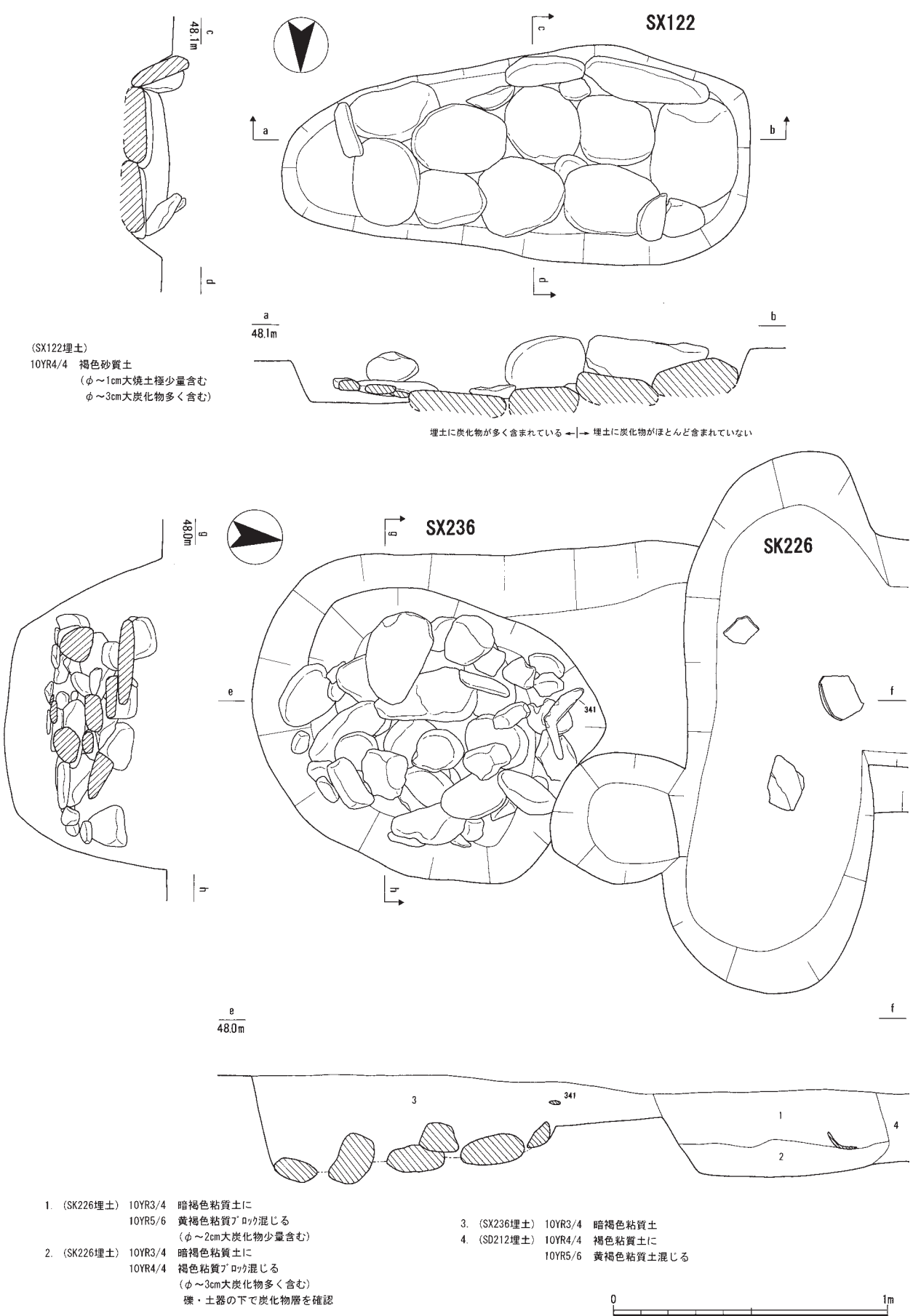
S X99 長さ2.1m、幅0.76m、深さ0.33mの土坑墓である。墓壙の断面は箱型になる。礫は、墓壙内に散在していた。礫を除去後、東側から小刀(337)、南側から鉄釘(338・339)、西側から塗膜のみ残存して

いた赤地の漆器を確認した。また、小刀や鉄釘には木質が残存し、墓壙内には木棺が安置されていたと考えられる。墓壙内から、伊藤編年第2段階の土師器鍋や山茶椀が出土している。

S X122 長さ1.7m、幅0.8m、深さ0.22mの楕円形をした墓である。墓壙内は、20~30cm程の礫が埋設され、南側は、礫が立った状態であった。そして、西端の礫は他より大きく、枕石と思われる。また、埋土には東端で炭化物が多く確認でき、それより西側



第51図 SX99平面図・断面図(1:20)



第52図 SX122・236、SK226平面図・断面図(1:20)

ではほとんど確認できなかった。SX122は、礫の出土状況から墓であると判断した。しかし、墓の可能性のあるものとの比較試料とするため、リン・カルシウム分析を行った。結果は、地山より酸化リン、酸化カルシウムの含有量は多いと確認できた。詳細は、第4節の通りである。墓壙からは伊藤編年第1段階の土師器鍋や藤澤編年第5型式の山茶椀が出土している。

SX236 径1.25m、深さ0.59mの円形をした墓である。墓壙内には、礫が底から浮いた状態で散在していた。墓壙の北隅からは、鎌(341)が出土した。鎌は、礫より上部の高さから出土した。つまり、墓壙を埋め、礫を置いた後、鉄製鎌を埋置したことにな

る。墓壙内からは、青磁片や藤澤編年第5型式の山茶椀等が出土している。

SX274 調査区北壁に沿って検出した。長さ1.54m、幅0.81m、深さ0.44mの石組墓である。墓壙内は、基底石から5段分の石組が残存していた。

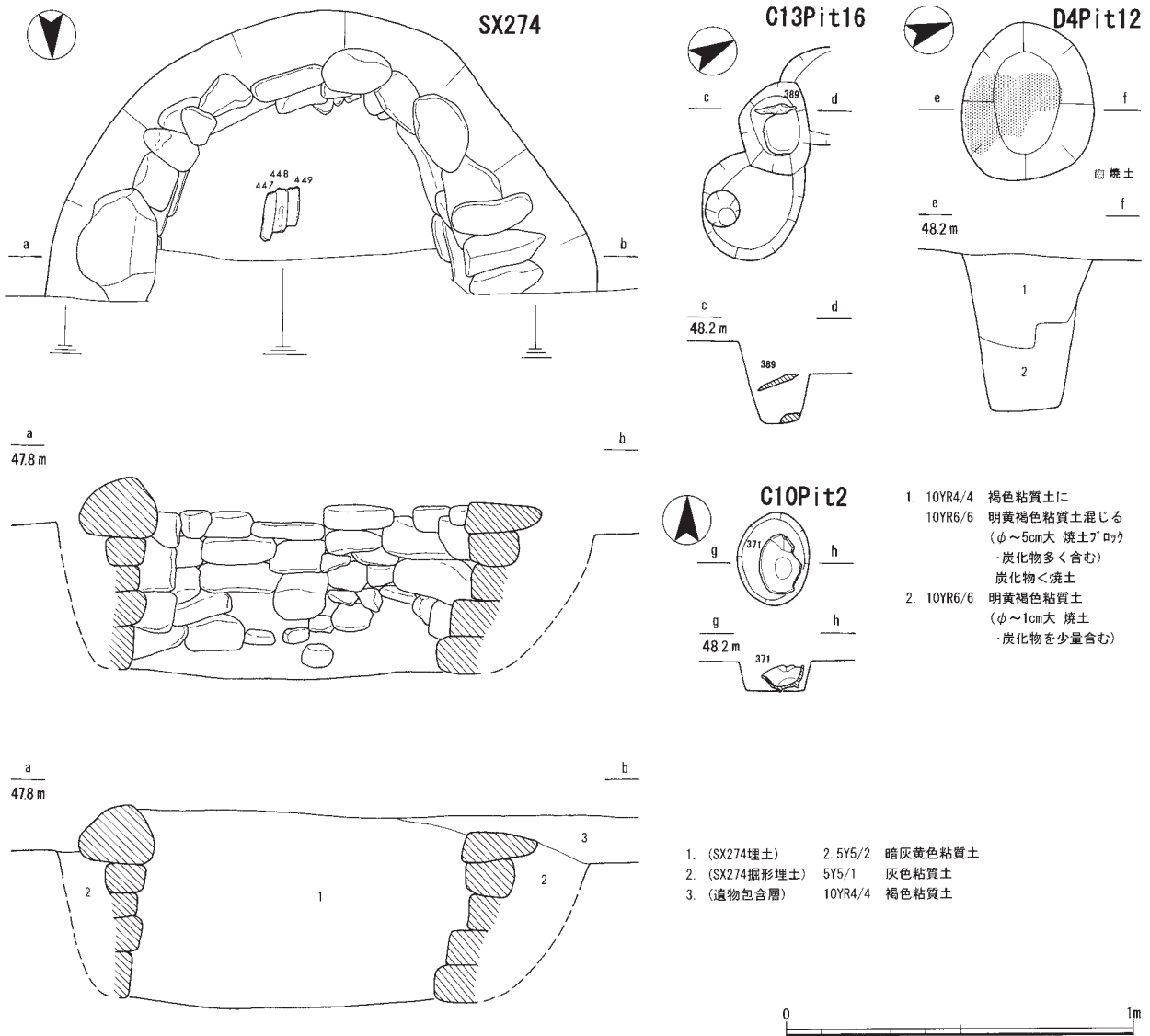
石組内には、骨が3片(447~449)残存していた。骨同定の結果、ヒトと思われる脛骨ということが判明した。詳細は第4節に記す。

墓壙内からは、伊藤編年第1段階b型式の土師器鍋や藤澤編年第5型式の山茶椀が出土している。

(6) 柱穴

柱穴を多数検出した。主なものについて記す。

D4Pit12は、埋土に焼土が多く含まれていた。柱



第53図 SX274、Pit平面図・断面図(1:20)

穴の中央では、土層1層に焼土がブロック状に含まれ、炭化物も多く含まれていた。しかし、2層には焼土や炭化物はほとんど含まれていなかった。土坑S K 88と同じような埋土の堆積状況であった。

C 10Pit 2は、柱穴の底から山茶碗(371)が出土し

た。掘立柱建物群からは少し離れており、周辺に建物が建つならば、地鎮等のために埋納されたものかもしれない。

C 13Pit 16では、底に根石と思われる石を検出した。また、石の上部では、削鑿(389)が出土した。

3 出土遺物

東沖遺跡から出土した遺物は、土師器皿・鍋、陶器皿・椀・鉢・甕、鉄製品小刀・釘・鏝などである。遺物の主体となる時期は、12世紀後葉～13世紀中葉である。それ以降、15世紀前半までの遺物が確認できる。土師器は、いずれも南伊勢系のものである。山皿・山茶碗は、渥美型・尾張型が出土し、東濃型は出土していない。

(1) 掘立柱建物出土遺物(1～154)

S B 281関連遺物(1～7)

1～7は、S B 281の建物内土坑S K 256出土遺物である。1～3は土師器皿である。皿は、器壁が薄く、口縁部が内彎している。4は無釉陶器皿(以下、山皿と記す)で、藤澤良祐氏の編年(以下藤澤編年と記す)尾張型第6型式のものである。内面に自然釉が付着している。5・6は、無釉陶器椀(以下、山茶碗と記す)で、渥美型のものである。5は、藤澤編年第5型式。6は高台が低く、体部が直線的で、藤澤編年第6型式のものである。7は陶器片口鉢で山茶碗質のものである。内面底部がよく挿られている。高台は小さく、全体的に小ぶりで、藤澤編年尾張型第6型式のものである。

S B 282出土遺物(8)

8は、土師器小皿である。口縁部は短く、ヨコナデを施している。

S B 283出土遺物(9)

9は、山茶碗である。口縁部のみ残存していた。藤澤編年第5型式のものであろう。

S B 285出土遺物(10)

10は土師器鍋の口縁部である。小片のため大きさは不明である。口縁部が短く、受口状を呈するため伊藤裕偉氏の編年(以下伊藤編年と記す)第1段階b型式頃のものと思われる。

S B 286出土遺物(11)

11は土師器皿である。外面に工具アタリ痕跡がみ

られる。

S B 288出土遺物(12・13)

12・13は土師器小皿である。13は内面に煤が付着している。

S B 289出土遺物(14・15)

14は土師器小皿である。器壁が薄く、口縁部に非常に弱いヨコナデが施されている。15は凝灰質泥岩製の砥石である。砥石の四方には、細かい磨り目が残る。

S B 289・290出土遺物(16・17)

16・17は土師器鍋である。いずれも口縁部が長く、やや内彎している。伊藤編年第2段階c型式～第3段階a型式のものであろうか。体部上半にハケメが、体部下半にはケズリ調整が残る。

S B 290出土遺物(18～25)

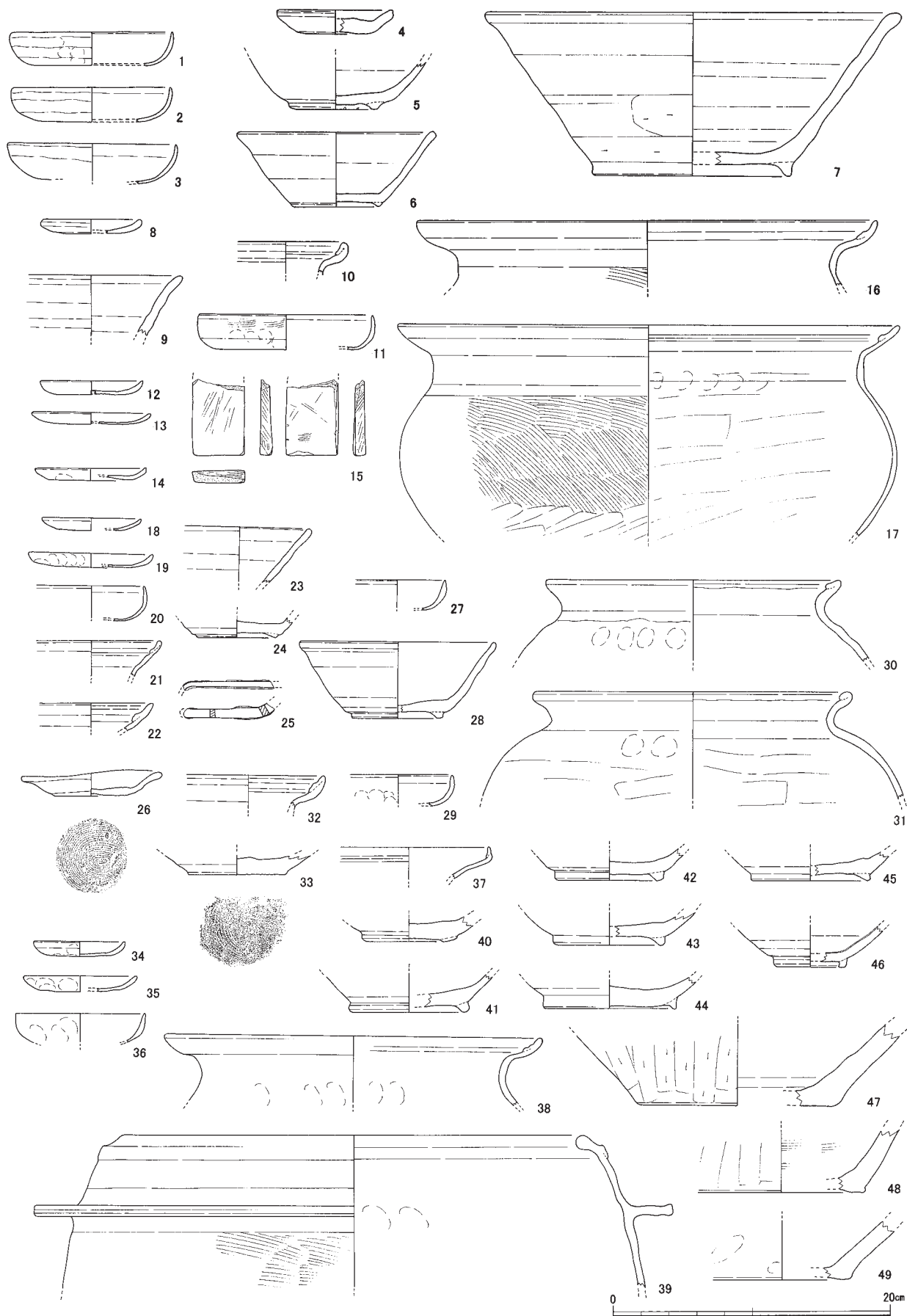
18・19は土師器小皿である。18は口径が7.2cmと小さく、新しい様相。19は口径9cmと大きく、古い様相がみられる。20は土師器皿である。21・22は土師器鍋の口縁部である。21は器壁が薄く、口縁端部も短い。口縁部の折り返しも短く、小形品になろう。22は口縁部が長く、折り返した内面には明瞭な稜がみられる。伊藤編年第3段階のものであろう。23・24は山茶碗である。23は口縁部のみ、24は底部が残存している。底部は高台が低く、断面が三角形をなし、粉殻痕が付いている。藤澤編年尾張型第6型式であろう。25は鉄製品鏝で、両端部がねじれの位置にある手違い鏝である。

S B 291出土遺物(26)

26はロクロ土師器小皿である。丁寧にロクロ成形され、口縁部が外反して開いている。歪みが大きいものの、焼成が良く、硬質である。

S B 292出土遺物(27・28)

27は土師器皿である。表面が風化している。28は山茶碗である。藤澤編年渥美型第6型式のものである。



第54図 掘立柱建物出土遺物実測図①(1:4)

S B 293出土遺物 (29~31)

29は土師器皿である。30・31は土師器甕である。口縁部が短く、少し外反する。そして器壁が厚く、頸部が短い。伊藤編年甕仮(A)段階のものである。

S B 294出土遺物 (32)

32は土師器鍋の口縁部である。

S B 295関連遺物 (33~59)

33・35~59はS B 295の石積み土坑S K 228から、34はS B 295の柱穴から出土した遺物である。

土師器 33は土師質土器(ロクロ土師器)皿の底部である。34・35は小皿で口縁端部に弱いヨコナデが施されている。36は皿で、小片のため歪みが大きい。37・38は鍋の口縁部である。37は胎土が緻密で、口縁端部外面がわずかに凹線状に窪み伊藤編年4段階c型式のものであろうか。38は、口縁部が短く、頸部にオサエが見られ、伊藤編年第1段階のものであろう。39は羽釜である。口縁端部を丸く収め、口縁部と口縁端部が共に内傾するいわゆる口縁部b手法^⑥のものである。鏝部は、胴部最大径であり、体部にはハケメが施されている。伊藤編年第3段階併行であらうか。

陶器 40~45は山茶椀の底部で、いずれも藤澤編年渥美型第5型式のものである。高台は低く、断面が三角形状のものや底部の器壁が厚いものがある。46は瀬戸美濃製品灰釉平椀である。藤澤良祐氏の編年^⑦(以下藤澤編年と記す)古瀬戸後I期のもの。内面に1箇所の特チン跡が残る。47は片口鉢の底部である。渥美産のもので、無高台である。片口鉢Ⅱ類^⑧に該当しよう。48~51は常滑製品である。48~50は底部片である。49は底部径が狭く、残存する内面体部がつるつるしていることから片口鉢と思われる。50は器壁が厚く、外面体部の調整はオサエが残る。体部の立ち上がり等を考えると片口鉢と考えられ、中野晴久氏の編年(以下中野編年と記す)10型式頃のものかもしれない。51は片口鉢の口縁部である。口縁端部に平坦な面を持ち、中野編年8型式のものであろう。52は渥美産の甕である。口縁部が外反し、外面に自然釉が付着している。12世紀代のものであろう。53は壺の頸部から肩部片である。肩部に一条の沈線が入り、おそらく三筋壺であらう。

石製品・鉄製品 54は砥石である。凝灰岩製で、使

用頻度に差はあるものの4面に磨り面が残る。55~59は鉄製品である。55は釘で、頭部を折り曲げた皆折釘^⑨。56は片側に屈曲が見られるため鏝であらう。57は、片側が直角に曲がり、鏝である。58は不明品である。五角形状をした小片で、左右が割れ、厚みが3mmと分厚い。この小片の形状から鏝と想定するならば、厚みが分厚すぎる。厚みから小刀と想定するならば、茎の一部と思われる。いずれにしても器種の特定ができない。59は鏝であらうか。円の四半分の形状をなし、刃先が欠けている。そして、右側には上部方向へ立ち上がりが確認できる。

S B 297出土遺物 (60~64)

60は土師器皿の口縁部片である。口縁端部は強いヨコナデを施し、体部との境に稜を持っている。中北勢系土師器皿の皿b手法^⑩に該当しよう。61は山皿で、器高が低く、扁平であり、藤澤編年渥美産第6型式のものである。62は土師器鍋である。口縁部が短く、頸部には指オサエの痕跡が明瞭に残る。伊藤編年第1段階b型式のものであろう。63・64は山茶椀である。いずれも渥美型で、63は第5型式、64は第6型式のものである。

S B 298出土遺物 (65)

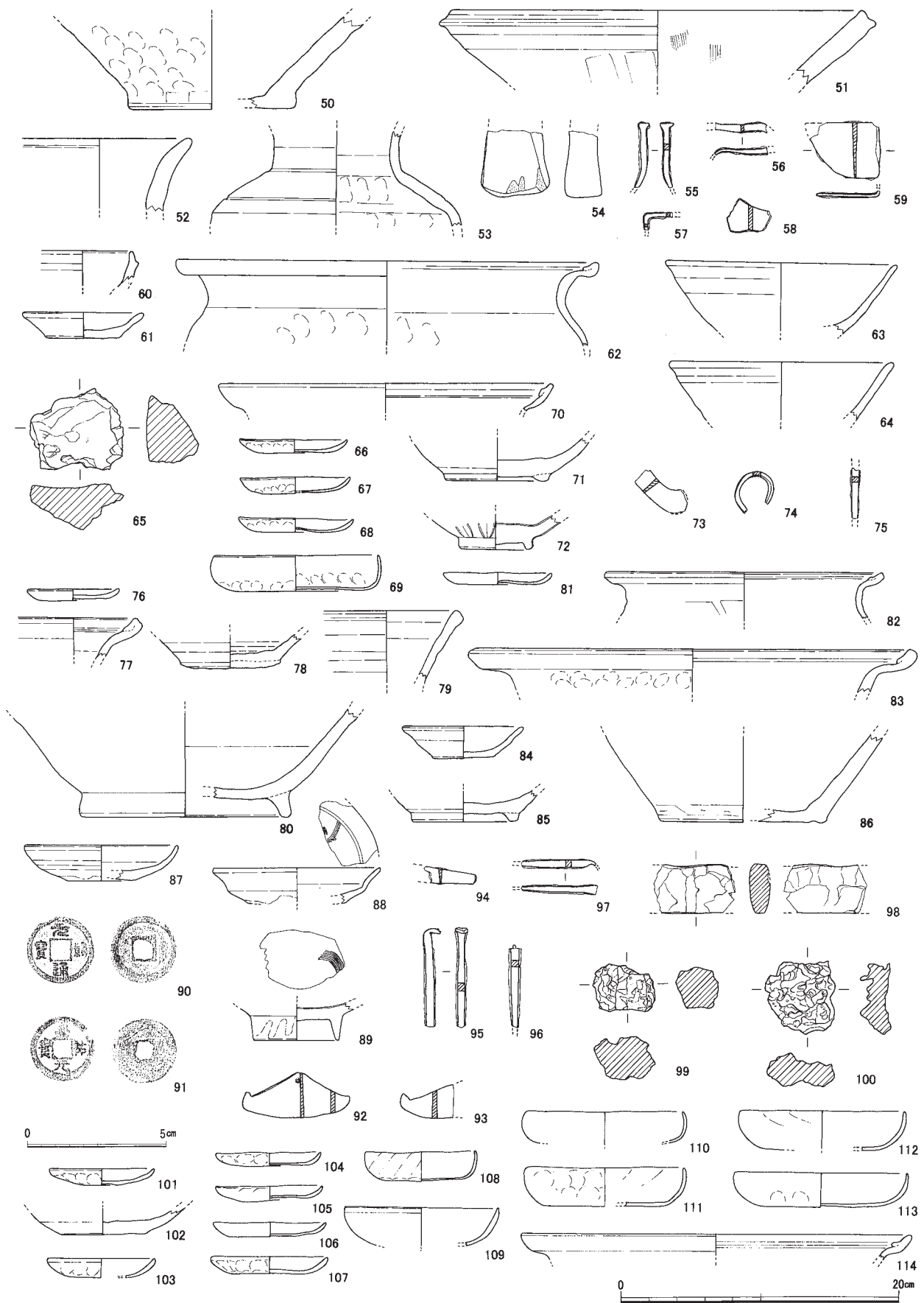
65は土製品である。部分的にスサの痕跡が残る面がある。用途や器種はわからない。

S B 299関連遺物 (66~75)

66~75はS B 299の建物内土坑S K 120出土遺物である。66~68は土師器小皿である。いずれも扁平で器高が低い。68は底部が凹んでいる。69は皿である。器壁が薄く、口縁部が内径し、岩出Ⅱb~Ⅲa期^⑪に相当する。70は鍋で、口縁部が小形で短い。71は山茶椀の底部で、藤澤編年渥美型第5型式のものである。72は青磁椀で底部のみ残存していた。外面体部に蓮弁文が入るタイプであらう。73~75は鉄製品である。73は鏝で、柄の先端部分にあたる。74は環で、いわゆる吊具である。75は一部しか残存していないが、釘であらう。

S B 300関連遺物 (76~129)

76~80はS B 300の柱穴出土遺物である。76は土師器小皿である。77は土師器鍋の口縁部である。口縁端部上端のヨコナデが強く、面を持っている。伊藤編年第2段階頃であらうか。78は山茶椀である。底



第55図 掘立柱建物出土遺物実測図②(1:4.90・91は1:2)

部は、製作時に粘土が不足していたのか、薄く作りすぎてしまったのか、更に底部を貼り付け、まるで上げ底のようである。底部は平底で、径は7cmと小さく、体部に向かって立ち上がり屈曲しているため藤澤編年第8型式のものになるのであろうか。79・80は片口鉢である。79は口縁部で、端部を丸く収めている。80は底部で、藤澤編年第4型式のものである。

81～129は石組遺構 S K 121・162・163出土遺物である。81は土師器小皿、82・83は土師器鍋である。82は口径20cm強と小形で、口縁部端部の折り返し部分が浅く窪んでいる。伊藤編年第1段階の特徴を示しているが、小形品は口縁部形態の変化が鈍いため具体的な時期はわからない。83は口縁部上端にヨコナデを施し、立ち上がりが受口状になっており、伊藤編年第2段階a型式のものであろう。84は山皿である。体部はやや丸みを持ち、口縁部は外反している。藤澤編年渥美型第5型式のものである。85は山茶碗の底部で、内面体部に自然釉が付着している。藤澤編年渥美型第5型式のものである。86は底部片である。平底で、底径12cmを考慮すると広口壺になるのであろうか。87は白磁皿である。平底で体部に丸みを持つ。88は青磁皿で、同安窯のものである。皿は体部中位で屈曲し、内面に文様が描かれている。森田勉氏の分類¹²⁾(以下、森田分類と記す) I 類1であらう。89は白磁碗である。細く直立した高台で、高台まで施釉されている。内面底部に櫛で文様を描いている。森田分類 V 類4 b に該当する。

90・91は銭貨である。銭文は、90が篆書で元符通宝、91は真書で嘉祐元宝とある。92～97は鉄製品である。92・93は火打金である。92は完形品で、基部に穴が開いている。93は1/3が残存している。94は小刀の関であらうか。95は釘で、頭部が屈曲する皆折釘である。残存長7.1cmとおおぶりである。96は頭部が欠損しているものの、先細りのため釘であらう。97は鏝である。両側に屈曲が見られ、片側は非常に細い。98は不明品で、表面に亀裂が入る。厚さが1.5cmと分厚く、X線透過写真を見る限り四周すべて地金と判断できる。これが製品なのか、溶解途中のものなのかも判断がつかない。99は鉄滓で、断面が台形状をしている。100は碗形滓であり、不整形を

なしている。

102は土師質土器皿である。底部から体部に直線的にのびている。117は土師質土器碗である。

101・103～114は土師器である。101・103～107は小皿である。101は硬質で、口径が小さく、口縁部に弱いヨコナデを施している。103・105は外面に素地の接合箇所が残る。106は内面の一部に油煙が残っている。108～113は皿である。108は胎土が均質で細かく、口径7.8cmと小さい。109は口縁端部をヨコナデし、断面が三角形をしている。114は鍋の口縁部で、折り返した部分のヨコナデが強く窪んでいる。伊藤編年第1段階のものであろう。

115・116・118～124は陶器である。115・116は山皿、118～121は山茶碗、122は片口碗、123は片口鉢である。115・118・123は尾張型、116・119～121は渥美型のもので、いずれも第6型式のものである。115は器壁が厚く、器高が低く、扁平である。116は器壁が薄く、扁平で、口縁部には自然釉が付着している。118は高台が低く、貼り付けも雑である。120は内面底部に重ね焼き痕が残る。122は伊勢地方ではあまり出土しない¹³⁾片口碗で、12世紀後半のものである。口縁部には自然釉が付着している。124は常滑製品甕の口縁部で、中野編年7型式頃のものである。

125は青磁碗。外面に蓮弁文が印刻され、龍泉窯系のものであろう。126は白磁の碗で、玉縁口縁が付くタイプの高台部分である。

127は鉄製品釘で、検出時から錆が見られなかった。表面に赤色顔料のようなものが塗布されている。128は鉄製品で種別は不明である。最大厚1.2cmで、非常に脆く、部分的に砕けた状態である。X線透過写真で確認したところ、この形状内すべて地金と判断した。製品として思い当たるものがなく、溶解しかけたもの、もしくは溶解途中のものなのかもしれない。129は碗形滓である。半球状をなしている。

S B 303出土遺物 (130)

130は凝灰岩製の砥石である。四方が磨られている。側面はよく使用されたのか、凹んでいる。

S B 305関連遺物 (131～153)

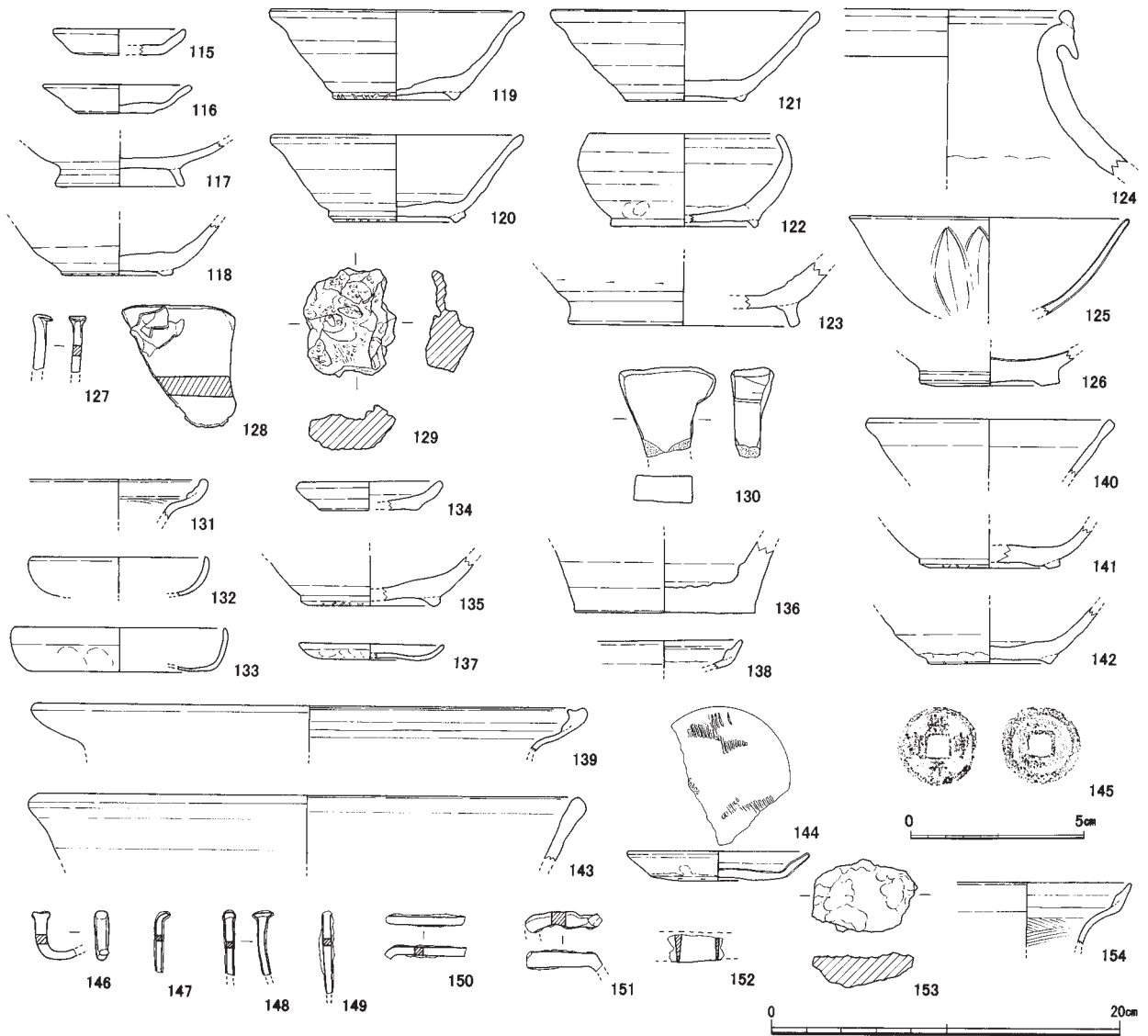
いずれも S B 305の建物内土坑 S K 25・50・58出土遺物である。131は S K 25出土で、土師器鍋の口縁部である。

132~136はS K 50出土遺物である。132・133は土師器皿である。器壁が厚めで、口縁端部を強めにヨコナデし、断面が三角形状になっている。134は山皿である。器高が低く、扁平で藤澤編年尾張型第6型式のものである。135は山茶椀で、藤澤編年渥美型第5型式のものである。136は常滑製品である。底径が10.4cmと小さいため、瓶ないしは壺の底部であろう。

137~153はS K 58出土遺物である。137は土師器小皿である。外面口縁部に粘土接合痕が観察できる。138・139は土師器鍋の口縁部である。138は口縁端部の折り返しが断面三角形状で、やや受口状になっており伊藤編年第2段階c型式頃であろう。139は、口

縁部が短く、内面に強いヨコナデが施されている。そのため口縁部内面の稜線が明瞭で、断面三角形状の突出が分厚い。伊藤編年第2段階の範疇であろうか。140~142は山茶椀、143は片口鉢で、いずれも藤澤編年第6型式のものである。142は尾張型で、他はすべて渥美型である。141・142は高台がいずれも低く、形骸化している。144は青磁皿で、外面底部下半と底部は施釉されていない。内面には、櫛によるジグザグ文様があり、森田分類同安窯系I類1bに該当しよう。

145は錢貨で熙寧元宝、初鑄年は1068年である。146~152は鉄製品である。146~149は釘で、いずれ



第56図 掘立柱建物出土遺物実測図③(1:4, 145は1:2)

も先端を欠損している。146～148は頭部や基部を折り曲げた折釘。150・151は鏝である。151はいずれも先端が欠損しているが、手違い鏝である。152は小刀であろう。棟側のみが原形を保っている。棟区の部分であろうか。153は小形の椀形滓である。断面形が半円状をなしている。

S B 306出土遺物 (154)

154は土師器鍋の口縁部である。胎土が細かく、小石粒が少ない。

(2) 土坑出土遺物 (155～287)

S K 3 出土遺物 (155)

155は土師器小皿である。

S K 4 出土遺物 (156)

156は土師器皿である。器壁が薄く、口縁部は尖っている。

S K 5 出土遺物 (157)

157は土師器鍋の口縁部である。口縁部が内彎し、内面の折り返し部分の突出が低い。

S K 21 出土遺物 (158)

158は土師器鍋の口縁部である。口縁部内面の断面が三角形をなしている。

S K 24 出土遺物 (159・160)

159・160は鉄製品釘である。159は頭部が斜めで、基部中央から脚部が左方向へ緩やかに曲っている。

S K 27 出土遺物 (161)

161は土師器甕の口縁部である。口縁端部は丸く、肥厚し、内側に折り返ししており、伊藤編年(仮) A 段階のものである。

S K 28 出土遺物 (162)

162は縄文土器の底部である。胎土に小石粒を多く含んでいる。

S K 30 出土遺物 (163・164)

163は土師器皿である。器壁が薄く、口径が10.4cmと小ぶりである。164は土師器鍋である。口縁部内面のヨコナデが強く、断面三角形の突出が大きく、跳ね上げたような形状である。

S K 31 出土遺物 (165・166)

165は土師器皿である。胎土が精良で、白色をしている。166は土師器鍋である。口縁部が長く、やや内彎している。伊藤編年第3段階のものであろう。

S K 37 出土遺物 (167～171)

167～171は土師器小皿で、口径が7.2～8.0cmと小さい。167は外面に素地接合痕が残る。170は器壁がやや厚く、楕円形を呈している。

S K 42 出土遺物 (172)

172は鉄製品釘である。頭部を持たない切釘で、脚部が欠損している。

S K 46 出土遺物 (173)

173は鉄滓である。

S K 65 出土遺物 (174～183・446)

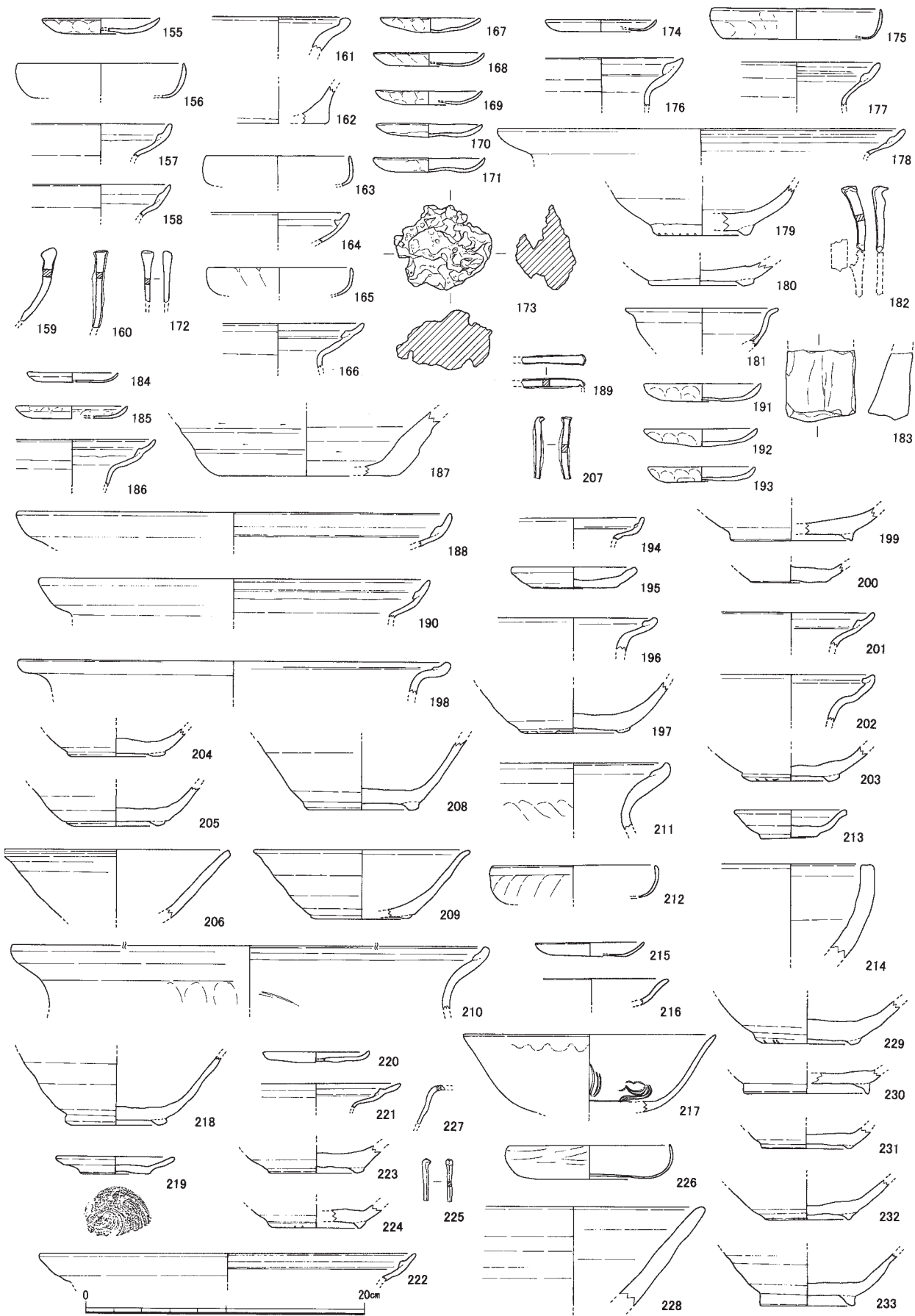
174～178は土師器、179～181は陶器である。174は小皿、175は皿である。176～178は鍋の口縁部である。176は口縁部から頸部に明瞭な屈曲が見られ、口縁端部と折り返し部分に強いヨコナデが施されている。断面は三角形で突出し、伊藤編年第2段階c型式に該当しよう。177は胎土の小石粒が少ない。口縁部は長く、折り返し部分の突出は平たい。178は口縁部が短く、小形品である。いずれも伊藤編年第2段階～第3段階の範疇である。

179・180は山茶椀で、いずれも渥美型である。179は内面に自然釉が付着し、藤澤編年第5型式のものである。180は179より高台が低く、形骸化した第6型式のものである。181は瀬戸美濃製品灰釉折縁皿で藤澤編年古瀬戸中IかII期のものである。

182は鉄製品釘である。釘は基部上半がゆるく屈曲している。446は小刀であろう。おそらく、右側が茎、左側が刃部になろう。182と446は、出土時、接合可能な同一個体であった(写真図版46参照)。しかし、保存処理後、分離した状態であったため、上半を182、下半を446として報告する。183は石質泥砂岩製の砥石である。前面と背面はよく磨られ、断面が台形状に磨り減っている。

S K 67 出土遺物 (184～187)

184・185は土師器小皿である。184は薄手でやや硬質、185は口径が大きく厚手のものである。186は土師器鍋の口縁部である。口縁端部を指で挟みこむようにヨコナデが施されている。このためやや内彎した口縁部の外面に明瞭な段が見られる。内面の三角形に折り返した部分も突出が平たく、頸部が屈曲する伊藤編年第3段階のものであろう。187は片口鉢の底部で、藤澤編年第5か6型式のものである。高台はなく、内面は使用時の播りのせいか表面が粗く



第57图 土坑出土遗物实测图①(1:4)

なっている。

S K 71出土遺物 (188・189)

188は土師器鍋の口縁部である。内彎する口縁部で、内面の折り返し部分のヨコナデは弱く、突出は低い。189は鉄製品銚である。脚部の屈曲部分がわずかに残っている。

S K 72出土遺物 (190)

190は土師器鍋である。胎土の小石粒は少なく、口縁部が内彎し、短い。

S K 79出土遺物 (191)

191は土師器小皿である。器壁がやや厚く、口径8.4cmと大きめである。

S K 82出土遺物 (192・193)

192・193は土師器小皿である。192はやや厚手で、193はやや硬質のもので、口縁部の断面が三角形状になっている。

S K 85出土遺物 (194・195)

194は土師器鍋の口縁部である。胎土は精良だが、小石粒が目立ち、器壁が薄い。口縁部の折り返しも小さいため、小形のものであろう。195は山皿で、器高が低く、全体的に扁平な形のため藤澤編年渥美型第6型式のものである。

S K 87出土遺物 (196・197)

196は土師器甕である。口縁部は短く、内側に折り返している。器壁はやや厚手で、胎土に小石粒を多く含んでいるため伊藤編年(仮)A段階のものであろう。197は山茶碗の底部で、使用されていたため内面は磨耗している。藤澤編年渥美型第5型式のものである。

S K 92出土遺物 (198)

198は土師器鍋である。口縁部の折り返し部分が、ヨコナデにより浅く窪んでいるため伊藤編年第1段階b型式のものであろう。

S K 94出土遺物 (199・200)

199は山茶碗で、藤澤編年渥美型第5型式のものである。200は土師質土器小皿の底部である。器壁が厚めである。

S K 104出土遺物 (201)

201は土師器鍋の口縁部である。口縁部端部は丸みをおび、折り返し部分のヨコナデが強く、断面三角形の突出は低い。伊藤編年第3段階a型式の範疇

であろう。

S K 106出土遺物 (202・203)

202は土師器鍋の口縁部である。胎土に小石粒が多く、口縁部端部の折り返しは明瞭で、伊藤編年第1～2段階のものであろう。203は山茶碗の底部である。底部内面は、ロクロナデによる段が見られる。藤澤編年渥美型第5型式のものである。

S K 107出土遺物 (204)

204は山茶碗である。底部が残存しているのみで、高台は低く扁平である。藤澤編年渥美型第5型式のものである。

S K 108出土遺物 (205)

205は山茶碗の底部で、藤澤編年渥美型第5型式のものである。

S K 111出土遺物 (206)

206は山茶碗の口縁部で、端部がやや尖っている。藤澤編年渥美型第6型式のものである。

S K 112出土遺物 (207)

207は鉄製品釘である。頭部は薄く、折り曲げられ、脚部が欠損している。

S K 113出土遺物 (208～210)

208・209は山茶碗で、渥美型のもの。208は高台が高く、断面台形を呈し、藤澤編年第5型式のものである。209は高台が低く、体部が直線的にのび、第6型式のものである。210は土師器鍋である。胎土は小石粒が多く、器壁が厚く密である。口縁部は外反し、端部の折り返しもわずかである。残存が少ないため、口径は推定である。

S K 114出土遺物 (211)

211は土師器鍋である。口縁部が短く、外反している。折り返し部分はヨコナデによってわずかに窪んでいる。伊藤編年第1段階の範疇であろう。

S K 115出土遺物 (212～214)

212は土師器皿である。器壁は薄く、口縁端部は断面三角形状をしている。213は山皿で、底部の糸切が雑である。藤澤編年渥美型第5型式のものである。214は常滑製品である。口縁部が面をなし、底部に向かって緩やかに丸くなっており、把手がつく片口である。中野編年5型式のものであろう。

S K 118出土遺物 (215～217)

215は土師器小皿である。216は同安窯系の青磁皿

である。217は青磁椀で、内面に劃花文が施文され、外面は噴出しが見られる。

S K 119出土遺物 (218)

218は山茶椀で、藤澤編年渥美型第5型式頃のものであろう。

S K 127出土遺物 (219)

219は小皿である。胎土は浅黄橙色をし、硬質である。底部は糸切で、器高は1.2cmと低く、扁平である。土師質土器であろうか。プロポーションは山皿と同じである。山皿を模したものであるならば、藤澤編年第6型式に相当しよう。

S K 136出土遺物 (220~225)

220は土師器小皿である。221・222は土師器鍋である。221は口縁部のヨコナデが強く、222はやや内彎した口縁部で伊藤編年第2段階c型式~3段階のものである。223・224は山茶椀で、渥美型のもの。223は藤澤編年第5型式のもので、内面に重ね焼き痕が残る。224は内面の底部から体部への立ち上がり角が角ばり気味で、藤澤編年第6型式のものである。225は鉄製品釘である。脚部が欠損している。厚さ3mmと薄く、小振りな作りである。

S K 141出土遺物 (226・227)

226は土師器皿である。胎土は淡黄色で、やや硬質、器壁が薄い。227は鉄製品鏃で、脚部のみ残存している。厚み3mmと薄く、小振りである。

S K 144出土遺物 (228)

228は片口鉢の口縁部である。藤澤編年渥美型第5か6型式のものである。

S K 145出土遺物 (229・230)

229・230は山茶椀で、いずれも渥美型のものである。229は底径が小形化し始めた第5型式のもの、230は高台の断面が逆三角形をした第3型式のものである。

S K 150出土遺物 (231)

231は山茶椀で、藤澤編年第6型式のものである。内面には自然釉が付着し、高台の剥離が著しい。

S K 152出土遺物 (232)

232は山茶椀で、藤澤編年尾張型第6型式のものである。内面に重ね焼き痕が残る。

S K 170出土遺物 (233)

233は山茶椀である。高台が逆三角形を呈し、胎

土も細かく、藤澤編年渥美型第4型式のものである。

S K 147出土遺物 (234)

234は片口鉢である。高台は逆三角形で、底部から体部に向かって直線的に開き、藤澤編年尾張型第6型式のものである。

S K 157出土遺物 (235)

235は土師器鍋である。口縁部は、やや内彎している。そして、端部外面を強くヨコナデし、内面の折り返し部分が沈線状に窪んでいる。体部外面には粗い刷毛目が横方向に施されている。伊藤編年第4段階b型式のものであろう。

S K 158出土遺物 (236~243)

236は土師器小皿である。口縁端部に弱いヨコナデが施されている。237・238は土師器皿である。237は口縁端部に強いヨコナデが施され、面を持っている。そして、器壁が厚めである。238は口縁部に粘土紐接合箇所が残っている。239は土師器甕である。胎土に小石粒を多く含み、器壁が厚い。口縁部は短く、折り返し部分のヨコナデは弱い。伊藤編年(仮)A段階のものである。

240・241は山茶椀で、藤澤編年渥美型第5型式と第6型式のものである。240は内面底部にえぐりを入れたのか凹みがある。241は口縁部のみ残存している。242は底部片である。底径が3.7cmと小振りで、瀬戸美濃製品の入子の可能性が高い。入子ならば、古瀬戸前Ⅲ期~中Ⅱ期までのものである。243は片口鉢で、渥美産。胎土が細かく、藤澤編年第3か4型式のものである。

S K 177出土遺物 (244~248)

すべて土師器である。244~246は皿、247・248は鍋である。244・246は器壁が薄く、素地が白色化し、口縁部が内彎する。245は器壁がやや厚い。口縁部に素地接合痕が残る。247は、口縁部が長く、内面の折り返し部分はあまり突出していない。248は口縁部が内彎し、頸部との境が明瞭である。いずれも伊藤編年第3段階の範疇であらう。

S K 178出土遺物 (249・250)

249は土師器小皿である。胎土が白色化し、器壁が薄く扁平である。250は鉄製品鎌で、切先の部分である。

S K 181出土遺物 (251)

251は土師器小皿で、風化が著しい。

S K 183出土遺物 (252~255)

252・253は土師器小皿で、器壁はやや厚い。253は外面底部から口縁部にかけて素地接合痕が残る。254は土師器皿である。255は山茶椀で、内面底部が研磨されている。藤澤編年渥美型第5型式のものである。

S K 187出土遺物 (256)

256は山皿である。口縁部に自然釉が付着している。器壁が厚く、扁平で、底部から口縁部にかけて緩やかに立ち上がる。藤澤編年渥美型第6型式のものである。

S K 193出土遺物 (257)

257は土師器皿である。口径が小さく、表面が剥離しているため、調整が不明瞭である。

S K 190出土遺物 (258)

258は常滑製品玉縁口縁壺である。口縁部を折り返してナデて、断面が三角形形状である。中野編年6 a型式のものである。

S K 211出土遺物 (259)

259は山茶椀の口縁部である。口縁端部は強いヨコナデにより尖っており、藤澤編年尾張型第7型式のものである。

S K 251出土遺物 (260)

260は山茶椀で、藤澤編年尾張第7型式のものである。口縁部には自然釉が付着している。

S K 196出土遺物 (261~271)

すべて土師器である。261~263は小皿である。いずれも硬質である。262は器壁がやや厚く、器高も高い。他は器壁が薄く、扁平である。264~269は皿である。264・269は口径が12cmと大きく、器壁が厚い。265は口縁部が強めにナデられている。268は底部のオサエがしっかりと残り、均一ではない。269は内面底部にナデ調整時に引っ掻いた粘土塊の痕跡が残る。270・271は鍋である。270は小形で、胎土の小石粒は少なめである。口縁部端部のヨコナデは強く、頸部との境が明瞭である。また、体部のハケメは細かく、薄く残る程度である。271は口縁部のみ残存している。器壁は厚く、端部の断面は三角形形状に突出するものの、丸みを帯びている。伊藤編年第2段階頃であろうか。

S K 207出土遺物 (272)

272は土師器鍋の口縁部である。胎土には、小石粒

を多く含み、器壁は厚い。

S K 226出土遺物 (273~275)

273は土師器小皿である。素地が灰白色で、胎土に小石粒をあまり含まない。器高が低く、口径も狭く、扁平である。274は土師器鍋である。口縁部の外側は、焼成不良から色調が異なっている。また、口縁部は短く、少し外反し、頸部・体部は指オサエ痕跡が明瞭に残っている。伊藤編年甕(仮) A~1段階のものであろう。275は山茶椀で、高台の断面は丸味を帯びた逆三角形を呈している。藤澤編年渥美型第5型式のものである。

S K 230出土遺物 (276・277)

276は土師器鍋である。胎土は細かく、小石粒をほとんど含んでいない。口縁部は外反し、頸部との境目がはっきりしている。そして、口縁端部上端はヨコナデが強く、内側を指で挟み込むようにナデて、体部にはハケメが施されている。概ね伊藤編年第3段階b型式の範疇にはいろう。277は鉄製品で、残存長12.7cm、最大幅6mmと細長い。紡錘車の軸であろうか。

S K 262出土遺物 (278)

278は鉄製品釘である。長さが8.4cmで、東沖遺跡出土の釘で最も長い。頭部は、若干丸みを帯びている。

S K 260出土遺物 (279・280)

279・280は土師器小皿である。279は器高が低く、扁平である。また、素地に水分が少なかったためか、表面に亀裂のような筋が多くみられる。280は口縁部に弱いヨコナデが施されている。

S K 238出土遺物 (281・282)

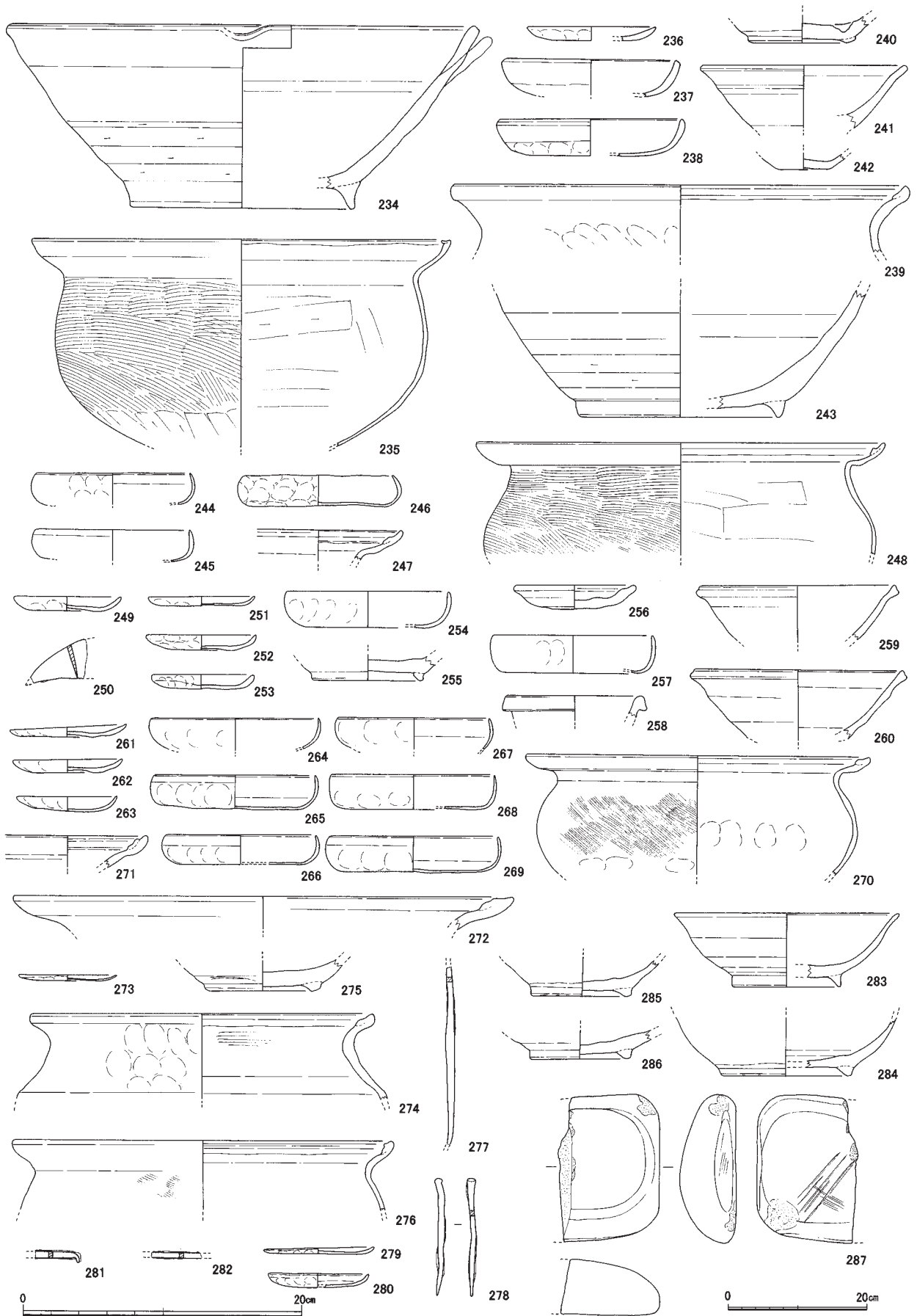
いずれも鉄製品である。281は鋸で、脚部に屈曲が見られる。282は断面四角形で、均一な幅のため鋸になろう。

S K 263出土遺物 (283)

283は山茶椀である。口縁部はゆるやかに外反し、高台は断面三角形で端部は丸味を帯びている。器高は低く、やや扁平になり、胎土は緻密である。283は、藤澤編年第3型式のもので、大アラコ窯[®]より古い。

S K 265出土遺物 (284~286)

284・285は山茶椀で、渥美型のものである。284は高台の端部の所々に粉殻痕が見られる。そして底部から体部へ緩やかに立ち上がる。藤澤編年第4型式



第58図 土坑出土遺物実測図②(1:4、287は1:8)

のものである。285は高台端部に初殻痕が残る。高台も低くなり、第5型式のものである。286は土師質土器碗の底部である。器壁が厚く、小石粒が多い。

S K 199出土遺物 (287)

287は砥石であろう。凝灰質砂岩製で、全面が研磨されている。所々に線条の跡が見られる。

(3) 溝出土遺物 (288～335)

S D 75出土遺物 (288～295)

288・289は土師器鍋である。288は胎土に小石粒が少なく、器壁も薄い。口縁部は長く、頸部の屈曲は明瞭である。内面折り返し部分の突出は平たく、伊藤編年第3段階b型式のものである。289は胎土が精良で、緻密で、橙色をしている。口縁部端部外面を強いヨコナデし、やや内傾している。体部には粗いハケメが見られ、伊藤編年第4段階b型式のものである。

290は山皿で、内面全面に自然釉が付着している。底部から口縁部への立ち上がりはやや丸みを持ち、口縁部は尖っている。藤澤編年尾張型第6型式のものである。291・292は山茶碗である。291は高台が形骸化し低く、藤澤編年渥美型第6型式のものである。292は高台の幅がやや広く、低めで、藤澤編年渥美型第5型式のものである。293は片口鉢の口縁部である。ロクロナデ成形時の指アタリが強い。藤澤編年渥美型第5か6型式になろう。

294・295は鉄製品である。294は器種がわからないため、横置き状態でレイアウトした。残存長7.7cmで、幅が広い左側は、厚みが均一である。右側は、断面がやや楕円形に近い隅丸長方形をしている。鎌の可能性も視野にいたれたが、扁平であり、先端の形状が不明であるので判然としない。295は鏝で、両脚部が残存している。脚部が短いため、先端は欠損している。

S D 105出土遺物 (296・297)

296は土師器小皿である。口縁部は弱いナデ調整され、器壁が厚めである。297は山茶碗で、高台に初殻痕が多く付着している。藤澤編年渥美型第5型式のものである。

S D 124出土遺物 (298～308)

298・299は土師器皿である。298は口径14.0cmと大きく、底部から口縁部への立ち上がりも緩く開いてい

る。300は土師器鍋である。器壁が薄めで、胎土には小石粒が少ない。口縁部は長く、やや内彎している。頸部は「く」の字形に屈曲し、伊藤編年第3段階b型式のものである。

301・302は山茶碗で、渥美型のものである。301は胎土が細かく、高台が高い逆三角形をしている藤澤編年第4型式のものである。302は、高台が低めで、立ち上がりが緩く、藤澤編年第5型式のものである。303は片口鉢の底部である。粗胎土で、内面がよく磨られている。藤澤編年尾張型第6型式のものである。304～306は常滑製品である。304・305は底径が12.2cmと14.5cmのため、壺の底部になろう。306は甕の口縁部である。縁帯が受け口状で、頸部貼り付けが内傾する中野編年5型式のものである。

307・308は鉄製品である。307は、片側がカーブをなし、厚みが下方へいくほど細くなるので、鎌の切先になろう。308は、不明品である。「し」の形状をし、先端が尖っている。上部が欠損しているかはわからなかった。仮に釣針と考えるならば、あぐ[®]がなく、規模が大きいため、釣れる魚の種類は少なくなる。川魚用というより海魚を釣る針なのかもしれない。もしくは、吊り金具のようなものの一節なのかもしれない。

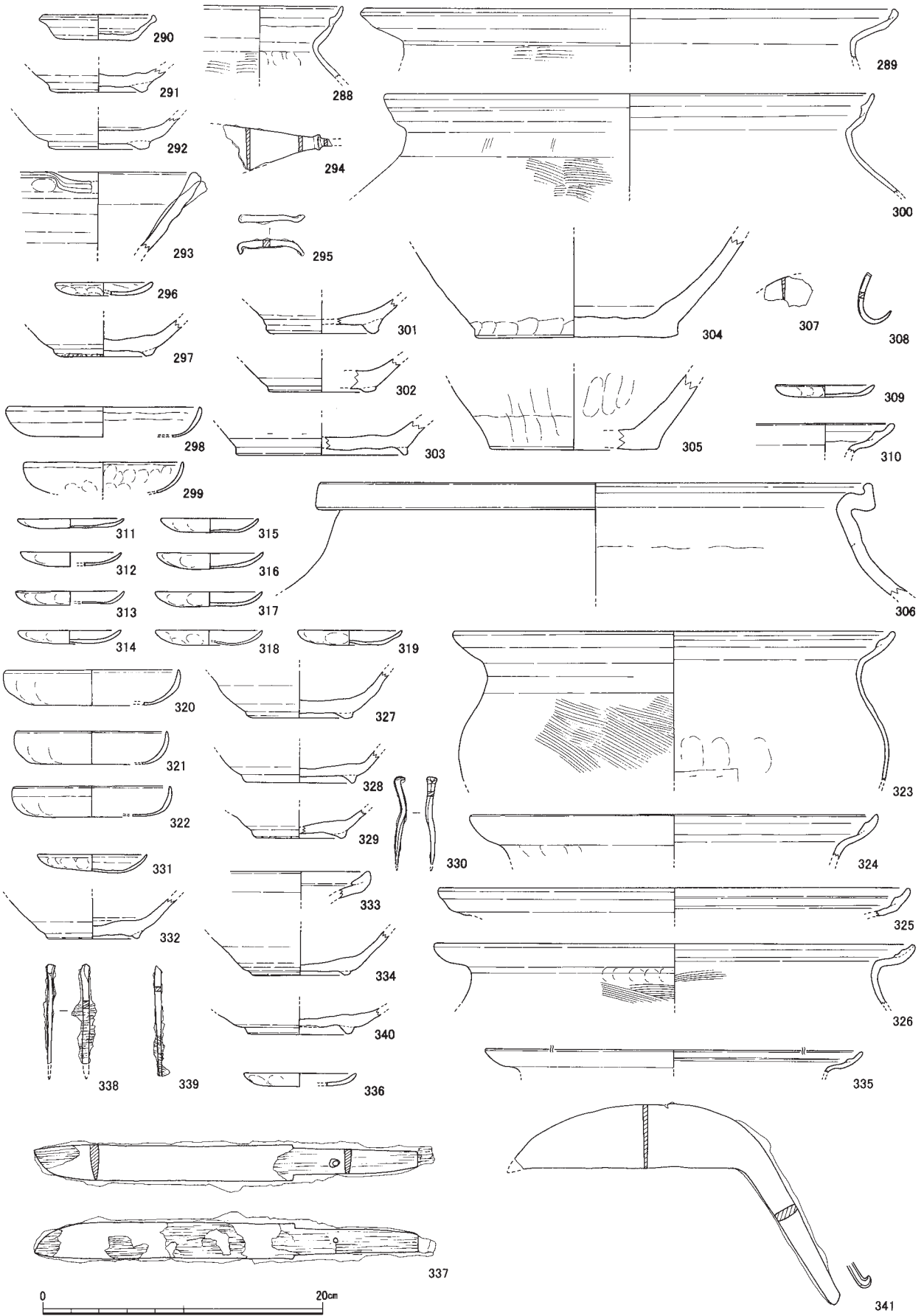
S D 130出土遺物 (309・310)

309は土師器小皿である。310は土師器鍋である。口縁部が短く、折り返し部分の断面が三角形の伊藤編年第2段階c型式である。

S D 212出土遺物 (311～330)

311～319は土師器小皿で、口径7.0～7.8cm、器高0.6～1.2cmのものである。いずれも口縁部を弱くナデ調整している。313は最も大きく、器壁も厚い。315は最も小さく、胎土に小石粒を多く含んでいる。320～322は皿である。320は口径12.6cmと大きく、底部から口縁部へ緩やかに開いている。323～326は土師器鍋である。いずれも口縁部が短く、やや受け口状をしている。胎土はやや粗く、小石粒を含んでいる。326は頸部の屈曲が明瞭であるが、いずれも伊藤編年第2段階c型式の範疇であろう。

327～329は山茶碗である。327は台形状の低めの高台が付き、底部から体部へと緩やかに立ち上がる。藤澤編年渥美型第5型式である。328・329は粗胎土



第59図 溝・墓出土遺物実測図(1:4)

で、高台が低く、底部内面が角張り気味である。藤澤編年尾張型第6型式のものである。330は鉄製品釘である。頭部は、断面が扁平で折り曲げた皆折釘。脚部が曲り、ねじれている。

S D219出土遺物 (331・332)

331は土師器小皿である。硬質で、オサエがよく残り、器高が1.3cmと高い。332は山茶碗である。高台には舂殻痕が付き、高台が低く、底部内面が角張るため、藤澤編年尾張型第6型式のものである。

S D242出土遺物 (333・334)

333は土師器鍋の口縁部である。口縁端部の折り返し部分は幅が広く、ヨコナデにより非常に浅く窪んでいる。伊藤編年第1段階b型式であろう。334は山茶碗で、藤澤編年尾張型第6型式のものである。粗胎土で、高台は低く、貼付けた部分が少し窪んでいる。

S D250出土遺物 (335)

335は土師器鍋である。口縁部小片のため口径は不確定である。口縁部がやや長く、折り返し部分の三角形の突出が薄い。伊藤編年第3段階に該当しよう。

(4) 墓出土遺物 (336～341)

S X99出土遺物 (336～339)

336は土師器小皿である。337は鉄製品小刀である。全長28.5cm、幅3.1cm、最大厚6mmの大きさである。小刀は茎を中心に木質が残存している。338・339は鉄製品釘である。338は頭部にねじれがあり、下半4.4cmに木質が残存している。脚部先端は欠損している。339は、頭部を持たない切釘で、基部先端は斜めである。下半3cmに木質が残存している。

S X122出土遺物 (340)

340は山茶碗の底部である。高台が低く、ゆるやかな体部への立ち上がりから藤澤編年渥美型第5型式のものである。

S X236出土遺物 (341)

341は鉄製品鎌である。切先先端部を欠損するものの、ほぼ完形品である。茎先端は2箇所打ち曲げており、屈曲している。

(5) P i t 出土遺物 (342～391)

土師器 342は土師質土器皿である。口縁端部が丸く肥厚している。鳥貫F2期^⑥に相当しよう。343～356は小皿である。口径は7.1～8.5cmで、器高は浅め

の1cm未満のものと深めの1cm以上のものがある。343・344は硬質、347・348・351・353・356は器壁が厚く、底部外面が指オサエにより凹んでいる。348は口縁部に粘土接合箇所が観察できる。

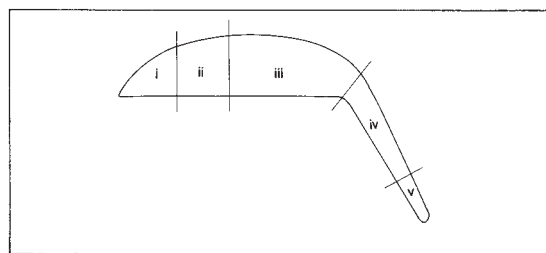
357～361は皿である。357は橙色で、口縁部は肥厚し丸く収めている。358～360は灰白色で、口径12cm前後とやや大きい。361は口径10cmと小ぶりで、器壁が非常に薄く、底部外面に板ナデが見られる。

362～365は鍋である。362は口縁部が短く、内彎している。口縁部の折り返し部分の断面が浅い三角形状をしている。伊藤編年第2段階c型式のものであろう。363・364は胎土に小石粒を多く含んでいる。口縁部が短く、外反して広がる。363は頸部が丸く、体部下半はケズリ調整で、伊藤編年は第1段階a型式のものである。364は口縁の折り返し部分はヨコナデにより浅く凹み、頸部が長いので、伊藤編年第1段階b型式のものである。365は口縁部が長く、やや内彎する。内面の折り返し部分断面の、三角形の突出はやや鋭利である。伊藤編年第3段階a型式であろう。368～370は土師質土器碗である。三角高台で、底部から口縁部にむかって緩やかに立ち上がっている。

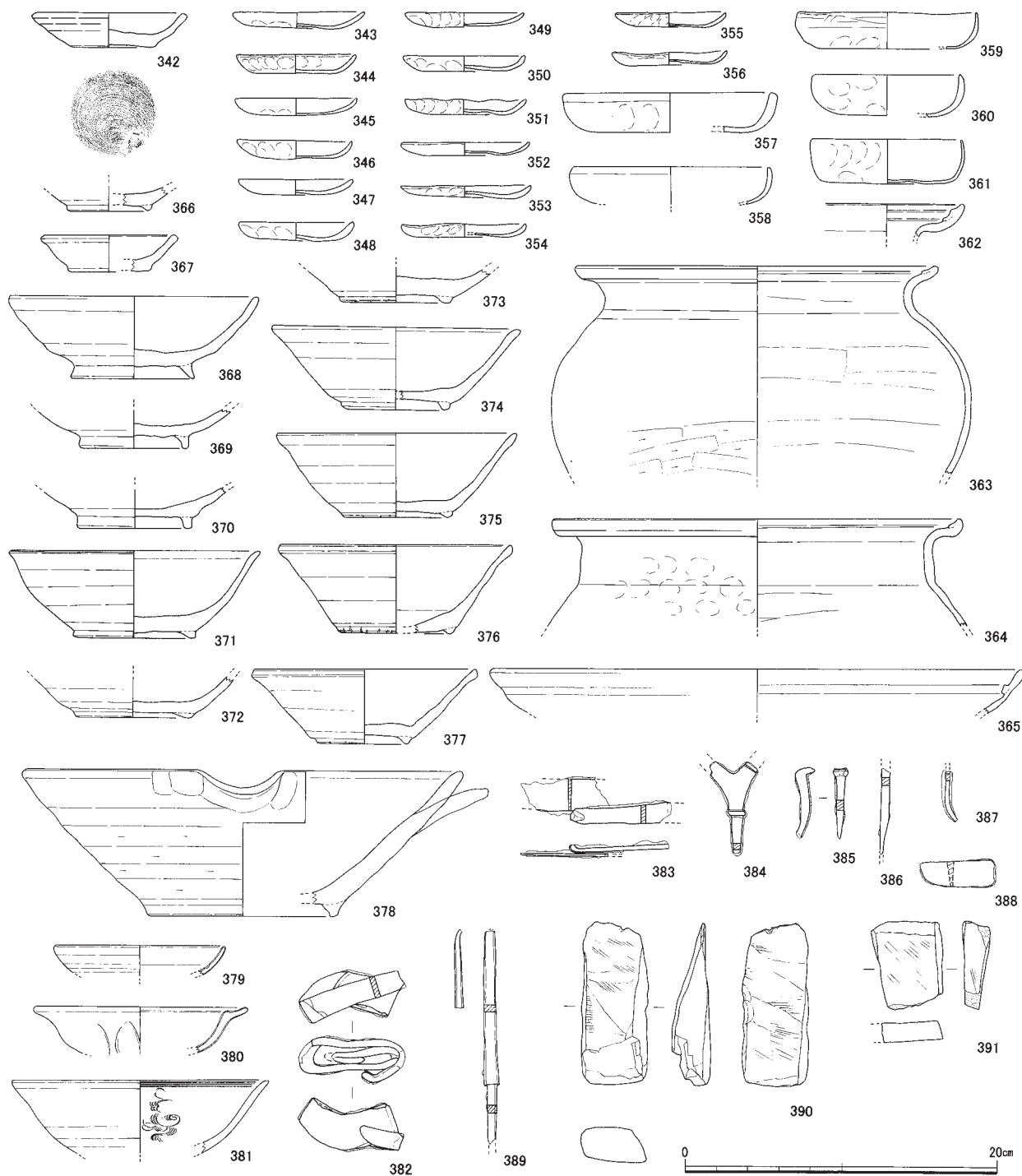
陶器 366は小碗で、藤澤編年渥美型第4型式のものである。内面に自然釉が付着している。367は山皿である。無高台で、底部がやや突出しており、藤澤編年渥美型第5型式のものである。371～377は山茶碗で、371～375は渥美型、376・377は尾張型である。371～373は第5型式で、371は輪花が2箇所見られる。374～376は内面底部と体部の境が浅く凹む第6型式である。374は内面に自然釉が付着している。377は内面底部と体部の境が角張り、口縁端部が尖る、第7型式のものである。また、内面には自然釉と重ね焼き時に剥離した高台が付着している。378は片口鉢である。口縁部を丸くおさめ、内面底部と体部の境がゆるやかに立ちあがる渥美型第6型式のものである。
磁器 379は白磁皿で、屈曲部の内面に沈線状の段がある。380は青磁小鉢、381は青磁碗である。381は内面に飛雲文が見られる。

鉄製品 382は鎌である。鎌は、4回折り曲げられた状態である。X線透過写真で確認すると、以下の6点が見える(第60図模式図、写真図版52参照)。^①i

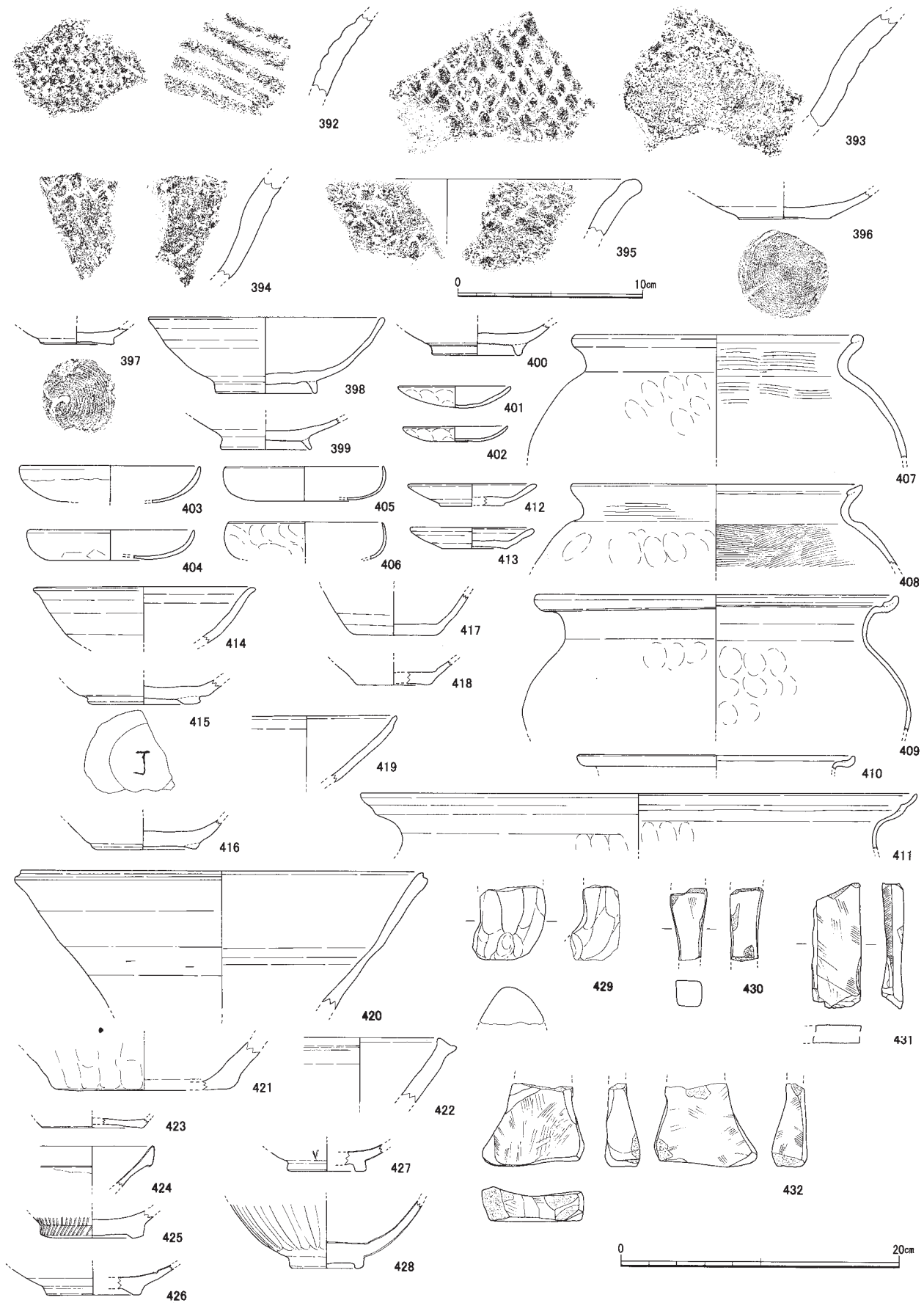
の切先の先端は欠損している。② i と ii の折り込み部分は接地している。③ i と ii を折り曲げた部分は欠損している。④ ii と iii を折り曲げた部分は、折れて離れている。折れた隙間を埋めるように錆が進行し、癒着した状態である。⑤ iii と iv を折り曲げた部分は、折り曲げたことによって屈曲部が切れた状態



第60図 鎌382模式図



第61図 Pit出土遺物実測図(1:4)



第62図 包含層出土遺物実測図①(1:4、392~395は1:3)

である。屈曲部は錆によって癒着している。⑥ivとvを折り曲げた部分は、地金はなく、錆によって癒着した状態である。

383は鎌であろう。残存状況から、二つに折り曲げられ、刃と茎が錆で癒着したと考えられる。茎は先端が打ち曲げられているため、鎌と断定できる。しかし、刃部は欠損が激しいため断定できない。保存処理後、2個体に分離した。

384は、雁股鍬である。両端が欠損している。385～387は釘である。385は頭部折り曲げた皆折釘。386は頭部をもたない切釘で、脚部が急激に細くなっている。387は頭部及び基部の一部を欠いている。脚部は緩やかに曲っている。388は小刀であろう。断面が下部に向かって細くなっており、刃の一部ではなかろうか。389は削鑿であろうか。先端が欠損している。上部先端は、先へ行くほど細くなり、緩やかに曲っている。

石製品 390・391は砥石である。390は結晶片岩もしくは黒色片岩製である。表面と裏面は非常に研磨され、断面は三角形状に尖っている。また、先端は細い錐のようなものを研いだのか、半円状の孔がある

ている。391は凝灰岩製で、三面を研磨している。

(6) 包含層出土遺物 (392～445)

縄文土器 392～395は、縄文土器である。392は外面に楕円文が、内面に斜行沈線が施されている。内面斜行沈線は沈線間が丸く盛り上がる。393～395は内外面に楕円文がつく。395のみ口縁部が残存している。高山寺式期に相当する。

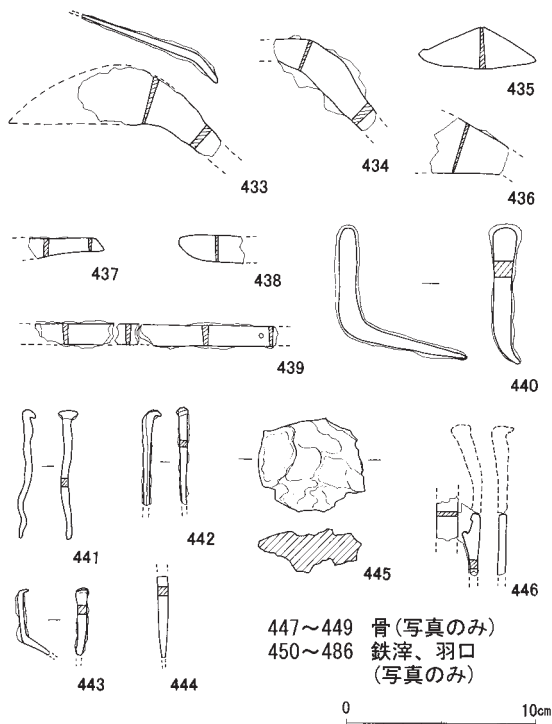
土師器 396～400は土師質土器である。396は皿の底部である。底部から口縁部へと直線的に開いている。397は小皿で、底部から口縁部へと一度屈曲して開いている。398～400は椀である。白灰色で、高台が付く。

401・402は小皿である。401は器高が深く、器壁が厚い。403～406は皿である。403・404は口径が大きく、底部から口縁部が緩やかに開き、器壁が厚い。405・406は灰白色で、器壁が薄い。

407・408は甕である。器壁が厚く、口縁部は短い。体部外面はオサエやナデで、内面はハケメで調整されている。伊藤編年(仮)A段階のものである。409～411は鍋である。小形のものから大形のものまでである。409は口縁端部の立ち上がりが受け口状で、頸部が長く、体部はオサエ・ナデ調整がされ、伊藤編年第1段階b型式に該当する。410は口径20cmと小さく、器壁も薄く、小形品である。口縁部の調整は第1段階b型式～第2段階a型式のようにも見えるが、胎土が細かく、小石粒も少ないことからもう少し後出すると思われる。411は口縁部が長く、頸部内面の稜線は明瞭で、器壁が薄い。伊藤編年第3段階b型式であろう。

陶器 412・413は山皿、414～418は山茶椀である。418は瀬戸産であるが、他は渥美産である。412は無高台で底部が突出する第5型式、413は器高が低く扁平な第6型式のものである。414・415は第5型式、416は第6型式である。415は底部外面に墨書が見られ、「丁」であろうか。417は平底である。内面底部と体部の境が角張り、第7か8型式のものである。渥美で焼いていないタイプ^⑩のようである。418は底径が5.2cmと小さい。そして、底部から体部へ直線的延び、ロクロ目も弱い第8か9型式に該当する。

419は瀬戸美濃製品灰釉平椀の口縁部である。口縁端部がやや尖り、藤澤編年古瀬戸後Ⅱ期のものである。



第63図 包含層出土遺物実測図②(1:4)

る。420は、片口鉢である。粗胎土で、片口鉢Ⅱ類になる。口縁端部が浅く凹み、藤澤編年尾張型第7型式のものである。

421・422は常滑製品である。421は底部の厚みが薄く、片口鉢の底部であろう。422は片口鉢である。硬質で、口縁部が平坦面を持ち、中野編年8型式であろう。

磁器 423は白磁皿である。平底で、全面施釉されており、森田分類Ⅸ-1類にあたる。いわゆる口禿皿である。424~426は白磁碗である。424は口縁部を玉縁にするもので、森田分類Ⅳ類にあたる。425は底部である。高台は厚く、削り出しが浅い。森田分類Ⅳ類にあたり、口縁部には玉縁がつく。426は高台の削り出しが浅く、体部下半はヘラ削り調整で、無釉である。内面見込みに段を持ち森田分類Ⅱ-2類であろう。427・428は青磁碗である。いずれも底部のみ残存し、高台が断面四角形で、高台部畳付およびその内部は露胎している。428は底部の器壁が厚く、外面体部に連弁文がある。龍泉窯系青磁で、森田分類Ⅰ類であろう。

土製品・石製品 429は土製品である。破片のためよ

[註]

- ① 小椀、山皿、山茶碗の編年は、以下の文献による。
藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第3号、三重県埋蔵文化財センター、1994年
- ② 南伊勢系土師器鍋の編年は、以下の文献による。
伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie history』vol. 1、三重歴史文化研究会、1990年
- ③ 豊田裕章「関西における石組み土坑の諸問題」『関西近世考古学研究』Ⅱ 関西近世考古学研究会、1992年
- ④ 中野晴久『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年 発表要旨集～』2005年
- ⑤ 本書でいう石組み遺構とは、性格は不明であるが、土坑内に石が長方形に残っているものを指す。
- ⑥ 『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査報告-第3分冊-楠ノ木遺跡』三重県教育委員会、三重県埋蔵文化財センター、1991年
- ⑦ 藤澤良祐「施釉陶器生産技術の伝播」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年 発表要旨集～』2005年
- ⑧ 赤羽一郎・中野晴久「中世常滑焼の生産地編年」『常滑焼と中世社会』小学館、1995年

くわからない。430~432は砥石である。430は砂質凝灰岩製で、全面が研磨されている。431は凝灰質泥岩製で、削痕のような線条が側面に多い。432は凝灰岩製で、中央部分をよく使用したのか凹みがみられる。

鉄製品 433・434は鎌である。いずれも切先と茎が残存していない。433は刃から茎の間で、屈曲している。434は表面が肌荒れし、肥厚している。435は火打金である。山形をし、基部に穴が開かないタイプである。436は、厚みが2mmと薄く、形状から鎌であろう。437は小刀であろうか。茎の一部であろう。438は小刀の切先である。439は小刀である。刃から茎まで残存する。目釘穴があき、棟区・刃区も角張るような様子もなく、刃から一環して同じ幅である。また、切先部分が欠損している。440~444は釘である。440は大型。441は頭部に若干えぐりが入る。442は、頭部に2面の打ち込みが確認でき、角張っている。脚部は、ねじれが見られる。444は脚部に向かって先細りとなるので釘と判断した。445は碗形滓である。断面が、わずかに半円状をしている。

(酒井巳紀子)

- ⑨ 釘の名称は、以下の文献による。
金箱文夫「近世の釘-川口市赤山陣屋跡の事例を中心に-」『物質文化』43、1984年
- ⑩ 『里前遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター、2002年
- ⑪ 『岩出地区内遺跡群発掘調査報告-一度会郡玉城町岩出所在ケカノ辻・角垣内・蚊山地区の調査-』三重県埋蔵文化財センター、1996年
- ⑫ 森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について-型式分類と編年を中心として-」『太宰府陶磁器研究-森田勉氏遺稿集・追悼論文集-』森田勉氏遺稿集・追悼集刊行会、1995年
- ⑬ 藤澤良祐氏に実見のうえ、ご教授いただいた。
- ⑭ 藤澤良祐氏に実見のうえ、ご教授いただいた。
- ⑮ 部分名称は、以下の文献による。
直良信夫『ものと人間の文化史 17・釣針』法政大学出版局、1976年
- ⑯ 『鳴抜Ⅱ』三重県埋蔵文化財センター、2000年
- ⑰ 藤澤良祐氏に実見のうえ、ご教授いただいた。

遺構番号	グリッド	性格	時期	南伊勢中世	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	間桁×梁	桁行(m)	梁行(m)	建物面積(m ²)	建物方向	建物内土坑	新旧関係(古い→新しい)	備考 SA, SB: 時期決定の根拠
SK1	K5	土坑	13世紀前葉～中葉	Ⅱ期	0.84	0.80	0.27								
SK2	K4	土坑	不明	Ⅰ期かⅡ期かⅢ期	0.60	0.54	0.08								
SK3	I3	土坑	13世紀後葉～14世紀中葉	Ⅱ期	0.74	0.68	0.18								
SK4	J2	土坑	12世紀中葉～後葉	Ⅰ期	0.70	0.48≦	0.17								
SK5	K5	土坑	13世紀後葉～14世紀中葉	Ⅱ期	0.92	0.74	0.23						SK9→SK5		
SK6	J2	土坑	12世紀後葉～13世紀前葉	Ⅱ期	0.62	0.36≦	0.10								
SK7	J5	土坑	13世紀後葉～14世紀前葉	Ⅱ期	0.72	0.72	0.19								
SK8	I6	土坑	11世紀	Ⅰ期	0.54	0.52	0.06								
SK9	K5	土坑	12世紀後葉～13世紀中葉	Ⅱ期	1.00	0.74	0.30						SK9→SK5		切り合いから判断
SK10	K5	土坑	中世	Ⅰ期かⅡ期かⅢ期	0.76	0.72	0.24								
SK11	K6	土坑	13世紀中葉～14世紀前葉	Ⅱ期	1.14	1.00	0.38								
SK12	J4	土坑	12世紀後葉～13世紀前葉	Ⅱ期	0.46	0.38	0.04								
SK13	H2	土坑	12世紀後葉～13世紀中葉	Ⅱ期	0.72	0.64	0.07								
SK14	I5	土坑	13世紀後葉～14世紀中葉	Ⅱ期	0.88	0.80	0.19								
SK15	J6	土坑	12世紀後葉～13世紀前葉	Ⅱ期	0.88	0.88	0.23								
SK16	J5	土坑	不明	Ⅰ期かⅡ期かⅢ期	0.44	0.40	0.11								出土遺物なし
SK17	H4	土坑	13世紀後葉～14世紀中葉	Ⅱ期	0.76	0.66	0.15								
SK18	H4	土坑	12世紀前葉～中葉	Ⅰ期	0.72	0.66	0.12								
SK19	I4	土坑	12世紀後葉～13世紀中葉	Ⅱ期	0.62	0.48	0.05								
SK20	I4	土坑	13世紀中葉～14世紀	Ⅱ期かⅢ期	0.88	0.62	0.05								
SK21		土坑	13世紀後葉～14世紀後葉	Ⅱ期かⅢ期	—	—	—								所在不明
SK22	I5・J5	土坑	12世紀後葉～13世紀前葉	Ⅱ期	1.22	0.74	0.30								
SK23	H3	土坑	12世紀中葉～後葉	Ⅰ期	0.64	0.54	0.07								
SK24	H3	土坑	12世紀前葉～中葉以降	Ⅰ期?	1.72	1.64	0.02						SK27→SK24		切り合いから判断
SK25	F3, F4, G3, G4	土坑	13世紀中葉～14世紀中葉	Ⅱ期	—	—	—								SK25→SK50・58に変更
SK26	I6	土坑	12世紀後葉～13世紀前葉	Ⅱ期	0.84	0.80	0.09								
SK27	H3	土坑	12世紀前葉～中葉	Ⅰ期	0.70	0.70	0.24						SK27→SK24		
SK28	H2	土坑	13世紀後葉～14世紀中葉	Ⅱ期	0.90	0.68	0.26								
SK29	E3	土坑	14世紀前葉～後葉以降	Ⅱ期かⅢ期	0.48	0.44	0.10						SK30→SK29		切り合いから判断
SK30	E3	土坑	14世紀前葉～後葉	Ⅱ期かⅢ期	0.72	0.68	0.17						SK30→SK29		
SK31	E2, F2	土坑	14世紀～15世紀前葉	Ⅱ期かⅢ期	10.40	5.60	0.15								
SK32	E4	土坑	13世紀後葉～14世紀中葉	Ⅱ期	0.62	0.60	0.11								
SK33	E4	土坑	13世紀後葉～14世紀前葉	Ⅱ期	0.52	0.42	0.09								

第13表 遺構一覧表①

遺構番号	グリッド	性格	時期	南伊勢 中世	長さ (m)	幅 (m)	深さ (m)	間 桁×梁	桁行 (m)	梁行 (m)	建物 面積 (㎡)	建物 方向	建物内 土坑	新旧関係 (古い→新しい)	備考 SA, SB: 時期決定の 根拠
SK34	E3	土坑	13世紀後葉～ 14世紀前葉	Ⅱ期	0.70	0.64	0.10								
SK35	E4	土坑	13世紀中葉～ 14世紀前葉	Ⅱ期	0.48	0.46	0.06							SK36→SK35	
SK36	E4	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期	0.78	0.74	0.10							SK36→SK35	
SK37	E4	土坑	13世紀前葉～ 14世紀前葉	Ⅱ期	1.14	0.76	0.34								
SK38	E2, 3	土坑	13世紀中葉～ 14世紀前葉	Ⅱ期	0.60	0.58	0.10								
SK39	E3	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期	0.56	0.50	0.11								
SK40	G2, F2	土坑	14世紀中葉～ 15世紀前葉	Ⅲ期	0.62	0.54	0.07								SB306の柱穴
SK41	D3, D4	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期	0.75	0.71	0.12								
SK42	G2	土坑	13世紀後葉～ 14世紀中葉	Ⅱ期	1.20	0.96≦	0.29								
SK43	E3, D3	土坑	中世	Ⅱ期か Ⅲ期	0.84	0.62	0.08								
SK44	D2, D3	土坑	14世紀中葉～ 15世紀前葉	Ⅲ期	0.76	0.74	0.16							SK48→SK44	切り合いから判断
SK45	D2	土坑	14世紀中葉～ 15世紀前葉	Ⅲ期	0.72	0.64	0.15							SK48→SK45	切り合いから判断
SK46	E3	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期	0.53	0.50	0.14								
SD47	D1, D2, E1, E2	溝	13世紀中葉～ 14世紀中葉	Ⅱ期	4.40	0.40	0.07								
SK48	D2, D3	土坑	14世紀中葉～ 15世紀前葉	Ⅲ期	0.76≦	0.50	0.15							SK48→SK44 SK48→SK45	
SK49	E4	土坑	13世紀後葉～ 14世紀中葉	Ⅱ期	1.30	0.80	0.07							SK78→SK71・72→SK49	
SK50	F2, F3	石組 遺構	13世紀中葉～ 14世紀前葉	Ⅱ期	3.00	1.78	0.14							SK50→SK58→SK98	SB305の建物内土坑 SK58と一連の遺構? 最新の遺物は土師器 鍋第2段階c型式
SK51	D2	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期	0.58	0.52	0.13								
SK52	D3	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期	2.64	0.60	0.10							SK52→SK66	
SK53	D3	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期	0.70	0.68	0.16								
SK54	D3, D4	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期	0.52	0.48	0.17								
SK55	E4	土坑	13世紀中葉～ 後葉	Ⅱ期	0.66	0.54	0.09								
SK56	C4, D4	土坑	12世紀後葉～ 13世紀中葉	Ⅱ期	0.74	0.64≦	0.10							SK56→SK57	
SK57	D4	土坑	12世紀後葉～ 13世紀中葉	Ⅱ期	0.48	0.67	0.27							SK56→SK57	
SK58	F3, F4, G3, G4	石組 遺構	13世紀中葉～ 14世紀中葉	Ⅱ期	4.03	3.04	0.38							SK50→SK58→SK98	SB305の建物内土坑 SK58と一連の遺構? 最新の遺物は土師器 鍋3段階
SK59	E4, E5, F5	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期	0.65	0.65	0.14							SK59→SK60	
SK60	E5, F5	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期	0.68	0.50	0.20							SK59→SK60	
SK61	D4, E4	土坑	13世紀後葉～ 14世紀中葉	Ⅱ期	0.92	0.87	0.39								底に炭化物が薄く広 がる
SK62	D5, E5	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期	0.66	0.54	0.10								
SK63	D5	土坑	12世紀後葉～ 13世紀中葉	Ⅱ期	0.68	0.67	0.15								
SK64	D5, D6, E5, E6	土坑	14世紀前葉～ 15世紀前葉	Ⅲ期	0.68	0.66	0.24							SK67→SB303(D6Pit)→ SK64	
SK65	E5, E6, F6	土坑	13世紀後葉～ 14世紀中葉	Ⅱ期	3.32	2.94	0.57								
SK66	D3	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉以降	Ⅱ期か Ⅲ期	0.64	0.54	0.15							SK52→SK66	

第14表 遺構一覧表②

遺構 番号	グリッド	性格	時期	南伊勢 中世	長さ (m)	幅 (m)	深さ (m)	間 桁×梁	桁行 (m)	梁行 (m)	建物 面積 (㎡)	建物 方向	建物内 土坑	新旧関係 (古い→新しい)	備考 SA, SB: 時期決定の 根拠
SK67	D5, D6, E6	土坑	14世紀前葉～ 15世紀前葉	Ⅲ期	3.49	2.30	0.08							SK68→SK67 SK67→SK73 SK67→SB303(D6Pit)→ SK64	
SK68	D6	土坑	14世紀前葉～ 後葉	Ⅲ期	0.80	0.66	0.20								
SK69	E7	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉以 降	Ⅱ期か Ⅲ期	0.72	0.60	0.10							SK69→SD75	
SK70	D7	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期	1.04	0.74	0.11								
SK71	E4	土坑	13世紀後葉～ 14世紀中葉	Ⅱ期	1.00	0.86	0.25							SK78→SK71・72→SK49	
SK72	E4	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期	0.60	0.53	0.14							SK78→SK71・72→SK49	
SK73	D6, E6	土坑	14世紀前葉～ 15世紀前葉	Ⅲ期	1.00	0.86	0.21							SK67→SK73	
74	—	—	—	—	—	—	—								欠番 SD75と同一遺構
SD75	C6, C7, C8, D6, D7, D8, E6, E7, E8, F6, F7, F8, G7, G8	溝	13世紀後葉～ 15世紀前葉	Ⅱ期 Ⅲ期	15.03	2.20	0.10 0.38							SK69→SD75 SK103→SD75 SK107→SD75 SK116→SK115→SD75 SD75(74)→SK76 SD75(74)→SD105	SD74と同一遺構 SK104・106との切り 合い不明 最新の遺物は土師器 鍋第4段階b型式
SK76	D8	土坑	13世紀後葉～ 15世紀前葉以 降	Ⅲ期	0.81	0.56	0.22							SD75→SK76 SK153→SK76	
SK77	C3, C4	土坑	13世紀後葉～ 14世紀中葉	Ⅱ期	0.87	0.68	0.18								
SK78	E4	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期	0.60	0.53	0.27							SK78→SK71・72→SK49	
SK79	C4	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期	1.13	1.02	0.20								
SK80	F5, G5	土坑	13世紀後葉～ 14世紀中葉	Ⅱ期	1.19	0.93	0.18								
SK81	H7	土坑	12世紀後葉～ 13世紀中葉	Ⅱ期	0.60	0.51	0.11								
SK82	G5	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期	1.04	0.70	0.12								
SK83	G7	土坑	12世紀後葉～ 13世紀中葉	Ⅱ期	0.63	0.62	1.76								
SK84	G7	土坑	12世紀後葉～ 13世紀中葉	Ⅱ期	0.70	0.64	0.07								
SK85	G8	土坑	12世紀後葉～ 13世紀中葉	Ⅱ期	0.72	0.69	0.21								
SK86	F8, G8	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期	0.63	0.62	0.09								SB297の柱穴
SK87	G7, G8	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期	1.18	0.71	0.12								
SK88	D4	土坑	不明	Ⅱ期か Ⅲ期	0.42	0.37	0.29								焼土塊
SK89	J7	土坑	13世紀前葉～ 中葉	Ⅱ期	0.65	0.60	0.12								
SK90	I8, I9	土坑	不明	Ⅱ期か Ⅲ期	0.75	0.75	0.11								
SK91	G7	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期	1.97	1.55	0.07							SK92→SK91→SK101	
SK92	G7	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期	1.11	1.03	0.19							SK92→SK91→SK101	
SK93	H8	土坑	13世紀前葉～ 14世紀前葉	Ⅱ期	0.80	0.75	0.18								
SK94	H8, I8	土坑	12世紀後葉～ 13世紀中葉	Ⅱ期	2.72	0.82	0.25								
SK95	C1, C2	土坑	13世紀後葉～ 14世紀中葉	Ⅱ期	0.88	0.72	0.14								
SK96	K7	土坑	12世紀後葉～ 13世紀中葉	Ⅱ期	1.22	1.17	0.34								
SK97	F6	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期	0.61	0.49	0.10								

第15表 遺構一覧表③

遺構 番号	グリッド	性格	時期	南伊勢 中世	長さ (m)	幅 (m)	深さ (m)	間 桁×梁	桁行 (m)	梁行 (m)	建物 面積 (㎡)	建物 方向	建物内 土坑	新旧関係 (古い→新しい)	備考 SA, SB: 時期決定の 根拠
SK98	G3, G4	土坑	13世紀中葉～ 14世紀中葉以降	Ⅱ期か Ⅲ期	2.02	1.19	0.09							SK50→SK58→SK98	
SX99	J7, K7	墓	13世紀後葉～ 14世紀中葉	Ⅱ期	2.11	0.76	0.33								
SK100	L8, K8	土坑	不明	Ⅰ期か Ⅱ期か Ⅲ期	0.82	0.81	0.17								出土遺物なし
SK101	G7	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期	0.52	0.37	0.09							SK92→SK91→SK101	
SK102	G7, H7	土坑	12世紀後葉～ 13世紀中葉	Ⅱ期	0.65	0.60	0.07								
SK103	F7	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期	0.70	0.65	0.16							SK103→SD75	
SK104	F8	土坑	14世紀前葉～ 15世紀前葉	Ⅲ期	0.84	0.82	0.18							SK106→SK104	SD75との切り合い不明
SD105	G6, G7	溝	13世紀後葉～ 15世紀前葉以降	Ⅲ期	3.54	0.54	0.15							SD75→SD105	
SK106	F8	土坑	12世紀後葉～ 13世紀中葉	Ⅱ期	1.10	0.77	0.13							SK106→SK104	SD75との切り合い不明
SK107	F7	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期	0.80	0.78	0.16								SD75との切り合い不明
SK108	G8	土坑	13世紀後葉～ 14世紀中葉	Ⅱ期	0.68	0.43	0.19							SK110→SK109→SK108	
SK109	G8	土坑	13世紀後葉～ 14世紀中葉	Ⅱ期	0.65	0.64	0.07							SK110→SK109→SK108	
SK110	G8	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期	0.39	0.38	0.16							SK110→SK109→SK108	
SK111	G9	土坑	12世紀後葉～ 13世紀中葉	Ⅱ期	0.67	0.60	0.32								
SK112	H12	土坑	12世紀後葉～ 13世紀中葉	Ⅱ期	0.96	0.71	0.15								
SK113	G8, G9, H9	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期	0.85	0.65	0.24								
SK114	H9	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期	0.63	0.58	0.10								
SK115	F8, F9	土坑	12世紀後葉～ 13世紀中葉	Ⅱ期	0.95	0.90	0.18							SK116→SK115→SD75	
SK116	F9	土坑	12世紀後葉～ 13世紀中葉	Ⅱ期	0.70	0.65	0.12							SK116→SK115→SD75	
SK117	G8, G9	土坑	12世紀後葉～ 13世紀中葉	Ⅱ期	1.06	0.48	0.09								
SK118	H11	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期	0.68	0.59	0.21								鍛造剥片 1 点出土 (鍛造剥片の可能性が 高いもの 1 点出土)
SK119	G9	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期	0.71	0.65	0.17								
SK120	G9, G10, H9, H10	石組 遺構	13世紀前葉～ 後葉	Ⅱ期	3.32	3.28	0.24							SK272→SK120	SB299の建物内土坑 最新の遺物は土師器 鍋第 2 段階 c 型式
SK121	E10, F10	石組 遺構	13世紀中葉～ 14世紀前葉	Ⅱ期	10.16	5.60	0.56							SK121・163→SK137 SK121・162・163→SD130→ SD124 SK121・162・163→SK168	SK121→SK162・163変 更 D10・E10・D11→ SK163 F9・F10・G10⇒SK162
SX122	C8, C9	墓	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅰ期	1.70	0.80	0.22								
SK123	G10	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期	0.83	0.77	0.19								
SD124	A11, B11, C11, D11, E11, D12, E12, F12	溝	13世紀後葉～ 14世紀中葉	Ⅱ期 Ⅲ期	17.0≦	0.6 2.15	0.14 0.39							SK121・162・163→SD130→ SD124	最新の遺物は土師器 鍋第 3 段階 b 型式
SK125	C9	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期	0.62	0.60	0.08								
SK126	C9	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期	0.52	0.51	0.12							SK128→SK126	
SK127	D9	土坑	12世紀後葉～ 13世紀中葉	Ⅱ期	0.63	0.55	0.11								
SK128	D9	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期	0.77	0.69	0.18							SK128→SK126	

第16表 遺構一覧表④

遺構番号	グリッド	性格	時期	南伊勢中世	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	間桁×梁	桁行(m)	梁行(m)	建物面積(m ²)	建物方向	建物内土坑	新旧関係(古い→新しい)	備考 SA, SB: 時期決定の根拠
SK129	D10	土坑	13世紀中葉～ 14世紀中葉	II期	0.53	0.45	0.15								
SD130	B10, C10, B11, C11, D11	溝	13世紀後葉～ 14世紀中葉	II期	6.85≦	1.15	0.13 0.19							SK121・162・163→SD130→ SD124	最新の遺物は土師器 鍋第2段階c型式
SK131	D10	土坑	中世	II期か III期	0.56	0.51	0.14								
SK132	G10	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉以降	II期	0.71	0.54	0.11							SK272→SK132	
SK133	C10	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	II期	0.62	0.56	0.11								
SK134	D11, E11	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	II期	0.60	0.55	0.16								
SK135	E9	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	II期	0.92	0.67	0.20								
SK136	E11, F11	石組 遺構	14世紀前葉～ 15世紀前葉	II期	2.73	2.48	0.26							SK145→SK136 SK278→SK136	SK145・278と一連の 遺構か？
SK137	E9	土坑	13世紀中葉～ 14世紀前葉	II期	1.18	0.75	0.23							SK121・163→SK137	
SK138	B10, C10	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	II期	1.75	0.77	0.11								
SK139	B10, C10	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	II期	0.66	0.65	0.12								
SK140	E9	土坑	12世紀後葉～ 13世紀中葉	II期	0.90	0.75	0.15 0.39								
SK141	H10	土坑	12世紀後葉～ 13世紀中葉	II期	0.75	0.67	0.17							SK141→SK142	
SK142	G10, H10	土坑	12世紀後葉～ 13世紀中葉	II期	1.00	0.92	0.13							SK141→SK142	
SK143	G11	土坑	13世紀中葉～ 後葉	II期	0.87	0.82	0.09							SK144→SK143	
SK144	G11	土坑	13世紀中葉～ 後葉	II期	1.06	0.73	0.25							SK144→SK143	
SK145	E11	土坑	13世紀後葉～ 14世紀中葉	II期	1.68	0.67	0.06							SK145→SK136	SK136と一連の遺構 か？
SK146	J9	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	II期	0.86	0.85	0.16								
SK147	H10, H11	土坑	12世紀後葉～ 13世紀中葉	II期	1.00	0.65	0.20								焼土塊
SK148	F11, G11	土坑	12世紀後葉～ 13世紀中葉	II期	0.72	0.66	0.04								
SK149	H11	土坑	13世紀前葉～ 後葉	II期	1.13	0.96	0.15								
SK150	H12, I12	土坑	12世紀後葉～ 13世紀中葉	II期	0.87	0.81	0.14								
SK151	H12	土坑	中世	II期	0.84	0.76	0.24								
SK152	G11	土坑	12世紀後葉～ 13世紀中葉	II期	0.62	0.33	0.35							SK272→SK152	
SK153	D8	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	II期	0.73	0.71	0.10							SK153→SK76	
SK154	H12, G12	土坑	12世紀後葉～ 13世紀中葉	II期	0.86	0.76	0.26								
SK155	G12	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	II期	0.73	0.65	0.15								
SK156	H13, G13	土坑	13世紀後葉～ 14世紀中葉	II期	1.00	0.90	0.19								
SK157	F13	土坑	15世紀前葉～ 中葉	IV期	0.63	0.59	0.22								
SK158	G9	土坑	13世紀中葉～ 14世紀前葉	II期	0.85	0.69	0.20 0.32								
SK159	G12, G13	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	II期	0.68	0.58	0.15								
SK160	F10, G10	土坑	12世紀後葉～ 13世紀後葉	II期	0.70	0.63	0.21							SK160→SK168	
SK161	G13, H13	土坑	12世紀前葉～ 中葉	I期	1.00	0.81	0.08								
SK162	F9, F10	石組 遺構	13世紀中葉～ 14世紀前葉	II期	—	—	—							SK121・162・163→SK168 SK121・162・163→SD130→ SD124	SB300の建物内土坑 最新の遺物は土師器 鍋第2段階c型式

第17表 遺構一覧表⑤

遺構番号	グリッド	性格	時期	南伊勢 中世	長さ (m)	幅 (m)	深さ (m)	間 桁×梁	桁行 (m)	梁行 (m)	建物 面積 (㎡)	建物 方向	建物内 土坑	新旧関係 (古い→新しい)	備考 SA, SB: 時期決定の 根拠
SK163	E10, E11	石組 遺構	13世紀中葉～ 14世紀前葉	Ⅱ期	—	—	—							SK163→SK162 SK121・162・163→SD130→ SD124 SK121・162・163→SK168 SK121・163→SK137	SB300の建物内土坑 最新の遺物は土師器 鍋第2段階c型式
SK164	F12	土坑	13世紀後葉～ 14世紀中葉	Ⅱ期	0.68	0.55	0.26								
SK165	F12	土坑	13世紀後葉～ 15世紀前葉以降	Ⅱ期か Ⅲ期	0.82	0.73	0.31							SK167→SK165	
SK166	E13, F13	土坑	13世紀中葉～ 14世紀前葉	Ⅱ期	1.82	1.40	0.12								擾乱の可能性あり
SK167	F12	土坑	13世紀後葉～ 15世紀前葉	Ⅱ期か Ⅲ期	—	—	—							SK167→SK165	遺構カードにのみ記 載あり
SK168	F10	土坑	13世紀前葉～ 14世紀前葉以降	Ⅱ期	1.19	0.79	0.29							SK160→SK168 SK121・162→SK168	
SK169	E13, E14	土坑	14世紀中葉～ 15世紀前葉以降	Ⅲ期	1.06	1.03	0.20							SK174→SK169 SB290 (E13P23) →SK169	
SK170	D12, E12	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期	0.74	0.72	0.22								
171		欠番	—	—	—	—	—								欠番 SD124と同一遺構
SK172	E12	土坑	13世紀後葉～ 14世紀中葉	Ⅱ期	0.91	0.83	0.14								
SK173	D13	土坑	中世	Ⅱ期	0.96	0.64	0.13 0.28								SB289の柱穴
SK174	E13	土坑	14世紀前葉～ 後葉	Ⅲ期	0.83	0.80	0.16							SK174→SK169	
SK175	D12	土坑	13世紀後葉～ 14世紀中葉以降	Ⅱ期	0.83	0.57	0.30							SK239→SK176→SK175	
SK176	C12, D12	土坑	13世紀後葉～ 14世紀前葉	Ⅱ期	0.90	0.82	0.29							SK239→SK176→SK175	
SK177	D12	土坑	13世紀後葉～ 14世紀前葉	Ⅲ期	1.78	1.73	0.83							SK184→SK177	
SK178	D12, E12	土坑	13世紀後葉～ 14世紀中葉	Ⅱ期	1.05	0.76	0.31							SK179→SK178→ SB290 (D12P4)	
SK179	D12	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期	0.88	0.80	0.19							SK179→SK178→ SB290 (D12P4)	
SK180	C14	土坑	13世紀後葉～ 14世紀中葉	Ⅱ期	0.74	0.68	0.24								SB293の柱穴
SK181	C13, D13	土坑	14世紀中葉～ 15世紀前葉以降	Ⅲ期	1.12	1.02	0.37							SB290 (D13P14) →SK181	
SK182	D13	土坑	12世紀後葉～ 13世紀後葉	Ⅱ期	0.90	0.78	0.09							SK198→SK182	
SK183	D13	土坑	12世紀後葉～ 13世紀中葉	Ⅱ期	—	—	—							SK183→SK237→SK199	
SK184	D12	土坑	13世紀後葉～ 14世紀前葉以前	Ⅱ期	0.88	0.82	0.23							SK184→SK177	出土遺物なし
SK185	B13	土坑	13世紀中葉～ 14世紀中葉	Ⅱ期	0.90	0.72	0.15							SK195→SK187→SK186→ SK185	
SK186	B13, C13	土坑	13世紀中葉～ 14世紀前葉	Ⅱ期	1.20	1.00	0.30							SK195→SK187→SK186→ SK185	
SK187	B13, C13	土坑	13世紀中葉～ 14世紀前葉	Ⅱ期	1.10	0.90	0.21							SK195→SK187→SK186→ SK185	
SK188	C13	土坑	13世紀前葉～ 後葉	Ⅱ期	1.82	0.77	0.13							SK197→SK188→ SB286 (C13P42)	
SK189	B14, C14	土坑	12世紀後葉～ 13世紀中葉	Ⅱ期	1.70	0.94	0.07							SK189→SB286 (B14P1)	
SK190	B15, B16, C15, C16	土坑	13世紀中葉～ 後葉	Ⅱ期	1.22	1.06	0.40								
SK191	C14	土坑	13世紀後葉～ 14世紀前葉	Ⅱ期	0.58	0.53	0.26								
SK192	B15, C15	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期	0.78	0.63	0.09								
SK193	C14, C15	土坑	13世紀後葉～ 14世紀後葉	Ⅱ期か Ⅲ期	1.33	1.01	0.22								
SK194	B14	土坑	中世	Ⅱ期か Ⅲ期	0.70	0.59	0.09								

第18表 遺構一覧表⑥

遺構番号	グリッド	性格	時期	南伊勢中世	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	間桁×梁	桁行(m)	梁行(m)	建物面積(m ²)	建物方向	建物内土坑	新旧関係(古い→新しい)	備考 SA, SB: 時期決定の根拠
SK195	B13, C13	土坑	12世紀後葉～13世紀前葉	Ⅱ期	1.30	0.50	0.20							SK195→SK187→SK186→SK185	
SK196	C12, C13, D13	土坑	13世紀中葉～14世紀前葉	Ⅱ期	1.39	1.15	0.20							SK214→SK196	SK183内
SK197	C13	土坑	13世紀前葉～後葉	Ⅱ期	1.00	0.55	0.16							SK197→SK188	
SK198	D13	土坑	12世紀後葉～13世紀中葉	Ⅱ期	0.87	0.60	0.07							SK198→SK182	SK213との切り合い不明
SK199	D12	土坑	14世紀前葉～15世紀前葉	Ⅲ期	1.24	1.22	0.45							SK239→SK199 SK183→SK237→SK199	
SK200	D16	土坑	中世	Ⅱ期か、Ⅲ期	0.86	0.84	0.12								
SK201	D16	土坑	12世紀前葉～中葉	Ⅰ期	0.84	0.78	0.16							SK221→SK201	
SK202	E14	土坑	14世紀中葉～15世紀前葉以降	Ⅲ期	0.82	0.64	0.29							SB295 (SK228) → SB294 (SK202)	SB294の柱穴
SK203	B16, C16	土坑	12世紀後葉～13世紀前葉	Ⅱ期	0.60	0.58	0.13								
SK204	C16	土坑	13世紀後葉～14世紀中葉	Ⅱ期か、Ⅲ期	0.79	0.66	0.15								
SK205	C15	土坑	12世紀中葉～13世紀前葉	Ⅱ期	0.67	0.63	0.21							SK206→SK205	
SK206	C15	土坑	12世紀前葉～中葉	Ⅱ期	0.67	0.63	0.15							SK206→SK205 SK206→SK207	
SK207	C15	土坑	12世紀後葉～13世紀前葉	Ⅱ期	0.69	0.63	0.15							SK206→SK207	
SK208	D10	土坑	12世紀後葉～13世紀前葉	Ⅱ期	0.71	0.67	0.20								
SK209	D11	土坑	12世紀後葉～13世紀中葉	Ⅱ期	0.55	0.51	0.06								
SK210	B12	土坑	12世紀後葉～13世紀中葉	Ⅱ期	1.14	0.99	0.25							SK216→SK210	
SK211	C13	土坑	13世紀中葉～14世紀前葉	Ⅱ期	0.92	0.78	0.17								SK183内
SD212	A13～16, B12～17, C17, D17, E17, F17	溝	13世紀中葉～14世紀中葉	Ⅱ期	42.30	0.30 2.30	0.24 0.62							SD222→SD212 SD219→SD212 SD212→SK226	最新の遺物は土師器 鍋第3段階併行
SK213	D12, D13	土坑	12世紀後葉～13世紀前葉	Ⅱ期	1.56	0.46	0.19							SK213→SK237	SK183内
SK214	C12	土坑	13世紀前葉～14世紀前葉以前	Ⅱ期	1.05	0.87	0.17							SK214→SK196	SK183内
SK215	D15	土坑	13世紀後葉～14世紀前葉	Ⅱ期	0.79	0.41	0.42							SK217→SK215	
SK216	B12	土坑	12世紀後葉～13世紀前葉	Ⅱ期	0.61	0.42	0.34							SK216→SK210	
SK217	D15	土坑	13世紀後葉～14世紀前葉	Ⅱ期	1.06	0.40	0.40							SK217→SK215	220(欠番)と同一遺構
SK218	D14	土坑	13世紀後葉～14世紀中葉	Ⅱ期	1.03	0.78	0.12								
SD219	B16, C16	溝	12世紀後葉～13世紀中葉	Ⅱ期	4.50	0.72	0.23							SD219→SD212	
220	欠番	—	—	—	—	—	—								欠番 SK217と同一遺構
SK221	D16	土坑	12世紀前葉～中葉	Ⅰ期	0.86	0.80	0.10							SK221→SK201	
SD222	B14	溝	12世紀後葉～13世紀前葉	Ⅱ期	3.83	0.60	0.16							SD222→SD212	
SK223	E15	土坑	14世紀中葉～15世紀前葉	Ⅲ期	0.80	0.41	0.15 0.35								SB294の柱穴
SK224	F15	土坑	12世紀後葉～13世紀前葉	Ⅱ期	1.10	0.27	0.08								
SK225	C16	土坑	12世紀後葉～13世紀前葉	Ⅱ期	1.04	0.84	0.28								
SK226	C12	土坑	13世紀中葉～14世紀前葉	Ⅱ期	1.98	0.78	0.30							SD212→SK226 SK235→SK236→SK226	
SK227	C17	土坑	中世	Ⅱ期か、Ⅲ期	2.10	0.68	0.17								

第19表 遺構一覧表⑦

遺構番号	グリッド	性格	時期	南伊勢 中世	長さ (m)	幅 (m)	高さ (m)	間 桁×梁	桁行 (m)	梁行 (m)	建物 面積 (㎡)	建物 方向	建物内 土坑	新旧関係 (古い→新しい)	備考 SA, SB: 時期決定の 根拠
SK228	D14, D15, E14, E15	石積み 土坑	14世紀中葉～ 15世紀前葉	Ⅲ期	4.02	4.00	0.76							SB295 (SK228)→ SB294 (SK202) SB295 (SK228)→ SB289 (D14C14)	SB295の建物内土坑 最新の遺物は土師器 鍋第4段階c型式
SK229	F15	土坑	13世紀後葉～ 14世紀中葉	Ⅱ期	—	—	—								SK229→SK238・240に 変更
SK230	F14	土坑	14世紀中葉～ 15世紀前葉	Ⅲ期	0.86	0.63	0.21 0.06							SK230→SK231	
SK231	F14	土坑	14世紀中葉～ 15世紀前葉	Ⅲ期	0.90	0.55	0.31							SK230→SK231	
SK232	F14	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期	0.64	0.63	0.17								
SK233	C16, D16	土坑	不明	Ⅲ期	1.58	1.21	0.14								出土遺物なし
SD234	H13, H14	溝	中世	Ⅱ期か Ⅲ期	2.90	1.09	0.36								
SK235	C12	土坑	13世紀中葉～ 14世紀前葉以前	Ⅱ期	0.47	0.39	0.14							SK235→SK236→SK226	
SX236	C12	墓	13世紀中葉～ 14世紀前葉	Ⅱ期	1.25	1.21	0.59							SK235→SX236→SK226	
SK237	D12	土坑	12世紀後葉～ 13世紀中葉	Ⅱ期	0.87	0.48	0.07							SK183→SK237→SK199	
SK238	F15	土坑	13世紀後葉～ 14世紀前葉	Ⅱ期	0.57	0.41	0.22							SK240→SK238	SK229→SK238・240に 変更 出土遺物なし
SK239	D12	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期	1.00	0.46	0.22							SK239→SK176→SK175 SK239→SK199	
SK240	F15	土坑	13世紀後葉～ 14世紀前葉	Ⅱ期	0.55	0.45	0.15							SK240→SK238	SK229→SK238・240に 変更
SK241	K14, K15	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期	1.52	0.72	0.42								
SD242	A19～21, B18, B19, C18, C19, D18, D19, E18, F18	溝	13世紀前葉～ 後葉	Ⅱ期	29.2≧	1.00 3.40	0.20 0.30								SD271と切り合い不明 最新の遺物は山茶碗 第7型式
SK243	C20	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期	0.88	0.88	0.09							SK244→SK243	
SK244	C20	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期	1.08	0.85	0.11							SK244→SK243	
SK245	C20	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期	0.92	0.70	0.23								SB283の柱穴
SK246	C21	土坑	12世紀後葉～ 13世紀中葉	Ⅱ期	0.77	0.58	0.08								
SK247	G13	土坑	13世紀後葉～ 14世紀前葉	Ⅱ期	1.05	0.59	0.28							SK247→SD250→SD280	
SK248	C21, D21	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期	3.21	1.99	0.16								
SK249	D21	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期	1.07	1.05	0.30 0.47								
SD250	F12, F13, G12, G13	溝	13世紀後葉～ 14世紀後葉	Ⅱ期 Ⅲ期	2.54	1.50	0.12							SK247→SD250→SD280	最新の遺物は土師器 鍋第3段階a型式
SK251	C12	土坑	12世紀後葉～ 13世紀中葉	Ⅱ期	1.05	0.67	0.18							SK252→SK251	
SK252	C12	土坑	12世紀後葉～ 13世紀中葉	Ⅱ期	1.34	1.28	0.28							SK252→SK251 SK252→SK267	
SD253	F12, F13, G12, G13	溝	13世紀後葉～ 14世紀後葉	Ⅱ期 Ⅲ期	1.96	0.95	0.34								SD250内 SD250と同時期と判断
SK254	G12	土坑	13世紀後葉～ 14世紀後葉	Ⅱ期 Ⅲ期	1.05	0.64	0.30								SD250内 SD250と同時期と判断
SK255	B21	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期	1.52	0.79	0.08							SK279→SK255	
SK256	B22, B23, C22, C23, D22, D23	土坑	13世紀中葉～ 14世紀前葉	Ⅱ期	6.30	4.20	0.48								SB281の建物内土坑
SK257	D23	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期	0.68	0.47	0.17							SK275→SK258→SK257	
SK258	D22, D23	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期	1.14	0.80	0.22							SK275→SK258→SK257	

第20表 遺構一覧表⑧

遺構 番号	グリッド	性格	時期	南伊勢 中世	長さ (m)	幅 (m)	深さ (m)	間 桁×梁	桁行 (m)	梁行 (m)	建物 面積 (㎡)	建物 方向	建物内 土坑	新旧関係 (古い→新しい)	備考 SA, SB: 時期決定の 根拠
SK259	C21	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期	1.39	0.86	0.06								
SK260	F13	土坑	13世紀後葉～ 14世紀後葉	Ⅱ期 Ⅲ期	0.93	0.53	0.33								SD250内 SD250と同時期と判断
SK261	F14, G14	土坑	13世紀後葉～ 14世紀後葉	Ⅱ期 Ⅲ期	0.59	0.55	0.12							SD280→SK263→SK262→ SK261	
SK262	F14, G14	土坑	13世紀後葉～ 14世紀後葉	Ⅱ期 Ⅲ期	0.76	0.71	0.27							SD280→SK263→SK262→ SK261	
SK263	F14, G14	土坑	13世紀後葉～ 14世紀後葉	Ⅱ期 Ⅲ期	0.87	0.75	0.26							SD280→SK263→SK262→ SK261	
SK264	D22	土坑	13世紀中葉～ 14世紀前葉	Ⅱ期	0.90	0.58	0.11							SK275→SK264	
SK265	F23, F24, G23, G24	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期	4.00	2.00≤	0.11								
SK266	E14, E15	土坑	14世紀中葉～ 15世紀前葉以前	Ⅱ期	0.85	0.75	0.14							SK266 (SB294) → SK202 (SB294)	SB294の柱穴
SK267	B12, C12	土坑	12世紀後葉～ 13世紀中葉	Ⅱ期	2.00	1.30	0.18							SK252→SK267	
SK268	E23	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期	0.91	0.86	0.20								
SD269	B19, C19, D19	溝	13世紀前葉～ 後葉	Ⅱ期	8.80	1.30	0.10								SD242と切り合い不明 SD242と同時期と判断
SD270	F14	溝	13世紀後葉～ 14世紀後葉	Ⅱ期	2.18	0.30	0.11								最新の遺物は土師器 鍋第2段階c型式～ 第3段階
SD271	A18, B18, C18, D18	溝	12世紀後葉～ 13世紀後葉	Ⅱ期	9.40	0.4 0.8	0.38 0.60								SD242と切り合い不明
SK272	G10, G11	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期	1.60	1.60	0.12							SK272→SK120 SK272→SK132 SK272→SK152	
SK273	H14	土坑	不明	—	—	—	—								表土掘削時に削平 土層断面図・写真図 版34に記載
SX274	B7, B8	墓	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期	1.54	0.81≤	0.44								
SK275	D22, D23	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期	1.17	0.86	0.08							SK275→SK264 SK275→SK258→SK257	
SD276	A16, A17	溝	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期	2.42	0.38	0.13								
SK277	E4	土坑	不明	Ⅱ期	0.88	0.62	0.08								出土遺物なし
SK278	F11	土坑	14世紀前葉～ 15世紀前葉以前	Ⅱ期	0.73	0.50	0.06							SK278→SK136	SK136と一連の遺構 か？ 出土遺物なし
SK279	B21	土坑	12世紀後葉～ 13世紀前葉以前	Ⅱ期	0.59	0.40	0.04							SK279→SK255	出土遺物なし
SD280	F13, F14	溝	13世紀後葉～ 14世紀後葉	Ⅱ期 Ⅲ期	2.32≤	0.53	0.11							SK247→SD250→SD280→ SK263→SK262→SK261	
SB281	B・C・D21, B・C・D22, B・C・D23	掘立柱 建物	13世紀中葉～ 14世紀前葉	Ⅱ期				3×2	6.15	5.00	30.75	1	SK256	SB285 (C21P40) → SB281 (C21P42)	SK256の時期
SB282	B・C21, B・C・D22	掘立柱 建物	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期				2×2	5.40	4.05	21.87	1W			
SB283	B・C20, B・ C21	掘立柱 建物	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期				3×2	5.55	3.60	19.98	4		SB283 (B21P15, B21P29) → SB285 (B21P16, B21P22)	
SB284	B・C20, B・ C21, B・C22	掘立柱 建物	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期				2×2	5.25	3.60	18.90	6		SK259→SB284 (C21P43) SB284 (B22P7) →SK256	
SB285	B・C20, B・C21, B・C22	掘立柱 建物	13世紀前葉～ 後葉	Ⅱ期				4×2	8.30	3.90	32.37	3		SB283 (B21P15, B21P29) → SB285 (B21P16, B21P22) SB285 (C21P40) → SB281 (C21P42)	
SB286	A12, B・C13, B14	掘立柱 建物	13世紀前葉～ 後葉	Ⅱ期				3×2	5.55	2.90	16.10	8W		SK188→SB286 (C13P42) SK189→SB286 (B14P1)	
SB287	B・C・D13	掘立柱 建物	13世紀中葉～ 14世紀前葉	Ⅱ期				2×2	4.65	3.75	17.44	1W			
SB288	D・E12, C・D・E13, C・D14	掘立柱 建物	13世紀前葉～ 後葉	Ⅱ期				3×2	5.25	5.10	26.78	2W		SK179→SB288 (E12P7)	

第21表 遺構一覧表⑨

遺構番号	グリッド	性格	時期	南伊勢 中世	長さ (m)	幅 (m)	深さ (m)	間 桁×梁	桁行 (m)	梁行 (m)	建物 面積 (㎡)	建物 方向	建物内 土坑	新旧関係 (古い→新しい)	備考 SA, SB : 時期決定の 根拠
SB289	C・D・E13, C・D14	掘立柱 建物	14世紀中葉～ 15世紀前葉	Ⅲ期				3×2	5.85	4.25	24.86	4W		SB295 (SK228)→ SB289 (D14P14)	D14P19をSB290と共用
SB290	C・D・E12, D・E13, C・D14	掘立柱 建物	14世紀中葉～ 15世紀前葉	Ⅲ期				4×4	7.50	6.20	46.50	2W		SK179→SK178→ SB290 (D12P4) SB290 (E13P23)→SK169 SB290 (D13P14)→SK181	SK228と切り合い不明 D14P19をSB289と共用
SB291	G14・15・16	掘立柱 建物	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期				2×2	4.35	4.20	18.27	6W			
SB292	B・C21, B・C22	掘立柱 建物	12世紀後葉～ 13世紀中葉	Ⅱ期				2×2	4.05	3.55	14.38	1W			
SB293	B・C12, B・C13	掘立柱 建物	13世紀中葉～ 14世紀前葉	Ⅱ期				2×2	5.05	3.90	19.70	4W			
SB294	D・E14, D15	掘立柱 建物	14世紀中葉～ 15世紀前葉	Ⅲ期				5×3	5.55	4.05	22.48	1W		SB295 (SK228)→ SB294 (SK202)	
SB295	D・E・F14, D・E・F15	掘立柱 建物	14世紀中葉～ 15世紀前葉	Ⅲ期				4×3	7.05	5.55	39.13	1	SK228	SB295 (SK228)→ SB289 (D14P14) SB295 (SK228)→ SB294 (SK202)	SK228の時期
SB296	D・E8, C・D9, C・D10	掘立柱 建物	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期				2×2	4.35	3.15	13.70	6W			
SB297	F・G8, F・G9	掘立柱 建物	13世紀後葉～ 14世紀前葉	Ⅱ期				2×2	4.95	3.60	17.82	6W		SB287 (F8P28)→SD75	
SB298	F・G8, F・G9	掘立柱 建物	13世紀前葉～ 後葉	Ⅱ期				2×2	4.05	2.85	11.54	4W		SB298 (F8P6)→SD75	
SB299	G9, G10	掘立柱 建物	13世紀前葉～ 後葉	Ⅱ期				2×1	3.60	2.25	8.10	3W	SK120		SK120の時期
SB300	D9, D・E・F10	掘立柱 建物	13世紀中葉～ 14世紀前葉	Ⅱ期				4×1	7.80	3.00	23.40	3W	SK121 SK162 SK163	SB300 (SK121・162・163)→ SB307 (E9Pit)	SK121・162・163の時期
SB301	H8, H9, H10	掘立柱 建物	12世紀後葉～ 13世紀中葉	Ⅱ期				2×2	4.80	2.80	13.44	0			
SB302	D・E4, D・E5, D・E6	掘立柱 建物	12世紀後葉～ 13世紀前葉	Ⅱ期				2×1	4.20	2.70	11.34	1W		SB302 (E6Pit)→ SB303 (E6P2)	
SB303	D4, D・E・F5, E・F6	掘立柱 建物	14世紀前葉～ 15世紀前葉	Ⅲ期				4×2	6.35	4.05	25.72	2W		SK67→SB303 (D6Pit)→ SK64 SB302 (E6Pit)→ SB303 (E6P2)	
SB304	F4, G4	掘立柱 建物	13世紀中葉～ 14世紀中葉	Ⅱ期				2×2	4.65	2.60	12.09	4W		SB305 (SK58)→ SB304 (F4Pit)	
SB305	F・G3, F・G4	掘立柱 建物	13世紀中葉～ 14世紀中葉	Ⅱ期				3×2	4.35	3.40	14.79	3W	SK25 SK50 SK58	SB305 (SK58)→ SB304 (F4Pit) SB305 (SK50)→ SB306 (F3P23)	SK25・50・58の時期
SB306	F・G2, F・G3	掘立柱 建物	14世紀前葉～ 15世紀前葉	Ⅲ期				2×2	4.40	3.75	16.50	2W		SB305 (SK50)→ SB306 (F3P23)	
SB307	E8・9, F9	掘立柱 建物	13世紀中葉～ 14世紀前葉	Ⅱ期				2×2	5.35	3.60	19.26	3W		SB300 (SK121・162・163)→ SB307 (E9Pit)	

第22表 遺構一覧表⑩

報告 番号	実測 番号	器種等	小地 区	遺構名	法量 (cm)			残存度	調整・技法などの特徴	胎土	焼成	色調	特記事項
					口径	器高	底径						
1	035-06	土師器 皿	C22	SK256	11.8	2.4	—	口縁部 6/12	外：オサエ、ナデ 内：オサエ、ナデ	やや 密	並	灰白	
2	035-05	土師器 皿	C22	SK256	11.6	2.5	—	口縁部 4/12	外：オサエ、ナデ 内：オサエ、ナデ	やや 密	並	灰白	
3	035-04	土師器 皿	C22	SK256	12.2	2.8	—	口縁部 7/12	外：オサエ、ナデ 内：オサエ、ナデ	やや 密	並	灰白	
4	039-07	陶器 山皿	D22	SK256- ④	8.4	1.7	—	口縁部 3/12	外：ロクロナデ、底部糸切 内：ロクロナデ	密	良	灰白	内面：自然釉 尾張型第6型式
5	035-02	陶器 山茶椀	C22	SK256- ④	—	—	6.3	底部 11/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	やや 密	良	灰白	渥美型第5型式
6	035-03	陶器 山茶椀	C23	SK256	14.2	5.4	6.8	底部 6/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	やや 密	良	灰白	渥美型第6型式
7	035-01	陶器 片口鉢	C22	SK256- ①	29.8	11.8	14.2	底部 5/12	外：ロクロナデ、ロクロケズリ、底部糸切、高 台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	やや 密	良	灰白	尾張型第6型式
8	069-03	土師器 小皿	C22 Pit5	SB282	7.2	1.0	—	口縁部 3/12	外：オサエ、ナデ、ヨコナデ 内：ヨコナデ	密	良	浅黄橙	
9	069-04	陶器 山茶椀	C21 Pit4	SB283	—	—	—	口縁部 1/12	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	
10	069-05	土師器 鍋	B20 Pit3	SB285	—	—	—	口縁部 1/12	外：オサエ、ヨコナデ 内：オサエ、ヨコナデ	密	並	にぶい 橙 にぶい 黄 橙	
11	069-06	土師器 皿	B13 Pit4	SB286	12.6	2.5	—	口縁部 3/12	外：ナデ、工具ナデ、ヨコナデ 内：ヨコナデ	密	並	淡黄	
12	069-02	土師器 小皿	C13 Pit7	SB288	7.0~ 7.4	1.0	—	口縁部 3/12	外：オサエ、ナデ 内：オサエ、ナデ	密	並	灰白	
13	069-01	土師器 小皿	C13 Pit7	SB288	8.6	0.8	—	口縁部 3/12	外：オサエ、ナデ 内：オサエ、ナデ	密	並	灰白	内面：煤付着
14	069-07	土師器 小皿	C14 Pit1	SB289	8.0	0.85	—	口縁部 3/12	外：オサエ、ナデ 内：オサエ、ナデ	密	並	浅黄橙	
15	065-02	石製品 砥石	D14 Pit14	SB289	長 5.45	幅 3.75	厚 0.9	重量 30g	—	—	—	—	
16	051-02	土師器 鍋	D14 Pit19	SB289 SB290	33.0	—	—	口縁部 1/12	外：ハケメ、オサエ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	灰白	
17	051-01	土師器 鍋	D14 Pit19	SB289 SB290	36.0	—	—	口縁部 3/12	外：ハケメ、ケズリ、オサエ、ヨコナデ 内：工具ナデ、オサエ、ヨコナデ	密	良	灰黄褐 灰白	外：煤付着
18	069-10	土師器 小皿	D13 Pit9	SB290	7.2	0.9	—	口縁部 2/12	外：オサエ、ナデ 内：オサエ、ナデ	密	並	灰白	
19	057-03	土師器 小皿	D13 Pit16	SB290	9.0	1.0	—	口縁部 5/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	やや 密	並	灰白	
20	069-08	土師器 皿	D14 Pit19	SB290	—	—	—	口縁部 1/12	外：ナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	並	浅黄橙	
21	069-12	土師器 鍋	D13 Pit8	SB290	—	—	—	口縁部 1/12	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密	並	浅黄橙	
22	069-09	土師器 鍋	D14 Pit19	SB290	—	—	—	口縁部 1/12	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密	並	灰黄褐 灰白	
23	070-01	陶器 山茶椀	D12 Pit4	SB290	—	—	—	口縁部 1/12	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	
24	069-11	陶器 山茶椀	D14 Pit19	SB290	—	—	7.6	底部 6/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	
25	009-06	鉄製品 錠	D13 Pit14	SB290	長 6.5	幅 0.9	厚 0.4	—	—	—	—	—	手違い錠
26	056-05	土師質土 器小皿	G16 Pit1	SB291	10.2	1.3~ 2.1	5.1~ 5.4	底部 12/12	外：ロクロナデ、底部糸切 内：ロクロナデ	密	良	浅黄橙	歪みあり
27	070-02	土師器 皿	C21 Pit11	SB292	—	—	—	口縁部 1/12	外：オサエ、ナデ 内：オサエ、ナデ	密	不良	灰白	
28	052-05	陶器 山茶椀	B21 Pit7	SB292	14.2	5.5	6.5	底部 2/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	渥美型第6型式
29	070-03	土師器 皿	C12 Pit4	SB293	—	—	—	口縁部 1/12	外：オサエ、ナデ 内：オサエ、ナデ	密	並	浅黄橙	
30	034-02	土師器 甕	B13 SK180	SB293	21.2	—	—	口縁部 2/12	外：オサエ、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	やや 密	不良	灰白	
31	034-01	土師器 甕	B13 SK180	SB293	23.0	—	—	口縁部 3/12	外：オサエ、工具ナデ、ヨコナデ 内：工具ナデ、ヨコナデ	やや 密	並	灰褐、に ぶい 黄 橙	外：煤付着
32	070-06	土師器 鍋	E14 Pit7	SB294	—	—	—	口縁部 1/12	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密	並	灰褐、に ぶい 黄 橙	外：煤付着
33	032-04	土師質土 器 皿	E14	SK228- ③トレンヂ	—	—	7.0	底部 5/12	外：ロクロナデ、底部糸切 内：ロクロナデ	やや 密	不良	浅黄橙	
34	070-04	土師器 小皿	D15 Pit10	SB295	6.6	1.1	—	口縁部 3/12	外：オサエ、ナデ 内：オサエ、ナデ	密	並	灰白	
35	029-03	土師器 小皿	D14	SK228- ⑤	8.2	1.1	—	口縁部 3/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	やや 密	並	灰白	
36	029-04	土師器 皿	E14	SK228- ①	9.3	—	—	口縁部 2/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	密	並	浅黄橙	
37	029-02	土師器 鍋	D14	SK228- ①トレンヂ	—	—	—	口縁部 1/12	外：ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	並	灰白	

第23表 遺物観察表①

報告 番号	実測 番号	器種等	小地 区	遺構名	法量 (cm)			残存度	調整・技法などの特徴	胎土	焼成	色調	特記事項
					口径	器高	底径						
38	029-01	土師器 鍋	D14	SK228	27.2	—	—	口縁部 1/12	外：オサエ、ナデ、ヨコナデ 内：オサエ、ナデ、ヨコナデ	やや 粗	並	浅黄橙	外：煤付着
39	064-01	土師器 羽釜	D14	SK228- ②	33.8	—	—	口縁部 2/12	外：ナデ、ハケメ、ヨコナデ、鏝貼付 内：ナデ、ヨコナデ	やや 粗	並	浅黄橙	
40	025-03	陶器 山茶椀	E14	SK228- ④	—	—	6.9	底部 11/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	渥美型第5型式
41	025-01	陶器 山茶椀	E14	SK228- ④礫中	—	—	8.6	底部 4/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	渥美型第5型式
42	025-02	陶器 山茶椀	E14	SK228- ④礫中	—	—	7.8	底部 6/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	渥美型第5型式
43	031-04	陶器 山茶椀	E15	SK228- ⑥	—	—	8.0	底部 5/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	渥美型第5型式
44	031-02	陶器 山茶椀	E14	SK228- ②	—	—	9.6	底部 9/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	やや 密	やや 良	灰白	渥美型第5型式
45	031-03	陶器 山茶椀	E14	SK228- ④	—	—	8.6	底部 3/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	やや 密	良	灰白	渥美型第5型式
46	032-03	陶器 平椀	D14	SK228- ②トノナ	—	—	5.2	底部 4/12	外：ロクロナデ、底部ナデ、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ、施釉	密	良	灰白	瀬戸美濃製品 古瀬戸後Ⅰ期
47	031-01	陶器 片口鉢	D14 E14	SK228- ⑤	—	—	14.6	底部 2/12	外：工具ナデ 内：ナデ	やや 密	良	灰黄	渥美 片口鉢Ⅱ類？
48	030-03	陶器 甕	D14 E14	SK228- ⑤	—	—	—	底部 1/12	外：工具ナデ、ナデ 内：ハケメ	やや 密	良	にぶい赤 褐	常滑製品
49	030-04	陶器 片口鉢	E14	SK228- ②	—	—	—	底部 1/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	やや 粗	良	にぶい赤 褐	常滑製品
50	030-02	陶器 片口鉢	E14	SK228- ①礫中	—	—	12.0	底部 4/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	やや 密	良	灰	常滑製品
51	030-01	陶器 片口鉢	D14	SK228- ⑥	31.2	—	—	口縁部 1/12	外：工具ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	褐灰	常滑製品
52	031-05	陶器 甕	D14 E14	SK228- ⑤外	—	—	—	口縁部 1/12	外：ナデ、施釉 内：ナデ、施釉	密	良	灰白	渥美 12世紀
53	032-02	陶器 三筋壺	E14	SK228- ⑦・⑧	—	—	—	頸部 5/12	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	良	にぶい橙	
54	030-05	石製品 砥石	D14 E14	SK228- ⑤	長 4.8	幅 4.8	厚 2.65	重量 90g	—	—	—	—	凝灰岩
55	009-05	鉄製品 釘	D14 E14	SK228- ①	長 4.6	幅 1.0	厚 0.4	—	—	—	—	—	
56	009-08	鉄製品 鏝	D14	SK228- ①	長 3.7	幅 0.6	厚 0.2	—	—	—	—	—	
57	009-07	鉄製品 鏝	D14	SK228- ②	長 1.9	幅 0.4	厚 0.2	—	—	—	—	—	
58	004-07	鉄製品	E14	SK228- ⑦	長 3.1	幅 2.5	厚 0.3	—	—	—	—	—	
59	004-08	鉄製品 鎌	E14	SK228- ⑦	長 5.0	幅 4.1	厚 0.3	—	—	—	—	—	
60	070-05	土師器 皿	F9 Pit18	SB297	—	—	—	口縁部 1/12	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密	並	浅黄橙	
61	017-07	陶器 山皿	G7 SK86 No.5	SB297	8.6	1.9	5.4	底部 4/12	外：ロクロナデ、底部糸切 内：ロクロナデ	密	良	灰白	内面：自然釉 渥美型第6型式
62	016-01	土師器 鍋	G7 SK86 No.1	SB297	30.2	—	—	口縁部 2/12	外：オサエ、ナデ、ヨコナデ 内：オサエ、ナデ、ヨコナデ	やや 粗	並	浅黄橙 にぶい橙	
63	016-02	陶器 山茶椀	G7 SK86 No.2	SB297	16.6	—	—	口縁部 4/12	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	渥美型第5型式
64	017-06	陶器 山茶椀	G7 SK86 No.3	SB297	16.0	—	—	口縁部 2/12	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	渥美型第6型式
65	067-02	土製品	G9 Pit21	SB298	長 6.6	幅 5.7	厚 3.5	—	—	密	—	橙	
66	019-05	土師器 小皿	G10	SK120- ②	7.7	1.0	—	口縁部 8/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	密	並	浅黄橙	
67	019-03	土師器 小皿	G10	SK120- ①	7.8	1.1	—	口縁部 8/12	外：オサエ、ナデ 内：オサエ、ナデ	密	並	淡黄	
68	019-04	土師器 小皿	G10	SK120- ②	8.2	1.05	—	口縁部 6/12	外：オサエ、ナデ 内：オサエ、ナデ	密	並	灰白	
69	019-02	土師器 皿	G10	SK120 No.4	11.7	2.6	—	口縁部 5/12	外：オサエ、ナデ 内：オサエ、ナデ	密	良	灰白	
70	019-06	土師器 鍋	G10	SK120- ②	(24.0)	—	—	口縁部 1/12	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密	並	黒褐	
71	019-07	陶器 山茶椀	F10	SK120- ⑨	—	—	7.2	底部 9/12	外：ロクロナデ、底部ナデ、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白 灰	渥美型第5型式
72	019-08	青磁 椀	G10	SK120 No.1	—	—	5.3	底部 12/12	外：ロクロナデ、削出高台、施釉 内：ロクロナデ、施釉	密	良	灰白	龍泉窯系Ⅰ類5
73	005-07	鉄製品 鎌	G10	SK120 No.5	長 4.0	幅 1.9	厚 0.3	—	—	—	—	—	

第24表 遺物観察表②

報告 番号	実測 番号	器種等	小地 区	遺構名	法量 (cm)			残存度	調整・技法などの特徴	胎土	焼成	色調	特記事項
					口径	器高	底径						
74	007-07	鉄製品 環	G10	SK120 No.6	長 3.0	幅 0.4	厚 0.4	—	—	—	—	—	吊具
75	008-03	鉄製品 釘	G10	SK120- ①No.2	長 3.7	幅 0.6	厚 0.4	—	—	—	—	—	
76	070-10	土師器 小皿	F10 Pit3	SB300	6.6	0.8	—	口縁部 2/12	外：オサエ、ナデ 内：オサエ、ナデ	密	並	淡黄	
77	070-09	土師器 鍋	E10 Pit8	SB300	—	—	—	口縁部 1/12	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密	良	にぶい橙	
78	070-07	陶器 山茶椀	F10 Pit3	SB300	—	—	7.0	底部 5/12	外：ロクロナデ、底部糸切 内：ロクロナデ	密	良	灰黄	底部に接合痕あり
79	070-08	陶器 片口鉢	E10 Pit8	SB300	—	—	—	口縁部 1/12	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	
80	054-01	陶器 片口鉢	E10 Pit5	SB300	—	—	14.8	底部 3/12	外：ナデ、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰黄	渥美型？ 第4型式
81	027-03	土師器 小皿	F10	SK162 セクション2 西	7.7	0.9	—	口縁部 4/12	外：オサエ、ナデ 内：オサエ、ナデ	密	並	灰白	
82	027-04	土師器 鍋	F10	SK162	20.0	—	—	口縁部 1/12	外：オサエ、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	並	にぶい黄 橙、浅黄	
83	027-05	土師器 鍋	F11	SK121- ⑤南 SK162	32.0	—	—	口縁部 1/12	外：オサエ、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	並	にぶい黄 橙、浅黄	
84	026-06	陶器 山皿	F10	SK121- ⑥南 SK163	8.6	2.25	4.4	底部 12/12	外：ロクロナデ、底部糸切、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	渥美型第5型式
85	027-06	陶器 山茶椀	F10	SK121- ⑥南 SK162	—	—	7.6	底部 12/12	外：ロクロナデ、底部ナデ、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	内面：自然釉 渥美型第5型式
86	027-07	陶器 大口壺？	F9・10	SK121- ⑩ SK162	—	—	12.0	底部 4/12	外：ナデ、ケズリ 内：回転ナデ	密	良	灰白	渥美
87	028-02	白磁 皿	F10	SK162 セクション2 西	11.0	2.5	4.6	底部 3/12	外：ロクロナデ、施釉 内：ロクロナデ、施釉	密	良	灰白	同安窯系？
88	028-03	青磁 皿	F10	SK121-6 北 SK162	12.0	—	—	口縁部 2/12	外：ロクロナデ、施釉 内：ロクロナデ、施釉	密	良	灰黄	同安窯系
89	028-05	白磁 椀	F10	SK162 セクション2 東	—	—	6.1	底部 5/12	外：ロクロナデ、削出高台、施釉 内：ロクロナデ、施釉	密	良	淡黄	
90	003-02	銭貨	E10	SK121 No.1	—	—	—	—	—	—	—	—	元符通宝（篆 書）初鑄年1098 年（北宋）
91	003-03	銭貨	E11	SK121-3 No.4	—	—	—	—	—	—	—	—	嘉祐元宝（真 書）初鑄年1056 年（北宋）
92	004-01	鉄製品 火打金	E10	SK121 No.7	長 7.7	幅 3.2	厚 0.2	—	—	—	—	—	
93	003-08	鉄製品 火打金	F10	SK162 No.1	長 3.9	幅 2.4	厚 0.3	—	—	—	—	—	
94	005-05	鉄製品 小刀	E10	SK121 No.9	長 3.7	幅 1.2	厚 0.2	—	—	—	—	—	
95	008-04	鉄製品 釘	E10	SK121 No.3	長 7.1	幅 0.9	厚 0.6	—	—	—	—	—	
96	008-12	鉄製品 釘	E10	SK121 No.10	長 6.0	幅 0.9	厚 0.5	—	—	—	—	—	
97	009-09	鉄製品 錠	F10	SK162 No.3	長 5.4	幅 0.6	厚 0.4	—	—	—	—	—	
98	010-02	鉄製品	E10	SK162 No.7	長 3.5	幅 5.8	厚 1.5	—	—	—	—	—	
99	068-02	鉄滓	F10	SK121 SK162- ⑤	長 4.5	幅 3.2	厚 3.1	重量 85g	—	—	—	—	
100	067-04	椀形滓	F10	SK121 SK162 No.4	長 5.3	幅 5.0	厚 2.4	重量 102g	—	—	—	—	鉄滓分析試料
101	024-05	土師器 小皿	E10	SK162・ 163セク ション3 中	7.4	1.2	—	口縁部 11/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	密	良	橙	
102	024-06	土師質土 器 皿	E10	SK162・ 163セク ション4 中	—	—	6.3	底部 10/12	外：ロクロナデ、底部糸切 内：ロクロナデ	密	やや 不良	にぶい黄 橙	
103	026-03	土師器 小皿	E10	SK163- ⑤ ブロック	7.7	1.4	—	口縁部 3/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	密	並	にぶい橙	
104	027-02	土師器 小皿	E10	SK163 セクション1	7.5	0.9	—	口縁部 12/12	外：オサエ、ナデ 内：オサエ、ナデ	密	並	灰白	

第25表 遺物観察表③

報告 番号	実測 番号	器種等	小地 区	遺構名	法量 (cm)			残存度	調整・技法などの特徴	胎土	焼成	色調	特記事項
					口径	器高	底径						
105	027-01	土師器 小皿	E10	SK163 セクション1 西	7.7	1.0	—	口縁部 12/12	外：オサエ、ナデ 内：オサエ、ナデ	密	並	灰白	
106	026-08	土師器 皿	E10	SK163 セクション1 西	8.1	1.0	—	口縁部 12/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	密	並	淡黄 灰白	内：油煙残
107	024-04	土師器 小皿	D10・ 11	SK121- ③北 SK163	8.4	1.2	—	口縁部 4/12	外：オサエ 内：ナデ	密	並	灰白	
108	026-07	土師器 皿	D10	SK121- ② SK163	7.8	2.1	—	口縁部 9/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	密	並	浅黄橙	
109	024-03	土師器 皿	D10	SK121- ③北 SK163	11.0	—	—	口縁部 3/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	密	並	灰白	
110	042-05	土師器 皿	E10	SK121- ⑤ SK163	11.2	—	—	口縁部 3/12	外：ナデ 内：ナデ	密	並	灰白	
111	023-03	土師器 皿	E10	SK121- ⑤北 SK163	11.6	2.8	—	口縁部 5/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	密	並	灰黄褐 灰白	
112	023-04	土師器 皿	E10	SK121- ⑤北 SK163	12.0	—	—	口縁部 4/12	外：ナデ 内：ナデ	密	並	灰白	
113	023-02	土師器 皿	E10	SK121- ⑤北 SK163	12.6	2.4	—	口縁部 5/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	密	並	灰白	
114	026-04	土師器 鍋	E10	SK163- ⑤	27.8	—	—	口縁部 1/12	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密	並	灰白	
115	024-07	陶器 山皿	E10	SK163	7.6	1.5	5.2	口縁部 10/12	外：ロクロナデ、底部糸切 内：ロクロナデ	密	良	灰白	尾張型第6型式
116	026-05	陶器 山皿	E10	SK121- ⑥ トレンヂ SK163	8.5	1.65	4.4	底部 12/12	外：ロクロナデ、底部ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	渥美型第6型式
117	023-01	土師質土 器 椀	E10・ 11	SK121- ④北 SK163	—	—	7.4	底部 11/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	並	浅黄橙	
118	026-02	陶器 山茶椀	E10	SK163 No.3	—	—	6.25	底部 12/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰黄 灰白	尾張型第6型式
119	026-01	陶器 山茶椀	E10	SK163 No.4	14.3	5.1	6.8	底部 8/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	渥美型第6型式
120	023-06	陶器 山茶椀	D10	SK121 SK163	14.4	5.0	7.8	底部 12/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	渥美型第6型式
121	023-05	陶器 山茶椀	E10	SK121- ⑤北 SK163	15.4	5.2	6.8	口縁部 5/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	渥美型第6型式
122	001-04	陶器 片口椀	E10	SK121- ⑤ SK163- ⑤	11.2	5.3	8.4	底部 6/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	やや 密	良	灰白	外面口縁部：自然釉、 12世紀後半
123	024-02	陶器 片口鉢	E10	SK121- ⑤ SK163	—	—	13.4	底部 3/12	外：ロクロケズリ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰黄	尾張型第6型式
124	024-01	陶器 甕	E10	SK121- ③ SK163	—	—	—	口縁部 1/12	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰	常滑製品
125	028-04	青磁 椀	E10	SK163	16.0	—	—	口縁部 1/12	外：ロクロナデ、施釉 内：ロクロナデ、施釉	密	良	灰白	龍泉窯系I類5b
126	028-01	白磁 椀	E10	SK121 SK163	—	—	8.0	底部 5/12	外：ロクロナデ、削出高台 内：ロクロナデ、施釉	密	良	灰白	
127	008-08	鉄製品 釘	E10	SK163 No.6	長 3.2	幅 1.0	厚 0.5	—	—	—	—	—	ベンガラ？付着
128	007-02	鉄製品	E10	SK163- ② No.8	長 7.0	幅 6.5	厚 1.2	—	—	—	—	—	
129	068-01	椀形滓	E10	SK121 SK162 No.4	長 6.1	幅 5.1	厚 2.6	重量 100g	—	—	—	—	
130	066-02	石製品 砥石	E5 Pit6	SB303	長 5.2	幅 5.55	厚 1.5	重量 66g	—	—	—	—	凝灰岩
131	011-05	土師器 鍋	F4	SK25	—	—	—	口縁部 1/12	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密	並	褐灰、に ぶい黄橙	
132	012-07	土師器 皿	F3	SK50	10.4	—	—	口縁部 3/12	外：ナデ 内：ナデ	密	並	灰白 灰黄	
133	012-06	土師器 皿	F3	SK50-③	12.5	2.5	—	口縁部 4/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	密	並	灰白	
134	012-08	陶器 山皿	F3	SK50	8.4	1.6	5.8	底部 2/12	外：ロクロナデ、底部糸切 内：ロクロナデ	密	良	灰白	尾張型第6型式

第26表 遺物観察表④

報告 番号	実測 番号	器種等	小地 区	遺構名	法量 (cm)			残存度	調整・技法などの特徴	胎土	焼成	色調	特記事項
					口径	器高	底径						
135	012-09	陶器 山茶椀	F3	SK50	—	—	8.0	底部 1/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	渥美型第5型式
136	012-10	陶器	F3	SK50	—	—	10.4	底部 3/12	外：ロクロナデ、鉄軸 内：ロクロナデ、鉄軸	密	良	灰白	常滑製品
137	013-04	土師器 小皿	F3・4	SK58	8.4	0.9	—	口縁部 4/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	やや 密	並	灰白	
138	013-05	土師器 鍋	F4	SK58	—	—	—	口縁部 1/12	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや 密	並	褐灰	
139	013-07	土師器 鍋	F3・4	SK58	32.0	—	—	口縁部 2/12	外：ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	やや 密	並	灰褐 褐灰	
140	013-03	陶器 山茶椀	F3・4	SK58	14.2	—	—	口縁部 2/12	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	渥美型第6型式
141	013-02	陶器 山茶椀	F4	SK58	—	—	8.0	底部 6/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	渥美型第6型式
142	013-01	陶器 山茶椀	F3	SK58	—	—	7.0	底部 11/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	やや 密	良	灰白	尾張型第6型式
143	013-06	陶器 片口鉢	F3・4	SK58	(32.0)	—	—	口縁部 1/12	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	尾張型第6型式
144	001-05	青磁 皿	F3	SK58-4	10.4	1.65	4.4	底部 9/12	外：ロクロナデ、ロクロケズリ、施釉 内：ロクロナデ	密	良	灰白	同安窯系
145	003-01	銭貨	F4	SK58	—	—	—	—	—	—	—	—	熙寧元宝（真書）初鑄年1068年（北宋）
146	006-07	鉄製品 釘	F3	SK58 No.1	長 2.9	幅 1.1	厚 0.6	—	—	—	—	—	—
147	006-06	鉄製品 釘	F3	SK58 No.2	長 3.5	幅 0.5	厚 0.3	—	—	—	—	—	—
148	006-05	鉄製品 釘	F3	SK58 No.3	長 3.2	幅 1.1	厚 0.4	—	—	—	—	—	—
149	006-03	鉄製品 釘	F3	SK58	長 4.8	幅 0.8	厚 0.4	—	—	—	—	—	—
150	006-04	鉄製品 錠	F3	SK58	長 4.6	幅 0.7	厚 0.5	—	—	—	—	—	—
151	006-08	鉄製品 錠	F3・4	SK58	長 4.4	幅 0.9	厚 0.8	—	—	—	—	—	手違い錠
152	005-04	鉄製品 小刀	F3	SK58	長 3.1	幅 1.6	厚 0.4	—	—	—	—	—	—
153	010-04	椀形洋	F3・4	SK58	長 4.1	幅 6.0	厚 2.0	—	—	—	—	—	鉄滓分析試料
154	011-08	土師器 鍋	G2	SB306	—	—	—	口縁部 1/12	外：ナデ、ヨコナデ 内：ハクメ、ヨコナデ	密	並	灰黄褐 灰白	
155	011-01	土師器 小皿	I3	SK3	8.4	1.1	—	口縁部 3/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	密	やや 不良	灰白	
156	011-02	土師器 皿	J2	SK4	12.2	—	—	口縁部 2/12	外：ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	並	浅黄橙	
157	011-03	土師器 鍋	K5	SK5	—	—	—	口縁部 1/12	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密	並	にぶい黄 橙	外：煤付着
158	011-04	土師器 鍋	H3	SK21	—	—	—	口縁部 1/12	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密	並	灰黄褐 浅黄橙	
159	006-10	鉄製品 釘	H3	SK24 No.2	長 5.2	幅 1.1	厚 0.5	—	—	—	—	—	—
160	006-11	鉄製品 釘	H3	SK24 No.1	長 5.6	幅 1.0	厚 0.4	—	—	—	—	—	—
161	011-06	土師器 甕	H3	SK27	—	—	—	口縁部 1/12	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密	やや 不良	にぶい黄 橙	
162	011-07	縄文土器	H2	SK28	—	—	—	底部 1/12	外：ナデ 内：ナデ	密	並	にぶい褐	
163	011-09	土師器 皿	E3	SK30	10.4	—	—	口縁部 2/12	外：ナデ 内：ナデ	密	並	浅黄橙	
164	011-10	土師器 鍋	E3	SK30	—	—	—	口縁部 1/12	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密	並	にぶい黄 橙	
165	011-11	土師器 皿	E2 F2	SK31	10.5	—	—	口縁部 2/12	外：ナデ 内：ナデ	密	並	灰白	
166	011-12	土師器 鍋	E2 F2	SK31	—	—	—	口縁部 1/12	外：ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	並	にぶい黄 橙、灰白	
167	012-02	土師器 小皿	E4	SK37 No.2	7.2	1.1	—	口縁部 6/12	外：オサエ、ナデ 内：オサエ、ナデ	密	並	浅黄橙	
168	012-04	土師器 小皿	E4	SK37 No.4	8.0	1.0	—	口縁部 7/12	外：オサエ、ナデ 内：オサエ、ナデ	密	並	灰白	
169	012-03	土師器 小皿	E4	SK37 No.3	7.7	1.0	—	口縁部 3/12	外：オサエ、ナデ 内：オサエ、ナデ	密	並	浅黄橙	
170	012-05	土師器 小皿	E4	SK37 No.5	6.9~ 8.0	1.0	—	口縁部 10/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	密	並	灰黄	
171	012-01	土師器 小皿	E4	SK37 No.1	8.0	1.0	—	口縁部 3/12	外：オサエ、ナデ 内：オサエ、ナデ	密	並	灰白	
172	006-09	鉄製品 釘	G2	SK42	長 3.7	幅 0.8	厚 0.4	—	—	—	—	—	—

第27表 遺物観察表⑤

報告 番号	実測 番号	器種等	小地 区	遺構名	法量 (cm)			残存度	調整・技法などの特徴	胎土	焼成	色調	特記事項
					口径	器高	底径						
173	067-03	鉄滓	E3	SK46	長 7.0	幅 6.1	厚 4.3	重量 166g	—	—	—	—	
174	014-04	土師器 小皿	E6	SK65-①	8.0	0.9	—	口縁部 2/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	やや 密	並	灰白	
175	014-03	土師器 皿	E6	SK65-①	12.4	—	—	口縁部 2/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	やや 密	並	灰白	
176	014-07	土師器 鍋	F6	SK65-④	—	—	—	口縁部 1/12	外：ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	やや 密	並	灰白	
177	014-06	土師器 鍋	F6	SK65-③	—	—	—	口縁部 1/12	外：ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	やや 密	並	褐灰 灰白	
178	014-08	土師器 鍋	F6	SK65 No.4	(29.2)	—	—	口縁部 2/12	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや 密	並	褐灰 灰褐	
179	014-01	陶器 山茶椀	E6	SK65 No.2	—	—	7.0	底部 6/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	渥美型第5型式
180	014-02	陶器 山茶椀	E6	SK65-①	—	—	7.6	底部 9/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	渥美型第6型式
181	014-05	陶器 灰釉折縁 皿	E6	SK65-①	11.0	—	—	口縁部 1/12	外：ロクロナデ、施釉 内：ロクロナデ、施釉	密	良	灰白、オ リーブ灰	瀬戸美濃製品 古瀬戸中ⅠかⅡ 期
182	003-06	鉄製品 釘	E6	SK65 No.1	長 4.8	幅 1.0	厚 0.5	—	—	—	—	—	保存処理前は 446と接合
183	014-09	石製品 砥石	F6	SK65-④	長 5.0	幅 5.1	厚 3.0	重量 120g	—	—	—	—	石質泥砂岩
184	015-03	土師器 小皿	D6	SK67-②	6.6	0.7	—	口縁部 4/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	やや 密	やや 不良	灰白	
185	015-02	土師器 小皿	D6	SK67-①	8.0	1.4	—	口縁部 3/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	やや 密	並	浅黄橙	
186	015-04	土師器 鍋	D6	SK67-②	—	—	—	口縁部 1/12	外：ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	やや 密	並	にぶい黄 橙、灰白	
187	015-01	陶器 片口鉢	D6	SK67-②	—	—	12.7	底部 2/12	外：ロクロナデ、ロクロケズリ 内：ロクロナデ	やや 密	良	灰白	第5か6型式
188	015-05	土師器 鍋	E4	SK71	31.2	—	—	口縁部 2/12	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや 密	並	褐灰、に ぶい黄橙	外：煤付着
189	003-07	鉄製品 錠	E4	SK71	長 4.6	幅 0.6	厚 0.4	—	—	—	—	—	
190	015-06	土師器 鍋	E4	SK72	(28.0)	—	—	口縁部 2/12	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや 密	並	褐灰、に ぶい黄橙	外：煤付着
191	018-07	土師器 小皿	C4	SK79	8.4	1.3	—	口縁部 3/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	密	並	浅黄橙	
192	016-05	土師器 小皿	G5	SK82	8.2	1.3	—	口縁部 11/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	やや 密	並	浅黄橙	
193	016-06	土師器 小皿	G5	SK82	7.8~ 8.0	1.1	—	口縁部 12/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	やや 密	並	灰白	
194	017-04	土師器 鍋	G8	SK85	—	—	—	口縁部 1/12	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや 密	並	にぶい橙 浅黄橙	
195	017-05	陶器 山皿	G8	SK85	9.0	1.5	6.2	底部 2/12	外：ロクロナデ、底部糸切 内：ロクロナデ	やや 密	良	灰白	渥美型第6型式
196	016-04	土師器 甕	G8	SK87-③	—	—	—	口縁部 1/12	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや 粗	並	にぶい褐	
197	016-03	陶器 山茶椀	G8	SK87-④	—	—	7.8	底部 2/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	渥美型第5型式
198	017-01	土師器 鍋	G7	SK92	(31.0)	—	—	口縁部 1/12	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや 粗	並	にぶい橙	
199	017-02	陶器 山茶椀	H8	SK94-④	—	—	8.8	底部 3/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	渥美型第5型式
200	017-03	土師質土 器 小皿	H8	SK94-③	—	—	5.6	底部 7/12	外：ロクロナデ、底部糸切 内：ロクロナデ	やや 粗	やや 不良	浅黄橙	
201	018-05	土師器 鍋	F8	SK104	—	—	—	口縁部 1/12	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや 粗	並	にぶい褐	外：煤付着
202	018-01	土師器 鍋	F8	SK106	—	—	—	口縁部 1/12	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや 粗	並	にぶい黄 橙	
203	018-02	陶器 山茶椀	F8	SK106	—	—	7.0	底部 6/12	外：ロクロナデ、底部ナデ、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	渥美型第5型式
204	018-03	陶器 山茶椀	F6・7	SK107	—	—	7.0	底部 6/12	外：ロクロナデ、底部ナデ、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	渥美型第5型式
205	018-04	陶器 山茶椀	G8	SK108	—	—	7.0	底部 6/12	外：ロクロナデ、底部ナデ、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	渥美型第5型式
206	018-08	陶器 山茶椀	G9	SK111	16.3	—	—	口縁部 2/12	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	やや 密	良	灰白	渥美型第6型式
207	008-02	鉄製品 釘	H12	SK112 No.1	長 4.5	幅 0.7	厚 0.5	—	—	—	—	—	
208	041-04	陶器 山茶椀	H9	SK113	—	—	8.0	底部 6/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	渥美型第5型式 外：煤付着
209	020-01	陶器 山茶椀	H9	SK113	15.5	4.9	7.2	底部 3/12	外：ロクロナデ、高台貼付 内：ロクロナデ	密	良	灰白	渥美型第6型式
210	041-03	土師器 鍋	H19	SK113	(34.2)	—	—	口縁部 1/12	外：オサエ、ナデ、ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや 密	並	灰黄褐	

第28表 遺物観察表⑥

報告 番号	実測 番号	器種等	小地 区	遺構名	法量 (cm)			残存度	調整・技法などの特徴	胎土	焼成	色調	特記事項
					口径	器高	底径						
211	020-02	土師器 鍋	H9	SK114	-	-	-	口縁部 1/12	外：ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	並	浅黄橙	
212	020-04	土師器 皿	F9	SK115	11.8	-	-	口縁部 9/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	密	並	灰白	
213	001-02	陶器 山皿	F8 F9	SK115	8.0	2.0	4.0	底部 12/12	外：ロクロナデ、底部糸切 内：ロクロナデ	密	良	灰白	湿美型第5型式
214	020-03	陶器 片口	F9	SK115	-	-	-	口縁部 1/12	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	良	にぶい褐	常滑製品
215	020-05	土師器 小皿	H11	SK118	7.8	1.0	-	口縁部 8/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	密	並	淡橙	
216	020-06	青磁 皿	H11	SK118	14.8	-	-	口縁部 1/12	外：ロクロナデ、施釉 内：ロクロナデ、施釉	密	良	灰白	同安窯系
217	020-07	青磁 椀	H11	SK118	18.0	-	-	口縁部 1/12	外：ロクロナデ、施釉 内：ロクロナデ、施釉	密	良	灰白	
218	019-09	陶器 山茶椀	G9	SK119	-	-	7.3	底部 8/12	外：ロクロナデ、底部ナデ、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	湿美型第5型式？
219	042-04	小皿	D9	SK127	8.5	1.2	5.0	底部 4/12	外：ロクロナデ、底部糸切 内：ロクロナデ	密	良	浅黄橙	
220	042-06	土師器 小皿	F11	SK136- ①	7.6	0.7	-	口縁部 2/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	密	並	灰白	
221	042-08	土師器 鍋	F11	SK136- ②	-	-	-	口縁部 1/12	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密	並	にぶい黄 橙 浅黄橙	
222	043-01	土師器 鍋	F11	SK136- ②	27.0	-	-	口縁部 1/12	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密	並	にぶい黄 橙、灰白	
223	038-07	陶器 山茶椀	F11	SK136 No.1	-	-	6.8	底部 10/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	湿美型第5型式
224	042-07	陶器 山茶椀	F11	SK136- ②	-	-	7.0	底部 4/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	湿美型第6型式
225	008-05	鉄製品 釘	F11	SK136 No.3	長 3.1	幅 0.5	厚 0.3	-	-	-	-	-	
226	042-01	土師器 皿	H10	SK141	11.6	2.4	-	口縁部 4/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	密	良	淡黄	
227	009-12	鉄製品 錠	H10	SK141 No.1	長 3.2	幅 0.4	厚 0.3	-	-	-	-	-	
228	043-03	陶器 片口鉢	G11	SK144	-	-	-	口縁部 1/12	外：ロクロナデ、ロクロケズリ 内：ロクロナデ、ロクロケズリ	密	良	灰白	湿美型第5か6 型式
229	038-06	陶器 山茶椀	E11	SK145 No.1	-	-	7.6	底部 12/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	やや 密	良	灰白	湿美型第5型式
230	042-02	陶器 山茶椀	E11	SK145	-	-	9.0	底部 2/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰黄 淡黄	湿美型第3型式
231	038-09	陶器 山茶椀	H12	SK150	-	-	6.4	底部 3/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	やや 密	良	灰白	第6型式
232	039-08	陶器 山茶椀	G12	SK152	-	-	6.3	底部 6/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	やや 密	良	灰白	尾張型第6型式
233	038-05	陶器 山茶椀	E12	SK170	-	-	6.7	底部 4/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	湿美型第4型式
234	043-02	陶器 片口鉢	H11	SK147	34.0	13.2	16.1	底部 2/12	外：ロクロナデ、ロクロケズリ、高台貼付、 ナデ 内：ロクロナデ、ロクロケズリ	密	良	灰白	尾張型第6型式
235	040-01	土師器 鍋	F13	SK157	30.0	-	-	口縁部 5/12	外：ハケメ、ケズリ、ヨコナデ 内：ナデ、ケズリ、ヨコナデ	やや 密	良	褐灰、に ぶい黄橙	外：煤付着
236	021-03	土師器 小皿	G9	SK158	9.2	-	-	口縁部 2/12	外：オサエ、ヨコナデ 内：ナデ	密	並	にぶい橙	
237	021-01	土師器 皿	G9	SK158	12.8	-	-	口縁部 2/12	外：オサエ、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	並	灰白	
238	021-02	土師器 皿	G9	SK158	13.5	2.6	-	口縁部 3/12	外：オサエ、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	並	にぶい橙	
239	021-05	土師器 甕	G9	SK158	33.0	-	-	口縁部 2/12	外：オサエ、ヨコナデ 内：ヨコナデ	密	並	にぶい黄 橙	外：煤付着
240	021-06	陶器 山茶椀	G9	SK158	-	-	7.7	底部 12/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	湿美型第5型式
241	021-07	陶器 山茶椀	G9	SK158	15.0	-	-	口縁部 2/12	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密	良	灰白	湿美型第6型式
242	021-04	陶器 入子	G9	SK158	-	-	3.7	底部 6/12	外：ロクロナデ、底部糸切 内：ロクロナデ	密	良	灰白	瀬戸美濃製品 古瀬戸前Ⅲ～中 Ⅱ期
243	021-08	陶器 片口鉢	G9	SK158	-	-	14.7	底部 1/12	外：ロクロナデ、ロクロケズリ、高台貼付、 ナデ 内：ロクロナデ、ナデ	密	良	灰白	湿美型第3か4 型式
244	041-01	土師器 皿	D12	SK177	11.0	-	-	口縁部 3/12	外：オサエ、ナデ 内：オサエ、ナデ	やや 密	良	灰白	
245	022-03	土師器 皿	D12	SK177 No.1	11.3	-	-	口縁部 7/12	外：ナデ 内：ナデ	密	並	浅黄橙	
246	022-02	土師器 皿	D12	SK177 No.3	11.0	2.3	-	口縁部 6/12	外：オサエ 内：ナデ	密	良	灰白	

第29表 遺物観察表⑦

報告 番号	実測 番号	器種等	小地 区	遺構名	法量 (cm)			残存度	調整・技法などの特徴	胎土	焼成	色調	特記事項
					口径	器高	底径						
247	041-02	土師器 鍋	D12	SK177	—	—	—	口縁部 1/12	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや 密	並	にぶい黄 橙	外：煤附着
248	022-01	土師器 鍋	D12	SK177 No.1	29.4	—	—	口縁部 5/12	外：ハケメ、ヨコナデ 内：工具ナデ、ヨコナデ	密	並	にぶい黄 褐	外：煤附着
249	039-04	土師器 小皿	D12	SK178	7.7~ 8.0	1.05	—	口縁部 12/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	やや 密	並	灰白	
250	005-02	鉄製品 鎌	D12	SK178	長 4.1	幅 2.8	厚 0.3	—	—	—	—	—	切先
251	039-03	土師器 小皿	C13	SK181	7.6	0.65	—	口縁部 6/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	やや 密	並	灰白	
252	038-03	土師器 小皿	C12	SK183	7.9	1.1	—	口縁部 7/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	やや 密	並	浅黄橙	
253	038-02	土師器 小皿	C12	SK183	7.4~ 7.6	1.1	—	口縁部 3/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	やや 粗	並	浅黄橙	
254	038-01	土師器 皿	D13	SK183	12.0	2.6	—	口縁部 3/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	やや 密	並	浅黄橙 褐灰	
255	038-04	陶器 山茶碗	C12	SK183	—	—	8.0	底部 5/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	渥美型第5型式
256	039-06	陶器 山皿	B13	SK187	8.8	1.7	—	口縁部 4/12	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	渥美型第6型式
257	039-02	土師器 皿	C14	SK193	11.6	2.7	—	口縁部 3/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	やや 密	並	灰白	
258	039-05	陶器 壺	C16	SK190	10.3	—	—	口縁部 1/12	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	良	にぶい赤 褐	常滑製品
259	038-08	陶器 山茶碗	C13 D13	SK211	14.5	—	—	口縁部 2/12	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	尾張型第7型式
260	040-02	陶器 山茶碗	C12	SK251	15.4	—	—	口縁部 2/12	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	尾張型第7型式
261	033-04	土師器 小皿	C13	SK196 No.1	7.7~ 8.5	0.8	—	口縁部 12/12	外：オサエ、ナデ 内：オサエ、ナデ	やや 密	良	浅黄橙	
262	033-03	土師器 小皿	C13	SK196-3	7.6~ 8.0	1.0	—	口縁部 11/12	外：オサエ、ナデ 内：オサエ、ナデ	やや 密	並	浅黄橙	
263	033-05	土師器 小皿	C13	SK196 No.2	7.1~ 7.6	1.1	—	口縁部 11/12	外：オサエ、ナデ 内：オサエ、ナデ	やや 密	並	浅黄橙	
264	032-05	土師器 皿	C13	SK196	12.0	—	—	口縁部 4/12	外：オサエ、ナデ 内：オサエ、ナデ	密	並	浅黄橙	
265	033-07	土師器 皿	C13	SK196 No.6	11.5	2.5	—	口縁部 11/12	外：オサエ、ナデ 内：オサエ、ナデ	やや 密	並	にぶい黄 橙、灰褐	
266	032-06	土師器 皿	C13	SK196	10.9	2.1	—	口縁部 3/12	外：オサエ、ナデ 内：オサエ、ナデ	密	並	にぶい黄 橙	
267	033-06	土師器 皿	C13	SK196 No.5	11.0	—	—	口縁部 10/12	外：オサエ、ナデ 内：オサエ、ナデ	やや 密	並	にぶい黄 橙 灰黄褐	
268	032-07	土師器 皿	C13	SK196 No.4	11.7	2.5	—	口縁部 3/12	外：オサエ、ナデ 内：オサエ、ナデ	密	並	灰白	
269	033-01	土師器 皿	C13	SK196 No.4	12.1	2.6	—	口縁部 9/12	外：オサエ、ナデ 内：オサエ、ナデ	密	並	灰白	
270	032-01	土師器 鍋	C13	SK196 No.8	24.7	—	—	口縁部 2/12	外：ハケメ、オサエ、ヨコナデ 内：オサエ、ナデ、ヨコナデ	やや 密	並	浅黄	
271	033-02	土師器 鍋	C13	SK196- ③	—	—	—	口縁部 1/12	外：ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	やや 密	並	にぶい褐 にぶい黄 橙	外：煤附着
272	039-01	土師器 鍋	C15	SK207	(36.0)	—	—	口縁部 1/12	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや 粗	並	灰白	
273	041-06	土師器 小皿	C12	SK226	7.0	0.4	—	口縁部 3/12	外：オサエ、ナデ 内：オサエ、ナデ	やや 密	並	灰白	
274	041-07	土師器 鍋	C12	SK226	24.6	—	—	口縁部 2/12	外：オサエ、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ、ハケメ	やや 密	やや 不良	褐灰 暗褐	外：煤附着
275	041-05	陶器 山茶碗	C12	SK226	—	—	8.2	底部 6/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	渥美型第5型式
276	040-03	土師器 鍋	F14	SK230	27.4	—	—	口縁部 2/12	外：ハケメ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	やや 密	良	明褐灰	
277	007-04	鉄製品 紡錘車	F4	SK230 No.1	長 12.7	幅 0.6	厚 0.3	—	—	—	—	—	軸
278	008-10	鉄製品 釘	F14	SK262 No.1	長 8.4	幅 0.6	厚 0.4	—	—	—	—	—	
279	034-04	土師器 小皿	F13	SK260	8.0	0.5	—	口縁部 7/12	外：オサエ、ナデ 内：オサエ、ナデ	やや 密	並	灰白	
280	034-03	土師器 小皿	F13	SK260	7.2	1.0	—	口縁部 5/12	外：オサエ、ナデ 内：オサエ、ナデ	やや 密	並	灰白	
281	009-11	鉄製品 錠	F15	SK238	長 2.3	幅 0.7	厚 0.3	—	—	—	—	—	
282	009-10	鉄製品 錠	F15	SK238	長 3.7	幅 0.4	厚 0.3	—	—	—	—	—	
283	042-03	陶器 山茶碗	F14	SK263	16.0	5.3	7.8	底部 4/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	第3型式

第30表 遺物観察表⑧

報告 番号	実測 番号	器種等	小地 区	遺構名	法量 (cm)			残存度	調整・技法などの特徴	胎土	焼成	色調	特記事項
					口径	器高	底径						
284	036-03	陶器 山茶椀	F24 G24	SK265	—	—	9.4	底部 4/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	渥美型第4型式 内：煤付着
285	036-02	陶器 山茶椀	F24 G24	SK265	—	—	7.2	底部 12/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	渥美型第5型式
286	036-01	土師質土 器 椀	F24 G24	SK265	—	—	7.2	底部 12/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	やや 密	並	にぶい橙 灰黄褐	
287	037-01	石製品 砥石	D12	SK199	長 21.4	幅 14.5	厚 8.0	重量 3900g	—	—	—	—	凝灰質砂岩
288	046-02	土師器 鍋	E6・7	SD75	—	—	—	口縁部 1/12	外：ハケメ、ヨコナデ 内：オサエ、ナデ、ヨコナデ	やや 密	並	にぶい黄 橙	外：煤付着
289	046-01	土師器 鍋	F8	SD75	38.4	—	—	口縁部 2/12	外：ハケメ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	やや 密	良	にぶい橙 浅黄橙	外：煤付着
290	046-06	陶器 山皿	C7	SD75	8.3	1.8	5.5	口縁部 11/12	外：ロクロナデ、底部糸切 内：ロクロナデ	密	良	灰黄	尾張型第6型式
291	046-05	陶器 山茶椀	D7・8	SD75	—	—	7.0	底部 6/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰黄	渥美型第6型式
292	046-04	陶器 山茶椀	D7・8	SD75	—	—	7.2	底部 12/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰黄	渥美型第5型式
293	046-03	陶器 片口鉢	D7 E7	SD75	—	—	—	口縁部 1/12	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	渥美型第5か6 型式 外：煤付着
294	003-05	鉄製品	E8	SD75	長 7.7	幅 3.2	厚 0.3	—	—	—	—	—	
295	006-01	鉄製品 鎌	F8	SD75	長 4.7	幅 0.7	厚 0.5	—	—	—	—	—	
296	044-04	土師器 小皿	G7	SD105	7.0	0.9	—	口縁部 4/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	密	並	灰白	
297	044-03	陶器 山茶椀	G7	SD105	—	—	7.2~ 7.8	底部 12/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	渥美型第5型式
298	047-03	土師器 皿	C10・ 11	SD124	14.0	2.1	—	口縁部 2/12	外：オサエ、ナデ、ヨコナデ 内：オサエ、ナデ、ヨコナデ	やや 密	並	灰白	
299	047-02	土師器 皿	C10・ 11	SD124	11.5	2.3	—	口縁部 2/12	外：オサエ、ナデ、ヨコナデ 内：オサエ、ナデ、ヨコナデ	やや 密	並	灰白	
300	047-01	土師器 鍋	C10・ 11	SD124	35.0	—	—	口縁部 1/12	外：ハケメ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	やや 密	並	明褐灰 灰白	外：煤付着
301	047-05	陶器 山茶椀	C10・ 11	SD124	—	—	8.0	底部 6/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰黄	渥美型第4型式
302	045-02	陶器 山茶椀	C11	SD124	—	—	7.7	底部 2/12	外：ロクロナデ、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰黄	渥美型第5型式
303	045-01	陶器 片口鉢	E12	SD124	—	—	12.2	底部 2/12	外：ロクロケズリ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	渥美型第6型式
304	044-02	陶器 壺	E12	SD124	—	—	14.5	底部 12/12	外：オサエ、ナデ 内：工具ナデ	密	良	灰、にぶ い黄橙	常滑製品
305	047-04	陶器 壺	E11・ 12	SD124	—	—	12.2	底部 2/12	外：工具ナデ、ナデ 内：ナデ	密	良	灰赤 灰白	常滑製品
306	044-01	陶器 甕		SD124	40.0	—	—	口縁部 3/12	外：ロクロナデ、鉄軸 内：ロクロナデ、鉄軸	密	良	灰白	常滑製品
307	005-01	鉄製品 鎌	C11	SD124 No.1	長 3.5	幅 2.1	厚 0.2	—	—	—	—	—	切先
308	007-06	鉄製品	C10	SD124 No.1	長 3.1	幅 0.4	厚 0.4	—	—	—	—	—	
309	045-03	土師器 小皿	C10・ 11	SD130	7.0	0.9	—	口縁部 4/12	外：オサエ 内：ナデ	密	並	灰白	
310	045-04	土師器 鍋	C10・ 11	SD130	—	—	—	口縁部 1/12	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密	並	灰黄褐 浅黄橙	
311	049-07	土師器 小皿	B14	SD212	7.6	0.6	—	口縁部 3/12	外：オサエ、ナデ 内：オサエ、ナデ	やや 密	並	灰白	
312	049-06	土師器 小皿	B14	SD212	7.2	1.0	—	口縁部 5/12	外：オサエ、ナデ 内：オサエ、ナデ	やや 密	並	灰白	
313	049-04	土師器 小皿	B14	SD212	7.8	0.9	—	口縁部 3/12	外：オサエ、ナデ 内：オサエ、ナデ	やや 密	並	浅黄橙	
314	049-08	土師器 小皿	B14	SD212	7.4	1.0	—	口縁部 11/12	外：オサエ、ナデ 内：オサエ、ナデ	やや 密	並	浅黄橙	
315	049-05	土師器 小皿	B14	SD212	7.0	1.0	—	口縁部 4/12	外：オサエ、ナデ 内：オサエ、ナデ	やや 密	並	灰白	
316	049-10	土師器 小皿	B15	SD212	7.5	1.2	—	口縁部 12/12	外：オサエ、ナデ 内：オサエ、ナデ	やや 密	並	灰白	
317	049-11	土師器 小皿	B14	SD212	7.3~ 7.7	1.1	—	口縁部 12/12	外：オサエ、ナデ 内：オサエ、ナデ	やや 密	並	灰白 浅黄橙	
318	029-05	土師器 小皿	B13	SD212	7.7	1.05	—	口縁部 6/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	やや 密	並	浅黄橙	
319	049-09	土師器 小皿	B14	SD212	7.5	1.0	—	口縁部 11/12	外：オサエ、ナデ 内：オサエ、ナデ	やや 密	並	灰白	
320	049-02	土師器 皿	B14	SD212	12.6	2.5	—	口縁部 2/12	外：オサエ、ナデ 内：オサエ、ナデ	やや 密	やや 不良	にぶい黄 橙 灰黄褐	

第31表 遺物観察表⑨

報告 番号	実測 番号	器種等	小地 区	遺構名	法量 (cm)			残存度	調整・技法などの特徴	胎土	焼成	色調	特記事項
					口径	器高	底径						
321	049-03	土師器 皿	B15	SD212	10.8	2.3	—	口縁部 3/12	外：オサエ、ナデ 内：オサエ、ナデ	やや 密	並	灰白	
322	049-01	土師器 皿	B14	SD212	11.2	2.2	—	口縁部 3/12	外：オサエ、ナデ 内：オサエ、ナデ	やや 密	並	灰白	
323	048-01	土師器 鉢	B15	SD212	31.6	—	—	口縁部 5/12	外：ハケメ、オサエ、ナデ、ヨコナデ 内：オサエ、ナデ、ヨコナデ	やや 密	並	淡黄	外：煤付着
324	048-03	土師器 鉢	B14	SD212	29.2	—	—	口縁部 2/12	外：オサエ、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	やや 密	並	灰黄褐 灰黄	
325	048-02	土師器 鉢	B16	SD212	33.8	—	—	口縁部 3/12	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや 密	並	灰黄褐 にぶい黄 橙	外：煤付着
326	048-04	土師器 鉢	B14	SD212	34.3	—	—	口縁部 1/12	外：ハケメ、オサエ、ナデ、ヨコナデ 内：ハケメ、オサエ、ナデ、ヨコナデ	やや 密	並	灰黄褐 浅黄橙	外：煤付着
327	029-06	陶器 山茶碗	B15	SD212	—	—	7.6	底部 7/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	渥美型第5型式
328	029-07	陶器 山茶碗	B14	SD212	—	—	8.0	底部 8/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	尾張型6型式
329	029-08	陶器 山茶碗	B13	SD212	—	—	6.6	底部 4/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	やや 密	良	灰白	尾張型6型式
330	008-09	鉄製品 釘	B16	SD212	長 6.2	幅 0.8	厚 0.3	—	—	—	—	—	
331	046-07	土師器 小皿	C16	SD219	7.8	1.3	—	口縁部 6/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	やや 密	並	浅黄橙	
332	046-08	陶器 山茶碗	B16	SD219	—	—	6.6	底部 12/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	渥美型第6型式
333	045-06	土師器 鉢	C18	SD242	—	—	—	口縁部 1/12	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密	並	にぶい黄 橙	外：煤付着
334	045-05	陶器 山茶碗	C18	SD242西	—	—	7.0	底部 4/12	外：ロクロナデ、底部ナデ、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	尾張型第6型式
335	045-07	土師器 鉢	F13 H13	SD250	(27.0)	—	—	口縁部 1/12	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密	並	褐灰 浅黄橙	外：煤付着
336	018-06	土師器 小皿	K7	SX99	8.0	0.9	—	口縁部 2/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	密	やや 不良	浅黄橙	
337	002-02	鉄製品 小刀	K7	SX99 No.3	長 28.5	幅 3.1	厚 0.6	—	—	—	—	—	木質残る
338	002-01	鉄製品 釘	K7	SX99 No.1	長 7.1	幅 1.8	厚 0.6	—	—	—	—	—	木質残る
339	008-01	鉄製品 釘	K7	SX99 No.2	長 7.9	幅 0.7	厚 0.3	—	—	—	—	—	木質残る
340	019-01	陶器 山茶碗	C8・9	SX122	—	—	7.3	底部 3/12	外：ロクロナデ、底部ナデ、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	浅黄	渥美型第5型式
341	010-01	鉄製品 鎌	C12	SX236 No.1	長 23.1	幅 4.5	厚 0.3	—	—	—	—	—	
342	056-04	土師質土 器 皿	E15	Pit3	10.0	2.2	5.5	底部 12/12	外：ロクロナデ、底部糸切 内：ロクロナデ	やや 密	並	にぶい黄 橙	
343	057-01	土師器 小皿	B21	Pit3	8.0～ 8.5	1.1	—	口縁部 11/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	やや 密	やや 良	灰白	
344	001-03	土師器 小皿	D9	Pit10	7.7～ 8.3	1.3	—	口縁部 12/12	外：オサエ、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	やや 密	やや 良	灰白	
345	055-05	土師器 小皿	D14	Pit9	7.8	1.2	—	口縁部 5/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	やや 密	並	灰白	
346	057-04	土師器 小皿	D14	Pit17	7.5	1.25	—	口縁部 8/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	やや 粗	並	灰白	
347	057-06	土師器 小皿	F9	Pit2	7.4	1.0	—	口縁部 5/12	外：ナデ 内：ナデ	やや 密	並	灰白	
348	057-07	土師器 小皿	G9	Pit11	7.4	1.2	—	口縁部 6/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	やや 密	並	浅黄橙	
349	057-05	土師器 小皿	D15	Pit6	7.7	1.0	—	口縁部 5/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	やや 密	やや 不良	灰黄褐	
350	055-06	土師器 小皿	E3	Pit1	7.8	1.0	—	口縁部 6/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	やや 密	並	浅黄橙	
351	057-02	土師器 小皿	C13	Pit8	7.8	1.1	—	口縁部 10/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	やや 密	並	灰白	
352	054-03	土師器 小皿	C14	Pit2	8.2	0.8	—	口縁部 6/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	密	並	浅黄橙	
353	054-06	土師器 小皿	C14	Pit2	8.3	0.8	—	口縁部 11/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	密	並	灰白	
354	054-08	土師器 小皿	C14	Pit2	8.0	0.85	—	口縁部 5/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	密	並	浅黄橙	
355	054-09	土師器 小皿	C14	Pit2	7.1	0.95	—	口縁部 11/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	密	並	灰白	
356	054-07	土師器 小皿	C14	Pit2	7.4	0.8	—	口縁部 6/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	密	並	浅黄橙	
357	055-02	土師器 皿	F3	Pit15	13.8	2.5	—	口縁部 2/12	外：オサエ、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	やや 粗	並	橙	
358	054-04	土師器 皿	C14	Pit2	12.4	2.3	—	口縁部 2/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	密	並	灰白 浅黄橙	

第32表 遺物観察表⑩

報告 番号	実測 番号	器種等	小地 区	遺構名	法量 (cm)			残存度	調整・技法などの特徴	胎土	焼成	色調	特記事項
					口径	器高	底径						
359	054-05	土師器 皿	C14	Pit2	11.5	2.4	—	口縁部 2/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	密	並	灰白	
360	055-03	土師器 皿	F15	Pit1	9.6	2.75	—	口縁部 10/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	密	並	灰白	
361	055-04	土師器 皿	D13	Pit20	10.0	2.9	—	口縁部 12/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	密	やや 良	浅黄橙	
362	054-02	土師器 鍋	C14	Pit2	—	—	—	口縁部 1/12	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密	良	灰黄褐 にぶい黄 橙	外：煤付着
363	050-01	土師器 鍋	E13	Pit15	23.2	—	—	口縁部 9/12	外：ナデ、ケズリ、ヨコナデ 内：工具ナデ、ヨコナデ	密	並	にぶい橙	外：煤付着 内：炭化物付着
364	052-01	土師器 鍋	B13	Pit10	26.3	—	—	口縁部 2/12	外：オサエ、ナデ、ヨコナデ 内：工具ナデ、ナデ、ヨコナデ	密	並	にぶい黄 橙	外：煤付着
365	055-01	土師器 鍋	H12	Pit4	34.3	—	—	口縁部 3/12	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや 粗	並	灰白	外：煤付着
366	052-04	陶器 小椀	H3	Pit2	—	—	5.2	底部 4/12	外：ロクロナデ、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	渥美型第4型式
367	053-07	陶器 山皿	F8	Pit13	8.7	2.35	5.4	口縁部 2/12	外：ロクロナデ、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	渥美型第5型式
368	056-01	土師質土 器 椀	F8	Pit3	16.0	5.3	7.8~ 8.0	底部 10/12	外：ロクロナデ、底部ナデ、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	やや 粗	やや 不良	浅黄橙	
369	056-03	土師質土 器 椀	G2	Pit26	—	—	7.0	底部 5/12	外：ロクロナデ、底部ナデ、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	やや 密	やや 不良	浅黄橙	
370	056-02	土師質土 器 椀	G2	Pit25	—	—	7.1~ 7.3	底部 11/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	やや 粗	やや 不良	浅黄橙	
371	052-02	陶器 山茶椀	C10	Pit2	16.0	5.6	7.8	底部 12/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰黄	渥美型第5型式
372	052-03	陶器 山茶椀	G7	Pit10	—	—	7.4	底部 12/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	渥美型第5型式
373	053-03	陶器 山茶椀	F11	Pit8	—	—	7.0	底部 12/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	渥美型第5型式
374	001-01	陶器 山茶椀	G10	Pit2	16.0	5.3	7.0	底部 6/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	渥美型第6型式
375	053-02	陶器 山茶椀	E12	Pit4	15.3	5.4	7.1	底部 9/12	外：ロクロナデ、底部ナデ、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	渥美型第6型式
376	052-06	陶器 山茶椀	D21	Pit8	15.0	5.7	7.4	底部 4/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	尾張型第6型式
377	053-01	陶器 山茶椀	C22	Pit3	14.3	4.8	5.9	底部 12/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	尾張型第7型式
378	063-01	陶器 片口鉢	G10	Pit4	28.3	9.4	12.2	底部 2/12	外：ロクロナデ、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	やや 密	良	灰白	渥美型第6型式
379	053-04	白磁 皿	G8	Pit9	11.0	—	—	口縁部 2/12	外：ロクロナデ、施釉 内：ロクロナデ、施釉	密	良	灰白	
380	053-05	青磁 小鉢	D13	Pit12	13.7	—	—	口縁部 2/12	外：ロクロナデ、施釉 内：ロクロナデ、施釉	密	良	灰白	14世紀
381	053-06	青磁 椀	F9	Pit4	16.4	—	—	口縁部 1/12	外：ロクロナデ、施釉 内：ロクロナデ、施釉	密	良	灰白	龍泉窯系 13世紀
382	007-01	鉄製品 鎌	D13	Pit4	長 6.9	幅 2.3	厚 0.7	—	—	—	—	—	4回折り曲げら れている
383	004-02	鉄製品 鎌	C9	Pit2	長 9.6	幅 3.0	厚 0.8	—	—	—	—	—	2回折り曲げら れている
384	003-04	鉄製品 雁股鎌	C13	Pit3	長 5.9	幅 3.0	厚 0.4	—	—	—	—	—	
385	008-06	鉄製品 釘	D14	Pit7	長 4.6	幅 1.0	厚 0.6	—	—	—	—	—	
386	009-03	鉄製品 釘	C14	Pit14	長 5.6	幅 0.6	厚 0.3	—	—	—	—	—	
387	009-02	鉄製品 釘	F13	Pit1	長 3.3	幅 0.7	厚 0.4	—	—	—	—	—	
388	007-03	鉄製品 小刀	C14	Pit5	長 4.9	幅 1.6	厚 0.5	—	—	—	—	—	茎
389	007-05	鉄製品 削鑿	C13	Pit16 No.1	長 13.7	幅 1.0	厚 0.4	—	—	—	—	—	
390	065-01	石製品 砥石	G9	Pit11	長 10.45	幅 4.25	厚 2.3	重量 149g	—	—	—	—	結晶片岩か黒色 片岩
391	066-03	石製品 砥石	C9	Pit2	長 5.65	幅 4.6	厚 1.25	重量 57g	—	—	—	—	凝灰岩
392	058-04	縄文土器 鉢	C19	包含層	—	—	—	—	外：押型文 内：押型文	密	並	にぶい黄 橙、褐灰	高山寺式期
393	058-03	縄文土器 鉢	B19	包含層	—	—	—	—	外：押型文 内：押型文、ナデ	密	並	灰黄褐 にぶい黄 橙	
394	058-02	縄文土器 鉢	B19	包含層	—	—	—	—	外：押型文 内：ナデ	密	並	にぶい黄 褐、にぶ い黄橙	
395	058-01	縄文土器 鉢	B19	包含層	—	—	—	口縁部 1/12	外：押型文、ヨコナデ 内：押型文、ヨコナデ	密	並	にぶい黄 褐	

第33表 遺物観察表①

報告 番号	実測 番号	器種等	小地 区	遺構名	法量 (cm)			残存度	調整・技法などの特徴	胎土	焼成	色調	特記事項
					口径	器高	底径						
396	058-05	土師質土器 皿	H11	包含層	—	—	6.5	底部 12/12	外：ロクロナデ、底部糸切 内：ロクロナデ	密	並	にぶい橙	
397	058-06	土師質土器 小皿	F2	包含層	—	—	5.4	底部 12/12	外：ロクロナデ、底部糸切 内：ロクロナデ	密	並	にぶい黄 橙 浅黄橙	
398	063-02	土師質土器 椀	G2	包含層	17.0	5.5	7.3	底部 3/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	並	浅黄橙	
399	063-03	土師質土器 椀	G2	包含層	—	—	6.6	底部 10/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	やや粗	並	灰白	
400	059-01	土師質土器 椀	F2	包含層	—	—	6.5	底部 9/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	並	灰白	
401	059-08	土師器 小皿	7~9	表土	8.2	1.6	—	口縁部 6/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	密	並	浅黄橙	
402	059-07	土師器 小皿	E9	包含層	7.6	1.1	—	口縁部 6/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	密	並	浅黄橙	
403	059-04	土師器 皿	G11	包含層	13.0	2.6	—	口縁部 3/12	外：ナデ 内：ナデ	密	並	にぶい黄 橙	
404	059-02	土師器 皿	B13	包含層	12.1	2.2	—	口縁部 6/12	外：ナデ 内：ナデ	密	並	灰白	
405	059-03	土師器 皿	J2	調査区 西側溝	11.6	—	—	口縁部 4/12	外：ナデ 内：ナデ	密	並	浅黄橙	
406	059-05	土師器 皿	C18	包含層	11.6	—	—	口縁部 5/12	外：オサエ 内：ナデ	密	並	灰白	
407	060-02	土師器 甕	B13	包含層	21.0	—	—	口縁部 4/12	外：オサエ、ナデ、ヨコナデ 内：ハケメ、ヨコナデ	やや密	並	灰白	外：煤付着
408	060-01	土師器 甕	B13	包含層	21.0	—	—	口縁部 4/12	外：オサエ、ヨコナデ 内：ハケメ、ヨコナデ	やや密	並	灰黄 にぶい橙	外：煤付着
409	061-01	土師器 鍋	E13	包含層 No.1	26.2	—	—	口縁部 2/12	外：オサエ、ナデ、ヨコナデ 内：オサエ、ナデ、ヨコナデ	やや密	並	にぶい黄 橙、灰白	
410	059-06	土師器 鍋	F11	包含層	20.0	—	—	口縁部 2/12	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密	並	浅黄橙	
411	060-03	土師器 鍋	D6	包含層	(40.0)	—	—	口縁部 1/12	外：ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	やや密	並	にぶい黄 橙	
412	062-03	陶器 山皿	F9	包含層	9.2	1.6	4.5	底部 5/12	外：ロクロナデ、底部糸切 内：ロクロナデ	密	良	灰白 灰	渥美型第5型式
413	062-02	陶器 山皿	F11	包含層	8.9	1.5	4.5	底部 11/12	外：ロクロナデ、底部糸切 内：ロクロナデ	密	良	灰白	渥美型第6型式
414	061-03	陶器 山茶椀	F17	包含層	16.0	—	—	口縁部 2/12	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	渥美型第5型式
415	060-04	陶器 山茶椀	C21	包含層	—	—	8.2	底部 3/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	渥美型第5型式 底部外面墨書
416	061-02	陶器 山茶椀	D10	包含層	—	—	7.6	底部 12/12	外：ロクロナデ、底部糸切、高台貼付、ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白	渥美型第6型式
417	062-01	陶器 山茶椀	C13	包含層	—	—	6.0	底部 9/12	外：ロクロナデ、底部糸切 内：ロクロナデ	密	良	灰白	渥美型第7か8 型式
418	061-05	陶器 山茶椀	4~7	表土掘 削	—	—	5.2	底部 5/12	外：ロクロナデ、底部糸切 内：ロクロナデ	密	良	灰白	瀬戸 第8か9型式
419	061-04	陶器 灰釉平椀	F13	包含層	—	—	—	口縁部 1/12	外：ロクロナデ、ロクロケズリ、施釉 内：ロクロナデ、施釉	密	良	灰黄	瀬戸美濃製品 古瀬戸後Ⅱ期
420	061-06	陶器 片口鉢	4~7	表土掘 削	29.6	—	—	口縁部 2/12	外：ナデ、ヨコナデ、ロクロケズリ 内：ロクロナデ	やや密	良	オリーブ 灰	尾張型第7型式
421	062-04	陶器 片口鉢	F13	包含層	—	—	12.6	底部 2/12	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	密	良	灰赤 赤灰	常滑製品
422	062-05	陶器 片口鉢	F13	包含層	—	—	—	口縁部 1/12	外：ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密	良	灰赤	常滑製品
423	063-07	白磁 皿	C13	包含層	—	—	7.2	底部 3/12	外：ロクロナデ、施釉 内：ロクロナデ、施釉	密	良	灰白	
424	063-08	白磁 椀	C13	包含層	—	—	—	口縁部 1/12	外：ロクロナデ、施釉 内：ロクロナデ、施釉	密	良	灰白	
425	063-04	白磁 椀	E13	包含層	—	—	7.4	底部 7/12	外：ロクロナデ、削出高台 内：ロクロナデ、施釉	密	良	灰白	
426	063-06	白磁 椀	D10	包含層	—	—	6.8	底部 3/12	外：ロクロケズリ、削出高台、 内：ロクロナデ、施釉	密	良	灰白	
427	063-05	青磁 椀	F6	包含層	—	—	5.6	底部 4/12	外：ロクロナデ、削出高台、施釉 内：ロクロナデ、施釉	密	良	灰白	
428	067-01	青磁 椀	4~7	表土掘 削	—	—	5.3	底部 6/12	外：ロクロナデ、ロクロケズリ、削出高台、 内：ロクロナデ、施釉	密	良	灰白	
429	059-09	土製品	E6	包含層	長 5.4	幅 5.2	厚 2.7	—	—	密	—	橙	
430	066-04	石製品 砥石	F13	包含層	長 5.25	幅 2.65	厚 1.9	重量 40g	—	—	—	—	砂質凝灰岩
431	065-03	石製品 砥石	D21	包含層	長 9.1	幅 3.5	厚 1.6	重量 71g	—	—	—	—	凝灰質泥岩
432	066-01	石製品 砥石	C21	包含層	長 6.0	幅 7.35	厚 2.5	重量 100g	—	—	—	—	凝灰岩

第34表 遺物観察表⑫

報告 番号	実測 番号	器種等	小地 区	遺構名	法量 (cm)			残存度	調整・技法などの特徴	胎土	焼成	色調	特記事項
					口径	器高	底径						
433	004-04	鉄製品 鎌	C9	包含層 No.1	長 7.5	幅 3.0	厚 0.3	—	—	—	—		
434	004-05	鉄製品 鎌	F7	包含層	長 5.5	幅 2.5	厚 0.4	—	—	—	—		
435	004-03	鉄製品 火打金	F14	包含層	長 6.2	幅 2.2	厚 0.2	—	—	—	—		
436	004-06	鉄製品 鎌	B11	包含層	長 4.2	幅 2.9	厚 0.2	—	—	—	—	鍛造切片	
437	005-06	鉄製品 小刀	D14	包含層 No.1	長 4.0	幅 1.1	厚 0.2	—	—	—	—	茎～刃関手前	
438	005-03	鉄製品 小刀	D11	包含層 No.1	長 3.5	幅 1.5	厚 1.0	—	—	—	—	切先	
439	005-08	鉄製品 小刀	F10	No.1	長 12.8	幅 1.2	厚 0.3	—	—	—	—		
440	006-12	鉄製品 釘	G8	包含層	長 7.1	幅 1.6	厚 0.9	—	—	—	—		
441	008-11	鉄製品 釘	F6	包含層 No.1	長 6.8	幅 1.1	厚 0.4	—	—	—	—		
442	008-07	鉄製品 釘	B9	包含層 No.1	長 5.1	幅 0.5	厚 0.3	—	—	—	—		
443	009-04	鉄製品 釘	G10	包含層 No.1	長 4.5	幅 0.6	厚 0.4	—	—	—	—		
444	009-01	鉄製品 釘	E14	包含層	長 4.3	幅 0.6	厚 0.5	—	—	—	—		
445	010-03	椀形滓	I2	包含層	長 4.8	幅 5.6	厚 2.4	—	—	—	—		
446	003-06	鉄製品 小刀	E6	SK65 No.1	長 4.1	幅 2.4	厚 0.5	—	—	—	—	保存処理前は 182と接合	
447		骨	B7 B8	SX274 No. 1	—	—	—	—	—	—	—	骨同定試料 写真のみ	
448		骨	B7 B8	SX274 No. 2	—	—	—	—	—	—	—	骨同定試料 写真のみ	
449		骨	B7 B8	SX274 No. 3	—	—	—	—	—	—	—	骨同定試料 写真のみ	
450		鉄滓	F10	SK162 (SK121) No. 3	長径 3.2	短径 2.7	厚 2.2	重量 19.27g	—	—	—	写真のみ	
451		鉄滓	F10	SK162 (SK121) No. 6	長径 2.4	短径 1.7	厚 1.1	重量 6.08g	—	—	—	写真のみ	
452		鉄滓	F10	SK162 (SK121) No. 7	長径 1.9	短径 1.7	厚 0.8	重量 2.8g	—	—	—	写真のみ	
453		鉄滓	F10	SK162 (SK121) No. 8・9	長径 3.6	短径 2.3	厚 2.0	重量 23.68g	—	—	—	写真のみ	
454		鉄滓	F10	SK162 No. 2	長径 3.2	短径 2.5	厚 2.1	重量 21.88g	—	—	—	写真のみ	
455		鉄滓	F10	SK162 No. 2	長径 2.2	短径 1.9	厚 1.3	重量 7.49g	—	—	—	写真のみ	
456		鉄滓	E10	SK163 (SK121) No. 2	長径 1.9	短径 1.1	厚 0.7	重量 2.43g	—	—	—	写真のみ	
457		鉄滓	E10	SK163 (SK121) No. 11	長径 3.3	短径 3.0	厚 1.2	重量 16.57g	—	—	—	写真のみ	
458		鉄滓	E11	SK162 No. 1	長径 3.5	短径 2.2	厚 1.6	重量 13.23g	—	—	—	写真のみ	
459		鉄滓	E11	SK162 No. 1	長径 1.4	短径 1.3	厚 0.9	重量 2.81g	—	—	—	写真のみ	
460		鉄滓	E10	SK163 (SK121) No. 9	長径 2.2	短径 1.7	厚 0.9	重量 4.38g	—	—	—	写真のみ	
461		羽口	E10	SK163 (SK121 ③)	長径 1.9	短径 1.4	厚 1.0	重量 3.94g	—	—	—	写真のみ	
462		鉄滓	G7	SK91	長径 3.5	短径 2.1	厚 1.3	重量 16.75g	—	—	—	写真のみ	
463		羽口	D10	SK129	長径 3.6	短径 2.0	厚 1.9	重量 10.58g	—	—	—	写真のみ ガラス質滓と粘 土の付着から判 断	
464		鉄滓	H10	SK141 No. 1	長径 2.4	短径 2.0	厚 1.5	重量 11.25g	—	—	—	写真のみ	
465		鉄滓	H10	SK142	長径 2.4	短径 2.0	厚 1.3	重量 11.59g	—	—	—	写真のみ	
466		鉄滓	H11	SK149	長径 2.0	短径 1.5	厚 1.1	重量 3.54g	—	—	—	写真のみ	

第35表 遺物観察表⑬

報告 番号	実測 番号	器種等	小地 区	遺構名	法量 (cm)			残存度	調整・技法などの特徴	胎土	焼成	色調	特記事項
					口径	器高	底径						
467		鉄滓	F11	SK136 No. 2	長径 3.4	短径 3.1	厚 1.6	重量 18.02g	—	—	—	—	写真のみ
468		鉄滓	D11	SD124	長径 2.9	短径 1.9	厚 1.5	重量 10.02g	—	—	—	—	写真のみ
469		鉄滓	H4	Pit1	長径 1.6	短径 1.3	厚 1.0	重量 2.87g	—	—	—	—	写真のみ
470		鉄滓	G7	Pit4	長径 5.0	短径 3.4	厚 1.7	重量 35.33g	—	—	—	—	写真のみ
471		鉄滓	F9	Pit15	長径 3.4	短径 1.8	厚 1.4	重量 9.05g	—	—	—	—	写真のみ
472		鉄滓	G9	Pit21	長径 2.8	短径 1.9	厚 1.4	重量 10.37g	—	—	—	—	写真のみ
473		羽口?	G12	Pit9 No. 1	長径 5.0	短径 4.2	厚 2.0	重量 45.58g	—	—	—	—	写真のみ 羽口の溶けたもの の可能性あり
474		鉄滓	E13	Pit11	長径 2.7	短径 2.4	厚 1.9	重量 11.91g	—	—	—	—	写真のみ
475		鉄滓	C14	Pit11	長径 4.0	短径 2.4	厚 1.3	重量 13.50g	—	—	—	—	写真のみ
476		鉄滓	D15	Pit1	長径 2.2	短径 1.6	厚 1.3	重量 5.19g	—	—	—	—	写真のみ
477		鉄滓	D15	Pit2	長径 2.0	短径 1.5	厚 1.1	重量 3.80g	—	—	—	—	写真のみ
478		鉄滓	D20	Pit1	長径 2.4	短径 2.3	厚 1.7	重量 14.06g	—	—	—	—	写真のみ
479		鉄滓	F2	包含層	長径 2.4	短径 2.1	厚 1.4	重量 6.66g	—	—	—	—	写真のみ
480		鉄滓	G5	包含層	長径 3.1	短径 2.2	厚 1.1	重量 9.81g	—	—	—	—	写真のみ
481		鉄滓	12~ 14	調査区 北壁	長径 6.4	短径 6.1	厚 3.2	重量 79.30g	—	—	—	—	写真のみ
482		鉄滓	B14	包含層	長径 5.3	短径 3.9	厚 2.8	重量 59.03g	—	—	—	—	写真のみ
483		鉄滓	F14	包含層	長径 2.9	短径 2.5	厚 1.8	重量 14.38g	—	—	—	—	写真のみ
484		鉄滓	H14	包含層 No. 1	長径 2.7	短径 2.2	厚 1.2	重量 7.93g	—	—	—	—	写真のみ
485		鉄滓	B22	包含層	長径 1.5	短径 1.3	厚 1.0	重量 2.51g	—	—	—	—	写真のみ
486		鉄滓	A21	包含層	長径 1.7	短径 1.4	厚 1.2	重量 2.78g	—	—	—	—	写真のみ 焼土付着

第36表 遺物観察表⑭

4 自然科学分析

(1) 目的

東沖遺跡では、石組遺構、墓、土坑等を確認した。土坑の検出は、約200基を超え、埋土中に炭化物や焼土を含むものも確認した。これらの土坑や石組遺構は、その性格が捉えにくかった。そのため、遺構、遺跡の性格を検討するうえでの手掛かりとして、以下4本の自然科学分析を行った。各分析の目的は、以下の通りである。

①リン・カルシウム分析は、土坑の性格を検討するために行った。土坑からは、骨片を確認できなかった。しかし、土坑墓の可能性も考えられたため、酸化リン、酸化カルシウムの含有量から墓の可能性を試みた。分析するにあたって、土坑の埋土の状況から任意で資料採取する遺構を選んだ。A～Eは、分析を行った遺構・埋土の種別である。

- A. 墓 (S X122、S X236)
- B. 墓の可能性が高い (S K226)
- C. 石組遺構 (S K120、S K121・162・163、S K136)
- D. 石積み土坑 (S K228)
- E. 土坑
 - a. 単一層埋土 (S K179、S K190)
 - b. 単一層埋土で焼土や炭化物を含むもの (S K141)
 - c. 複数層堆積した埋土で焼土や炭化物を含まない層 (S K147)
 - d. 複数層堆積した埋土で焼土や炭化物を含む層 (S K147、S K225)

②樹種同定は、S K226が墓であるかを検討する資料の一部として行った。S K226は、底面や壁面に被熱痕跡が確認できなかった。しかし、土坑から一定量の炭化材が出土し、これらは火葬される際の燃料材として使用されたものか否かを判断するために同定を行った。さらに、周辺環境の復元も視野に入れて樹種同定を行った。

③骨同定は、出土した動物遺体を同定するために行った。

④鉄滓の成分分析は、遺跡内で鍛冶を行っている可能性を検討するために行った。遺跡内では、鉄

滓や鉄釘等の鉄製品が多く出土している。このため、破損した鉄製品を再利用して鍛冶を行った可能性の有無も視野に入れて成分分析を行った。

各種分析報告は、次節以降の通りである。

(酒井巳紀子)

(2) 土坑土壌中のリン・カルシウム分析

藤根 久 (株式会社パレオ・ラボ)

①はじめに

東沖遺跡の調査では、中世の比較的大型の土坑群が複数検出された。これら土坑は、土坑墓として利用された可能性が予測されているものもある。

ここでは、これら土坑の使用に関する性格を調べるために、土坑土壌の篩を用いた水洗選別を行い、骨片の検出を試みた。また、骨を構成する主要な無機成分のリンとカルシウム含有量を調べるために、蛍光X線分析を行った。

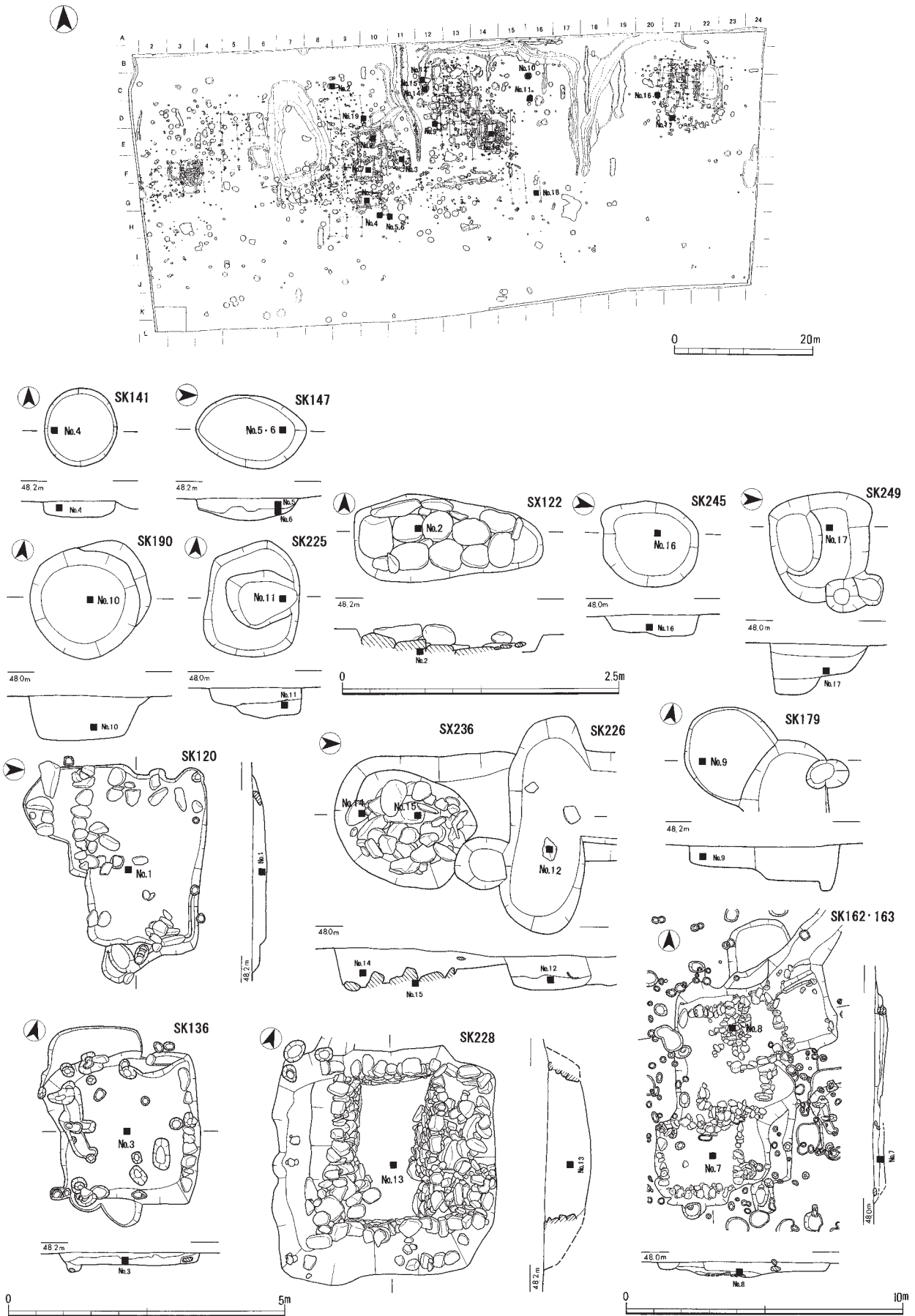
②試料と方法

試料は、土坑内の残留土壌および地山試料の19試料である(第64図、第37表)。採取された試料は、多くがシルト質粘土であるが、砂混じりシルト質粘土も含まれている。

各試料は、1mm篩を用いて水洗選別を行い、実体顕微鏡による観察を行った。

さらに、20g程度を採取して乾燥した後、セラミック乳鉢で軽く粉砕した。粉砕した試料は、塩化ビニール製リングに充填した後、油圧プレス機を用いて20トンプレスして測定用ブリケットを作成した。測定は、フィリップス社製波長分散型蛍光X線分析装置MagiX(PW2424型)を用いてFP法(ファンダメンタル・パラメータ法)により行った(以後、測定Iと呼ぶ)。

なお、骨片粒子を元素マッピング分析により検出し、点分析を行うために、前述とは別仕様の蛍光X線分析を行った。試料は、測定Iと同じ測定用ブリケットを使用した。測定は、X線分析顕微鏡(株堀場製作所製XGT-5000Type II)を用いた。元素マッピングの測定条件は、X線導管径100 μ m、電圧50KV、電流自動設定、測定時間10,000secである。点分析の測定条件は、X線導管径100 μ m、電圧50KV、電流



第64図 土壌分析試料採取箇所(1:50、SK120・136・228は1:100、SK162・163は1:200、平面図は1:800)

自動設定、測定時間500secである。定量計算は、標準試料を用いないFP法で半定量分析を行った（以後、測定Ⅱと呼ぶ）。

③結果および考察

各試料について1mm篩を用いて水洗選別を行い、実体顕微鏡による観察を行った結果、骨と思われる残留物は全く見られなかった。本来、歯以外の骨は、酸性土壤中において溶出し易く、その形態を留めないことが原因と思われる。

第38表には、各土坑試料と地山試料の測定Ⅰによる蛍光X線分析結果を示す。

分析した結果、化学組成として酸化ケイ素 SiO_2 が最も多く56.63～61.18%含まれ、次いで酸化アルミニウム Al_2O_3 が22.97～26.20%、酸化鉄 Fe_2O_3 が6.86～8.23%、酸化カリウム K_2O が2.78～3.86%であり化学的には類似した成分と言える。

生物の骨や歯を構成する主要な無機成分は、水酸磷灰石（ハイドロキシアパタイト： $\text{Ca}_5(\text{OH})(\text{PO}_4)_3$ ）からなり、リンとカルシウムがほぼ等量含まれている。ただし、人間であるか否かは特定できない。

測定の結果、酸化リン P_2O_5 は、0.21～2.23%含まれ、地山は0.24%および0.21%であった。また、酸化カルシウム CaO が0.50～1.65%含まれ、地山は0.64%および0.56%であった。

一般的に土壤中では、酸化リンは少ないが、酸化カルシウムは長石類中に普通に含まれる元素である。

土壤中の分析値から、骨成分が残存しているかどうかの判定は、両元素の含有量がほぼ等量で周辺土壌の値に対して高いことが必要である。ただし、土壌中における埋没後の両元素の挙動は異なることから、両元素が少なくとも周辺土壌（地山）の含有量より高い値であることが条件と考える。第65図－上図に、酸化リン(P_2O_5)と酸化カルシウム(CaO)の分布図を示す。

この図中において、地山（No.18とNo.19）の含有量より高い領域に位置する試料は、酸化リン(P_2O_5)ではいずれの試料も高い値を示すが、酸化カルシウム(CaO)では試料No.3、No.9、No.14、No.15が低い。また、No.9は酸化リン(P_2O_5)が高い値を示すことから、直ちに骨成分が残存していないと判断できない。

測定Ⅱによる蛍光X線分析の結果、元素マッピン

グ分析においてリン濃度の高い部分が検出された（第66図および第67図の白色部分）。

各試料において複数点の点分析を行った結果を第39表に示す。また、複数点測定した分析結果のうち、酸化リン(P_2O_5)の含有量が最も高い結果について第65図－下段図に示す。

試料No.1、No.4、No.6～No.9、No.13の7試料が、地山試料（No.19）より酸化リン(P_2O_5)および酸化カルシウム(CaO)が共に高い値であった。なお、試料No.12は、酸化リン(P_2O_5)の含有量が高いものの、酸化カルシウム(CaO)含有量が地山の値より低い。

以上の測定Ⅰまたは測定Ⅱの結果から、試料No.1（S K 120）、No.4（S K 141）、No.6（S K 147下層）、No.7（S K 162下層）、No.8（S K 163下層）、No.9（S K 179）、No.13（S K 228）の7試料は骨質物が残存している可能性が示された。また、試料No.12（S K 226）は、酸化カルシウム(CaO)含有量が地山の値より低いものの、骨質物が残存している可能性が高い。

④おわりに

17土坑の土壌について、水洗篩分けとリンおよびカルシウム分析を行った。水洗篩分けでは、骨片は確認されなかったが、蛍光X線分析によるリン・カルシウム分析（測定Ⅱ）において、7土坑の土壌においてリンおよびカルシウム含有量の高い値を示す質物が検出できた。これらは、リンおよびカルシウム含有量がともに高いことから、骨質物の可能性が高いことを示す証拠と考える。

従来のリン・カルシウム分析では、地山との比較で僅かな含有量の違いから、土坑の使用に関する性格が推定されてきた。ここで測定Ⅱとして試行したように、軽くプレスした試料の元素マッピング分析を行い、リン濃度の高い部分を検出して点分析を行い、直接的に骨質物の検出を行う方法が極めて有効と考える。

（3）S K 226出土炭化材の樹種同定

植田弥生(株式会社パレオ・ラボ)

①はじめに

ここでは、S K 226から出土した炭化材の樹種同定結果を報告する。S K 226は中世の墓と考えられるものであるが、底や壁に被熱の痕跡は見られず、明確

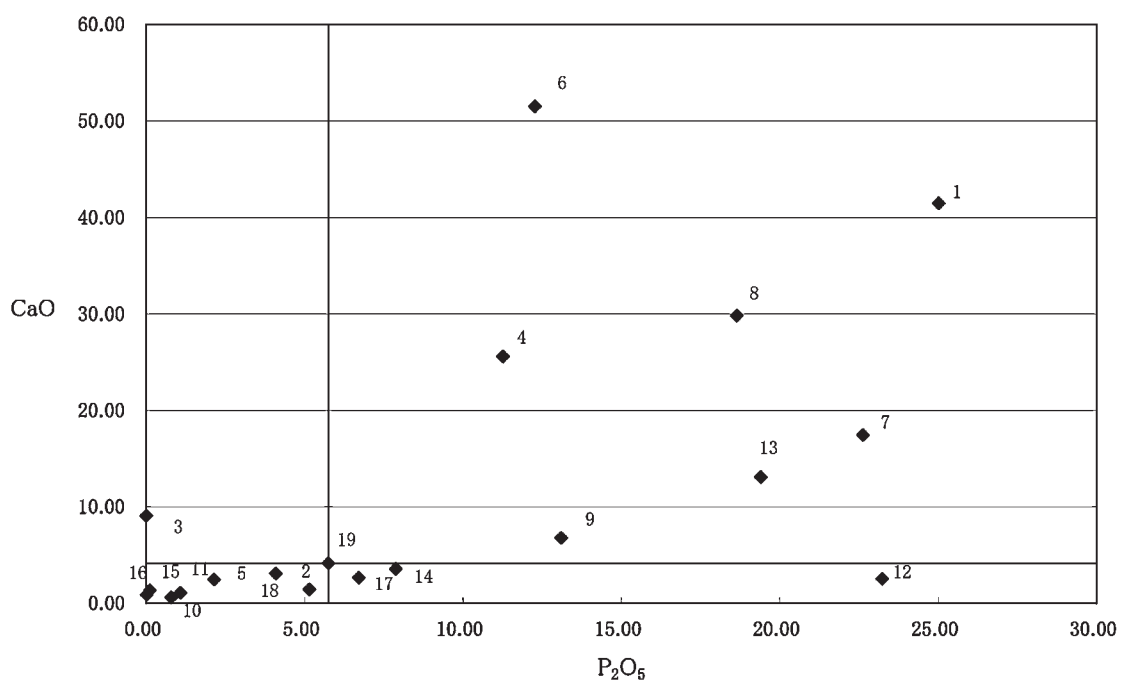
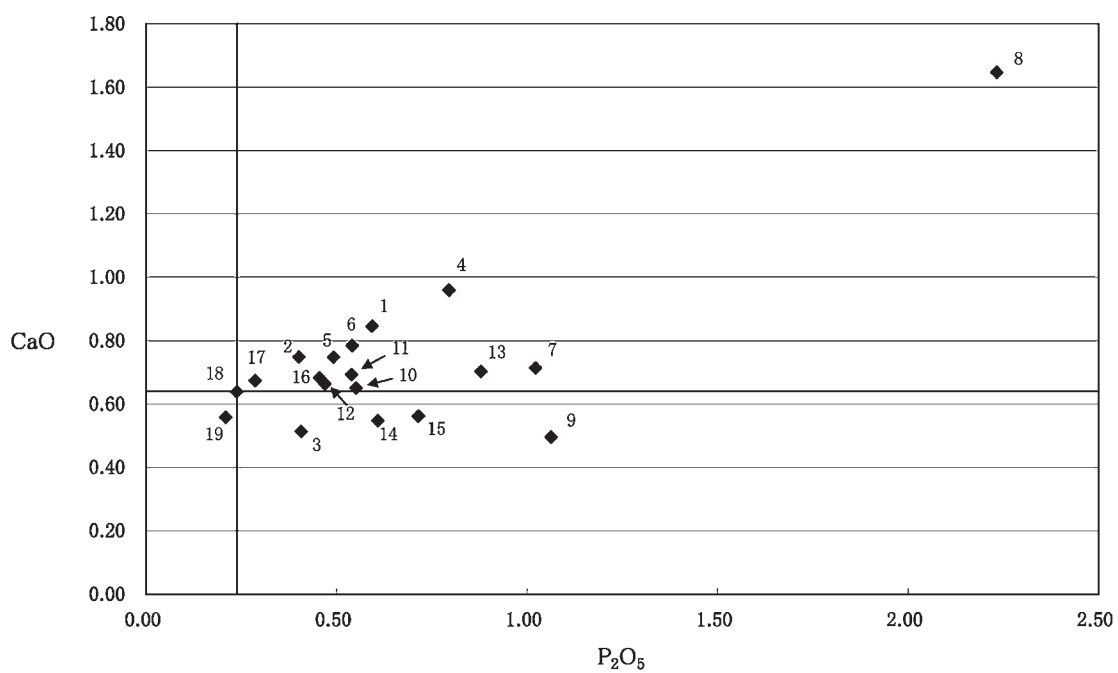
分析No.	遺構	層位	堆積物	色調	1mm篩残渣	その他
1	SK120		シルト質粘土	にぶい黄色 (2.5Y 6/3)	山茶碗、土師器片、大型石英	
2	SK122		砂混じりシルト質粘土	灰黄色 (2.5Y 6/2)		
3	SK136	下層	砂質シルト質粘土	浅黄色 (2.5Y 7/4)	土師器片、砂・礫多い	
4	SK141		シルト質粘土	にぶい黄色 (2.5Y 6/3)	山茶碗、土師器片、砂・礫多い	
5	SK147	上層	シルト質粘土	浅黄色 (2.5Y 7/3)	土師器片、焼土・砂多い	
6	SK147	下層	シルト質粘土	浅黄色 (2.5Y 7/3)	山茶碗片、礫・砂少ない	
7	SK162	下層	シルト質粘土	灰黄色 (2.5Y 6/2)	山茶碗、土師器片、大型礫	
8	SK163	下層	シルト質粘土	浅黄色 (2.5Y 7/3)	土師器片、砂・礫多い	
9	SK179		砂混じりシルト質粘土	にぶい黄色 (2.5Y 6/4)	山茶碗片、大型礫・砂多い	
10	SK190		シルト質粘土	にぶい黄色 (2.5Y 6/3)	山茶碗、土師器片、礫、砂多い	
11	SK225	下層	シルト質粘土	浅黄色 (2.5Y 7/3)	土師器片、砂多い	
12	SK226		シルト質粘土	にぶい黄色 (2.5Y 6/3)	土師器片、砂多い	炭化材多い
13	SK228		シルト質粘土	にぶい黄色 (2.5Y 6/3)	山茶碗、土師器片、砂多い	
14	SX236	礫上	砂混じりシルト質粘土	浅黄色 (2.5Y 7/3)	土師器片、砂・礫多い	
15	SX236	礫下	シルト質粘土	浅黄色 (2.5Y 7/3)	山茶碗、土師器片、砂多い	
16	SK245		シルト質粘土	浅黄色 (2.5Y 7/4)	土師器片	P・Ca分析下部試料
17	SK249	最下層	シルト質粘土	浅黄色 (2.5Y 7/4)		
18	地山1		砂混じりシルト質粘土	浅黄色 (2.5Y 7/4)		
19	地山2		シルト質粘土	浅黄色 (2.5Y 7/4)		

第37表 分析試料とその詳細

分析No.	遺構No.	層位	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	SO ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	Cr ₂ O ₃	MnO	Fe ₂ O ₃	CuO	ZnO	Rb ₂ O	SrO	ZrO ₂	BaO	TOTAL	判定
1	SK120		0.96	2.04	23.35	60.55	0.59	0.06	3.08	0.85	1.03	0.01	0.31	7.03	0.010	0.018	0.022	0.017	0.031	0.060	100.00	
2	SK122		0.94	2.42	24.82	58.17	0.40	0.06	3.67	0.75	1.07	0.01	0.24	7.28	0.011	0.018	0.021	0.018	0.033	0.063	100.00	
3	SK136	下層	1.11	2.53	23.68	59.38	0.41	0.03	3.86	0.51	1.02	0.02	0.16	7.15	0.008	0.015	0.019	0.011	0.035	0.064	100.00	
4	SK141		0.76	2.13	23.88	60.31	0.80	0.05	2.78	0.96	1.04	0.01	0.33	6.79	0.013	0.019	0.017	0.011	0.035	0.068	100.00	●
5	SK147	上層	0.81	2.24	24.72	58.62	0.49	0.05	3.16	0.75	1.12	0.01	0.23	7.64	0.008	0.020	0.020	0.009	0.040	0.059	100.00	
6	SK147	下層	0.90	2.53	24.61	58.20	0.54	0.04	3.11	0.79	1.13	0.02	0.25	7.75	0.011	0.018	0.017	0.011	0.029	0.060	100.00	
7	SK162	下層	0.99	2.26	23.57	59.92	1.02	0.05	3.18	0.71	1.01	0.02	0.25	6.84	0.011	0.020	0.018	0.011	0.040	0.065	100.00	●
8	SK163	下層	0.83	2.19	22.97	58.25	2.23	0.06	2.94	1.65	1.04	0.01	0.29	7.35	0.012	0.025	0.020	0.019	0.038	0.078	100.00	●
9	SK179		0.85	2.07	24.42	58.76	1.06	0.08	3.32	0.50	1.08	0.01	0.19	7.52	0.015	0.015	0.019	0.008	0.046	0.054	100.00	(●)
10	SK190		0.80	1.99	24.91	59.11	0.55	0.09	2.88	0.65	1.10	0.01	0.28	7.48	0.010	0.017	0.016	0.008	0.040	0.061	100.00	
11	SK225	下層	0.74	2.01	25.12	58.89	0.54	0.08	2.87	0.69	1.10	0.01	0.28	7.52	0.010	0.019	0.017	0.009	0.030	0.059	100.00	
12	SK226		0.85	2.24	24.37	58.95	0.47	0.07	3.34	0.66	1.10	0.02	0.24	7.54	0.009	0.017	0.017	0.009	0.050	0.050	100.00	
13	SK228		0.80	2.03	23.24	61.18	0.88	0.09	2.93	0.70	1.01	0.01	0.31	6.68	0.009	0.020	0.017	0.010	0.033	0.060	100.00	●
14	SX236	礫上	1.01	2.48	24.13	59.30	0.61	0.08	3.44	0.55	1.03	0.01	0.20	7.04	0.009	0.018	0.016	0.010	0.031	0.050	100.00	
15	SX236	礫下	0.93	2.29	23.19	60.91	0.72	0.08	3.14	0.56	1.03	0.01	0.22	6.80	0.009	0.017	0.016	0.010	0.023	0.050	100.00	
16	SK245	下部	0.75	2.24	25.61	57.62	0.46	0.08	2.97	0.68	1.14	0.01	0.27	8.04	0.011	0.021	0.018	0.009	0.026	0.058	100.00	
17	SK249	最下層	0.81	2.26	26.20	56.63	0.29	0.08	3.19	0.67	1.22	0.01	0.27	8.23	0.011	0.023	0.018	0.011	0.027	0.062	100.00	
18	地山1		0.81	2.36	24.57	59.03	0.24	0.06	3.42	0.64	1.09	0.01	0.21	7.41	0.010	0.016	0.016	0.008	0.045	0.057	100.00	
19	地山2		0.93	2.40	23.77	59.54	0.21	0.04	3.58	0.56	1.10	0.02	0.17	7.56	0.008	0.017	0.017	0.008	0.022	0.064	100.00	
	最小値		0.74	1.99	22.97	56.63	0.21	0.03	2.78	0.50	1.01	0.01	0.16	6.68	0.008	0.015	0.016	0.008	0.022	0.050		
	最大値		1.11	2.53	26.20	61.18	2.23	0.09	3.86	1.65	1.22	0.02	0.33	8.23	0.015	0.025	0.022	0.019	0.050	0.078		
	平均値		0.87	2.25	24.27	59.12	0.66	0.06	3.20	0.73	1.08	0.01	0.25	7.35	0.010	0.019	0.018	0.011	0.034	0.060		

第38表 測定 I の蛍光 X 線分析結果 (単位%)

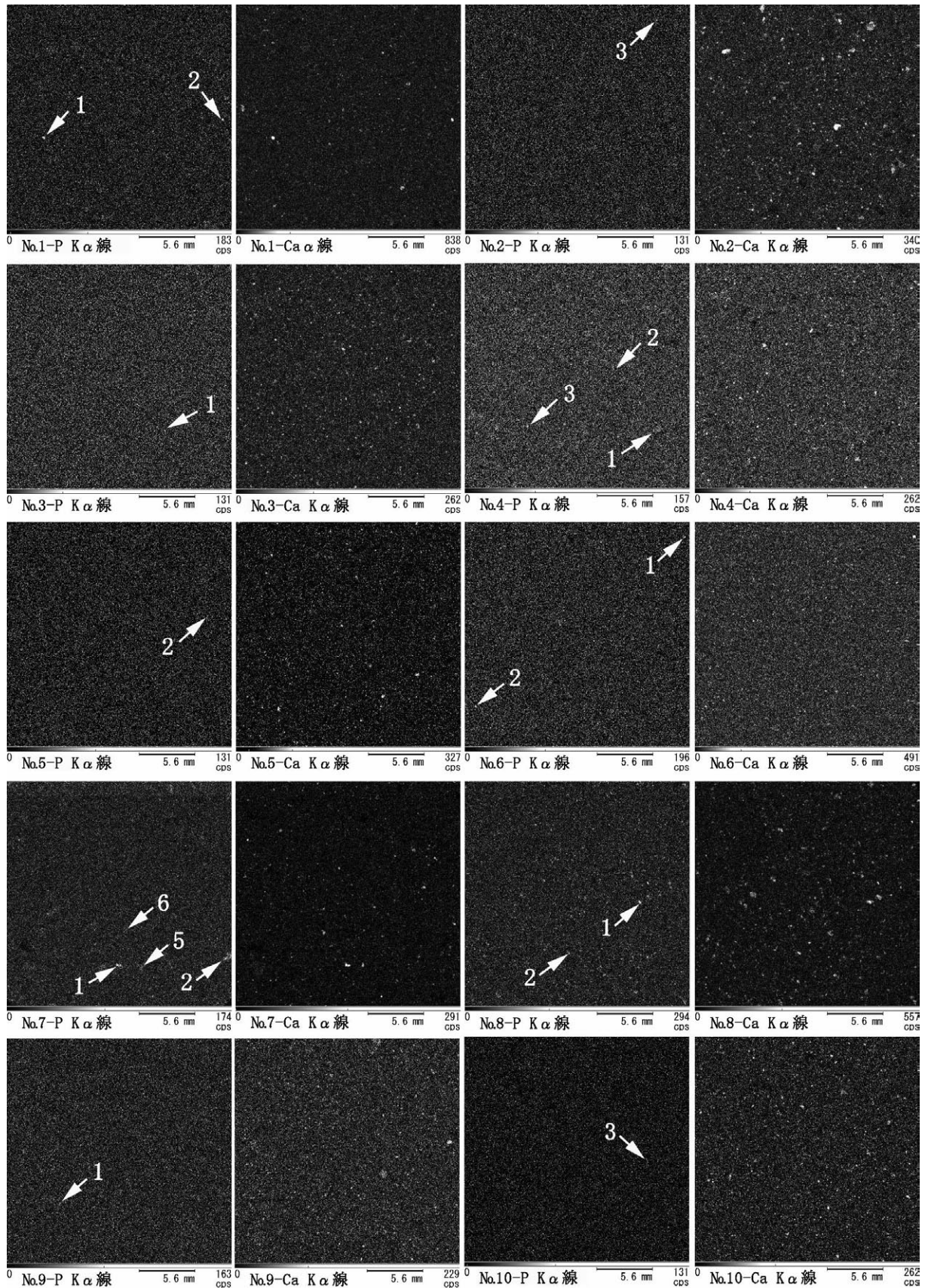
分析No.	遺構No.	層位	位置	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	SO ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	CuO	ZnO	Rb ₂ O	SrO	Y ₂ O ₃	ZrO ₂	TOTAL	測定 I	測定 II
1	SK120		1	23.51	6.23	14.45	0.94	0.28	44.67	1.12	2.37	5.81	0.05	0.07	0.05	0.30	0.07	0.08	100.00		●
2	SK122		2	17.71	4.74	25.01	0.86	0.70	41.50	1.89	0.34	6.75	0.02	0.08	0.11	0.13	0.00	0.15	99.99		
3	SK136	下層	3	26.87	50.18	5.15	0.19	3.20	1.44	1.32	0.48	11.05	0.02	0.02	0.02	0.01	0.01	0.05	100.01		
4	SK141		1	0.00	0.00	2.63	19.57	15.30	9.50	8.23	0.26	33.74	4.98	1.63	0.00	0.25	1.97	1.93	99.99		●
			2	0.00	0.00	5.17	2.17	11.00	9.91	4.21	7.88	55.54	0.83	0.48	0.81	0.49	0.67	0.84	100.00		●
			3	35.24	1.29	11.26	0.33	3.22	25.62	3.29	0.13	18.98	0.00	0.14	0.15	0.10	0.13	0.14	100.02		
5	SK147	上層	2	48.27	10.22	2.14	0.00	8.44	2.48	3.99	0.81	23.06	0.13	0.04	0.13	0.08	0.05	0.14	99.98		
6	SK147	下層	1	0.20	0.00	12.27	0.01	0.35	51.53	5.81	0.27	27.20	0.03	0.17	0.00	1.11	0.25	0.80	100.00		●
			2	0.00	0.00	2.23	0.63	3.00	34.93	6.67	0.38	49.31	0.37	0.65	0.25	0.44	0.42	0.72	100.00		
			1	16.91	24.91	22.62	0.22	1.78	17.46	0.88	0.40	14.56	0.04	0.05	0.03	0.06	0.01	0.08	100.01		
7	SK162	下層	2	28.12	44.63	13.25	0.03	3.25	1.58	2.53	0.15	6.32	0.01	0.00	0.01	0.05	0.02	0.03	99.98		●
			5	29.67	52.45	6.50	0.04	2.27	0.80	1.81	0.26	6.08	0.01	0.01	0.02	0.03	0.01	0.03	99.99		●
			6	24.28	62.69	2.17	0.16	2.46	2.08	0.71	0.27	5.08	0.03	0.00	0.00	0.02	0.01	0.03	99.99		
8	SK163	下層	1	29.99	1.57	18.64	0.33	1.55	29.82	1.79	1.13	14.15	0.07	0.15	0.00	0.58	0.14	0.09	100.00		●
			2	39.88	0.00	11.06	0.00	4.32	15.89	3.26	1.14	23.49	0.00	0.27	0.19	0.32	0.06	0.12	100.00		●
9	SK179		1	0.00	0.00	13.10	1.32	29.98	6.77	2.82	0.06	40.94	1.34	0.00	0.91	0.92	0.29	1.55	100.00	(●)	●
10	SK190		3	24.97	56.82	0.79	0.17	2.90	0.63	1.34	0.52	11.72	0.02	0.03	0.04	0.01	0.01	0.03	100.00		
11	SK225	下層	2	0.00	84.37	1.08	0.26	4.57	1.09	0.97	0.64	6.80	0.01	0.00	0.00	0.02	0.08	0.13	100.02		
			1	0.00	0.00	23.23	0.00	7.39	2.55	4.05	0.50	59.11	0.00	0.03	0.00	0.46	0.61	2.07	100.00		
12	SK226		3	74.02	0.00	1.93	0.68	3.42	2.51	2.36	0.12	14.51	0.14	0.00	0.01	0.07	0.04	0.18	99.99		(●)
			4	68.26	0.00	0.17	1.04	8.56	1.40	1.71	0.16	18.15	0.16	0.04	0.12	0.10	0.04	0.09	100.00		
13	SK228		1	19.27	53.38	8.56	0.21	2.27	6.33	1.05	0.39	8.44	0.01	0.02	0.02	0.01	0.01	0.03	100.00		●
			2	10.49	43.72	19.40	0.13	0.92	13.08	0.55	0.41	11.21	0.01	0.02	0.01	0.01	0.02	0.03	100.01		●
14	SX236	礫上	1	0.00	0.00	7.88	0.43	13.30	3.58	4.96	4.14	63.09	0.41	0.48	0.28	0.49	0.25	0.70	99.99		
			2	38.46	0.00	3.52	0.82	18.52	3.88	10.58	0.14	21.81	0.43	0.00	0.38	0.25	0.23	0.99	100.01		
			3	0.00	0.00	7.87	0.14	12.44	2.75	1.60	0.40	66.34	0.00	0.04	2.14	4.62	0.08	1.59	100.01		
15	SX236	礫下	1	28.50	51.56	0.02	0.06	4.46	0.88	1.98	0.77	11.70	0.01	0.02	0.01	0.01	0.00	0.01	99.99		
16	SK245	下部	1	28.91	34.18	0.11	0.10	6.93	1.36	2.60	1.23	24.06	0.12	0.09	0.11	0.01	0.04	0.15	100.00		
17	SK249	最下層	1	42.23	0.00	6.71	0.30	6.85	2.67	2.42	1.60	35.93	0.15	0.36	0.26	0.15	0.02	0.35	100.00		
18	地山1		1																		



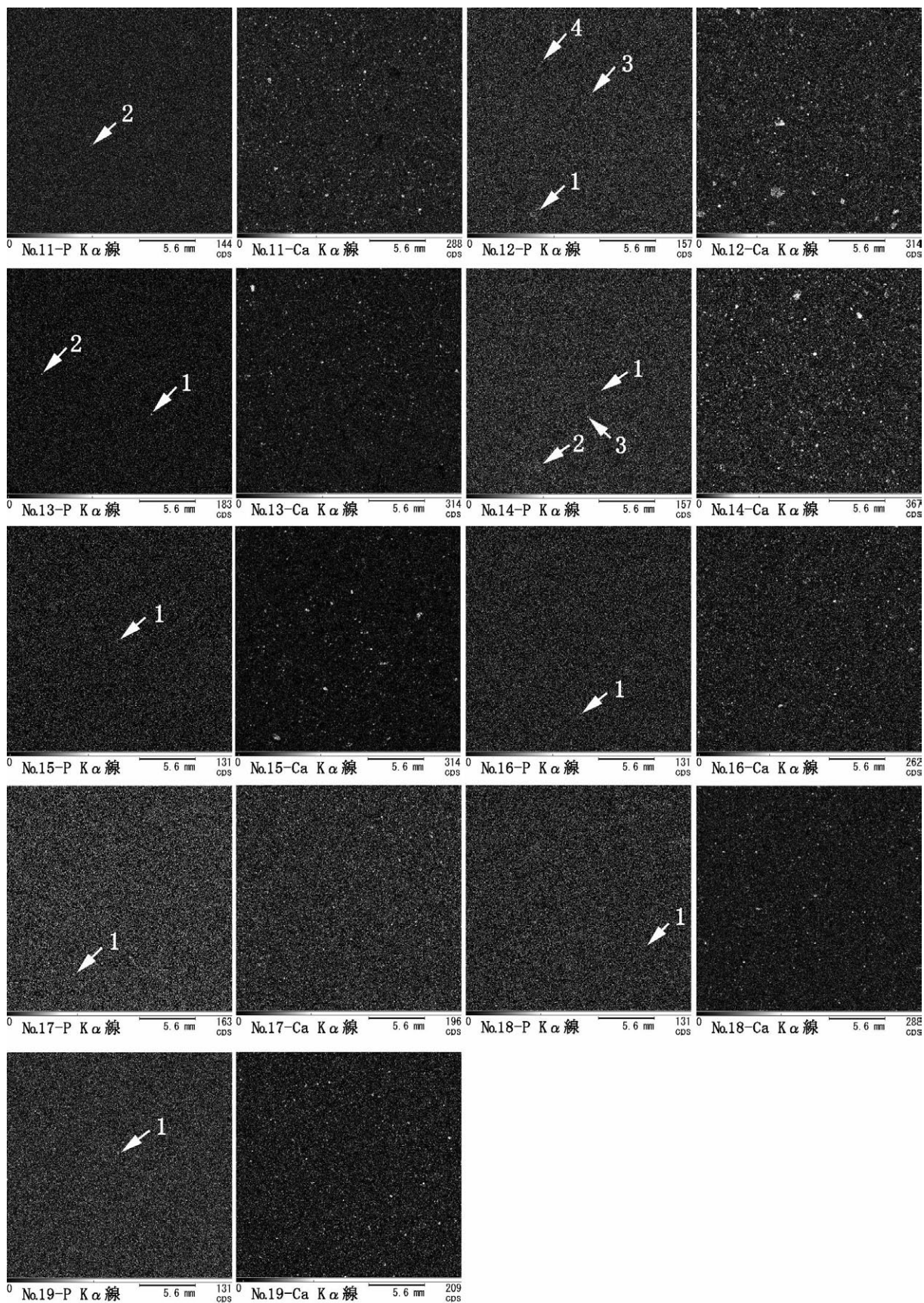
第65図 土坑土壤のリン (P₂O₅) -カルシウム (CaO) 分布図

上段図：測定 I (全岩) による分析結果

下段図：測定 I (点分析) による分析結果 (複数測定のうちリン含有量が最も高い点を示す)



第66図 元素マッピング図 (P;リン、Ca;カルシウム) と点分析位置①
 点分析は、典型的な部分の分析位置を示す。



第67図 元素マッピング図 (P;リン、Ca;カルシウム) と点分析位置②
 点分析は、典型的な部分の分析位置を示す。

な副葬品や骨片も乏しいため、土坑が墓であるのかを検討する資料の一部として、出土炭化材の樹種同定が実施された。

②試料と方法

土壌を水洗選別し取り上げられた多数の炭化材から、形状や大きさの異なる炭化材や異なる分類群と思われるもの合計11点を、樹種同定試料とした。

同定は、炭化材の横断面(木口)を手で割り実体顕微鏡で予察し、次に材の3方向(横断面・接線断面・放射断面)の断面を作成し、走査電子顕微鏡で拡大された材組織を観察した。走査電子顕微鏡用の試料は、3断面を5mm角以下の大きさに整え、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡(日本電子(株)製 JSM-5900LV型)で観察と写真撮影を行った。

同定した炭化材の残り破片は、三重県埋蔵文化財センターに保管されている。

③結果

炭化材11点から検出された分類群は、常緑広葉樹のアカガシ亜属(2点)・ヒサカキ(1点)、常緑広葉樹のムクノキ(3点)・クリ(1点)・サクラ属(1点)、常緑性と落葉性の分類群を含むスノキ属(2点)・ツツジ科(1点)であった。

水洗選別された炭化材のほとんどは、小さな破片であり、非常に細い枝材が僅かに見いだされた。樹種同定試料とした破片には、髓がある破片や、髓に近い部位の破片が多かった。

以下に同定根拠とした材組織の特徴を記載し、材の3方向の組織写真を提示した。

(1)コナラ属 アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 第68図 1a-1c(破片番号1)

集合放射組織を挟み小の単独管孔が放射方向に配列する放射孔材。道管の壁孔は小さく交互状、穿孔は単穿孔である。放射組織は同性、単列のものと同放射組織とがあり、道管との壁孔は孔口が大きく、柵状・交互状である。

(2)クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 第68図 2a-2c(破片番号11)

1年生の材(当年枝)で、小型の管孔が火炎状に配列し、晩材では非常に小型となる。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単穿孔である。放射組織は単列である。

(3)ムクノキ *Aphananthe aspera* (Thunb.) Planch. ニレ科 第68図 3a-3c(破片番号4)

中型～小型の管孔が単独または2～3個が放射方向に複合し、帯状柔組織が顕著な散孔材である。道管の壁孔は交互状で横に伸びた孔口はつながり流れ、穿孔は単穿孔である。放射組織は異性、1～3細胞幅の紡錘形、上下端に方形細胞があり、結晶細胞がある。放射組織と道管との壁孔は交互状に密在する。

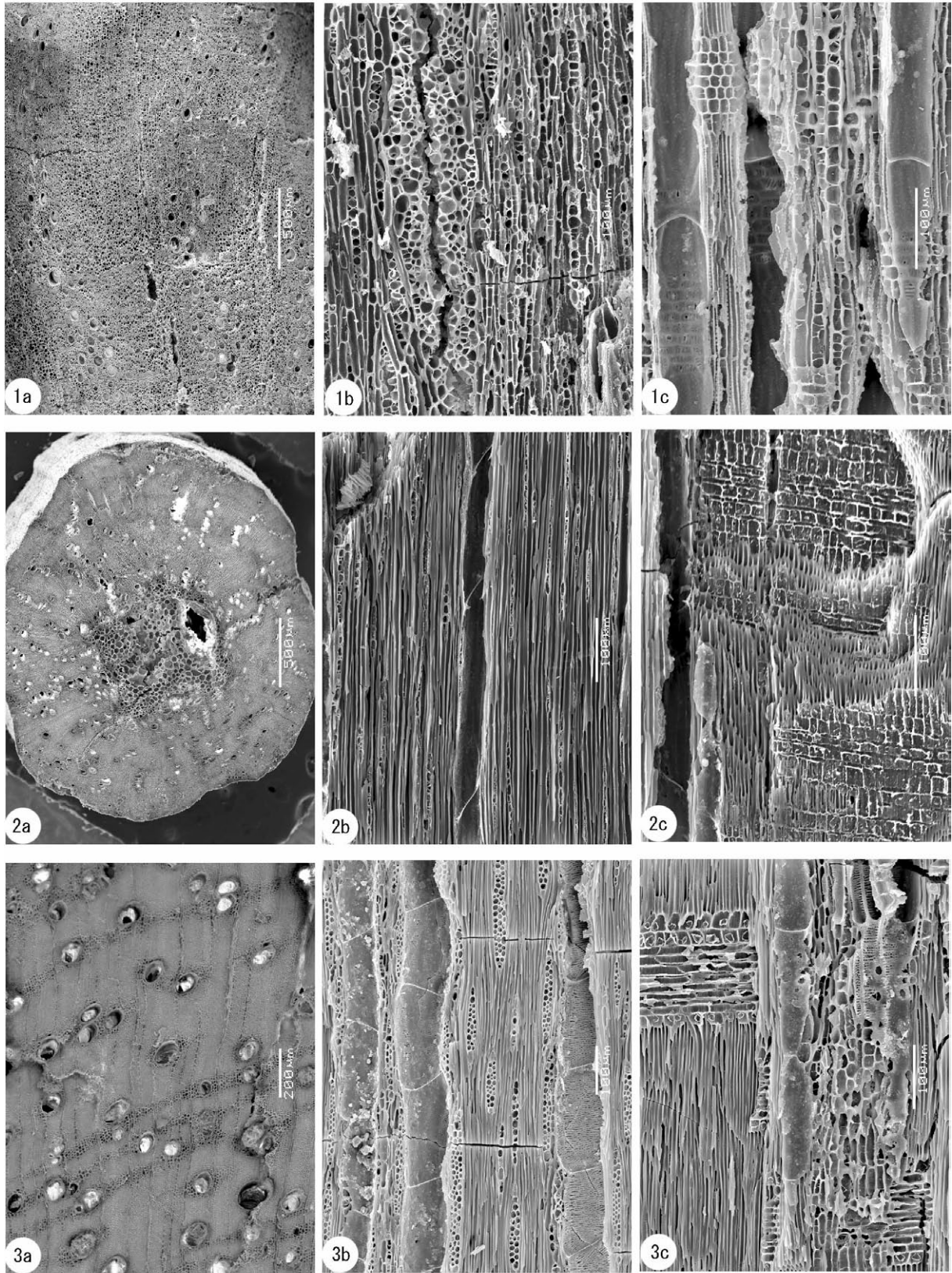
(4)サクラ属 *Prunus* バラ科 第69図 4a-4c(破片番号7)

小型の管孔が年輪の始めにやや密に分布し、その後は放射方向・接線方向・斜斜に複合し分布している散孔材である。道管の壁孔は対列状または交互状、穿孔は単穿孔、内腔にらせん肥厚がある。放射組織は異性、1～3細胞幅、道管との壁孔は小型で密在する。

(5)ヒサカキ *Eurya japonica* Thunb. ツバキ属 第

破片番号	樹種	形状	サイズ(cm) 放射径×接線径	備考
1	アカガシ亜属	破片	0.7×0.8	樹芯部材
2	スノキ属	破片	1.1×1.2	樹芯部材
3	ムクノキ	破片	0.8×0.8	
4	ムクノキ	破片	1.5×1.0	
5	ムクノキ	破片	1.2×1.8	
6	ヒサカキ	破片	0.6×1.1	樹芯部材
7	サクラ属	破片	0.5×1.0	樹芯部材
8	アカガシ亜属	破片	0.5×1.0	樹芯部材
9	ツツジ科	芯持ち丸木	直径1.1	
10	スノキ属	芯持ち丸木	直径0.3	
11	クリ	芯持ち丸木	直径0.5	

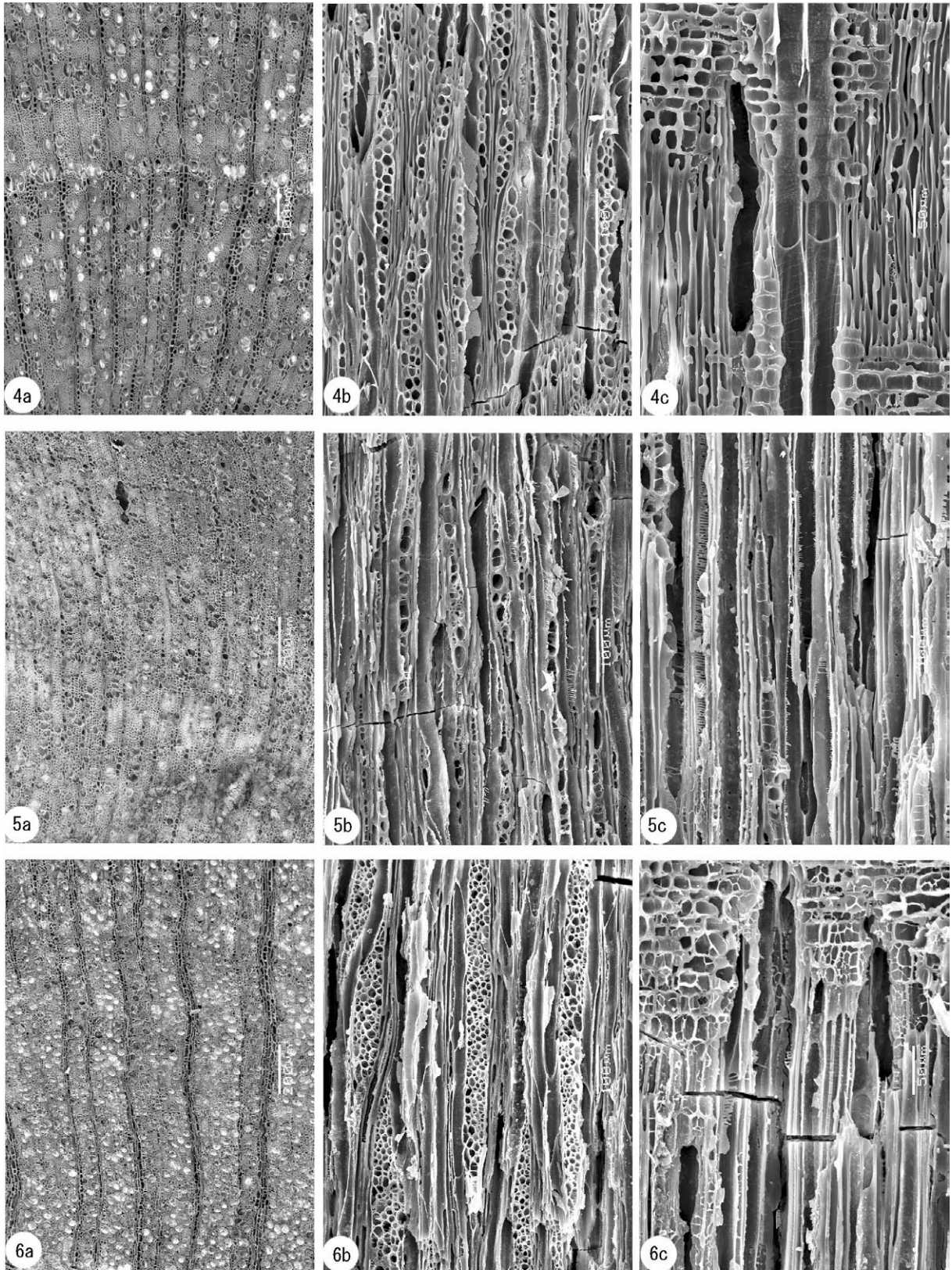
第40表 SK226出土炭化材の樹種同定結果



第68図 SK226出土炭化材材組織の走査電子顕微鏡写真①

1a-1c: アカガシ亜属 (破片番号1) 2a-2c: クリ (破片番号11) 3a-3c: ムクノキ (破片番号4)

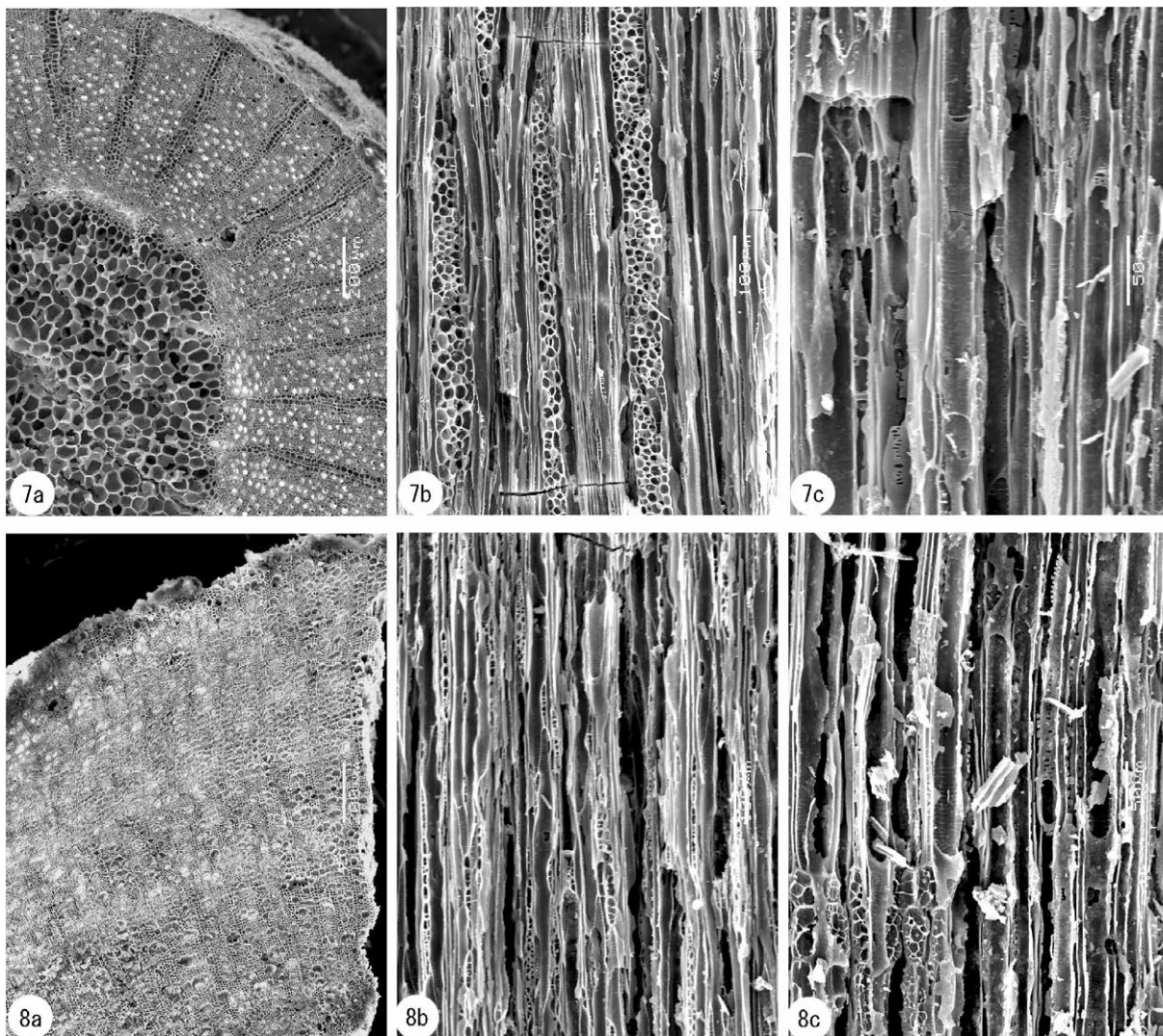
a: 横断面 b: 接線断面 c: 放射断面



第69図 SK226出土炭化材材組織の走査電子顕微鏡写真②

4a-4c：サクラ属（破片番号7） 5a-5c：ヒサカキ（破片番号6） 6a-6c：スノキ属（破片番号2）

a：横断面 b：接線断面 c：放射断面



第70図 SK226出土炭化材材組織の走査電子顕微鏡写真③
 7a-7c：スノキ属（破片番号10） 8a-8c：ツツジ（破片番号9）
 a：横断面 b：接線断面 c：放射断面

69図 5a-5c(破片番号6)

非常に小型で多角形の管孔が密に分布する散孔材である。道管の壁孔は交互状から階段状、穿孔は横棒数が非常に多い階段穿孔である。放射組織は異性、1～2細胞幅、道管との壁孔は交互状・階段状である。(6)スノキ属 *Vaccinium* ツツジ科 第69図 6a-6c(破片番号10)

極めて小型で角形の管孔が密在する散孔材である。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔と横棒数の少ない階段穿孔があり、内腔にらせん肥厚がある。放射組織は異性、1～5細胞幅、細胞高は非常に高い。

(7)ツツジ科 *Ericaceae* 第70図 7a-7c(破片番号9)

小型で円形に近い管孔が多数分布する散孔材である。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔と横棒数の少ない階段穿孔があり、内腔にらせん肥厚がある。放射組織は異性、1～2細胞幅である。

④考察

S K 226に含まれていた炭化材からは、常緑広葉樹のアカガシ亜属(2点)・ヒサカキ(1点)、常緑広葉樹のムクノキ(3点)・クリ(1点)・サクラ属(1点)、常緑性と落葉性の分類群を含むスノキ属(2点)・ツツジ科(1点)の、常緑と落葉の広葉樹材が検出された。炭化材の樹種構成からは、特に選択性が強い傾向は認められない。また、炭化材は樹芯部に近い破片や、直径1

cm以下の非常に細い枝材もあり、全体的に細い材の燃え残りのように思えた。従って、これらの炭化材は、火葬時の燃料材とは異なる経緯の燃え残りではないだろうか。

また炭化材から検出された樹種は常緑樹と落葉樹を含み、当地域の植生を反映するものであり、身近な森林を利用していたことが伺える。

(4) S X 274から出土した骨同定

黒澤 一男 (株式会社パレオ・ラボ)

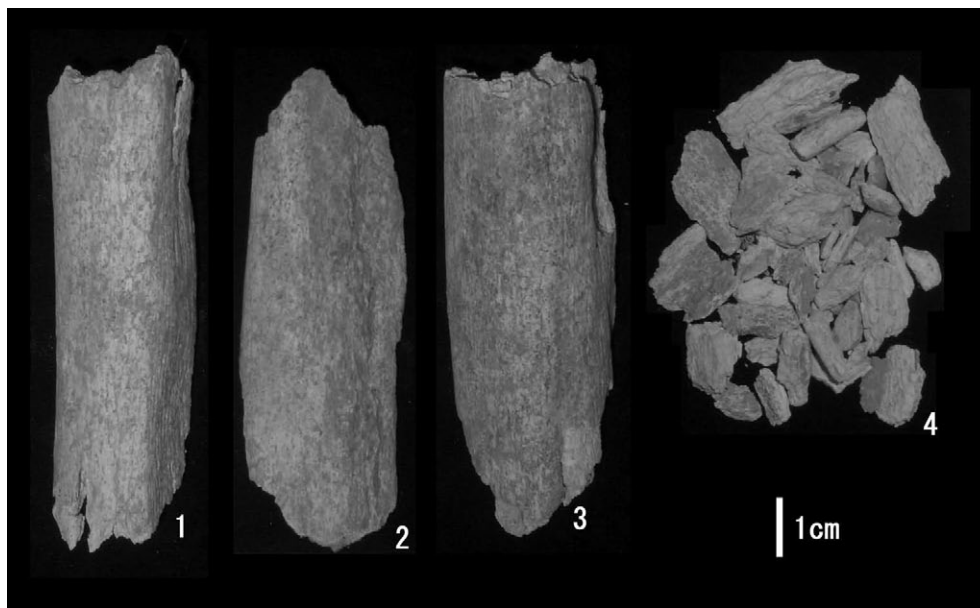
①対象試料および方法

三重県松阪市茅原町に所在する東沖遺跡では、中世の集落及び墓地跡が見つかり、その中の墓と考えられる石組みの中から骨片が数点検出された。ここではその骨片について同定をおこなった。同定は標本との比較によりおこなった。

②同定結果および考察

東沖遺跡から出土した動物遺体について同定した結果を以下に述べる。なお、これらの試料はグリッドB7・B8のS X 274から出土している。

No.1 試料(447)は、長さ約79mmの円筒状の破片で、その断面は丸みを帯びた三角に近い形状をしている。骨幅はおよそ24mmであり、緻密質は5mm弱である。骨幹部のみの破片であるため、断定はでき



第71図 SX274出土骨

- | | |
|-----------------------------|------------------------------|
| 1. ヒト? 脛骨? 骨幹部 (No. 1: 447) | 2. ヒト? 脛骨? 骨幹部 (No. 2: 448) |
| 3. 不明 骨幹部 (No. 3: 449) | 4. 不明 骨幹細片 (No. なし: 447~449) |

ないが、その形状からヒトの脛骨の骨幹部である可能性が考えられる。

No.2 試料 (448) は、長さ約78mm、幅27mmの半円状の破片で、中央あたりに神経孔と思われる2mm弱の孔が存在する。緻密質の厚さは7mm程度であり、内面には海綿質が全体に広がっている。骨幹部破片であるため、断定はできないが、その形状と神経孔の入り方などからヒトの脛骨の骨幹部である可能性が考えられる。

No.3 試料 (449) は、長さ約78mmの円筒状の破片で、骨幅はおよそ28mmであり、緻密質の厚さは6mm程度である。骨幹部のみの破片であるため、同定にはいたらない。ヒトであれば大腿骨、馬であれば中足骨の骨幹部が考えられるが、決め手に欠け、同定にはいたらなかった。

その他に長さ約3cm以下の細片が確認されているが、これらはNo.1～3 (447～449) に関連する破片と考えられる。

③おわりに

東沖遺跡から出土した骨片を同定した結果、ヒトと思われる脛骨が2点確認された。骨幹部破片であるため、詳細な検討にはいたらないが、緻密質の厚さや、骨幹幅などから比較的がっちりした骨と考えられる。

(5) 鉄滓分析

山田卓司 (財団法人 元興寺文化財研究所)

①分析内容

蛍光X線分析装置により定性分析して鉄分の存在を確認後、株式会社九州テクノリサーチによる詳細な分析が行われた。

②使用機器及び原理

・エネルギー分散型蛍光X線分析装置 (XRF) (SII ナノテクノロジーSEA5230)

試料の微小領域にX線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有の蛍光X線を検出することにより元素を同定する。

金属の同定で使用される励起電圧45kV、コリメータ径φ1.8mm、大気圧下にて測定した。なお、X線管球はモリブデン (Mo) である。(詳細な測定条件は、第41表参照)

③結果

鉄滓のXRF分析チャートを第72・73図に示し、第42表にそのまとめを掲げる。XRF分析の結果から、全ての資料断面から鉄 (Fe) が強く検出されたため、これらを鉄分析試料とした。

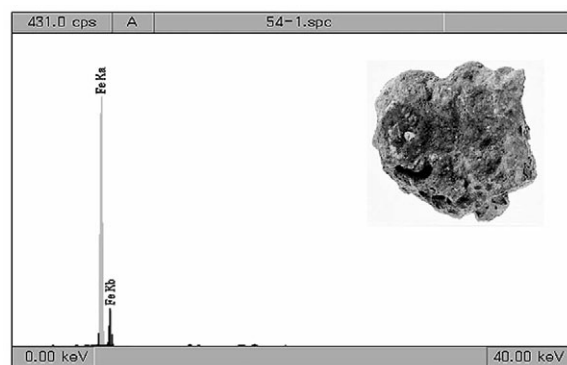
鉄分析の結果から、各鉄滓について次のようなことが分かった。

鉄滓	100	153
測定時間 (秒)	300	300
有効時間 (秒)	213	227
試料室雰囲気	大気	大気
コリメータ	φ1.8 mm	φ1.8 mm
励起電圧 (kV)	45	45
管電流 (μA)	16	12

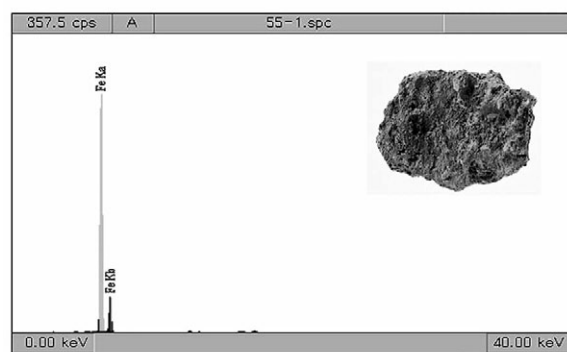
第41表 鉄滓切断面XRF測定条件

Z	元素	元素名	ライン	No. 54 (cps)	No. 55 (cps)	ROI (keV)
26	Fe	鉄	K α	2758.211	2299.371	6.23- 6.57

第42表 鉄滓切断面の測定結果まとめ



第72図 鉄滓100切断面のXRF分析チャート



第73図 鉄滓153切断面のXRF分析チャート

④考察

100は、鉄酸化物主体の滓であった。また、造滓成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$) と砂鉄起源の脈石成分 (TiO_2 、V、MnO) は低値で、塩基性成分 ($\text{CaO} + \text{MgO}$) は微量であった。純度の高い (ほとんど脈石成分を含まない) 鉄素材を、熱間で鍛打加工した際の吹き減り (鉄材の酸化に伴う損失) で生じたものと考えられる。

153は、100と同様に鉄酸化物主体の滓であり、純度の高い鉄素材を、熱間で鍛打加工した際の吹き減りで生じたものと考えられる。砂鉄起源の脈石成分 (TiO_2 、V、MnO) が非常に低値であるため、廃鉄器を再生した鍛冶が考えられる。

⑤分析データ

第72・73図、第41・42表を参照のこと。

⑥鉄分析

詳細は、以下の分析調査を参照のこと。

東沖遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査

九州テクノロジーサーチTACセンター

大澤正己・鈴木瑞穂

A. いきさつ

東沖遺跡は三重県松阪市茅原町に所在する。13世紀中葉から14世紀前葉と推定される土坑 (SK162・163) から、鉄釘などの廃鉄器多数と鉄滓を出土している。このため、遺跡内での鉄器製作の様相を検討する目的から、金属学的調査を行う運びとなった。

B. 調査方法

①供試材

第43表に示す。鍛冶関連遺物 (椀形鍛冶滓) 2点の調査を行った。

②調査項目

(a) 肉眼観察

分析調査を実施する遺物の外観の特徴など、調査前の観察所見を記載した。この結果をもとに、分析試料の採取位置を決定している。

(b) マクロ組織

本来は肉眼またはルーペで観察した組織であるが、本稿では顕微鏡埋込み試料の断面を、低倍率で撮影したものを指す。当調査は顕微鏡検査よりも、広範囲で組織の分布状態、形状、大きさなどが観察でき

る利点がある。

(c) 顕微鏡組織

鉄滓の鉄物組成や金属部の組織観察、非金属介在物調査などを目的とする。

試料観察面を設定・切り出し後、試験片は樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の 3μ と 1μ で鏡面研磨した。

また観察には金属反射顕微鏡を用い、特徴的・代表的な視野を選択して写真撮影を行った。金属鉄の調査では3%ナイトル (硝酸アルコール液) を腐食 (Etching) に用いた。

(d) ビッカース断面硬度

ビッカース断面硬度計 (Vickers Hardness Tester) を用いて硬さの測定を行った。

試験は鏡面研磨した試料に 136° の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除いた商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用し、荷重は200gfで測定した。

(e) 化学組成分析

出土遺物の性状を調査するため、構成成分の定量分析を実施した。

全鉄分 (Total Fe)、金属鉄 (Metallic Fe)、酸化第一鉄 (FeO) : 容量法。

炭素 (C)、硫黄 (S) : 燃焼容量法、燃焼赤外吸収法。

二酸化硅素 (SiO_2)、酸化アルミニウム (Al_2O_3)、酸化カルシウム (CaO)、酸化マグネシウム (MgO)、酸化カリウム (K_2O)、酸化ナトリウム (Na_2O)、酸化マンガン (MnO)、二酸化チタン (TiO_2)、酸化クロム (Cr_2O_3)、五酸化燐 (P_2O_5)、バナジウム (V)、銅 (Cu)、二酸化ジルコニウム (ZrO_2) : ICP (Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer) 法 : 誘導結合プラズマ発光分光分析。

C. 調査結果

100 : 椀形鍛冶滓

(a) 肉眼観察 : 102gとやや小型の椀形鍛冶滓である。側面3面は直線状の破面。色調は黒灰色を呈する。上面が僅かにくぼむ形状で、下面は流動状の細かな凹凸が著しい。木炭痕も散在する。また僅かに灰白色の鍛冶炉床土が付着する。破面には中小の気孔が見

られるが、緻密で重量感のある滓である。

(b) マクロ組織：第74図①に示す。全面がほぼ白色粒状鉍物相で埋まる。内部に不定形または粒状の気孔が多数散在するが、比較的緻密な滓である。また観察面には、まとまった金属鉄ないし銹化鉄部はみられなかった。

(c) 顕微鏡組織：第74図②③に示す。白色粒状結晶ウスタイト (Wustite: FeO)、淡灰色柱状結晶ファイヤライト (Fayalite: $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$) が晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。また滓中のごく微細な明白色粒は金属鉄、不定形小型の灰色部は銹化鉄である。

(d) ビッカース断面硬度：紙面の構成上、硬度を測定した圧痕の写真を割愛したが、白色粒状結晶の調査を実施した。硬度値は468Hv、499Hvであった。ウスタイトの文献硬度値450~500Hv^①の範囲内であり、ウスタイトと推定される。

(e) 化学組成分析：第44表に示す。全鉄分 (Total Fe) は67.57%と高値であった。このうち金属鉄 (Metallic Fe) は<0.01%、酸化第1鉄 (FeO) 69.77%、酸化第2鉄 (Fe_2O_3) 19.07%の割合であった。造滓成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$) は8.97%と低値で、塩基性成分 ($\text{CaO} + \text{MgO}$) も0.50%と、ごく微量である。製鉄原料の砂鉄起源の二酸化チタン (TiO_2) は0.35%、バナジウム (V) 0.03%と低値であった。また酸化マンガン (MnO) 0.17%、銅 (Cu) も<0.01%と低い。

当試料は鉄酸化物の割合の高い滓であった。この特徴から、純度の高い鉄素材を熱間で鍛打加工した時の吹き減り (鉄材の酸化に伴う損失) で、生じた滓と推定される。

153：椀形鍛冶滓 (含鉄)

(a) 肉眼観察：66 g と非常に小型で偏平な椀形鍛冶滓である。大きな破面はなく、ほぼ完形と推測される。色調は暗灰色である。上面は平坦気味で、下面は浅い皿状を呈する。また遺跡出土鉄関連遺物用に調整された特殊金属探知機^②のM (◎) で反応があり、内部に金属鉄が残存すると推測される。

(b) マクロ組織：第74図④に示す。視野の大部分は小型で不定形の銹化鉄部が占め内部には、中小の細かい気孔が多数散在している。鉄滓としての白色粒状鉍物相は少なく、観察面で金属鉄は残存していな

かった。

(c) 顕微鏡組織：第74図⑤⑥に示す。⑤の上側の灰色部は銹化鉄である。金属組織の痕跡は不明瞭で、炭素含有量等の情報は得られなかった。また⑤の下側は滓部で、⑥はその拡大である。白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファイヤライトが晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。

(d) ビッカース断面硬度：紙面の構成上、硬度を測定した圧痕の写真を割愛したが、白色粒状結晶の調査を実施した。硬度値は408Hv、412Hv、418Hvであった。風化の影響か、やや軟質の値を示したが、ウスタイトと推測される。

(e) 化学組成分析：第44表に示す。全鉄分 (Total Fe) は62.49%と高値であった。このうち金属鉄 (Metallic Fe) <0.01%、酸化第1鉄 (FeO) 48.93%、酸化第2鉄 (Fe_2O_3) 34.97%の割合であった。検鏡で銹化鉄が多く認められたように酸化第2鉄が多い。また造滓成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$) は10.70%と低値で、塩基性成分 ($\text{CaO} + \text{MgO}$) も0.42%とごく微量であった。また製鉄原料の砂鉄起源の二酸化チタン (TiO_2) は0.09%、バナジウム (V) <0.01%と非常に低値であった。さらに酸化マンガン (MnO) 0.06%、銅 (Cu) も<0.01%と低値である。

当試料は椀形鍛冶滓 (100) と比較しても、脈石成分の低減傾向が顕著であり、廃鉄器を再生した鍛冶が行われた可能性が考えられる。

D. まとめ

東沖遺跡から出土した椀形鍛冶滓2点を分析調査した結果、次の点が明らかとなった。

今回、分析調査を実施した椀形鍛冶滓 (100、153) は、共に鉄酸化物主体の滓であった。純度の高い (ほとんど脈石成分を含まない) 鉄素材を、熱間で鍛打加工した際の吹き減り (鉄材の酸化に伴う損失) で生じたものと推定される。

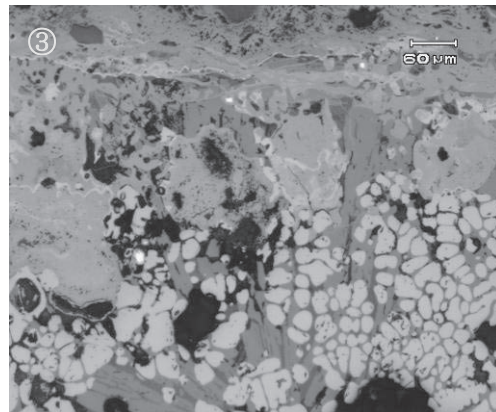
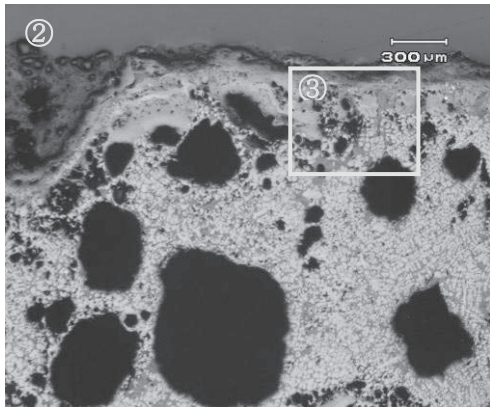
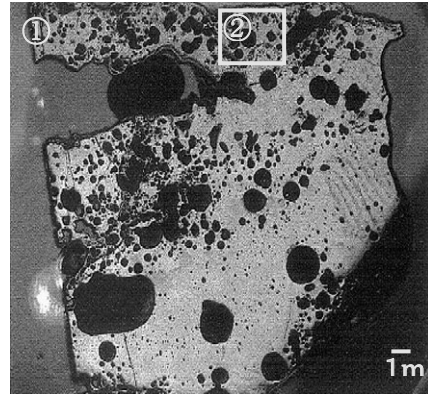
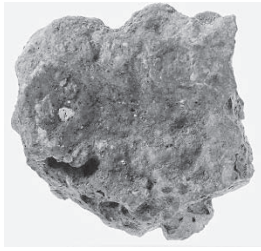
土坑 (SK162・163) から出土した、他の鉄滓も同様の鍛錬鍛冶滓であれば、当遺跡では小鍛冶用に調整された鉄素材 (新鉄) か、廃鉄器 (古鉄) を鍛冶原料として、鍛造鉄器の製作を行っていた可能性が高いと考えられる。

100

椀形鍛冶滓

- ①マクロ組織
- ② ①の拡大
- ③ ②の拡大

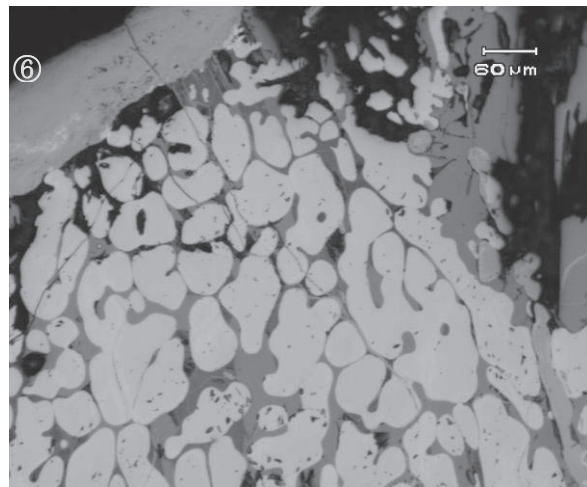
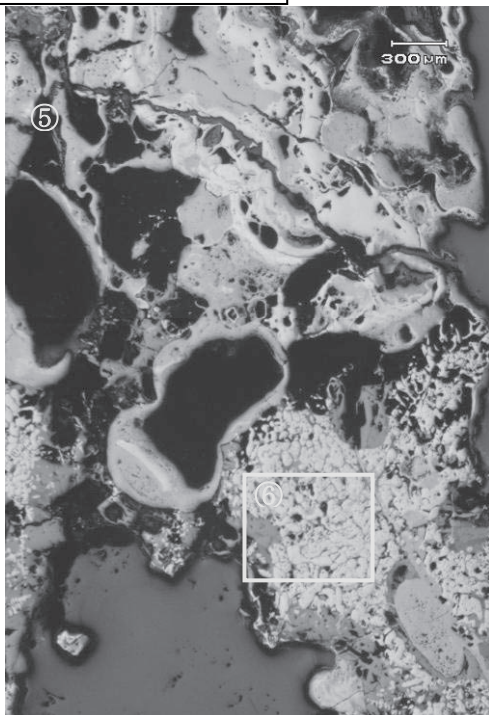
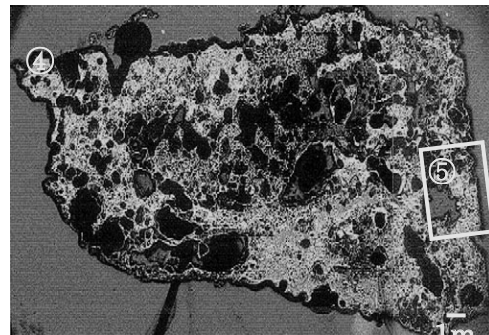
明白色粒:微小金属鉄散在
不定形灰色部:錆化鉄、
滓部:ウスタイト・ファイヤイト



153

椀形鍛冶滓(含鉄)

- ④マクロ組織
- ⑤ ④の拡大
- 上側:錆化鉄、金属組織痕跡
不明瞭
- 下側:滓部:ウスタイト・ファイヤイト
- ⑥ ⑤の滓部拡大



第74図 椀形鍛冶滓の顕微鏡組織

符号	出土位置	遺物名称	推定年代	計測値		メタル硬度	調査項目							備考	
				大きさ (mm)	重量 (g)		顕微鏡組織	ヒッカース断面硬度	X線回折	EPMA	化学分析	耐火度	加コ		
															マクロ組織
100	S K 162	椀形鍛冶滓	13c中葉～ 14c前葉	53×50×23	102	なし	○	○	○			○			
153	S K 58	椀形鍛冶滓 (含鉄)	13c中葉～ 14c中葉	60×41×20	66.1	M (◎)	○	○	○			○			

第43表 供試材の履歴と調査項目

Σ *

* * * * *

符号	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄	酸化 第1鉄 (FeO)	酸化 第2鉄 (Fe ₂ O ₃)	二酸化 珪素 (SiO ₂)	酸化 アルミニウム (Al ₂ O ₃)	酸化 カルシウム (CaO)	酸化マ グネシウム (MgO)	酸化 カリウム (K ₂ O)	酸化 ナトリウム (Na ₂ O)	酸化 マンガン (MnO)	二酸化 チタン (TiO ₂)	酸化 クロム (Cr ₂ O ₃)	硫黄	五酸化 リン (P ₂ O ₅)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	二酸化 ジルコニウム (Zr ₂ O)	造滓 成分	造滓 成分	TiO ₂	Total Fe	Total Fe	注
100	67.57	<0.01	69.77	19.07	6.53	1.55	0.3	0.2	0.27	0.12	0.17	0.35	0.02	0.02	0.21	0.1	0.03	<0.01	0.06	8.97	0.133	0.005	0.005	0.005	
153	62.49	<0.01	48.93	34.97	8.44	1.6	0.2	0.22	0.18	0.06	0.06	0.09	0.01	0.03	0.32	0.14	<0.01	<0.01	<0.01	10.7	0.171	0.001	0.001	0.001	

第44表 供試材の化学組成

符号	出土位置	遺物名称	推定年代	顕微鏡組織							化学組成 (%)							所見
				Total Fe	Fe ₂ O ₃	塩基性成分			TiO ₂	V	MnO	造滓成分	Cu					
						酸化 鉄	酸化 マンガン	酸化 銅										
100	S K 162	椀形鍛冶滓	13c中葉～ 14c前葉	67.57	19.07	微小金属鉄、 滓部：ウスタイト・ファイヤライト	0.5	0.35	0.03	0.17	8.97	<0.01	鍛錬鍛冶滓					
153	S K 58	椀形鍛冶滓 (含鉄)	13c中葉～ 14c中葉	62.49	34.97	銹化鉄(金属組織痕跡不明瞭)、 滓部：ウスタイト・ファイヤライト	0.42	0.09	<0.01	0.06	10.7	<0.01	廃鉄器再生の鍛錬鍛冶滓か					

第45表 出土遺物の調査結果のまとめ

[註]

- ① 日刊工業新聞社『焼結鉍組織写真および識別法』1968年
ウスタイトは450～500Hv、マグネタイトは500～600Hv、
ファイヤライトは600～700Hvの範囲が提示されている。
- ② 天辰正義・穴澤義功・平井昭司・藤尾慎一郎『鉄関連
遺物の分析評価に関する研究会報告』（社）日本鉄鋼協
会 社会鉄鋼工学部会 「鉄の歴史—その技術と文化—」
フォーラム 鉄関連遺物の分析評価グループ、2005年

(6) 鍛造剥片の抽出について

①目的

東沖遺跡では、鍛冶関連遺構は検出していない。しかし、土坑の中には、焼土や炭化物を多く含むものが見られ、鉄製品や鉄滓を多く出土した。このような状況から、鍛冶関連遺構が存在する可能性を検討するとともに、土坑の性格を解明することが責務となった。これらの手段の一つとして鍛造剥片の抽出を試みた。具体的な手法は、次節のとおりである。なお、鍛造剥片の採取に関しては、口頭にて大道和人氏の指導を得た。

②方法

鍛造剥片の有無を確認するため、以下の手法を用いた。

試料採取 土坑の中から、埋土中に焼土や炭化物を多く含んだ遺構を選択して埋土を採取した。採取した土坑は、以下6土坑である。

S K 118、S K 141、S K 142、S K 147、S K 179、

S K 228

手法 鍛造剥片を抽出するため、以下の手法を行った。試料の重量は、いずれも500gの定量で行った。磁石は、「T R S C O ハンドマグネット H M - 115 吸着力250N」を使用した。(第46表参照)

鍛造剥片を抽出するため、全試料を乾燥させたいうえで、磁石で吸着する「乾燥」の手法を用いた。その後、3試料については、「水洗（試料を水洗したいうえで、磁石で吸着する）」と「水洗+乾燥（試料を水洗し、乾燥させたいうえで、磁石で吸着する）」を試みた。

以上、3手法を用いたが、乾燥が有効的であった。

③結果

S K 118からは、鍛造剥片を2点、鍛造剥片の可能性のある破片を1点確認した。S K 147からは、鍛造剥片の可能性のある破片を1点確認した。他の土坑からは、確認できなかった。

④まとめ

S K 118からは、鍛造剥片を2点確認した。S K 147からは可能性のある剥片を確認した。この2土坑以外から鍛造剥片は確認できなかった。総重量5kgの埋土の篩いがけを行ったが、鍛造剥片の出土は2点と非常に少ない。鍛冶を行っている遺構であるならば、もっと多くの剥片が出土するという^①。このため、S K 118ないしはその周辺で鍛冶を行っていた可能性は残るものの、確実に鍛冶を行っているとはいえなかった。

試料 番号	遺構名	乾燥		水洗		水洗+乾燥		合計 (g)	鍛造 剥片	備考
		実施	重量 (g)	実施	重量 (g)	実施	重量 (g)			
1	S K 1 1 8	○	500	○	500	○	500	1500	あり	鍛造剥片の可能性のあるものが1点有り。SK118の周辺で鍛冶をしている可能性はある。
2	S K 1 4 1	○	500	×	0	○	500	1000	なし	
3	S K 1 4 2	○	500	×	0	×	0	500	なし	
4	S K 1 4 7	○	500	×	0	×	0	500	可能性あり	1点、鍛造剥片の可能性はある。
5	S K 1 7 9	○	500	×	0	○	500	1000	なし	
6	S K 2 2 8	○	500	×	0	×	0	500	なし	

第46表 土壌洗浄一覧表

[註]

- ① 大道和人氏のご教授によると、500gの定量サンプルで鍛冶遺構からは100～200片程度の鍛造剥片が出土することである。

(7) 自然科学分析から得られた知見

以上の分析結果を踏まえて、若干の考察を行いたい。

①リン・カルシウム分析

S K120、S K147、S K162・163、S K179、S K228の土坑には、骨質物が残存している可能性が示された。今回、骨片粒子を元素マッピング分析により点分析を行い、直接的にリン濃度の高い部分の骨質物の検出を行う手法を試みた。これによってリン濃度の高い部分が検出でき、上記のような結果をえた。

②炭化材の樹種同定

S K226出土の炭化材からアカガシ亜属、ヒサカキ、ムクノキ、クリ、サクラ属、スノキ属、ツツジ科を検出した。常緑と落葉広葉樹材が検出され、樹種構成からは選択性に強い傾向は認められず、当地の植生を反映したものと考えられる。

③骨同定

S X274出土の骨は、ヒトと思われる脛骨を2点確認した。骨幹部破片のため詳細な検討にはいたらな

かった。

④鉄滓の成分分析

試料は、椀形鍛冶滓で、鉄酸化物主体の滓であった。これは、純度の高い鉄素材を熱間で鍛打加工した際の吹き減りで生じたものと思われる。また、脈石成分が低値であるため、鉄素材や廃鉄器を原料とした鉄器製作を行っていた可能性も指摘されている。

⑤鍛造剥片

鍛造剥片が2点、可能性があるものが2点出土した。1点を除き、いずれもS K118から出土し、この近辺で鍛冶を行っていた可能性が少なからずはあったのではなかろうか。

⑥まとめ

以上のように5種類の分析を行い、そこから得られた結果を記述したが、自然科学分析を踏まえた遺跡の性格を解明するまでには至らなかった。

現地調査中、日々の進展の中、遺構・遺跡の性格を検討し、解明するために思案した。しかし、調査担当の経験不足から想定された遺構の性格に適する分析を順次に行うことができなかった。最終的には、各分析結果を示すことができなかったことにご理解をいただきたい。

(酒井巳紀子)

5 小結

(1) 遺構の変遷

東沖遺跡の時期ごとの様相についてまとめる。

① I 期 (11世紀後半～12世紀後葉)

時期 伊藤裕偉氏の南伊勢中世編年 I 期^①に対応する。藤澤良祐氏の編年灰釉陶器百代寺式期から山茶椀第 5 型式前半に併行する時期。

遺構 土坑 8 基、墓 1 基を確認した。これらが点在する状況である。遺物は、11世紀の灰釉陶器や土師質土器が出土するものの量的には少ない。

② II 期 (12世紀後葉～14世紀前葉)

時期 伊藤裕偉氏の南伊勢中世編年 II 期に対応する。藤澤良祐氏の編年山茶椀第 5 型式後半から第 8 型式に併行する時期。

遺構 掘立柱建物 21 棟、土坑 187 基、墓 3 基、溝 9 条を確認した。遺構・遺物ともに大半は、II 期に属する。屋敷地は、区画溝によって 3 箇所に分かれる。掘立柱建物は、12世紀後葉から13世紀前葉になると明瞭になり、屋敷地に本格的に居住が始まる。また、出土遺物で見ると、II 期の終わり頃には区画溝の多くは埋没していたようである。

以下、屋敷地ごとに記載する。

A 区 S D 124以西の範囲。B 区や C 区と比較すると区画間が長いので、便宜上、S D 75を境に西側を A 1 区、東側を A 2 区とする。

A 1 区 掘立柱建物の建てられた順は、S B 302→S B 305→S B 304である。建物の面積は、いずれも 12～15㎡と小規模である。

土坑は、掘立柱建物の北側と南側にあるが、特に北側に集中する。また、S D 75に近接する S K 65は、他のものとは形状・規模が異なるため、他とは異なった性格を持っていたのかもしれない。

A 2 区 掘立柱建物の初現は、S B 296や S B 301になろう。掘立柱建物の建てられた順は、S B 298→297で、S B 287は S B 298の建て替えである。また、S D 75が機能する頃には、石組遺構 S K 121・162・163を伴った S B 300が建てられる。その後、S B 307が建てられたようである。

土坑は、建物群の南側に集中している。S B 299の東側では、2点の鍛造剥片が出土した S K 118や焼土

を多く含んだ土坑を確認した。

B 区 S D 124から S D 212の範囲。柱穴間で、切り合い関係はない。

S B 286・287・288・291・293の 5 棟を確認した。出土遺物から、S B 286・287・288・293は区画溝が機能している頃の建物であろう。

S D 219・222は、区画溝 S D 212に先行する。現状では、S D 212は東溝より西溝が短い。しかし、S D 212は、後世の水田造成時及び表土掘削時に削平を受けているため、S K 150・151・154・155・159・164・165・170・172・175・176・184・254は溝の底だけが残っている状態なのかもしれない。

S D 212が埋没し始めると、S X 236、S K 226が掘削される。

土坑は、建物群の西側に集中する。

C 区 S D 241から調査区東端までの範囲。

掘立柱建物は近接した場所で繰り返し建てられている。掘立柱建物の建てられた順は、S B 283→S B 285→S B 281、S B 284→S B 281である。建物は、西から東へと移動し、建物内土坑を伴う建物 S B 281が最も新しい。

区画溝 S D 242・269・271は新旧関係が不明である。しかし、B 区の区画溝のように、S D 269・271は、S D 242に先行する溝の可能性が高い。また、出土遺物から S D 242は同屋敷地内の S B 281より早く埋没する可能性が高い。

C 区は、全体の中で最も早く屋敷地ができあがり、終息するのも早い屋敷地である。

③ III 期 (14世紀中葉～15世紀前半)

時期 伊藤裕偉氏の南伊勢中世編年 III 期に対応する。藤澤良祐氏の編年山茶椀第 9 型式以降、古瀬戸後 III 期に併行する時期。

遺構 掘立柱建物 6 棟、土坑 14 基を確認した。遺構・遺物ともに III 期より減少する時期である。出土遺物で見ると、区画溝は III 期には埋没していく。また、II 期としている建物等の中には、この時期になるものも含まれていると考える。

A 区 A 1 区 掘立柱建物 S B 303と S B 306を確認した。この 2 棟の前後関係はわからない。

土坑は、S B303の東側と西側に見られる。

A 2区 土坑を2基確認した。

区画溝S D124は、細々と機能しているものの埋没し始めている。S D75も同様であるが、出土遺物からS D124より機能している期間が長いようである。

B区 掘立柱建物の建てられた順は、S B295→S B294・S B289である。S B295は、石積み土坑S K228を伴う。S K228は、規模を縮小した可能性が高く、使用期間に幅があったと思われる。

区画溝S D212は細々と残っているが、出土遺物から、建物より早く埋没するようである。

土坑は建物内と建物の南に2基確認できるのみである。

C区 遺構を確認していない。

④IV期（15世紀後半～16世紀末）

時期 伊藤裕偉氏の南伊勢中世編年IV期に対応する。藤澤良祐氏の編年古瀬戸後IV期以降大窯期に併行する時期。

遺構 土坑を1基確認した。調査区の大半は埋没しているようである。

A区 III期まで機能していたS D75は、15世紀後半には埋没する。

B区 土坑を1基確認した。15世紀後半には土坑も埋没する。

C区 遺構を確認していない。

⑤まとめ

東沖遺跡の各時期のまとめは以下の通りである。

I期以前は、縄文時代早期高山寺式期の鉢を北東側のグリッドB・C19付近で確認した。出土量はごくわずかであるが、人々の生活の痕跡が確認できる。

I期は、当遺跡内で本格的に人々が活動を開始した時期である。土坑や墓しか確認できない。

II期は、人々が居住を開始した時期である。そして、遺構、遺物ともに多く、東沖遺跡の最盛期となる時期である。調査区内には、溝によって区画された3箇所屋敷地が確認できる。屋敷地内は、北側に遺構が密集する。土坑は、掘立柱建物の南側や西側等に集中している。

III期は、居住域が減少し始める時期である。出土遺物から見る限り、区画溝は埋没する。しかし土層から見ると、長期間、開いていたように見える。お

そらく遺物からみえる埋没時期より長く開いていたのだろう。また、建物も減少する。A1・B区では、掘立柱建物が確認できる。C区では、遺構が確認できなかった。そして、遺物の出土量も減少している。ただ、B区で古瀬戸後II期までの遺物が出土しており、この時期までは居住していたようである。また、時期区分上、II期とIII期に分けたが、集落としては継続して営まれていた状況にある。

IV期は、人々が活動を終えた時期である。土坑を1基確認した。

IV期以降は、遺構を確認していない。遺物は、藤澤編年登窯第6か7小期の尾呂茶碗の出土によって、当地で活動が再開されたことがわかる。この頃には現在のような田園風景になったのではないかと思われる。

(2) ブロック形屋敷地群から見た東沖遺跡の位置付け

東沖遺跡では、12世紀後葉から掘立柱建物が確認でき、13世紀前葉になると、屋敷地を区画する溝が出現する。屋敷地は、この溝によって3区画にわかれる。そして、東沖遺跡は13世紀～14世紀に最盛期を迎える。以降、徐々に区画溝が埋没し、15世紀後半に終焉していく。

そして、東沖遺跡で確認された屋敷地群は、いわゆるブロック形屋敷地群にあたる。ブロック形屋敷地群とは、伊藤裕偉氏^②によると「小区画の屋敷地が集合する形態をなす集落遺跡」をさす。本稿では、「三辺もしくは、四周を巡る溝によって区画された屋敷地が集合する形態をなす集落遺跡」をさす。

では、東沖遺跡に見られるようなブロック形屋敷地群がいつ頃出現したのか、県内の事例をみていくとともに、東沖遺跡の位置付けを考えていきたい。

①事例

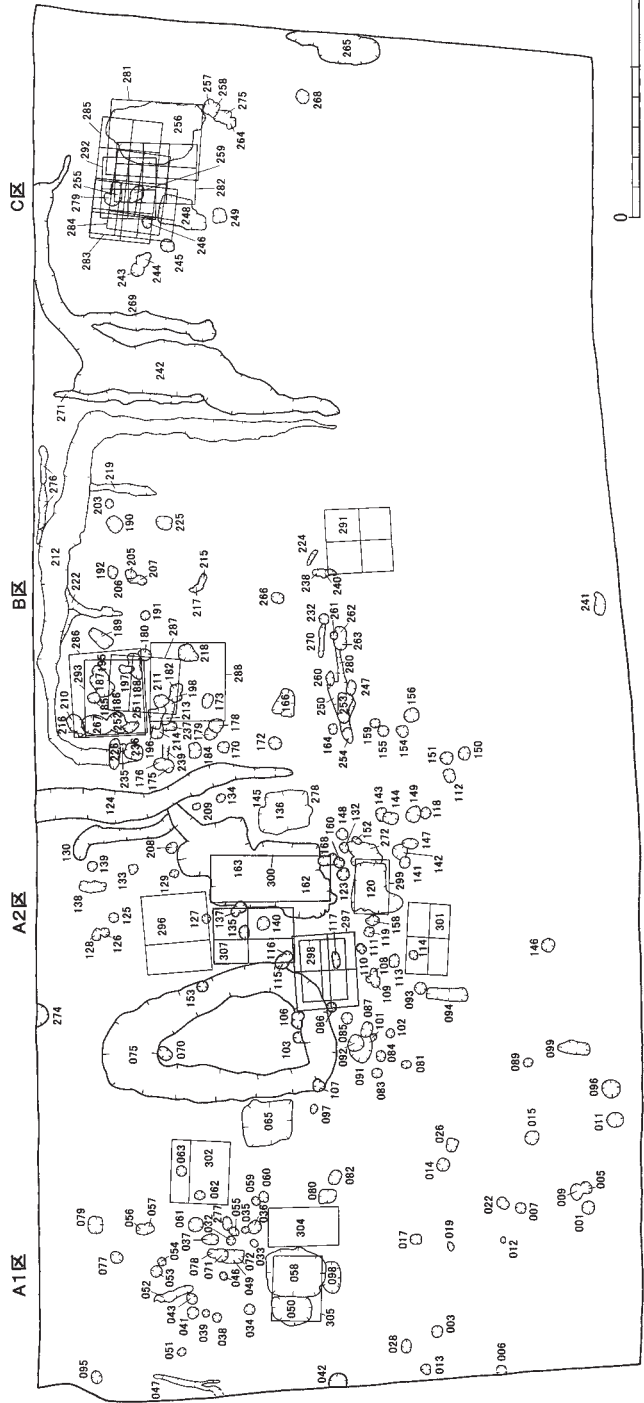
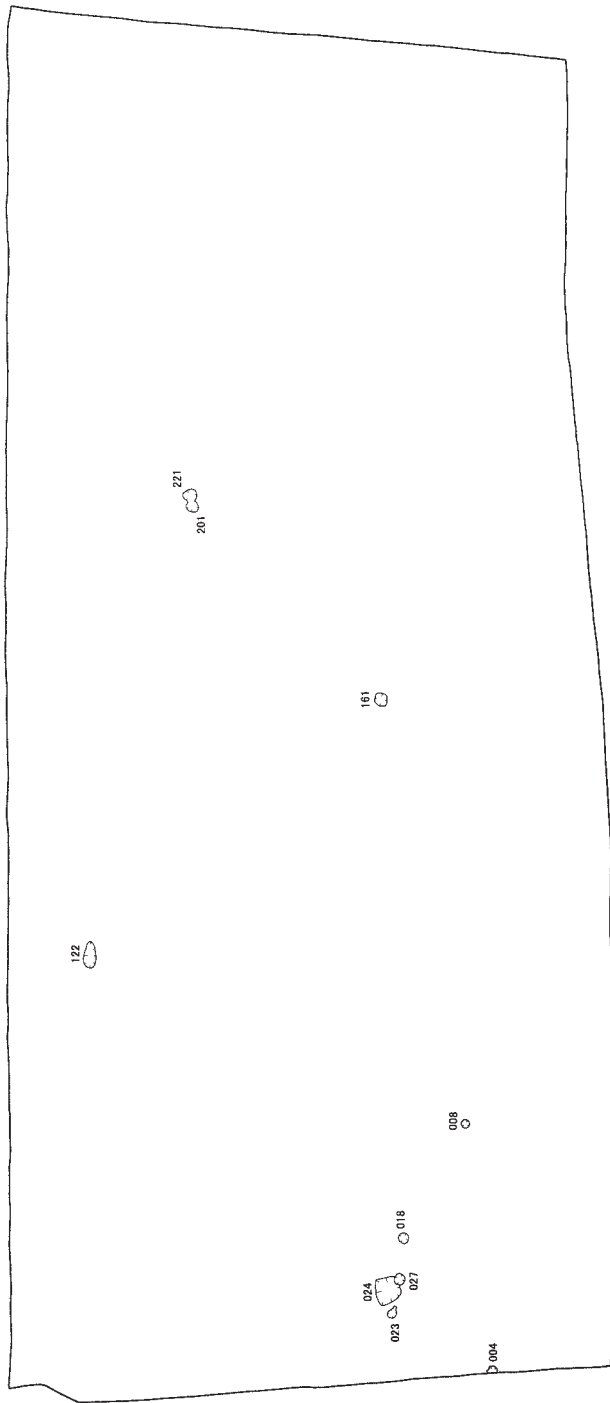
志知南浦遺跡^③（桑名市）

12世紀～17世紀中葉の遺構が確認されている。ブロック形屋敷地群が出現するのは、15世紀後葉である。

屋敷地を4箇所確認した。

掘立柱建物を18棟確認し、屋敷地では、主屋、梁行が1間の建物、小規模な建物等が見られる。

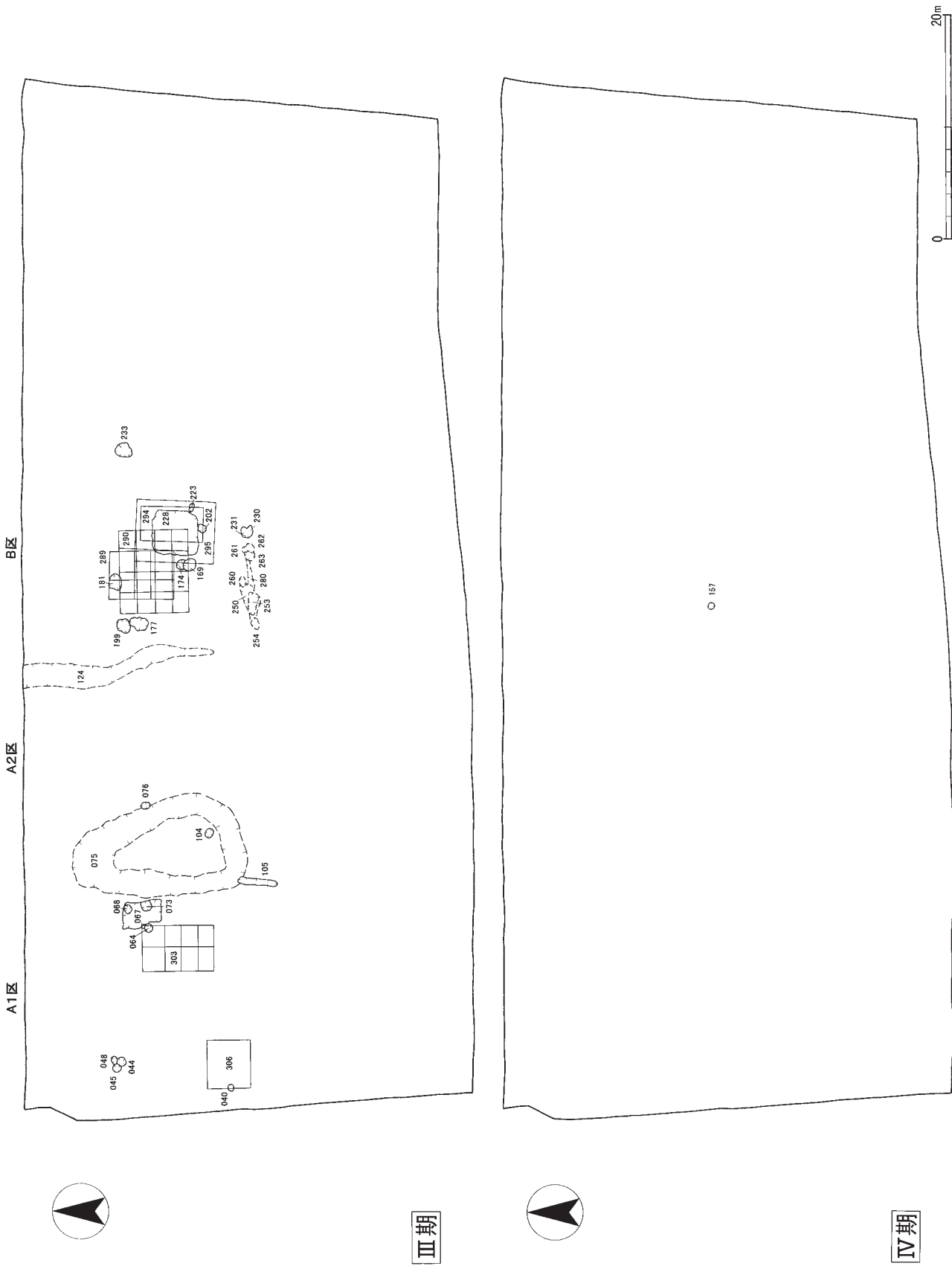
区画溝は、15世紀初頭に掘削され、17世紀中葉ま



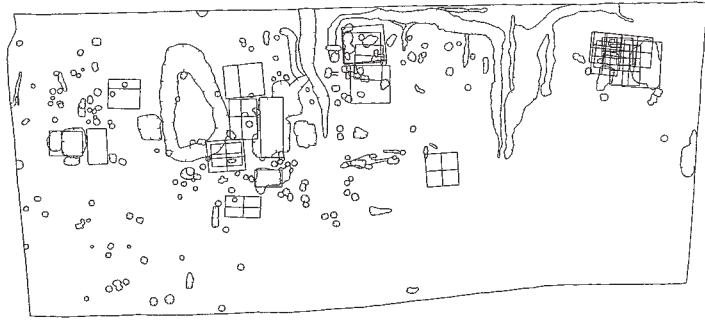
I期

II期

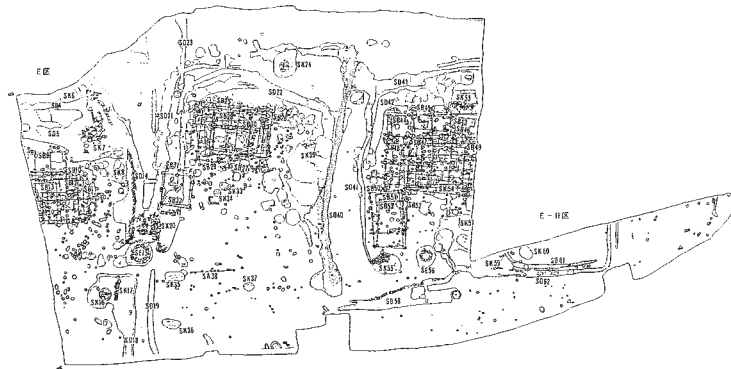
第75图 遺構変遷図①(1:500)



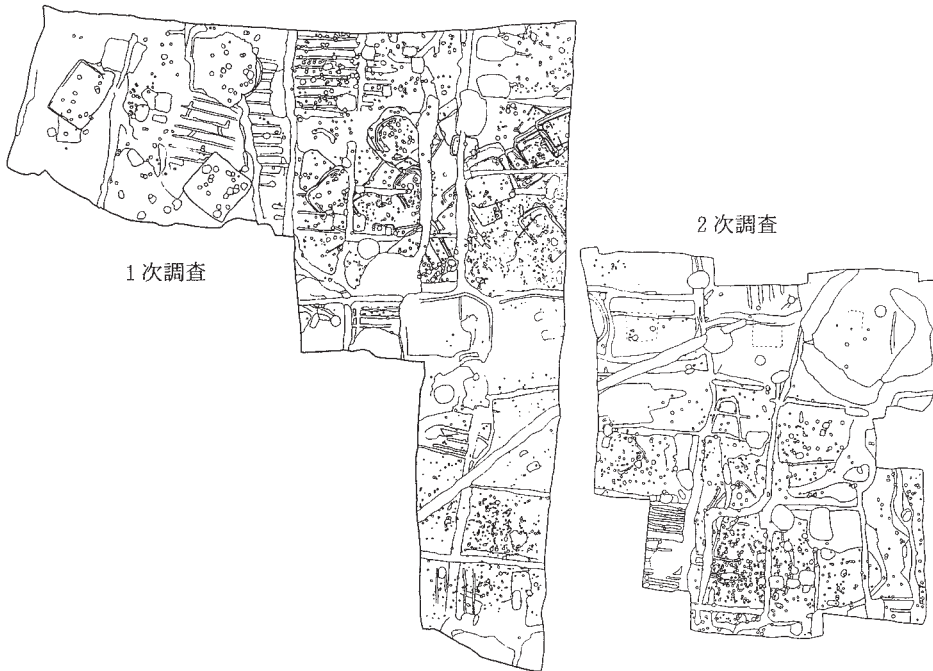
第76図 遺構変遷図②(1:500)



東沖遺跡



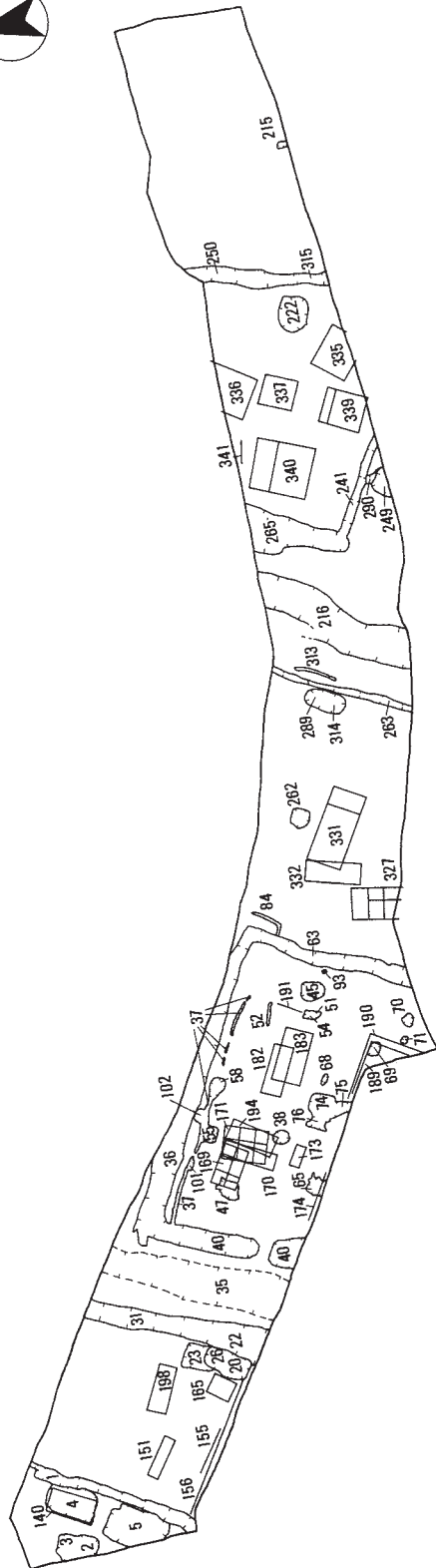
家野遺跡



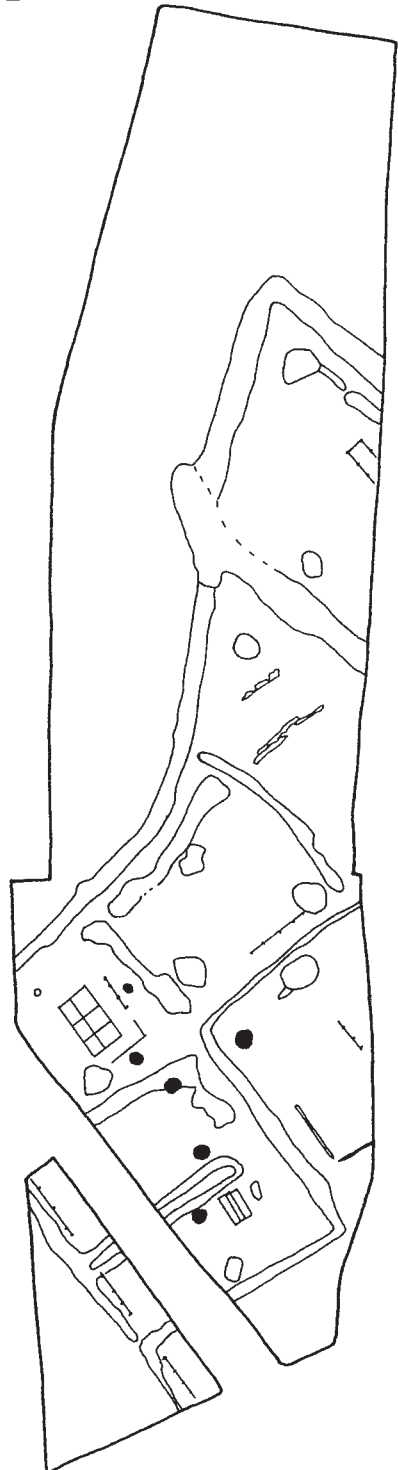
上野遺跡



第77図 ブロック形屋敷敷地群事例①(1:1000)



志知南浦遺跡



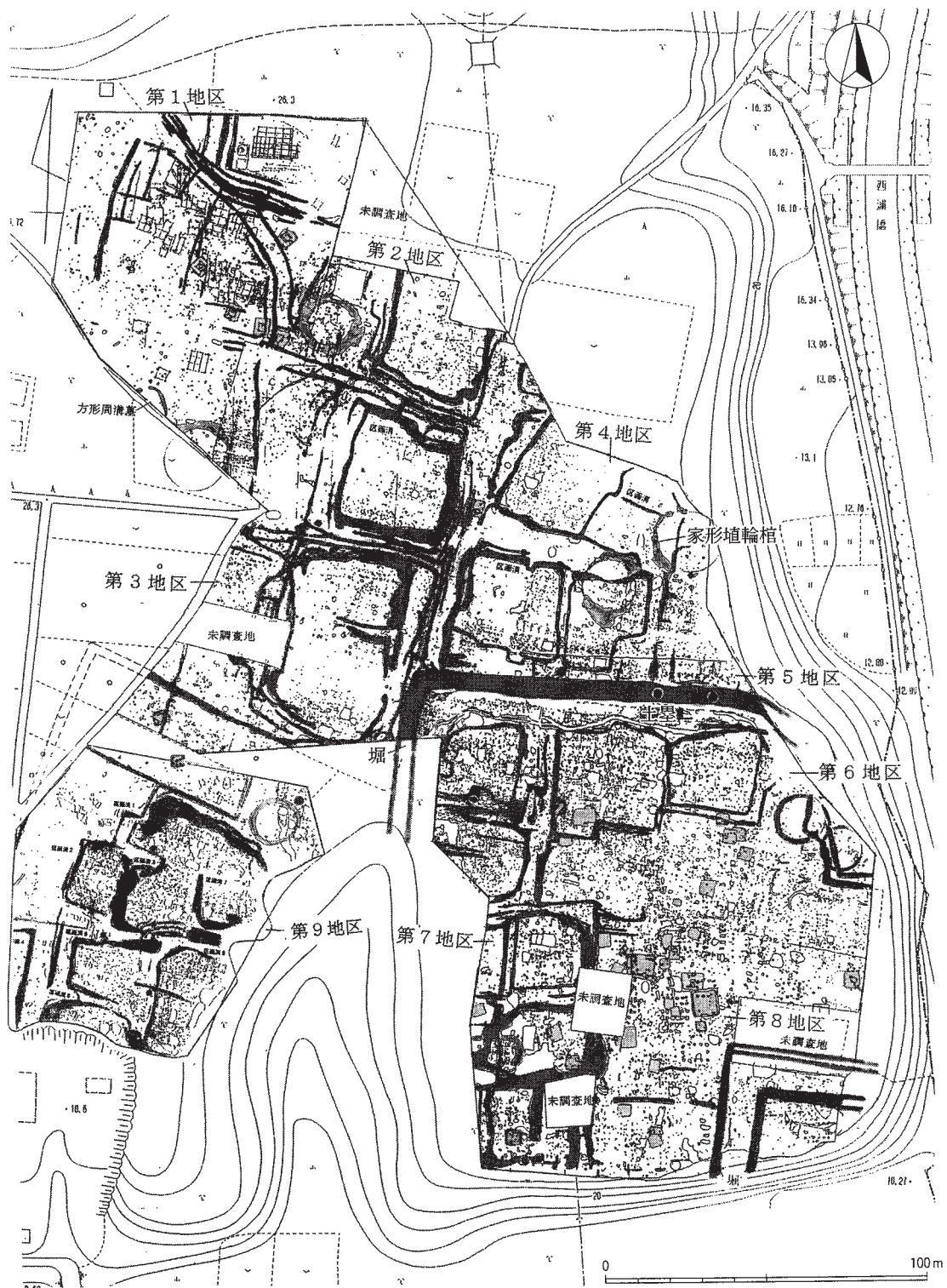
小津遺跡



第78図 ブロック形屋敷地群事例②(1:1000)



第79図 ブロック形屋敷地群事例③(1:2000)



上野遺跡第2次調査区遺構平面図（『三重県史』より転載）

第80図 ブロック形屋敷地群事例④(1:2000)

で機能している。

上野遺跡^④（四日市市）

13世紀～15世紀の遺構が確認されている。

屋敷地を2箇所確認した。

掘立柱建物は、鎌倉時代のものを23棟、室町時代ものを6棟確認した。掘立柱建物出土の遺物は、13世紀頃である。

区画溝からは、13世紀～15世紀の遺物が出土している。

報告書によると、建物の時期と区画溝の時期差があり、建物群が廃絶してから溝の埋没までかなりの時期差があったことが指摘されている。

この点について、山田猛氏^⑤は、「区画溝の時期は限定しきれないが、中世を中心にある程度後世まで存続したものと思われる」ことや「掘立柱建物の規模や所属期に関しては問題を残す」ことを指摘している。

報告書記載遺物を見る限り、区画溝の時期は14世紀中葉～15世紀中葉が中心と考える。また、区画溝の方向や建物の方向が同一方向であることや建物が区画溝内に配置されていること等を考えると、建物の時期はもう少し新しくなる可能性が高い。つまり、区画溝及び建物は、14世紀中葉～15世紀中葉が中心となる時期と考える。

伊坂城跡^⑥（四日市市）

15世紀後半～16世紀後葉の遺構が確認されている。屋敷地は、15世紀後半～末にかけて出現し、16世紀前半に最盛期を迎える。

屋敷地は溝や土塁で囲まれ、道路遺構の両側に17区画が確認されている。

掘立柱建物は、70棟程確認されている。屋敷地内には、主屋、倉庫、雑舎等の建物群が並ぶ。

屋敷地を区画する土塁、堀、道路遺構等は、15世紀後半以降に出現^⑦し、16世紀後半～末にかけて徐々に埋没していったと考えられる。

上野遺跡^⑧（津市）

12世紀後葉以降の遺構が確認されている。南北には通路が、東西には大堀が巡り、その両側に屋敷地が展開されている。

屋敷地は、30箇所以上が確認されている。

区画溝は四周を囲まれたものやL字形やコの字形のように完結していないものがある。報告書が未刊のため詳細はわからないが、屋敷地群は、遅くとも15世紀前半頃には成立し、16世紀前半頃に廃絶したのではないかと想定されている。

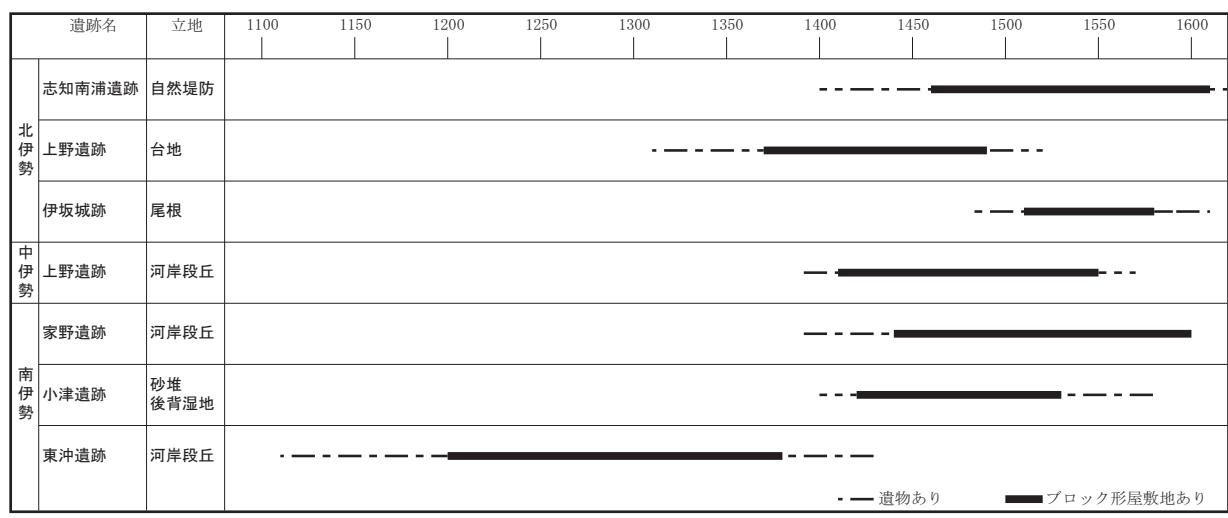
家野遺跡^⑨（津市）

14世紀以降16世紀末の遺構が確認されている。14世紀以降に、逆コの字形をした溝によって区画された屋敷地が出現する。

屋敷地を3箇所確認した。

掘立柱建物を24棟程確認した。掘立柱建物は5回以上の建て替えが見られるものもあり、建物配置はほぼ踏襲されている。そして、屋敷地は14世紀～16世紀末に継続して使用されていたものと考えられている。

しかし、報告書に記載された遺物を見る限り、伊



第47表 ブロック形屋敷地消長表

藤編年第3段階b型式～第4段階e型式までの遺物が確認でき、主体は、15世紀後葉～16世紀後葉という印象を受ける。おそらく、15世紀後葉に溝で囲まれた屋敷地が出現し、16世紀前葉に盛行するのではないかと考える。また、逆コの字形をした区画溝や遺構が北側に集中する点は、東沖遺跡の状況に類似している。

小津遺跡^⑧（松阪市）

12世紀～16世紀後半までの遺構が確認されている。屋敷地は、15世紀第1四半期に出現し、最盛期は15世紀後半～16世紀初頭である。

屋敷地を8箇所確認した。

掘立柱建物を9棟確認した。建物は、15世紀第2四半期以降16世紀前半まで見られる。

区画溝は、15世紀第1四半期に字境に沿って掘削される。本格的に屋敷地群が見られるようになるのは15世紀第3四半期からである。また、区画溝は16世紀前半まで機能している。

②事例から見たブロック形屋敷地群の出現

ブロック形屋敷地群が確認できた遺跡について概観してきた。前述の7遺跡の事例からブロック形屋敷地群の出現の時期について考えていく。

最も早くブロック形屋敷地群を確認したのは、東沖遺跡の13世紀前葉から中葉である。次いで、上野遺跡の14世紀中葉から15世紀中葉である。他の遺跡の状況を見ても15世紀前半もしくは後半からブロック形屋敷地群が出現する。

県内の状況としては、最も早いもので13世紀前葉から中葉に、一般的には15世紀以降にブロック形屋敷地群が出現するようである。

③東沖遺跡の位置付け

前項でブロック形屋敷地群の出現時期について述べてきた。県内の状況としては、一般的には15世紀以降に出現するようである。

一方、東沖遺跡では、ブロック形屋敷地群が13世紀前葉から中葉に出現する。現在のところ、県内で最も古い状況にある。しかし、東沖遺跡のような13世紀にブロック形屋敷地群が出現する事例は、滋賀県の西田井遺跡等他府県ではすでに確認されている。東沖遺跡の屋敷地群は、県内で出現期のブロック形屋敷地群の様相が確認できる事例である。

(3) 鉄関連遺物から見た東沖遺跡の様相

東沖遺跡からは、12世紀後葉～15世紀前葉の鉄製品約100点と約40点の鉄滓等の鍛冶関連遺物が出土した^⑩。その内、報告した遺物は77点である。これらの遺物は、県内の集落遺跡から出土した遺物としては多く、微量ながら鍛造剥片も出土している（第V章第4節参照）。しかし、製鉄炉等の鍛冶に関わる遺構や鋳型は確認していない。そこで、これらの鉄製品及び鍛冶関連遺物からみえる東沖遺跡の様相について若干述べたい。

①鉄製品

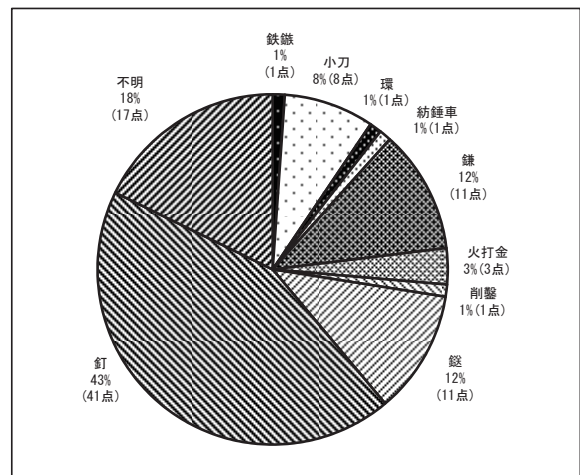
鉄製品は、95点出土した。種類別にみると、鉄鎌1点、環1点、紡錘車1点、火打金3点、鎌11点、小刀8点（報告書未掲載遺物1点含む）、削鑿1点、鏝11点、釘41点（報告書未掲載遺物13点含む）、不明品17点（報告書未掲載遺物13点含む）である。種類別は、釘が最も多く、全体の43%を占める。そして、これら遺物の中には、折れ曲がったものも見られた。

また、出土地点をグリッド別で見えていくと、E10が最も多く13点、次いでF3の7点、G10・D14の5点となる。いずれも、グリッド内には石組遺構もしくは石積み土坑が検出されており、これらの遺構から鉄製品の出土が多いということが言える。

②鍛冶関連遺物

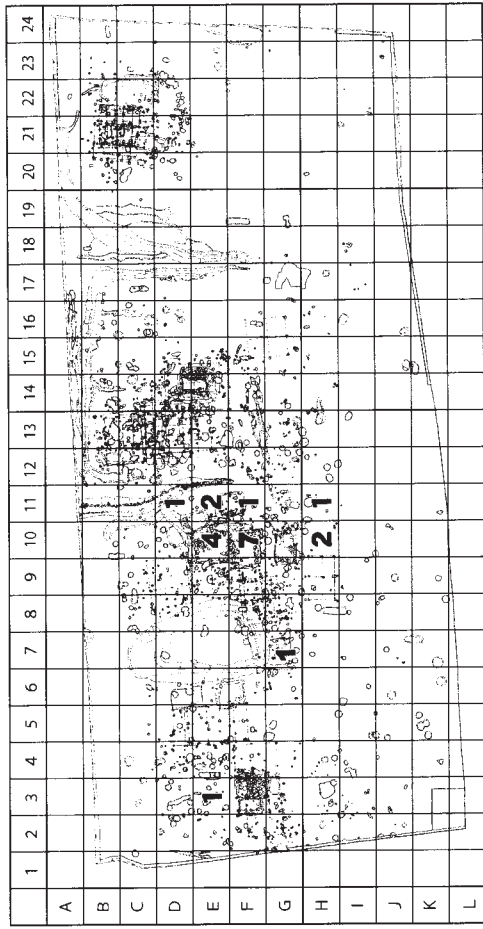
羽口3点、椀形滓3点、鉄滓37点（内遺構出土は20点）、鍛造剥片2点が出土した。

羽口は、グリッドD10、E10、G10からの出土で

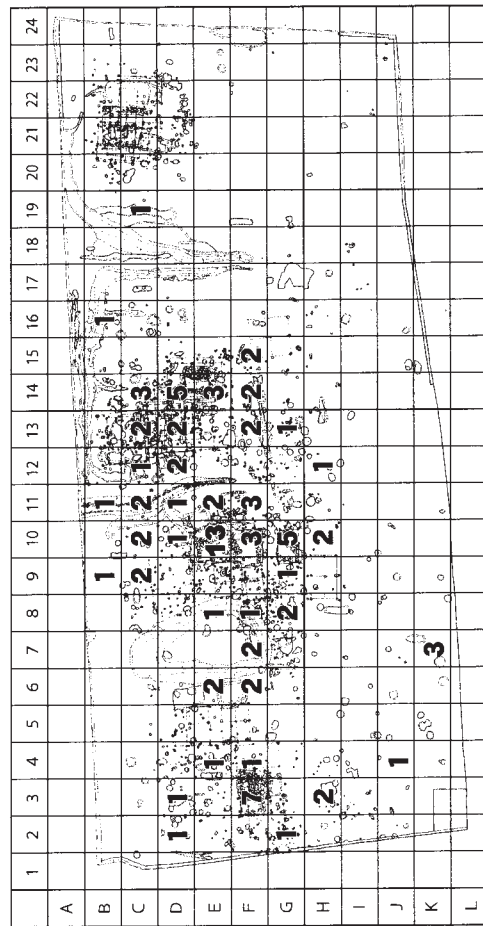


第48表 鉄製品種別割合

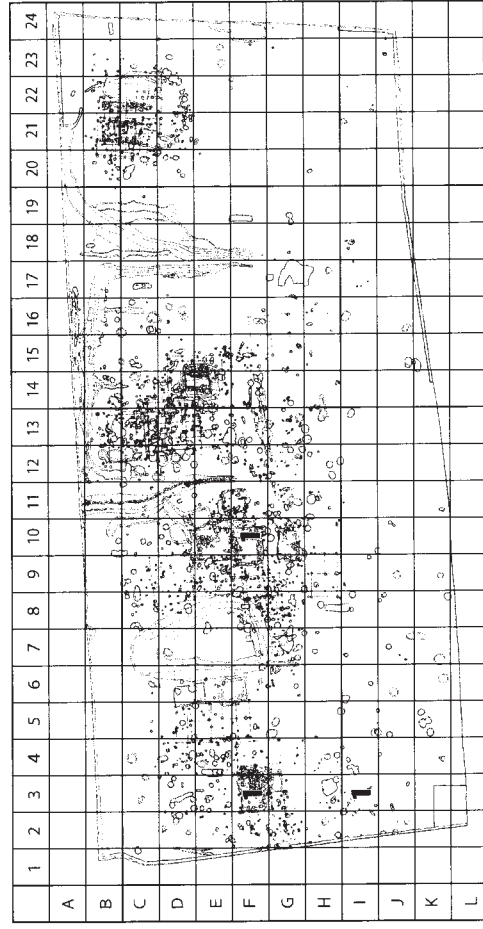
鉄滓 (遺構出土のみ)



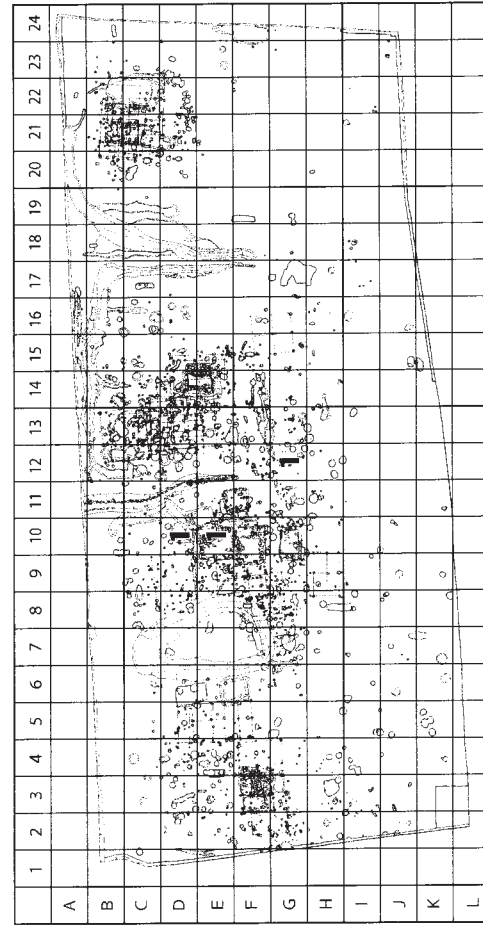
鉄製品



椀形滓



羽口



第81図 鉄関係遺物出土点数分布図(1:800)

ある。いずれも小片である。

椀形滓は、F 3、I 3、F 10からの出土である。内 2 点は、金属学的分析の結果、鉄酸化物主体の滓との結果が得られている（第 V 章第 4 節参照）。いずれも全長 5 cm 前後の小型品で、脈石成分^⑫をほとんど含まない純度の高い鉄素材を鍛打加工した際に生じたものと推定される。

鉄滓の出土は、F 10 が最も多く 7 点、次いで E 10 が 4 点と続く。石組遺構 S K 121・162・163 内とその付近で多く出土している。さらに、遺構出土の鉄滓を見ていくと、A 1 区と A 2 区からしか出土していない。

鉄滓は、小片が多く、5 cm 未満のものが 32 点、5 cm 以上のものはわずか 2 点にすぎない。これらの遺物の中には、椀形滓も含まれているかもしれない。しかし、小片のため判断ができず、すべて鉄滓として取り扱った。

鍛造剥片は、S K 118 で 2 点、可能性があるものを S K 118 と S K 147 で 1 点ずつ出土した（第 V 章第 4

[註]

- ① 伊藤裕偉「中世後期における伊勢・志摩地域の土器相」『関東・東海における中世土器・陶器の最近における研究成果』2004年
- ② 伊藤裕偉「ブロック形屋敷地群の成立と展開」『小牧・長久手の戦いの構造 戦場論 上』岩田書院、2006年
- ③ 『志知南浦遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター、2008年
- ④ 『四日市市遺跡調査会文化財報告書VI 上野遺跡』四日市市遺跡調査会、1991年
『四日市市遺跡調査会文化財報告書IX 上野遺跡2』四日市市遺跡調査会、1991年
- ⑤ 山田猛「1 上野遺跡」『三重県史 資料編 考古2』三重県、2008年
- ⑥ 『近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）愛知県境～四日市 J C T 建設に伴う 伊坂城跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター、2003年
『西ヶ広遺跡（第3・4次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター、2006年
- ⑦ 出土遺物は、古瀬戸後Ⅳ期から出土しているものの、

節参照）。非常に少ない。いずれもグリッド H 11 に所在する。

③鍛冶関連遺構

鍛冶関連遺構の可能性が高い遺構として、石組遺構があげられる。石組遺構には覆屋のような建物が付属すると考えられ、鉄製品及び鉄滓の出土数が多い。

④まとめ

東沖遺跡でみられる鉄関連遺物の様相をまとめると、以下の通りである。

(i) 遺構出土の鉄滓は、A 1 区と A 2 区からに限られる。羽口、椀形滓もほぼ一致する。

(ii) 工房と思われる石組遺構は、A 区のみにある。

(iii) 遺跡内からは、折り曲げた鉄製品が出土していることに注目される。

以上 3 点から、東沖遺跡、特に A 区では金属の加工が行われていた可能性が高いと言える。

（酒井巳紀子）

大半が搬入品である。集落が形成されたのは大窯第 1 段階の頃である。

- ⑧ 伊藤裕偉「ブロック形屋敷地群の成立と展開」『小牧・長久手の戦いの構造 戦場論 上』岩田書院、2006年
小林俊之「三重県南部（南伊勢・志摩・東紀伊）の中世集落遺跡の動向」『東海の中世集落を考えるー考古学から中世のムラをどう読み解くかー』第 9 回東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会、2002年
田中喜久雄「60 上野遺跡」『三重県史 資料編 考古2』三重県、2008年
- ⑨ 「XI 一志郡白山町 家野遺跡」『平成元年度農業基盤整備事業地域 埋蔵文化財発掘調査報告ー第 1 分冊ー』三重県教育委員会、三重県埋蔵文化財センター、1992年
- ⑩ 『小津遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター、2007年
- ⑪ 鉄製品・鍛冶関連遺物は、報告書未掲載遺物も含めてすべて抽出している。
- ⑫ 二酸化チタン、バナジウム、酸化マンガンを指す。

VI 下茅原遺跡・東沖遺跡の総括

下茅原遺跡及び東沖遺跡の遺構の変遷

下茅原遺跡及び東沖遺跡の概要や時期については、小結で記載した通りである。ここでは、各小結のまとめと範囲確認調査の結果を踏まえて時期の変遷を記述する。時期については、第V章第5節の通りである。なお、下茅原遺跡第2次調査では、明確に時期のわかる遺構が出土していないため、個別の説明は省略した。

(1) I期以前

縄文時代 下茅原遺跡第1次調査では、A地区で縄文時代のものと考えられる削器と中期の土器を確認した。B地区で縄文時代早期（神宮寺式期）の押型文土器を確認した。

下茅原遺跡第2次調査では、縄文時代早期後半頃の鉢が出土した。

東沖遺跡では、縄文時代早期（高山寺式期）の押型文土器を確認した。

また、東沖跡の東側に位置する新殿木戸遺跡^①では、縄文時代中期の土器が採取されている。

弥生時代 下茅原遺跡B地区で、弥生土器（中期）が1点出土している。

少なくとも下茅原町内の段丘上では縄文時代～弥生時代中期にわたって人々の活動が行われていたようである。

(2) I期（11世紀後半～12世紀後葉）

下茅原遺跡A地区では、SR1を、B地区ではSR31を確認した。いずれも自然流路である^②。範囲確認調査坑の遺物は、自然流路もしくは自然流路付近からの出土である。下茅原遺跡では、耕地や空地として土地利用がされていたようである。

東沖遺跡では、土坑と墓を確認した。東沖遺跡は、人々の居住が始まらないものの、それに先行する時期である。

(3) II期（12世紀後葉～14世紀前葉）

下茅原遺跡A地区では、墓を2基確認した。範囲確認調査では、1次調査区や2次調査区の周辺で遺物が出土している。

東沖遺跡では、掘立柱建物21棟、土坑187基、墓3基、溝9条を確認した。そして、溝によって区画された3箇所屋敷地が見られる。屋敷地の1箇所は、金属加工が行われていた可能性がある。また、東側には新殿木戸遺跡があり、山皿・山茶碗が出土している^③。おそらく、東沖遺跡から新殿木戸遺跡までの範囲に集落が広がっていたのだろう。

(4) III期（14世紀中葉～15世紀前半）

下茅原遺跡A地区では、土坑を1基確認した。まだ人々の居住は開始されていない。範囲確認調査坑から遺物が出土しているものの、点在する状況である。下茅原遺跡では、ほとんど人々の活動が確認できない時期である。

東沖遺跡では、掘立柱建物6棟、土坑14基を確認した。掘立柱建物は、15世紀前半には廃絶する。屋敷地を区画していた溝が徐々に埋まり始め、埋没していく時期である。屋敷地は2箇所に減少し、集落の規模はII期より縮小していく。

(5) IV期（15世紀後半～16世紀末）

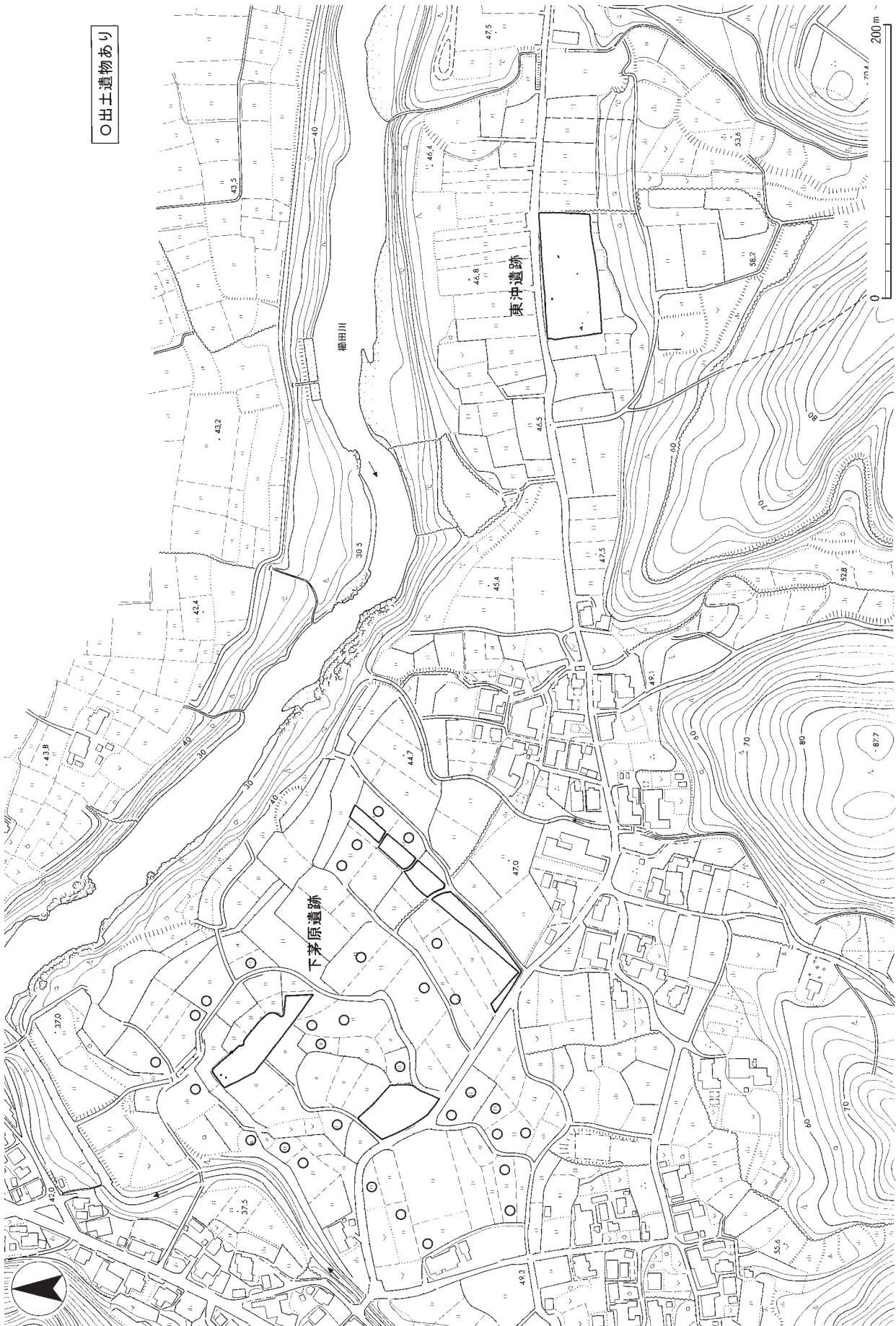
下茅原遺跡A地区では、掘立柱建物6棟、土坑4基を確認した。屋敷地を1箇所確認した。範囲確認調査坑から、遺物は出土していない。A地区付近では、人々が居住していたようである。

東沖遺跡では、土坑を1基確認した。集落は廃絶しており、土坑の埋没をもって、現在のような耕地になったと考えられる。

(6) まとめ

下茅原町内の遺跡についてまとめると以下の通りである。

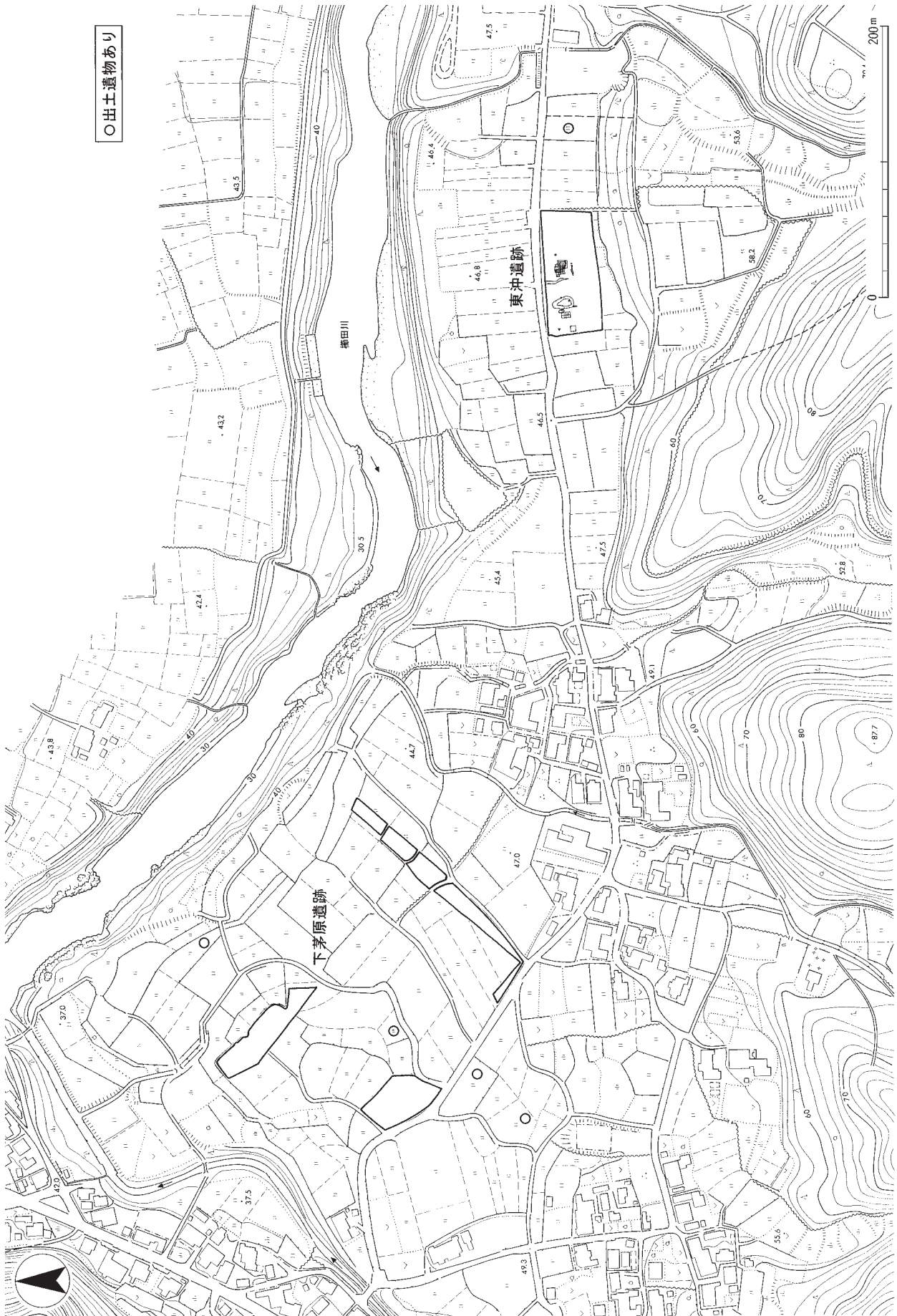
下茅原遺跡は、12世紀末頃迄、自然流路であり、空地のような状態であった。一方、東沖遺跡は12世紀後葉になると、集落が確認される。13～14世紀を最盛期として、屋敷地が3箇所展開される。屋敷地は、掘立柱建物が廃絶する15世紀前半まで継続される。そして、東沖遺跡が終焉する15世紀後半には、下茅原遺跡で集落が確認される。この頃には、土地



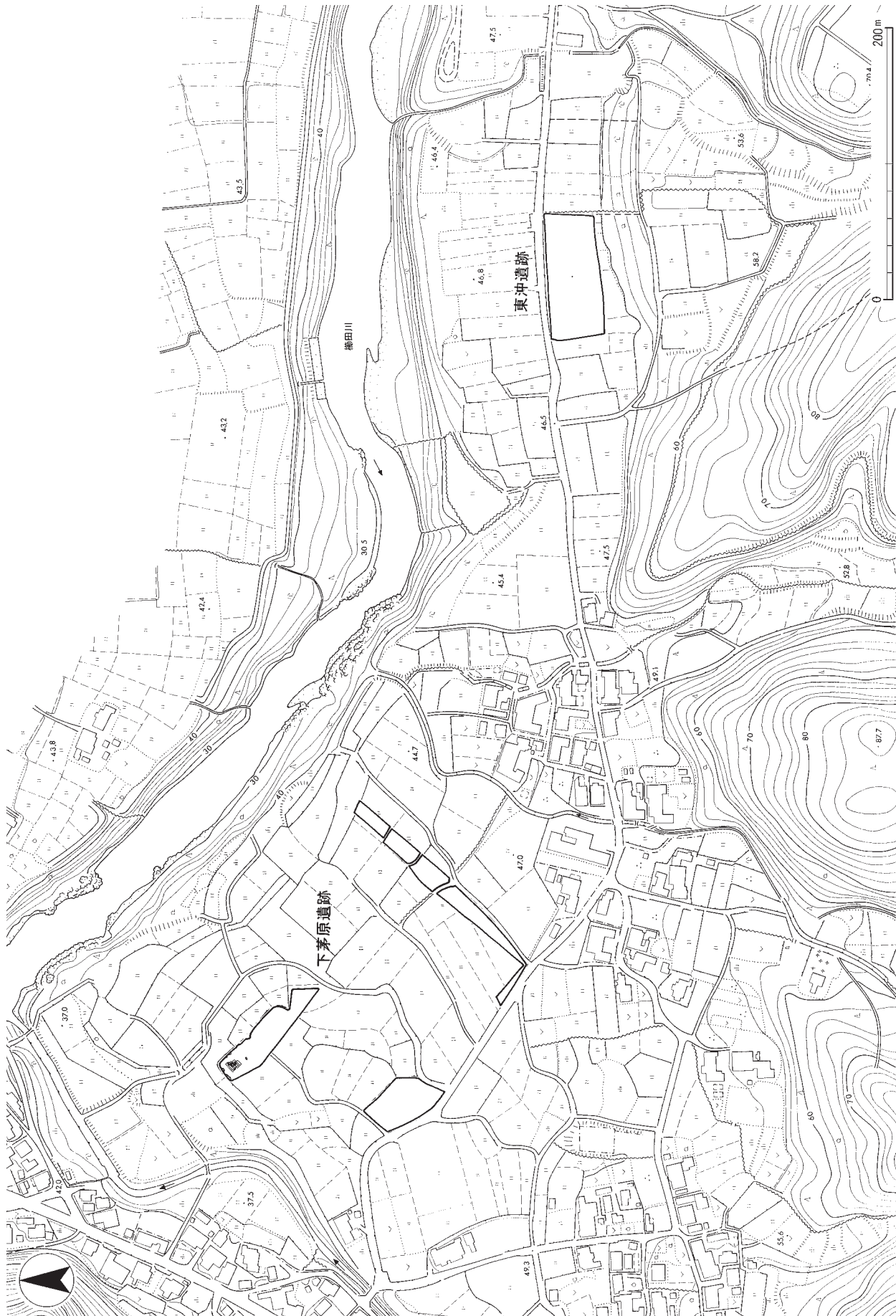
第82図 遺構変遷図 I 期(1:4000)



第83図 遺構変遷図Ⅱ期(1:4000)



第84図 遺構変遷図Ⅲ期(1:4000)



第85図 遺構変遷図Ⅳ期(1:4000)

が安定し、東沖遺跡より、より街道に近い下茅原遺跡へと集落が移動し、現在のような集落と耕地が展開されるようになったのであろう。

(酒井巳紀子)

[註]

- ① 『松阪市史 第二巻 資料篇 考古』松阪市史編さん委員会、1978年
- ② 第Ⅲ章参照
- ③ 松阪市史編さん委員会『松阪市史 第二巻 資料篇 考古』1978年

